2379

85

國語漢文 中辭林

畠山健 校閲
都文舍編輯所編纂

東京
都文舍發行

昭和41年8月30日 内閣

85-169

例言

一　本書は、現今行はるゝ、中等教育の、あらゆる國語漢文科の讀本につき、その中の難語難句のみを摘出して、これに、平易なる解釋を施せるものなり。されば、徒らに、頁數增加の材料たる尋常平易なる普通語の如きは、一切、これを省略せり。

一　本書に收めたる語は、その種類の上よりいふときは、我が古言古語、及び、漢語はいふに及ばず、宮室、神社、佛閣、衣服、調度、武具、武器、官職、稱呼、內外の地名、人名、書名より、佛語、俗語、俚諺、格言、金言の如き、或は、和漢の故事及び、歷史上の事件、其の他、學術上の專門語に至るまで、苟くも、讀本中にあらはれたるは、一切、これを網羅せり。

一　語句の解釋は、成るべく、平易簡明ならんことを期し、出來得る限り、その出典、若くは、用例をも示せり。

一　人名は、和漢東西の別なく、教科書中に現はれたるものは、現存の人をも洩さず。而して、本姓名によりたる外、或は、

宇治大納言、池殿、西伯、
の如く、普通の稱呼に從ひ、或は、
郁離子、伊川先生、梅田雲濱、
の如く、或は、諡を用ひ、或は、
活目天皇、
の如く、御諱により、或は、
太平洋の濤をわけし古人、顯川の水に耳を洗ひし賢人、
島作れる大臣、六條にみちのくの鹽竈を模して作れる大臣、
の如きをも出せり。

一　官職は、或る書中に限り、特別の人に充てゝ、固有名詞の如く用ひられたるものは、その解をも付したり。例へば、うまのかみ(右馬頭、馬頭)の條下に「伊勢物語に、馬の頭といへるは、在原業平を指せり」といへるが如し。

又、
執金吾、相國、
の如き、唐官、及び、唐名をも出し、或は、

一　任四五箇年の職、
七箇國の受領を經れば參議に任ず、
の如き、補任に關することをも收めたり。

一　書名は、その卷數、及び、著者は、必ずこれをあげ、又、成るべく、その書の性質をも記載して、その內容を知らしめたれど、甚だ必要ならざるものは、省略せるもあり。これ、徒らに、紙數の增加せんことを恐れてなり。

一　衣服、及び、色目、又、武具、武器等につきては、讀本中に用ひられたる句のまゝに、これが適切なる解を下さんことをもつとめたり。例へば、
白金打つたる糸毛の具足、　藪納の裝束、
濃き衣の上ぐもりたる、　花もかへりぬれなどしたる衣、
などを出せるが如し。

一　一語にして、二種以上の漢語を充つるもの、および、漢語の同音なるものは、これを一項の下に收めて、その、別に義あるものは、一々、これを釋せり。例へば、
名詞にては、

さけ　鮭鮏、鱒、水豚、石娃魚、
なぎさのゐん　渚院、波瀲院、
つづらをり　葛折、九折阪、
いうえん　遊衍、遊燕、遊宴、

動詞にては、

まつはる　纏擣簡、綢繆、絢縁、
いかる　怒、恚、忿、慍、瞋、

形容詞にては、

すさまじ　凄、冷、荒涼、凌競、淋慄、
なまめかし　婀娜、嬌冶、窈窕、

副詞にては、

こひねがはくは　庶幾、庶乎、希、冀、

一　の如く出して、その解をなせるが如し。
句には、その箇々の語を釋すれば、意義自ら明らかなれども、初學者には、容易に解し難きものあり。或は、全く、新に一義をなせるものあり。これ等も出

來得る限り收めて、これが釋を施せり例へば、

ありふるわざ。　こゑきゝ知らん際、　さらぬ別れ、
狹く切りぬらし、　さるべきにやありけむ、　かけずけおさる、
鈴虫のふりすてがたう、

などを、各、獨立に擧げたるが如し。

一　詩歌の句の如きも、成るべく、多く引用せらるゝまゝ、これを收めたり例へば、

江山信美是吾州、　花を見すてゝかへるかりがね、
輕舟已過萬重山、　君まさで烟たえにし、
蘭省の花の時錦帳の下、　くれなばなげの、

などを出して、その本文の全體、及び、作者、幷に、意義を釋せるが如し。

一　故事、及び、熟語は、ひろくこれをとり。例へば、

ときう　菟裘、
りうえい　柳營、
しばのほね　死馬の骨、

くめぢのはし　久米路の橋、
ふしのくすり　不死之藥、
とうりようもん　登龍門、
かぎよのくわん　河魚の患、
くんしんすゐぎよ　君臣水魚、
てんじやうのごすゐ　天上の五衰、
ぶりようのたうげん　武陵の桃源、
かんばうのまじはり　管鮑の交、
りやうじやうのくんし　梁上の君子
の如し。これ、本書の特色とする所にして、この方面より見るときは、また、故事熟語辭典とも稱することを得べし。

一　俚諺、格言、金言等の如きも、

樂は苦の種、　　天は人の上に人を作らず、
十讀不ㇾ如ㇾ一寫、　　天は高きに居て卑きを聽く、
天網恢々疎不漏、　　逐ㇾ鹿者不ㇾ見ㇾ山、

水清ければ魚なし、　　鼠捕る猫は爪をかくす、
などの類ずべて、これを收めたり。

一　古書中の文句の如きも、屢、引用せられたるまゝ、これを收めたり。例へば、一時の懈怠は、一生の懈怠となる。
額には矢はたつとも、背には矢は立てじ、
苛政猛ㇾ於ㇾ虎、
言行者君子之樞機、
毫釐差、致ㇾ千里之謬、
士當ㇾ先天下憂而憂、後ㇾ天下之樂而樂、
人非ㇾ聖人ㇾ誰無ㇾ過、過能改善莫ㇾ大焉、
觀ㇾ富貴之家祿位重疊、猶ㇾ再實之木其根必傷、
扶桑豈無ㇾ影乎、浮雲掩而忽昏、叢蘭豈不ㇾ芳乎、秋風吹而先敗、
南望則有ㇾ關路之長、行人征馬駱繹於ㇾ翠巒之下、東顧亦有ㇾ林塘之妙、紫鴛白鷗遊ㇾ於朱檻之前、
の如し。

一 名數に關するものも、
三不幸、　五伴緒の神、
春秋の十二諸侯、　九天、　竹林七賢、　六臘、　十惡、
などの如く、これを收めたり。

一 歷史上の事件の如きは、別に、歷史辭典の如きありて、これを搜索するを得れども、本書は、また、
復號事件、　佐賀之亂、　くりみあのたたかひ、
の如き、よく、讀本中にあらはるゝものは、これをあげたり。

一 本書は、すべて、五十音順によりて排列したれば、別に畫數によりて引くべき、漢字の索引を添へたり。索引の用法は、別にいふべし。

一 促音は、タ行のつと、その假字を同じうすれば、その列に出せり。又、鼻音のんも、マ行のむと同列に收めたり。

一 字音の假字は、暫く從來慣用せる方法に從へり。但し、
いやう、　いゆう、　いよう、
と、かくべきは、すべて、

やう、　ゆう、　よう、
とし、
ぐゎん、　ぐゑ、
とかくべきは、すべて、
げ、
とし、
院、　允、
の假名ば、
ゐん、　いん、
の兩所に出し、
法、
の假名は、
はふ、　ほふ、
の兩所に出し、又從來、全く誤謬の讀み方をなしながら、普通に慣用せられて、固有の音の如くなれるものは、必ずしもこれを正さず、その釋文中に本

音を示し置きたり、

一　本書に用ひたる文、及び句の區別は、概ね、左のさだめに從へり、

文、　文の主成分を備へて、意義の完全なるもの。また、

　樂は苦の種、

の如く、說明語に附屬する助動詞の省かれたるもの、及び、

　身を殺して仁を爲す、

の如き、

　虎穴に入らずんば虎兒を得じ、

　毛を吹いて疵を求む、

　管を用ひて天を闚く、

の如き、常に、主語を省略して用ひらるるものも、これに入れたり。

句、　副詞句、名詞句、形容詞句を問はず、二語以上より成りて、語よりは、更に、複雜なる意義を爲せるもの。又、

　一簣の土を以て、大河の流れを支ふるに異ならず、

　雲泥も啻ならず、

の如き、

　後方へ退きに退く、

　水草を逐ひて移る、

の如き、文の組立の上よりいふときは、即ち、亦、主語の省略せられたるものなれども、此等は、主語を補はざれば、意義全く不完全にして、獨立しては用ひらるゝことなきを以て、亦、句と定めたり。これ等は、實は、動詞句とも名づくべきか。されど、本書には、これ等の區別を立てず、すべて單に、句としたり。

一　動詞にして、二種の活用あるものは、二種ともにこれを示し、なほ、自他の別あるものは、釋文中にこれを示したれども、或は、漏れたるもあるべし。

一　形容詞の副詞法は、形容詞を釋すれば、自ら明らかなれども、熟語の形容詞の副詞法、及び、その語尾の、音便によりて、うに變じて用ひられたるものは、まゝ、獨立に、これを擧げたり。初學者をして、見易からしめんが爲に外ならず。

一 漢語は、挺然、皦然 の如き、莞爾 莚爾 の如き、漫漫、淋漓、蕭殺 の如きは、その用の多き方に從ひて、これを副詞、形容詞とし、其の他、特に、サ行變格に活用せしめて、動詞としたるもの、外は、總て、これを、名詞としたり。故に、名詞としたるもの、中には、常に、名詞にのみ用ひらるゝものと、サ行變格に活用して、動詞にも用ひらるゝものとあるべきことゝいふを待たず。

一 語の種類につきては、單に次の符號を知るを要す。

〔名〕——名詞、　〔代〕——代名詞、　〔動〕——動詞、
〔形〕——形容詞、　〔四〕——四段、　〔上一〕——上一段、
〔下一〕——下一段、　〔上二〕——上二段、　〔下二〕——下二段、
〔カ變〕——カ行變格、　〔サ變〕——サ行變格、　〔ナ變〕——ナ行變格、
〔ラ變〕——ラ行變格、　〔テニヲハ(助辭)〕、　〔副〕——副詞、
〔感〕——感動詞、　〔接〕——接續詞、　〔接頭〕——接頭語、
〔接尾〕(又、接)——接尾語、〔句〕——名詞句、形容詞句、副詞句、動詞句、
〔文〕

一 本書は、倉卒の際、編纂の業を終へたるを以て、前後の體裁、或は、一致せざるものあらむ。材料、或は、杜撰なるものあらむ。中等科生徒用としては、解釋の法、或は、適當ならざるものあらむ。然るに、出版期日の切迫したるが爲に、校閲者をして、十分、その責任を負はしむること能はざりしは、頗る遺憾とする所にして、又、こゝに、明らかに告白して、江湖に謝せざるべからざる所なり。然れども、版を重ぬるに從ひ、次第に增補訂正を加へて、完備を期せんとすること、これ、編者の素志にして、又全くその責任なることを知れり。希くは、大方の君子、幸に諒とせられんことを。

明治三十六年八月

編者しるす

例言終

目次

あ……一　い……二三　う……四五　え……五七　お……六四　か……七六　き……一一九　く……一四六　け……一七二　こ……一八七　さ……二一一　し……二三三

す……三〇四　せ……二八五　そ……三〇三　た……三一一　ち……三四一　つ……三五六　て……三六三　と……三七五　な……三九一　に……四〇三　ぬ……四〇九　ね……四一一

の……四一四　は……四一六　ひ……四四〇　ふ……四五八　へ……四八七　ほ……四九四　ま……五〇九　み……五二二　む……五三六　め……五四一　も……五四五　や……五五三

ゆ……五六四　よ……五六九　ら……五七六　り……五八二　る……五九三　れ……五九五　ろ……六〇〇　わ……六〇五　ゐ……六一四　ゑ……六一九　を……六二二

（終）

索引凡例

一　この索引は、本書につきて、その意義を知らんと欲する漢語の音、若くは、訓の、明かならざるもの、及び、漢字をあてたる語句の讀み方の、紛れ易しと思はるゝものにつき、その捜索の便を計りて添へたり。されば、本書に收めたる語句といへども、尋常平易にして、索引を待たずして明かなるものゝ如きは、これを省略したり。

一　語句の順列は、すべて、頭字の畫數によりて、次第したり。故に、頭字の畫數を計へ、その部につきて頁數を知り、然る後、本書につきて見るべし。又、この索引は、本書の本文の語句によりてものしたること、いふまでもなけれど、まゝ、釋文中の語句をとりて、これを出せるもあれば、その心して見るを要す。

一　漢字の畫の數へ方は、普通の例によりたれども、次の諸字は、その、單獨に用ひられたる時と、扁、或は旁（ツクリ）として用ひられたる時とを問はず、總て左の畫數によれり。

衣（ネ）、六。　足　足、七。　肅、一二。

一　俗字の普通に行はれたるものは、必ずしも改めず。されば、正字の畫によらず、俗字の畫數を以てしたるもあり。決を決に從ひて、六畫に入れたるが如し。

一　畫を同じうせる諸文字、及び、頭字相同じき語句の排列につきては、倉卒の際、順序を畫一整頓すること能はず、唯、人名をば、成るべく、末の方に列ねるやうしたり。

一人名は、本名、若くは、雅號、法名等の頭字より出し、姓は、括弧に收めて、その下に記入せり。されど、姓の讀み難しと思はるゝもの、および、支那の人名は、また、姓より出したるもあり。

一漢語の句、及び文は、諺み下したるときと、棒讀みにしたるときと、その頭字となるべき文字異なることあり。かゝるときは、大方これを二樣に出せり。例へば、

泰山に登りて天下を小なりとす。
　登泰山而小天下。

を、一は、泰の字につきて、十一畫の部に出し、一は、登の字につきて、十二畫の部に出せるが如し。

一語句の長きものは、成るべく、これを、更に、數小句に分ち、いづれの句よりも搜索し得るやうにせり。例へば

南望則有二關路之長一、行人征馬駱二驛於一翠巖下一。東顧亦有二林塘之妙一、紫鴛白鷗遊二遨於一朱檻之前一。

といへるをば、

行人征馬、　駱驛、
　　林塘、　紫鴛白鷗、

などに分ちて、行の部、駱の部、林の部、紫の部より搜索し得るやうしたるが如し。

國語漢文 中辭林 索引

一畫

(一)一入 四八
一分 三三
一角 三三
一定 三三
一般 三五
一頻 四八
一貫 三三
一餉 三三
一義 三二
一聯 三三
一籮 四七
一斑 三五
一の宮 三三
一の人 三三
一の上 三三
一方に 三三
一向に 三三
一丁字 三三
一中節 三三
一家言 三三
一乘院 三五
一葦水 四八
一簞食 三三
一點紅 三三
一刀兩斷 三三
一刀三禮 三三
一字千金 四七
一字之師 三五
一心不亂 三三
一刻千金 三三
一朝一夕 三三
一陽來復 四八
一擧兩得 四六
一倡三歎 三四
一味同心 三四
一氣呵成 三三
一覺之眠 三三
一擲千金 三三
一日三秋思 三四
一心都是膽 三四
一本御書所 三四
一時の懈怠 三四
一彈丸の地 三二
一枝を切らば 三二
一樹の蔭の宿 三四
一任四五箇年 三三
一將功成萬骨枯 三三
一簣の土を以て 三三
一饋十起以勞民 三三
一齋(佐藤) 三三
一豐(山內) 五六一
一徹(稻葉) 三七
(乙)乙夜 三五
乙名 六六

二畫

(二)二回 四七〇
二見 四七〇
二重 四七〇
二藍 四七〇
二酉 四〇二
二豎 二二九

二千石 四〇五
二引兩 四七〇
二王樣 四〇八
二位殿 四〇八
二位の尼 四〇八
二十四孝 四〇四
二十八將 四〇四
二十一史 四〇四
二十一代集 四〇四
二宮の大饗 四〇三
二條の行幸 四〇六
二所籐の弓 四七〇
二洲(尾藤) 四四七
(七)七夕 三三三
七草 三九七
七寶 二四三
七面山 二四二
七日關白 三九八
七歩の詩 二四三
(八)八日 五九四
八分 四三二

八代 四〇五
八江 四七〇
八荒 四〇八
八的 四〇八
八橋 四〇八
八道 四〇四
八音 四〇四
八紘 四〇四
八論 四〇四
八龍 四〇三
八瀬 四〇六
八幡 四七〇
八幡山 四四七
八幡船 三三三
八幡大菩薩 三九七
八幡不知 二四三
八幡殿の名には 二四二
八咫鏡 三九八
八省院 二四三
八省院の四樓 五九四
八省院の十二堂 四三〇
八束穗 五五七
八汐路 四三〇
八丈島 五五七
八罩島 四二八
八犬傳 四二〇
八代將軍 四二八
八雲御抄 四二九
八重一重 五五六
八十平瓮 四二九
八十伴緒 五五九
八十梟帥 五五九
八入の色 五五九
八阪瓊曲玉 四二八
八千度悔ゆ 四二九
八百日行く 五五九
八重事代主神 四二八
八歳の宮の御歌 四三〇
八島の內の大臣 五五六
八重葎にも 三五七
八兵衛(魚屋) 四二八
八郎太(坂元) 二一七
(九)九重 一九六
九天 二一三
九泉 二一三
九穴 二一〇
九原 二一〇
九死 二一〇
九官 二一〇
九采 二一〇
九夏 一一九
九折坂 三六〇
九廻腸 一一九
九五の尊 二一〇
九牛一毛 一一九
九牧の金 二一三
九鼎大呂 二一三
九品淨土 一五三
九十の春光 一四八
九郎御曹子 一五七
九條殿の遺誡 一五一
九仞之功虧一簣 一三〇

九齡(張) 三四九
(十)十手 二四三
十念 二四八
十善 二四八
十惡 二四八
十八公 二四八
十寸鏡 五一三
十返の花 三七八
十王の廳 二四八
十六夜日記 二七
十讀不如一寫 二四八
(人)人別 四四九
人屋 四四九
人宿 四四九
人吉 四四九
人形 四四八
人垣 四四八
人橋 四四八
人文 四四八
人倫 二五四
人鎭 二五五

人の許 四四八
人惡く 四四九
人馬絡繹 二五四
人中の龍 二五四
人非聖人 二五三
人生如朝露 二五三
人面より起る 四四八
人木石に非ず 四四九
人遣りならず 四四九
人遺ならぬ道 四四九
人皆得あらで 四四九
人は萬物の靈 四四八
人心不同如面 四四八
人麿(柿本) 九〇
(入)入 四四九
入魂 四四九
入蜀記 四四九
入虎穴 四四八
入日を招き返す 四四九
(丁)丁年 三六五
丁寧 三六五

丁憂 三六三
丁銀 三四九
丁汝昌 三六四
(乃)乃 二八〇
乃公 三一三
乃公 三九二
乃至 三九二
乃者 二一八
乃樂 四〇二
(匕)匕首 一四
匕首 四四五
匕首 五七五
(刀)刀自 三八三
刀圭 三一九
刀鋸 三一九
刀筆 三一三
刀根川 三六四
(力)力行 一九一
力役 五八五
(刁)刁刁 三六六
(了)了解 三六六

丁伯(佐野) 三四
(又)又兵衛(岩佐) 三七
又兵衛(後藤) 二〇三
又右衛門(荒木) 一九

三畫

(大)大統 三一六
大蘇 三二五
大祓 七二
大麻 三一七
大饗 三一三
大贊 七一
大臣 六八
大臣 七三
大夫 三一七
大府 三一七
大樹 三一五
大德 三一六
大名 三一八
大行 三一二
大呂 三一八

大漸 三一五
大厦 三一一
大辟 三一七
大牢 三一八
大床 三一二
大宮 三一二
大宮表 三一二
大父 三一七
大紋 三一八
大番 三一
大唐 三一六
大明 三一八
大明世祖文皇帝 三一八
大宗 三一五
大手 三一
大童 三一二
大概 二一〇
大略 二一〇
大慈 三一五
大鏡 六九
大尾 三一七

大森 三一七
大島 三一三
大津 三一三
大津宮 三一三
大津宮の御宇 三一三
大船 三一三
大同 三四〇
大同江 三一三
大鹿島 三一三
大山 三一七
大山積 五六〇
大山祇 五六〇
大山津見 五六〇
大久目 五六〇
大來目 五六〇
大伴部 五六〇
大汝神 五六〇
大巳貴神 五六〇
大名持神 五六〇
大御寶 五六〇
大御酒 三一五

大御稜威 三一二
大御手風 三一三
大幣旗 三一七
大嘗會 三一四
大殿 三一三
大成殿 三一五
大盤所 三一七
大殿籠 三一一
大殿油 三一一
大織冠 三一五
大前君 六八
大前君 三一四
大相國 三一四
大塔宮 三一六
大丈夫 三一六
大丈夫 五一三
大猷院 三一一
大系圖 六九
大鹿毛 六九
大融寺 三一八
大理石 三一八

大般若 三一七
大叫喚 三一三
大紅蓮 三一三
大食調 三一三
大早計 三一三
大口魚 三四〇
大堰川 三一三
大井川 三一三
大井川行幸 三一三
大藩府 三一七
大和魂 五六〇
大和舞 五六〇
大和民族 五六〇
大和めぐり 五六〇
大和物語 五六〇
大和俗訓 五六〇
大内裏圖 三一五
大伴親王 三一一
大友皇子 三一一
大坂定番 三一一
大乘小乘 三一五

大炊御門 三一三
大炊の廢帝 三一三
大氣なく 三一〇
大地の鼻 三一六
大荒目の鎧 六八
大庭の椋木 三一一
大人しき郎等 六六
大行不顧細謹 三一一
大功は世々 三一三
大風起りて雲飛揚す 三一七
大厦の倒れむとするは 三一三
大比叡移されたる上野の岡 三一三
大平(本居) 西八
大學(村上) 五九
大雅(池野) 二六
(二)三皇 三一五
三宮 三一五
三昧 三一〇

三軍 三一五
三頭 三一五
三韓 三一五
三叉 三一六
三島 三一六
三崎 三一六
三枚甲 三一六
三光鈺 三一六
三稜洲 三一六
三井寺 三一六
三城目 三一六
三宅島 三一六
三種神器 三一六
三徑就荒 三一六
三日坊主 三一六
三保松原 三一六
三十三間堂 三一六
三舍を避く 三一六
三五夜中新月色 三一六
三十六計走爲上策 三一七

三庄太夫 三一八
三船(淡海) 一四
三溪(菊池) 三四三
(千)千木 三四四
千入 三四四
千染 三四四
千章 二九九
千乘 二九九
千顆 二九七
千尋 三四六
千尋濱 三四六
千早振 三四六
千町田 三四七
千引岩 三四六
千歲藥 五五五
千生瓢 一六
千字文 二九八
千隈川 五四三
千載集 二九八
千載一遇 二九八
千代の古道 三五四

千里に適くもの 三〇一
千里始足下 三八六
千里(大江) 六九
千蔭(橘)(加藤) 三三〇
千浪(加藤) 一〇一
千廣(伊達) 三三三
(小)小人 二九〇
小學 二九〇
小成 二九七
小名 二九二
小劒 二九一
小春 二九〇
小袿 一九〇
小樹 一九〇
小蒜 一九八
小鳥 一九二
小野 六三三
小絨 四八五
小豆粥 一一
小豆島 一一
小迫合 一九九

小具足 一九四
小櫻威 一九七
小櫻を黄に返したる鎧 一九七
小笠懸 一九二
小淘綾 二〇九
小冠者 一九五
小鴨毛 二〇二
小安殿 二八九
小倉山 六三
小田原 六三
小野田 六三
小塚原 二〇二
小墾田宮 六四
小治田宮 六四
小牧の役 二〇六
小普請組 二〇五
小心翼々 二九〇
小笠原島 六二
小笠原流 六二
小中黒の矢 二〇三

小さは敢へなむ 三四六
小幡の里に馬はあれど 二四
小督局 一九二
小通(小野) 六三
小楠(横井) 五七一

(山)山陽 九二
山陰 五八一
山鳥 五八一
山鶏 五六一
山雉 五六一
山里 二三〇
山方 五六〇
山立 五六〇
山寨 二一六
山彦 五六二
山伏 五六二
山賤 五五九
山崎 五五九
山の峡 五六一
山分衣 五六二

山下水 五六〇
山法師 五六一
山成島 五六一
山陵志 二三〇
山階寺 五六〇
山容水相 二三〇
山を茂み 五六二
山吹の瀬 五六二
山科の皇子 五六〇
山海名産圖會 二三五
山中暦日なし 二三八
山陰の友訪はむ 五五九
山從人面起雲傍馬頭生 五六一
山中の賊を破るは易し 二三八
山陽(賴) 五七六

(上)上 五二
上天 二五八
上膊 二六〇
上卿 二五六

上國 二五七
上根 二五七
上枝 五〇三
上臥 五二
上緒 六
上旬 二五八
上方 一〇九
上梓 二五七
上海 二六二
上達部 一三
上日の者 三五七
上品上生 二六〇
上巳の節 二六〇
(下)下重 二四〇
下襲 二四〇
下組 二四〇
下悃 九三
下物 一〇七
下乘 一七
下知 一七
下鞍 二四一

(下)下根 二五七
下男 一三〇
下田 二五五
下照姫 二四〇
下り立つ田子 七五
下愚の性移るべからず 九一

(口)口利 一五〇
口業 一四七
口吻 一九一
口籠 一五一
口實 一八九
口琴 四五五
口說く 一五一
口敏し 一五〇
口疾し 一五〇
口穢し 一五〇
口唬ぶ 一五〇
口血未乾 一八八
口網諸持 一五〇
口耳の學 一八九

口に蜜あり 一五〇
口舌者鑿身之斧 五三五

(己)己に克つ 六七
己を賣る 六七
己所不欲、勿施於人 六七

(女)女院 四〇八
女御 四〇八
女房 四〇八
女從 三五四
女中の堯舜 三五四
女に家なし 六二四
女兒の言用ふべからず 六二四
女郎花の一時をくねる 六二四

(子)子規 五〇三
子房 二四六
子房の謀 二四六
子四つ 四一三

子捕子捕 二〇三
子來之民 二七二
子と袍を同くす 二四五
子に黄金を遺す勿れ 二〇四
子貢 二三七
子美(杜) 三八三
子平(林) 四三八
子厚(柳) 五八三

(土)土 四四六
土宜 三七八
土器 一〇五
土簋 三七八
土豚 三六四
土浦 三五九
土佐家 三六二
土蜘蛛 三五九
土壌肥沃 三八三
土崩瓦解 三八六
土御門殿 三五九

(亡)亡す 四七
亡狀 四六八
亡慮 四八六
亡命 四二
亡謝 四二〇
亡羊の歎 四二
亡國の音 四一九

(干)干祿 二一四
干戈 二一〇
干城 二一三
干將莫邪 二一三
干城(谷) 三三三

(弓)弓丈 五六六
弓手 五六七
弓取 五六七
弓筈 五六六
弓弦調 五六六
弓矢の道 五六七

(久)久方の 四四三
久世渡 一四九
久能山 一五三
久米部 一五六

久米の佐良山 一五六
久里濱事件 一五八
久足(小津) 六二三
久右衛門(今井) 四〇
(士)士窮乃見節義 二三六
士別而三日則當刮目 二七五
相看
士當先天下之憂而憂 二四七
士清(谷川) 三三三
士新(宇野) 五二
士寧(鵜殿) 四七
(尸)尸祿 二七四
尸位素餐 二七五
尸佼 二三五
(丸)丸屋 五二
丸根 五一〇
丸龜 一五三
(工)工夫 三六
工匠 一八
工藝
寸斷 九六
(丁)丁丁 一〇二
(巾)巾車 九八
(也)也有(横井) 一二九
(才)才 三五〇
四畫
(心)心太 二八二
心術 一五三
心醉 一五三
心傲 一九六
心遣 一九六
心自 一九六
心の湊 一九六
心疾し 一九六
心無く 一九六
心許無がる 一七七
(尺)尺牘 一九六
尺蠖 二六二
尺璧を貴ばず 二七四
(切)切瑳 二九四
切目 一四四
切戸 一四四
切文の矢 一四四
切齒扼腕 二九五
(支)支吾 二三七
支離 二七三
(片)片々 四九二
片帆 九七
片便 九七
片假名 九六
片側破 九六
片言隻辭 四九一
片言獄を斷ず 四九一
片添へて 九七
片懸けて 九七
(反)反く 三〇八
反目 四三七
反間 四三四
反玷 四三六
反命 四三七
反切 四三六
反響 二〇〇
(分)分際 一三三
分際 四八三
分内 四八四
分限 四六五
分別 四八四
分類 四八五
分散 四八三
分子 四八三
分明し 四八三
(引)引板 六〇五
引敷 四四四
引網 四五一
引帶 四四二
引負 四四二
引替 四四二
引雨 四四二
引接 四四二
引見 四二
引證 四二
引決 四二
引導 二九一
引返 三九
引用 三九一
引手 三九二
引島 四九
引出物 五〇
引馬宿 二〇六
引入烏帽子 五四八
(今)今時 二五三
今參 三九
今鏡 四〇七
今是昨非 二五二
今昔物語 三六
今生の面目 三六八
今日の生 三六七
今日來ずば 三六七
(丹)丹心 三三三
丹青 三六八
丹頂 三六七
丹碧 三三八
丹塗 三三二
丹波川 三三四
(井)井井 二八七
井泉 二八七
井然 二八七
井田 二八八
井桁 六一五
井樓 二八九
井陘 二八六
井蛙の見 二八五
井底の蛙 二八七
井手の渡 六一六
井出の玉川 六一六
井井(竹添) 三三六
(内)内 四九
内外 三九一
内宮 三九一
内府 三九一
内辨 三九一
内宴 三九一
内典 三九一
内胄 三九一
内證 三九一
内訌 三九
内昇殿 三九一
内侍司 三九二
内物部 四九
内省不疾 二〇六
内膳(小宮山) 五四八
内遠(本居) 二五三
(仁)仁川 三三九
仁壽殿 四〇七
仁和寺 二五二
仁者は山を愛す 三六
仁齋(伊藤) 三六八
(手)手風 三六七
手勢 三六七
手練 三六七
手摺 三六七
手輿 三三三
手肱 三三八
手向山 三三一
手末の調

手段もなく　二八一
手に從つて亡ぶ　三六八
(元)元后　一八一
元子　一八一　五四七
元手　一八五
元老　一八五
元老院　五四八
元結紙　一八〇
元亨釋書　一八一
元次山　三九九
元忠(鳥居)　五一〇
元就(毛利)　五一〇
元康(毛利)　二九
元春(吉川)　一〇四
元信(狩野)　五六四
元禎(湯淺)　九六
(方)方方　三三
方便　四二一
方寸　四二〇
方物　四二二
方冊　四二九
方言　四一九
方外　四一九
方遙　九六
方人　四二〇
方丈　四一九
方丈記　四一八
方廣寺　五六〇
方孝孺　四七
方谷(山田)　四〇八
(牛)牛飼　二〇〇
牛莊　五一〇
牛尾魚　二九
牛耳を執る　一〇四
(文)文色　五六四
文杖　九六
文挾　三三
文車　四二一
文物　四二〇
文才　四二二
文盲　四二二
文子　四二三
文選　五五〇
文昌星　四二三
文珠樓　五五〇
文無し　一九
文無き事　一九
文采瑰琦　四八三
文王の囿　四八四
文行忠信　四八二
文永の役　四八二
文德實錄　五五〇
文墨に託して自遣る　四八四
文帝　四八三
文覺　五四九
文貞公　四八三
文天祥　四八四
文彦博　四八三
文照院　四八三
文山(文)　四八四
文晁(文)　三三三
文彦(大槻)　七〇
文雄(矢野)　五九八
文雄(井上)　六一六
文左衛門(紀國屋)　一三
(不)不同　四六八
不次　四六七
不凡　四八二
不羈　四六一
不軌　四六一
不朽　四六一
不惑　四八七
不動　四八〇
不佞　四八一
不腆　四八〇
不興　四六二
不堪　四六一
不敏　四八二
不便　四八二
不調　四七九
不肖　四六九
不虞　四六二
不遇　四六三
不耦　四六三
不順　四六八
不隨　四六九
不遜　四七〇
不倫　四八六
不仁　四六五
不孝　四六五
不辜　四六五
不埒　四六五
不雪　四六六
不運　四六六
不慮　四六六
不圖　四八〇
不例　四八七
不豫　四八五
不毛　四八二
不斷　四七〇
不斷著　四七〇
不勝　四六九
不承　四六二
不承す　四六三
不承不丞　四六三
不具　四六八
不具附く　四六九
不覺　四七〇
不覺涙　四八六
不繫舟　四六五
不世出　四六五
不都合　四六五
不意轉　四六五
不如歸　四六六
不破關　四六六
不識庵　四八〇
不起の人　四八七
不死の藥　四八五
不庭の臣　四八二
不輸の地　四七〇
不可思議　四七〇
不受不施　四六九
不倶戴天の仇　四六九
不入虎穴不得虎子　一九五
木に緣りて魚を求む　一三
木花開耶姫　二〇四
(天)天則　三七〇
天爵　一六
天壽　五四六
天壤　三六九
天賦　三七三
天性　三七〇
天府　三七二
天職　三七〇
天胤　三六八
天晴　一三
天國　三六七
天氣　四五一
天鵞　三六七
天幕　三七二
天津　三六九
天返　三六八
天邊　三六八
天の川　三七二
(木)木枯　一九五
木暗　一九二
木賊　三八一
木犀　五四六
木訥　四九八
木强　五四六
木主　四九八
木魅　二〇〇
木靈　二〇〇
木鐸　四九八
木乃伊　五三
木戸口　二九
木目峠　一三
木幡山　二〇四
木綿附鳥　五六七
木曾の棧　二八
木曾の御坂　二八
木蘭地の直垂　五四六

天皇邊 二八一
天妃神 二七二
天誅組 二七一
天文學 二七三
天守臺 二七〇
天台宗 二七〇
天中川 一六
天安川 一八
天橋立 一六
天目山 二七三
天龍河 二七三
天都山 二七一
天鷲絨 四五七
天離る 一六
天翔る 一五
天瓊る 一六
天津日嗣 一六
天神地祇 三六九
天羽羽矢 一八
天香久山 一八
天の美祿 二七二

天稟の才 二七二
天降附く 二七一
天高聽卑 二七二
天上の五衰 二六九
天主敎の禁 二七三
天明戊申の災 二七〇
天滿大自在天神 二七二
天網恢々疎不漏 二七二
天の職に人代る 二七二
天時不如地利 二七三
天與弗受反受其咎 二七二
天海 二六八
天樹院 二七〇
(水)水 四九
水泡 二四
水利 二五
水苔 二五六
水松 七三
水母 一五
水城 二五五

水屋 五二七
水飯 一八
水葱 二七二
水雞 二七三
水豚 二七〇
水獺 二六四
水干 五二六
水簾 七三
水鏡 二七三
水戸 二七二
水戸義公 二七一
水馴棹 二六八
水に畫 二七〇
水無月 四九
水無瀨 五二
水屋集 二六四
水雷艇 五二六
水の尾 二六三
水尾の御門 五二六
水莖の岡 五二六
水魚の交 五二五

水牛の胃 二八二
水分の峰 二八二
水天一碧 二九九
水師提督 二八二
水先案内 二八二
水化石灰 二八二
水能く船を載す 二八二
水草を逐ひて移る 二八二
水は方圓の器に隨ふ 二八二
水清ければ魚なし 二八二
水は北を陽とす 二八二
(日)日嗣 四四七
日新 四四〇
日覆 四四〇
日面 四四〇
日蝕 四四〇
日角 四四〇
日賦 四四〇

日歩 四五二
日光 四四〇五
日光權現 四四〇五
日光の結構 四四〇五
日の經 四五〇
日の緯 四五〇
日丸旗 四五〇
日華門 四五〇
日比谷御門 四五一
日蓮宗 四四〇五
日出三竿 四四〇五
日巳加レ辰 四四五
日に異に 四四〇
日吉神社 四四〇
日本書紀 四四〇七
日本書紀通證 四四〇七
日本紀略 四四〇七
日本智囊 四四〇七
日本道德論 四四〇七
日陰を惜む 四四一

日暮而途遠し 四四三
日長くして少年の如し 四四四
日を曠くして久しき に彌る 四五七
(月)月宮 一七八
月數 三五七
月旦 一七八
月立 三五六
月隱 四九八
月盡 一六五
月蝕 一六四
月毛 四四九
月白 四四〇
月代 一六五
月代 三五二
月の都 四五〇
月華門 一六六
月輪陵 一六五
月輪關白 五〇一
月花の歎の譽 一七一

月大將星を犯す 五〇八
月日は人を待たず 三五八
月日は百代の過客 三五八
月明星稀烏鵲南飛 三五七
(火)火串 四九八
火橛 四九八
火食 一六五
火急 一六四
火取 四四九
火炙 四四〇
火災 一六五
火防 四五二
火車 四五〇
火焼布 一六五
火燈口 一六六
火立浦 五〇一
火輪船 一七一
火遠理命 五〇八

(太)太后 三一三
太公 三一三
太保 三一七
太傅 三一七
太閤 三一三
太白 三一六
太極 三一二
太占 四八〇
太蘭 四八一
太原 三一三
太沽 三一二
太泥 三一二
太陰曆 三一一
太政官 三一八
太宰府 三一八
太婆川 三一四
太華山 三一三
太鼓持 三一三
太上天皇 三一八
太宰の權帥 三一八
太しり建つ 四八〇

太宗(明)　五三
太政大臣は一人師範として　三六　一九五
(五)五敎　二四
五覇　一九五
五官　三四
五車　一九九
五節　一九一
五戒　一九一
五更　三四
五衣　二〇〇
五嶋　一九八
五常　一九八
五常訓　一九八
五銖錢　三九
五百霧　二〇九
五龍山　三四
五伴緒神　一九七
五風十雨　一九九
五臟六腑
五畝之宅

五所八幡
五十步百步
五月蠅なす
五部の大乘經
(王)王　二〇五
王者　一九五
王母　三四
王孫　一九九
王業　一九一
王道　二九一
王化　三四
王家　二〇〇
王畿　一九八
王侯　一九八
王父　一九八
王子　三九
王女御　二〇九
王氣附く　三四
王佐の才　一九七
王事靡盬　一九九
王侯と歯す

王侯將相寧ぞ種あらむ　六〇六
王仁　六一二
王莽　六〇八
王勃　六〇七
王維　六〇八
王建　六〇六
王倫　六〇八
王昭君　六〇七
王鐵槍　六〇七
王昌齡　六〇七
王安石　六〇五
王羲之　六〇五
王陽明　六〇八
王子學　六〇六
王應麟　六〇五
王屋山　六〇八
王良造父　六〇八
(公)公卿　一四六
公卿　五一七
公達　一三七

公主　一八九
公家　一四七
公方　一五二
公儀　一八七
公樣　七二
公事　一四八
公文　一九一
公廨　一八七
公德　一九〇
公孫樹　三六
公曉　一四七
公寬法親王　一八八
公任(藤原)　四七二
公經(藤原)　四七二
公能(藤原)　四七二
公紀(風早)　九四
公禮(樺島)　一〇四
(六)六合　五八五
六穀　六〇四
六經　五八五
六儀　五八五

六藝　五八五
六軍　五八五
六軍　六〇四
六軍の貙虎に非ずして　六〇四
六臘　五八六
六朝　五八五
六晉　五八五
六田　五三八
六鳥　六〇一
六大洲　六〇一
六衙府　六〇二
六歌仙　六〇二
六波羅　六〇三
六波羅密寺　六〇三
六波羅の入道　六〇三
六月祓　三九六
六月祓　五二七
六月の望　六〇二
六月の秋　六〇三
六無の歌

六つの花　五三八
六道輪廻　六〇一
六韜三略　五八五
六十六部　六〇一
六合の渡　六〇一
六日の菖蒲　五三八
六尺の孤を託すべし　六〇一
六條に陸奥の鹽竈を　六〇二
六條判官　六〇二
六無齋　六〇二
(中)中宮　三五二
中有　三五二
中陰　三五二
中菁　三五二
中國　三五二
中瘴　三五二
中年　三五三
中庸

中差　二九三
中堅　三五二
中原　三五二
中原の鹿　三五二
中空　二九三
中空日記　二九三
中臣　二九四
中臣壽詞　二九四
中御門　二九四
中尊寺　三五三
中津藩　三九三
中行の士　三四一
中黑の旗　三九三
中流失舟　三四一
中闕白　二九四
中大兄皇子　二九四
中洲(三島)　五二三
(夫)夫子　四五九
夫人　四六八
夫木集　四八二
(毛)毛柔物　一七九

毛蠹物　一七九
毛を吹いて疵を　八一六
(允)允可　六一七
允當　四三
允文允武　四三
(父)父　九六
父島　三四五
父の王を失ふ例　三四五
父は子の爲に隱す　三四五
父雖不父子不可以不子　三四五
(勾)勾玉　五二一
勾踐の恥　一八九
勾當の內侍　一九〇
(比)比屋　四四〇
比丘　四四二
比來　四五五
比喩　四五五
比府　四五六
比肩接踵　四四三

(少)少康　二九〇
少輔　二八九
少艾　二八九
少年期　二九二
少納言入道　二九一
(孔)孔明　一九一
孔子　一八八
孔子家語　一八九
孔子時に遇はず　一八九
孔叢子　一八九
(夭)夭札　五九
夭折　五九
夭夭　五九
(介)介心　七七
介錯　七七
介然　七七
介冑　七七
介立　七七
(斗)斗牛　三七九
斗入　三八四
斗南の才　三八四
斗折蛇行　二九九
斗筲穿窬の才　二八九
(巴)巴里　二八六
巴の旗　二九二
巴提便　二九一
(匹)匹敵　一九一
匹夫　一八八
匹夫の勇　一八九
(友)友垣　一八九
友誼　五九
友元(人見)　五九
友幸(林)　五九
(化)化育　七七
化者　七七
化身　七七
(氏)氏神　七七
氏子　七七
氏寺　七七
氏郷(蒲生)　三七九
(午)午餐　三八四
午飯　三八四
(弔)弔屈の擧　三八四
(刈)刈菰の　三八三
(仍)仍　四三九
(予)予　三八七
(冗)冗長　四三一
(尤)尤物　四四七
(凶)凶讖　四四七
(仄)仄字　四四七
(屯)屯食　三八七
及)及ばずに　二三
(止)止事無し　四四九
(亢)亢龍の悔　四三八
(戸)戸部　一六〇
戸田　一七七
(犬)犬居　一七七
犬牙　四九
(厄)厄難　四九
(仇)仇香　五〇
五畫
(正)正朔　四五七
正法　一五一
正鵠　一一七
正子　三九八
正身　二九七
正風　二九七
正覺坊　二九六
正無うも　二九六
正正堂堂　五一三
正木の薙　二八七
正八幡宮　五一三
正行朝臣の形見の扉　二九九
正宗(岡崎)　五一三
正成(楠)　一四八
正行(楠)　一四八
正儀(楠)　一四九
正季(楠)　一四九
正盛(平)　一四八
正臣(坂)　三三五
正俊(堀田)　三一七
正明(石原)　五〇三
正雪(由井)　二八六
正清(鎌田)　五六七
正信(本多)　一〇八
正長(鈴木)　五〇五
正遠(和田)　二七八
正志(會澤)　六二一
正兄(福住)　一四
正信(狩野)　四六三
正胤(奥山)　一〇四
正風(高崎)　六五
正一(外山)　三六八
(目)目論　三三三
目擊　五四六
目送　五四六
目笑　五四六
目見　五四三
目角　五四三
目柴　五一七
目代　五四六
目付　五四三
目黑　五四三
目離る　五四三
目退ぐ　五一三
目易し　五四四
目を盜む　五四四
目を欲る　五四四
目も文に　五四四
目皆悉裂　五四四
目路の限　五四四
目渡る鳥　五四四
目を欹てて見る　五四四
(立)立枝　三三九
立處　三三九
立待　五四四
立蔀　三三一
立言　三三一
立法　五四六
立春　五四三
立夏　五四三
立山　三三二
立錐地　五八七
立志の辭　五八七
立憲政體　五八七
立乎其大者　三〇八
(白)白皙　四二四
白波　四二五
白眉　四二五
白縞　四二四
白衣　四二三
白鷗　四二五
白馬　二一
白鼠　二七五
白屋　四二三
白堊　四二三
白石　二七四
白眼　四二三
白痴　四二五
白狀　四二四
白旗　四二九
白雨　四二三
白散　四五四
白襲　二七二
白樫　二七二
白峰　二七三
白河　四二三
白金　四八五
白薄樣　二七四
白眞弓　二七三
白拍子　二七三
白水郎　一五
白日夢　四二四
白玉樓　四二四
白虎樓　四五四
白帝城　四二四
白根山　二七三
白氏文集　四二四
白總の馬　二七三
白駒の隙　四二四
白覆輪の鞍　二七五
白髮三千丈　四二五
白色不動光　四二四
白金打つたる糸毛の具足　二七四
白居易　四三

白樂天 四五
白石(新井) 二〇
白圭(松崎) 五一四
白嵓(稲垣) 三六
(石)石帶 二九三
石突 二八
石弓 二九
石交 二九二
石膏 二九二
石尊 二九三
石經 二九三
石伏 二八
石火矢 二八
石合戰 二八
石戰戲 二八
石桂魚 二三〇
石灰石 二九二
石橋の 二八
石走る 三八
石山寺 二六
石廊崎 四三
石打の征矢 二七
石に漱ぎ流に沈す 二八
石を抱いて淵に沈む 二九
(石)石橋(鈴木)
古龍 一一
古稀 一一
古渡 三一
古兵 四一
古里 三一
古文書 四一
古反故 三一
古河驛 四一
古の葛飾 一一
古賀文學 一一
古文眞寶 三一
古今六帖 一一
古今集 一一
古今集遠鏡 一一
古今集秘訣 一三
古今餘材抄 一九三
古川の邊の杉の下蔭 四八六
(氷)氷 二〇四
氷水 一九
氷雨 三一
氷柱 三一
氷柱 三一
氷釋 三一
氷樣 三一
氷人 四一
氷炭相容れず 四一
(四)四時 四一
四恩 三一
四至 三八
四簇 三八
四船 五七四
四天 二四四
四天王寺 二四四
四方拜 二四六
四方出 二四九
弘賢(屋代) 五五六
弘之(加藤) 一〇二
弘就(日根野) 四五〇
古法眼 四〇四
古松軒 一九
(左)左道 三一
左遷 三一
左祖 三一
左傳 三一
左近の櫻 三一
左右を備ふ 四四六
左準繩右規矩 二六七
(巨)巨浸 一四三
巨擘 一四三
巨勢山椿 一九九
(弘)弘通 一五〇
弘道館 一九〇
弘安の役 一八七
弘範(張) 三四九
弘高(巨勢) 一九九
(打)打步 三二九
打衣 四九
打狗 三一
打毬 五一〇
打毬樂 三一九
打出濱 四九
打付目 四九
打潛む 五〇
打翳む 二四九
(玉)玉盌 二四九
玉臺 一〇〇
玉帛 二〇〇
玉兎 二七四
玉觥 五七三
玉玦 五七四
玉串 五七三
玉匣 二五〇
玉篋 二四二
玉襷 二四六
玉緒 三二九
玉江 五〇
玉篇 四九
玉葉集 四九
玉蜀黍 三一九
玉津島 四九
玉小櫛 四九
玉祖命 五〇
玉屋命 三三七
玉垣の宮 三三六
玉山崩る 一四一
玉石俱焚 一四三
玉鉾百首 三三七
玉川水道 三三六
(王)王人 一四〇
(生)生 三三六
生食 二六
生飯 三三四
生絲 二七八
生絹 二七八
生井 二六
生涯 二七九
生徒 二八
生唆 二六
生佛 二六〇
生靈 二七九
生不學 二七九
生産所 四〇二
生者必滅 二五八
(布)布置 四七〇
布設 四六九
布敎 四六五
布告 四六六
布施 四六九
布袋 五〇二
布衣 四五八
布衣 四九四
布衣の兵 四九四
布衣の交 四五八
布肩衣 四〇九
布引の瀧 四〇九
(司)司寇 二三五
司空 二三七
司法 二四七
司城 二三八
司城子罕 三三八
司馬遷 二四七
司直(成島) 四〇二
(令)令 五九五
令儀 五九五

令終 五九五
令名 五九六
令德 五九六
令聞 五九六
令外官 五八九
令條記 五九〇
令狐楚 五九五
(加)加秩 九八
加累 一二八
加波山 一〇五
加比丹 一〇六
加奈太 一〇三
加奈拿 一〇三
加奈利亞 一〇三
加賀の千代 一〇三
加茂の競馬 八九
(本)本朝 一二五
本院 五〇六
本丸 五〇六
本歌 五〇五
本地 五〇五
本意 四九五
本陣 五〇五
本牧 五〇六
本帥 五〇五
本帥綱目 五〇五
本因坊 五〇五
本支百世 五〇六
本朝文粹 五〇六
本朝麗藻 五〇六
本朝無題詩 五〇六
本朝軍器考 五〇五
本立ちて道生ず 五四七
本を外にし末を內に す 五四八
(甲)甲首 八四
甲板 一一四
甲裳 一四八
甲越 一〇七
甲必丹 一〇六
甲子夜話 一〇七
甲斐が嶺を爽にも見しが 一〇六
(田)田疇 三七二
田子 三二八
田樂 三二八
田舍 六一六
田舍人 六一六
田舍合子 六一六
田伏崎 三三五
田上川 三三四
田原坂 一〇〇
田宇草 三七〇
田單が火牛の計 二一七
田村麿(坂上) 二〇三
(平)平 四八八
平坦 四八九
平癒 四八九
平房 四八九
平蕪 四八八
平衍 四五六
平頸 四五六
平文 四五六
平葺 四五五
平泉 四五六
平城 四〇一
平城 四八八
平安 四八八
平安京 三三五
平安時代 四八八
平穩に 三九七
平假名 四五六
平野社 四五六
平等院 四五四
平旦の氣 四八八
平生の歡 四八八
平治の亂 四八八
平家物語 四八八
平將軍 四八八
平洲(紀) 一三四
平八(本多) 五〇五
(北)北斗 四九八
北邙 四九八
北極 四九七
北極星 四九七
北朝 四九八
北面 四九九
北堂 四九八
矢背 五五六
北野 五〇三
北緒 一二八
北の方 一二八
北山殿 一二九
北道主人 四九八
北白川宮 一二八
北山(山本) 五六三
(世)世紀 一二八五
世範 一二八五
世話 三〇三
世故 二九四
世繼翁 五七三
世の性 五七四
世事百談 二九四
世を宇治山 五七五
(矢)矢 二三三
矢倉 五五五
矢束 五五七
矢頭 二五四
矢面 五五四
矢間 五五五
矢叫 五五五
矢庭 五五八
矢立 五五七
矢立の初 五五七
矢繼早 五五七
(玄)玄關 一八〇
玄蕃 一八〇
玄蕃寮 一八〇
玄圃梨 一八〇
玄冬素雪 一八三
玄惠法師 一八五
玄旨 一八一
玄德(劉) 五八四
玄白(杉田) 一八一
玄隨(宇田川) 五八四
(末)末學 二七七
末造 四二〇
末葉 四二〇
末廣 四二〇
末松山 四二〇
末我廼比禮 五五五
末は何處と遠江 五五八
(瓦)瓦合 一六三
瓦解 一六三
瓦硯 一六五
瓦全 一六六
瓦磚 一六六
瓦盃藁席 一六六
瓦窓繩樞 一六四
(外)外交 一六〇
外臣 一六三
外孫 一六〇
外典 一六〇
外辨 一六〇
外記 一六〇
外位 一六〇
外樣 三八三
外山の鹿 三八七
外敎の禁 一六〇
外本內末 五四八
(由)由旬 五六五
由緒 五六七
由々し 五六七
由有り 五九二
由良の湊 五六七
(印)印象 四一
印綬 四一
印籠 四三
印地打 四三
印南原 三七
(出)出湯 三六
出納 二八三
出師 二八二
出師表 二八二
出頭地 二六六
出雲國造 三五
出藍の譽 二六六

出雲(竹田) 三六
(母)母屋 五一
母衣 五〇七
母島 四三三
母刀自 四三三
(可)可汗 八九
可憐 一八
可殺不可辱 二〇九
(申)申樂 二三一
申文 五一〇
申楯 二五四
(皮)皮子 一〇四
皮籠 一〇四
皮膚 四五一
皮相 四四三
皮相士 四四三
(去)去就 一四二
去年 一九九
去來(向井) 五三六
(市)市 一〇七
市井 三三九
市坊 二四六
市谷 五三四
(甘)甘葛 四七〇
甘薺 二三三
甘心 五二
甘露 三三五
甘泉殿 四八二
(占)占兆 三三六
占形 一九〇
占領 一九〇
占城 四四
占婆 二
占守島 一九一
右馬頭 一七四
右京職 五八
右近の橘 五四七
右衛門の陣 三〇〇
(以)以心傳心 三九九
以逸待勞 一五一
以仁王 一四九
(未)未申 五三一
未明 五三
未了因 五三四
未曾有 四七〇
(用)用度 二三三
用間 五六
用捨 五六九
用管闚天 一五〇
(半)半天 三九三
半空 三九三
半物草 四三七
半藏門 四三五
(他)他見 四
他木 二〇三
他鎭 三三一
他山之石 五三三
(主)主上 二六四
主稅寮 三四二
(尻)尻鞘 二七四
尻槧 二七四
(牙)牙旗 九〇
牙城 九五
(代)代 五三
代始和鈔 五三四
(札)札所 五七〇
札幌 五六九
(卯)卯花 五六九
卯吉(田口) 一五〇
(史)史部 三九三
史記 三九三
(功)功田 四三七
功成名遂身退 四三五
(兄)兄 四
兄 二〇三
兄弟閱ㇾ墻 三三一
(永)永字八法 五三三
永孚(元田) 二六四
(仙)仙洞 三四二
仙(津田) 二七四
(句)句讀 二七四
句題 九〇
(民)民法 九五
民坊 五三一

(此)此方寄りての事 二〇〇
此面彼面に 二〇四
(尼)尼山 二四四
(戌)戌辰の役 五〇〇
(穴)穴熊の猛き獲物 三
(弗)弗 三八九
(奴)奴 五九七
(叩)叩角 三六八
(叩)叩頭 一九〇
(台)台鼎 三一六
(伎)伎 二五〇
(凹)凹凸 一四
(汜)汜濫 四三七
(且)且且且 九九
(央)央央央 二
(扔)扔く 四〇九
(只)只管 四四六
(氐)氐羌 三六三
(矛)矛盾 五三八
(必)必死 四四七
(因)因獄 四四九
(風)風 二四
(叱)叱咤 二四四
(召)召次 五〇〇
(幼)幼艾 幼學綱要 三八九
(乎)乎 五九七
(失)失す 一六八
(云)云々 一九〇
(叫)叫ぶ 叫喚地獄 三一六
(回)回向 二五〇
回向院 一四
回回教 四三七
回天の力 九九
回祿の災 二
六畫
(巧)巧笑 巧婦 巧言令色 巧遲不如拙速 八五
米沮 四八八
米突 五四三
米子 五七四
米澤 五七四
米利堅志 四四七
(有)有識 二四
有職 二四
有司 二四
有實 二〇
有珠 四七
有機物 三三
有機界 三三
有機體 三三
有波海 五一
有扈氏 四八
有待の身 五六
有爲轉變 三六九
有天下而不與 五五一
有禮(森) 六六
有樂齋(織田) 二〇八
(米)米坐 四八八
米沮 五四三
米突 五七四
米澤 五七四
米利堅志 四四七
米庵(市川) 三一
(行)行幸 一三九
行幸 五三四
行啓 一三九
行宮 一七
行宮 八三
行李 一八
行李 八八
行樂 八八
行縢 五五六
行纏 四三
行潦 八七
行潦 四〇六
行年 一四〇
行德 一三九
行政 一三九
行政法 一三九
行願寺 一三九
行憂し 二五
行住坐臥 一三九
行人征馬 八四

行尸走肉 八三
行き交ふ人はさながら梢の綠を行く心地す 五六五
行基 一三八
行家(源) 五三〇
行平(在原) 二二
行成(藤原) 四七七
行親(根井) 四二
行簡(神保) 二五四
行平(下河邊) 二五五
(竹)竹牌 三四三
竹帛 三四三
竹器 一四七
竹筒 二三〇
竹篩 三三七
竹葉 三四三
竹本 三三七
竹下 三三七
竹橘 三三七
竹尻籠 三三三
竹生島 三四三
竹林院 三四四
竹林七賢 三四四
竹田文學 三四三
竹馬の友 三四三
竹屋の渡 三三七
竹の水門 三三七
竹田の原 三三六
竹竿懸願絲 三三七
竹の實を食む鳥 三三七
竹堂(齋藤) 三三三
竹田(田能村) 三三四
(考)考妣 三三四
考試 三三四
考課 三三四
考績 三三四
(老)老中 五三七
老悖 五三七
老耄 五三七
老成者 五三七
老婆心 五三七
老蘇森 六四
老少不定 五七七
老而益壯 六四
老學庵雜記 五七七
老を養ふ故事 六四
老之來而始行道 六四
老吾老以及人之老 六〇九
老子 五七七
老(小野) 六三三
朱明 二六六
朱學 二六三
朱子學 二六四
朱印 二六三
朱印船 二六三
朱陳の民 二六五
朱熹 二六三
朱晦庵 二六四
(自)自愛 三三三
自治 二四一
自若 二三九
自敘鑑 二三七
自暴自棄 二四六
自多しとす 五二五
(吉)吉旦 一三〇
吉祥 一二九
吉上 一二九
吉野 五七二
吉野執行 五七二
吉野拾遺 五七二
吉田城 一三三
吉備中山 一三三
吉備津宮 一三三
吉水院 一三〇
吉水僧正 五七二
吉隆(大谷) 七〇
吉宗(德川) 三八〇
吉次(金賣) 一〇三
(百)百敷 五五〇
百僚 四五五
百揆 四五四
百會 四五五
百舌 四五七
百舌の耳原の陵 五四七
百萬遍 四五四
百萬塔 四五四
百錬鈔 四五五
百敗不挫 四五四
百足らず 五五一
百聞不如一見 四五四
百人一首改觀抄 四五四
百度戰ひて百度勝つ 五五一
百尺竿頭進一歩 四五四
百里奚 四五五
百川(依田) 五七三
百枝(山田) 五六〇
(西)西疇 二八七
西陲 二八七
西曆 二八九
西廂 二八六
西廂記 二八六
西府 二一三
西陣 四〇四
西宮 四〇四
西の湖 四〇四
西の對 四〇四
西班牙 二八〇
西比利亞 二四九
西稗雜纂 二八八
西寺の老鼠 四〇四
西國立志編 二一一
西山 二八六
西湖(田村) 三四〇
(名)名教 五四一
名分 五三三
名號 三九七
名田 三九七
名附 四七六
名殘 四七六
名細し 四七六
名譽心 四七六
名古屋 三九六
名聲籍甚 五四一
名吉の頭 四〇二
名越の祓 三九六
名與器不可以假人 三九七
(光)光榮 四二
光景 一六三
光堂 四四一
光風霽月 一六三
光陰矢の如し 一六一
光明皇后 一六三
光行(源) 五三〇
光範(赤松) 三
光政(池田) 二六
光起(土佐) 三八三
光信(土佐) 三八三
光親(藤原) 四七六
光長(藤原) 四七六
光隆(藤原) 四七六
光賴(藤原) 四七六
光圀(德川) 三八〇
光由(吉田) 五七二
光秋(土岐) 三七九
光平(伴林) 三八七
(安)安逸 一六
安佚 一六
安堵 一七
安坐居 五
安宅關 一〇
安樂川 一八
安樂寺 一八
安樂壽院 一八
安濃松原 一三
安而不忘危 五五六
安永檢校 一七
安針(三浦) 一二
安房(勝) 九九
(同)同胞 三七七
同胞 四三八
同保 三七七
同化 三七六
同化力 三七六

同平章字 三七七
同盟罷工 三七七
(衣)衣冠 三六
衣服 三〇三
衣箱 三六〇
衣紋 六三
衣魚 二五〇
衣川 一三二
衣笠城 一三一
衣食足而知禮節 二九
(先)先人 二九八
先進 一九八
先達 三〇〇
先途 三〇〇
先天的 三〇〇
先覺者 二九七
先取權 二九九
先哲叢談 三〇〇
先咲く花 五一四
先即制レ人 二一八
先聖後聖其揆一也 二九
(伏)伏流 四六四
伏屋 四六九
伏庵 四六九
伏籠 四六八
伏見 四六八
伏水 四六八
伏並む 四六四
伏波將軍 四三七
(早)早急 四三一
早追 四三一
早打 四三一
早雨 四三一
早蕨 四三一
早苗 四三一
早少女 四三一
(仲)仲秋 四三一
仲間 四三一
仲兄 四三一
仲求 四三一
仲淹(范) 四三一
仲麿(安部) 四三一
仲成(藤原) 四三一
仲平(藤原) 四三一
仲時(北條) 四三一
(曲)曲 四三一
曲 四三一
曲庵 四三一
曲筆 四三一
曲學阿世 四三一
曲水の宴 四三一
曲に渡す 四三一
曲亭 四三一
(地)地學 四三一
地軸 四三一
地頭 四三一
地下 四三一
地獄 四三一
地獄の業風 四三一
地中海 四三一
地象儀 四三一
地質學 四三一
地田宿 四三一
地魚の災 四三一
地に墜つ 四三一
地利不如人和 四三一
地冷水無三伏夏 四三一
(池)池月 四三一
池塘 四三一
池殿 四三一
(在)在經る事 四三一
在すが如 四三一
在五中將 四三一
在衡(藤原) 四三一
在滿(荷田) 四三一
(交)交交 四三一
交錯 四三一
交綏 四三一
交睫 四三一
交詢 四三一
交易 四三一
交野 四三一
交讓木 四三一
(多)多に 四三一
多方 四三一
多賀城 四三一
多寶塔 四三一
多武峰 四三一
多摩川 四三一
多多益善 四三一
多波禮具左 四三一
(宇)宇內 四三一
宇宙 四三一
宇治川 四三一
宇治殿 四三一
宇治大納言 四三一
宇治拾遺物語 四三一
宇禰野 四三一
宇和島 四三一
宇都保物語 四三一
宇佐八幡宮 四三一
(守)守山 四三一
守錢奴 四三一
守錢虜 四三一
守邦親王 四三一
守部(橘) 四三一
守重(近藤) 四三一
守武(荒木田) 四三一
(年)年木 四三一
年貢運上 四三一
年々歲々花相似 四三一
年平(飯田) 四三一
(汗)汗血 四三一
汗青 四三一
汗馬の勞 四三一
汗牛充棟 四三一
(色)色衣 四三一
色代 四三一
色然 四三一
色養 四三一
色褪せたる櫻 四三一
(伊)伊東 四三一
伊勢瓶子 四三一
伊勢物語 四三一
伊萬里燒 四三一
伊川先生 四三一
伊賀入道(稻富) 四三一
(因)因緣 四三一
因業 四三一
因循 四三一
因襲 四三一
因果 四三一
因果應報 四三一
(好)好尙 四三一
好意 四三一
好在 四三一
好奇心 四三一
好事 四三一
好事の人 四三一
好事を行じて前程を問ふ 四三一
(如)如法 四三一
如露 四三一
如望雲霓 四三一
如意輪堂 四三一
如雪 四三一
如水(黑田) 四三一
(合)合ふ 四三一
合圖 四三一
合物 四三一
合子 四三一
合卺 四三一
合歡木 四三一
合從連衡 四三一
(羊)羊齒 四三一
羊角 四三一
羊腸 四三一
(至)至誠 四三一
至善圓滿の世界 四三一
(休)休ふ 四三一
休休 四三一
休戚 四三一
休命 四三一
(肉)肉祖 四三一
肉食 四三一

肉刑 四〇三
肉山脯林 四〇三
(式)式 二三六
式代 二三六
式退 二三六
式微 二三七
(死)死海 二三五
死而後已矣 二三八
死出の山路 二四四
死出の田長 二四四
(列)列椿 三六二
列聖の洪緒を纘ぐ 五九八
列子 五九七
列樹(春道) 四二九
[耳]耳朶 二四〇
耳順 二三九
耳食 二三九
耳梨山 五三一
耳無山 五三一
耳成山 五三二
(羽)羽翼 四〇三
羽化 二三六
羽檄 二三六
羽觴 二三六
羽東師 二三六
(妄)妄想 二三七
妄語 二三五
妄誕 二三八
妄執 二四四
(江)江湖 二四四
江家 三六二
江帥 八五
江萬里 一九〇
江山信美是吾鄉 一八八
匡山 一三五
匡房(大江) 一三五
(向)向に 一三七
向股 一三三
向島 一三三
(伐)伐つ 一三三
伐木丁丁 二三七
(血)血儲 三七四
(屹)屹然 四〇三
屹度 四〇三
(劣)劣弱心 四〇七
劣弱身 四〇七
(缶)缶 四〇九
缶 五〇九
(亥)亥子 四〇〇
亥中月 五一〇
(朶)朶雲 一八八
朶頤 八二
(刑)刑 八五
刑法 一九〇
(匡)匡正 一九〇
匡山 一八八
匡房(大江) 一三五
(向)向に 一三七
向股 一三三
向島 一三三
(伐)伐つ 一三三
伐木丁丁 二三七
(血)血儲 三七四
血食 一三〇
(圭)圭田 一三〇
圭角 六三三
圭介(大鳥) 六三三
(艾)艾 四五八
艾老 五〇三
(彷)彷徨 六一六
彷彿 六一六
(夙)夙に 三一一
夙成 三一六
(托)托鉢 一七二
(坊)坊者 一七五
(扛)扛鼎 一三九
(充)充斥 一三九
(汝)汝 六九
(艮)艮齋(安積) 二一八
(曳)曳聲 五三六
(吃)吃水 五〇
(凩)凩 五〇
(伉)伉儷 四二一
(来)来耜 二
一七八
一三四
三〇八
七二
七六
七六
四一九
四二〇
五一四
二六三
四七
一九二
八八
五七六

(丞)丞相 二六九
(夷)夷則 六一五
阡)阡陌 三〇一
(忙)忙怕 一九六
(杓)杓葉の織物 一五〇
(劬)劬 一四
(各)各自 六七
(企)企望 一三二
(字)字彙 二七五
(吐)吐田 四三六
(牝)牝鷄晨を司る 四五二
(旨)旨と 五二九
(忖)忖る 四三
忖度 三〇九
(伎)伎癢 三〇九
(刎)刎頸の交 一三八
(任)任す 四八三
(全)全忠(朱) 五七一
(存)存亡 二六五
(岌)岌岌 三〇九
(決)決斷所 一三三
言擇 一七八
言責 二〇三
言視ぐ 一八二
言向く 二〇三
言問ふ 二〇三
言問ひし鳥 二〇三
言痛し 二〇〇
言喧ぐ 二〇三
言塞ぐ 二〇三
言遣す 二〇三
言知らず 三八
言志行錄 一八一
言を巧にす 二〇三
言擧せぬ國 二〇一
言詮なき事 三九
言語は君子の樞機 一八〇
言行は君子の樞機 一八〇
(利)利 五八三
利 一五三
利益 五九〇
利器 五八三
利潤 五八六
利己 五八六
利己主義 五八六
利根 五八六
利根川 三八四
利島 三八三
利用厚生 五九一
利休 五八三
利仁(藤原) 四七〇
利家(前田) 五一七
利勝(土井) 三八九
(身)身屋 五五一
身盡 五三三
身退ぐ 五三三
身寄峠 五三四
身を穿つ斧 五三五
身を益なきものにして 五三五
身を殺して仁を爲す 五三五

決二於勝千里外一 九九

(赤)赤星　三
赤髯　三
赤道　二九二
赤銅　二六一
赤地　二九三
赤楊　二九二
赤貧　二九三
赤子　二九三
赤樫　二
赤壁　二九二
赤澤　二
赤穗　三
赤條條　二九三
赤駒の蜿　二
赤水(長久保)　二九二
(秀)秀才　二三三
秀逸　二三三
秀政(堀)　五〇七
秀成(堀)　五〇七
秀衡(藤原)　四七五
秀康(清水)　二五〇
秀義(佐々木)　二
秀綱(大河內)　一
(孝)孝養　一
孝廉　八
孝悌　九
孝鳥　九
孝經　九
孝義錄　九
孝孺　四
孝允(木戸)　一
孝綽(大塚)　六
(尾)尾花　六
尾張　六
尾道　六
尾大掉はず　四
尾羽うち枯す　六
尾花が末を秋とはいはむ　六
(君)君子　六
君子國　六
君子豹變　一
君子見善則遷　三〇二
君澤形　一三四
君臣水魚　一五五
君父の仇は倶に天を戴かず　一五五
君まさで烟絕えにし　一三五
君雖不君臣不可以不臣　一三四
君平(蒲生)　一〇八
(伯)伯勞　五四七
伯牙　四三三
伯林　四九二
伯靈　四九二
伯夷傳　四三三
伯仲の間　四三五
伯繼(熊澤)　一五四
(佛)佛陀　四七九
佛者　四七九
佛名　四七九
佛閣　四七八
佛國　四七九
佛生會　四七九
佛法僧　四七九
佛の御石の鉢　五〇三
(足)足輕　八
足塲　九
足蹇　九
足跗　九
足袋　三〇六
足揃　三三四
足引の　九、
足搔く　九
足弱車　二
足白太刀　九
(良)良道　八
良人　五二
良弼　九九〇
良香(都)　五〇〇
良文(村岡)　五三
良房(藤原)　五四〇
良經(藤原)　四七八
良雄(大石)　六八
良澤(前野)　五一七
(佐)佐命　二三〇
佐野　二三四
佐殿　二七八
佐渡院　二三三
佐紀山　二七八
佐賀の亂　二三七
佐保姫の心盡　二三五
佐理(藤原)　四七三
(里)里　五八二
里閈　五八三
里長　二三三
里曲　二三三
里中社　五八七
里見太郎　二三三
(成)成就　二五八
成績　二七七
成明親王　四〇一
成功(鄭)　三六四
成季(橘)　三三〇
成卿(杉田)　二七七
成章(富士谷)　四六七
(呂)呂宋　五九三
呂后　五九二
呂蒙正　五九二
(杜)杜若　五九二
杜山　五五二
杜宇　五〇三
杜鵑　五〇三
杜撰　三五九
杜父魚　二六
杜康　五三
杜牧之　二三三
杜子美　二三三
杜審言　二三三
(見)見る　二〇
見ゆ　五一八
見放く　五一三
見遣す　二九四
見晴かす　二九五
見參の板　二八一
見軍作矢　二六
見附の國府　五一六
見雲眞人　五一三
見佛　一八四
(扶)扶持　四七一
扶助　四六八
扶桑　四六六
扶桑國　四六六
扶桑略記　四六六
扶桑豈無影乎　四六六
(吹)吹嵐　四六一
吹荒　四六一
吹返　四六二
吹毛求疵　一八六
吹上の濱　四六一
吹く風も枝を鳴さず　四六三
(折)折角　二九四
折閱　二九五
折中　二九五
折衝　二九五
折節　二九六
折敷　六三
折櫃　六三五
折掛垣　六三五
折烏帽子　六三五
折に遇ひて　二四二
(沈)沈く　三四八
沈沈　三四八
沈湎　三四八
沈重　三四八
沈澱物　三四八
沈痼癈疾　三四七
(五)吾　六〇五
吾子　六
吾兒　六
吾木香　六三
吾妻橋　三
吾妻鏡　三
吾復夢に周公を見ず　六三
吾が老を老として人

(位)位置 六五九
位置 六五〇
位置 六五一
位置 六五二
位置 六五三
位置 六五四
位置 六五五
位置 六五六
位置 六五七
位置 六五八
位置 六五九
位置 六六〇
位置 六六一
位置 六六二
位置 六六三
位置 六六四
位置 六六五
位置 六六六
位置 六六七
位置 六六八
位置 六六九
位置 六七〇
位置 六七一
位置 六七二
位置 六七三
位置 六七四
位置 六七五
位置 六七六
位置 六七七
位置 六七八
位置 六七九
位置 六八〇
位置 六八一
位置 六八二
位置 六八三
位置 六八四
位置 六八五
位置 六八六
位置 六八七
位置 六八八
位置 六八九
位置 六九〇
位置 六九一
位置 六九二
位置 六九三
位置 六九四
位置 六九五
位置 六九六
位置 六九七
位置 六九八
位置 六九九
位置 七〇〇
位置 七〇一
位置 七〇二
位置 七〇三
位置 七〇四
位置 七〇五
位置 七〇六
位置 七〇七
位置 七〇八
位置 七〇九
位置 七一〇
位置 七一一
位置 七一二
位置 七一三
位置 七一四
位置 七一五
位置 七一六
位置 七一七
位置 七一八
位置 七一九
位置 七二〇
位置 七二一
位置 七二二
位置 七二三
位置 七二四
位置 七二五
位置 七二六
位置 七二七
位置 七二八
位置 七二九
位置 七三〇
位置 七三一
位置 七三二
位置 七三三
位置 七三四
位置 七三五
位置 七三六
位置 七三七
位置 七三八
位置 七三九
位置 七四〇
位置 七四一
位置 七四二
位置 七四三
位置 七四四
位置 七四五
位置 七四六
位置 七四七
位置 七四八
位置 七四九
位置 七五〇
位置 七五一
位置 七五二
位置 七五三
位置 七五四
位置 七五五
位置 七五六
位置 七五七
位置 七五八
位置 七五九
位置 七六〇
位置 七六一
位置 七六二
位置 七六三
位置 七六四
位置 七六五
位置 七六六
位置 七六七
位置 七六八
位置 七六九
位置 七七〇
位置 七七一
位置 七七二
位置 七七三
位置 七七四
位置 七七五
位置 七七六
位置 七七七
位置 七七八
位置 七七九
位置 七八〇
位置 七八一
位置 七八二
位置 七八三
位置 七八四
位置 七八五
位置 七八六
位置 七八七
位置 七八八
位置 七八九
位置 七九〇
位置 七九一
位置 七九二
位置 七九三
位置 七九四
位置 七九五
位置 七九六
位置 七九七
位置 七九八
位置 七九九
位置 八〇〇
位置 八〇一
位置 八〇二
位置 八〇三
位置 八〇四
位置 八〇五
位置 八〇六
位置 八〇七
位置 八〇八
位置 八〇九
位置 八一〇
位置 八一一
位置 八一二
位置 八一三
位置 八一四
位置 八一五
位置 八一六
位置 八一七
位置 八一八
位置 八一九
位置 八二〇
位置 八二一
位置 八二二
位置 八二三
位置 八二四
位置 八二五
位置 八二六
位置 八二七
位置 八二八
位置 八二九
位置 八三〇
位置 八三一
位置 八三二
位置 八三三
位置 八三四
位置 八三五
位置 八三六
位置 八三七
位置 八三八
位置 八三九
位置 八四〇
位置 八四一
位置 八四二
位置 八四三
位置 八四四
位置 八四五
位置 八四六
位置 八四七
位置 八四八
位置 八四九
位置 八五〇
位置 八五一
位置 八五二
位置 八五三
位置 八五四
位置 八五五
位置 八五六
位置 八五七
位置 八五八
位置 八五九
位置 八六〇
位置 八六一
位置 八六二
位置 八六三
位置 八六四
位置 八六五
位置 八六六
位置 八六七
位置 八六八
位置 八六九
位置 八七〇
位置 八七一
位置 八七二
位置 八七三
位置 八七四
位置 八七五
位置 八七六
位置 八七七
位置 八七八
位置 八七九
位置 八八〇
位置 八八一
位置 八八二
位置 八八三
位置 八八四
位置 八八五
位置 八八六
位置 八八七
位置 八八八
位置 八八九
位置 八九〇
位置 八九一
位置 八九二
位置 八九三
位置 八九四
位置 八九五
位置 八九六
位置 八九七
位置 八九八
位置 八九九
位置 九〇〇
位置 九〇一
位置 九〇二
位置 九〇三
位置 九〇四
位置 九〇五
位置 九〇六
位置 九〇七
位置 九〇八
位置 九〇九
位置 九一〇
位置 九一一
位置 九一二
位置 九一三
位置 九一四
位置 九一五
位置 九一六
位置 九一七
位置 九一八
位置 九一九
位置 九二〇
位置 九二一
位置 九二二
位置 九二三
位置 九二四
位置 九二五
位置 九二六
位置 九二七
位置 九二八
位置 九二九
位置 九三〇
位置 九三一
位置 九三二
位置 九三三
位置 九三四
位置 九三五
位置 九三六
位置 九三七
位置 九三八
位置 九三九
位置 九四〇
位置 九四一
位置 九四二
位置 九四三
位置 九四四
位置 九四五
位置 九四六
位置 九四七
位置 九四八
位置 九四九
位置 九五〇
位置 九五一
位置 九五二
位置 九五三
位置 九五四
位置 九五五
位置 九五六
位置 九五七
位置 九五八
位置 九五九
位置 九六〇
位置 九六一
位置 九六二
位置 九六三
位置 九六四
位置 九六五
位置 九六六
位置 九六七
位置 九六八
位置 九六九
位置 九七〇
位置 九七一
位置 九七二
位置 九七三
位置 九七四
位置 九七五
位置 九七六
位置 九七七
位置 九七八
位置 九七九
位置 九八〇
位置 九八一
位置 九八二
位置 九八三
位置 九八四
位置 九八五
位置 九八六
位置 九八七
位置 九八八
位置 九八九
位置 九九〇
位置 九九一
位置 九九二
位置 九九三
位置 九九四
位置 九九五
位置 九九六
位置 九九七
位置 九九八
位置 九九九
位置 一〇〇〇
位置 一〇〇一
位置 一〇〇二
位置 一〇〇三
位置 一〇〇四
位置 一〇〇五
位置 一〇〇六
位置 一〇〇七
位置 一〇〇八
位置 一〇〇九
位置 一〇一〇
位置 一〇一一
位置 一〇一二
位置 一〇一三
位置 一〇一四
位置 一〇一五
位置 一〇一六
位置 一〇一七
位置 一〇一八
位置 一〇一九
位置 一〇二〇
位置 一〇二一
位置 一〇二二
位置 一〇二三
位置 一〇二四
位置 一〇二五
位置 一〇二六
位置 一〇二七
位置 一〇二八
位置 一〇二九
位置 一〇三〇
位置 一〇三一
位置 一〇三二
位置 一〇三三
位置 一〇三四
位置 一〇三五
位置 一〇三六
位置 一〇三七
位置 一〇三八
位置 一〇三九
位置 一〇四〇
位置 一〇四一
位置 一〇四二
位置 一〇四三
位置 一〇四四
位置 一〇四五
位置 一〇四六
位置 一〇四七
位置 一〇四八
位置 一〇四九
位置 一〇五〇
位置 一〇五一
位置 一〇五二
位置 一〇五三
位置 一〇五四
位置 一〇五五
位置 一〇五六
位置 一〇五七
位置 一〇五八
位置 一〇五九
位置 一〇六〇
位置 一〇六一
位置 一〇六二
位置 一〇六三
位置 一〇六四
位置 一〇六五
位置 一〇六六
位置 一〇六七
位置 一〇六八
位置 一〇六九
位置 一〇七〇
位置 一〇七一
位置 一〇七二
位置 一〇七三
位置 一〇七四
位置 一〇七五
位置 一〇七六
位置 一〇七七
位置 一〇七八
位置 一〇七九
位置 一〇八〇
位置 一〇八一
位置 一〇八二
位置 一〇八三
位置 一〇八四
位置 一〇八五
位置 一〇八六
位置 一〇八七
位置 一〇八八
位置 一〇八九
位置 一〇九〇
位置 一〇九一
位置 一〇九二
位置 一〇九三
位置 一〇九四
位置 一〇九五
位置 一〇九六
位置 一〇九七
位置 一〇九八
位置 一〇九九
位置 一一〇〇
位置 一一〇一
位置 一一〇二
位置 一一〇三
位置 一一〇四
位置 一一〇五
位置 一一〇六
位置 一一〇七
位置 一一〇八
位置 一一〇九
位置 一一一〇
位置 一一一一
位置 一一一二
位置 一一一三
位置 一一一四
位置 一一一五
位置 一一一六
位置 一一一七
位置 一一一八
位置 一一一九
位置 一一二〇
位置 一一二一
位置 一一二二
位置 一一二三
位置 一一二四
位置 一一二五
位置 一一二六
位置 一一二七
位置 一一二八
位置 一一二九
位置 一一三〇
位置 一一三一
位置 一一三二
位置 一一三三
位置 一一三四
位置 一一三五
位置 一一三六
位置 一一三七
位置 一一三八
位置 一一三九
位置 一一四〇
位置 一一四一
位置 一一四二
位置 一一四三
位置 一一四四
位置 一一四五
位置 一一四六
位置 一一四七
位置 一一四八
位置 一一四九
位置 一一五〇
位置 一一五一
位置 一一五二
位置 一一五三
位置 一一五四
位置 一一五五
位置 一一五六
位置 一一五七
位置 一一五八
位置 一一五九
位置 一一六〇
位置 一一六一
位置 一一六二
位置 一一六三
位置 一一六四
位置 一一六五
位置 一一六六
位置 一一六七
位置 一一六八
位置 一一六九
位置 一一七〇
位置 一一七一
位置 一一七二
位置 一一七三
位置 一一七四
位置 一一七五
位置 一一七六
位置 一一七七
位置 一一七八
位置 一一七九
位置 一一八〇
位置 一一八一
位置 一一八二
位置 一一八三
位置 一一八四
位置 一一八五
位置 一一八六
位置 一一八七
位置 一一八八
位置 一一八九
位置 一一九〇
位置 一一九一
位置 一一九二
位置 一一九三
位置 一一九四
位置 一一九五
位置 一一九六
位置 一一九七
位置 一一九八
位置 一一九九
位置 一二〇〇
位置 一二〇一
位置 一二〇二
位置 一二〇三
位置 一二〇四
位置 一二〇五
位置 一二〇六
位置 一二〇七
位置 一二〇八
位置 一二〇九
位置 一二一〇
位置 一二一一
位置 一二一二
位置 一二一三
位置 一二一四
位置 一二一五
位置 一二一六
位置 一二一七
位置 一二一八
位置 一二一九
位置 一二二〇
位置 一二二一
位置 一二二二
位置 一二二三
位置 一二二四
位置 一二二五
位置 一二二六
位置 一二二七
位置 一二二八
位置 一二二九
位置 一二三〇
位置 一二三一
位置 一二三二
位置 一二三三
位置 一二三四
位置 一二三五
位置 一二三六
位置 一二三七
位置 一二三八
位置 一二三九
位置 一二四〇
位置 一二四一
位置 一二四二
位置 一二四三
位置 一二四四
位置 一二四五
位置 一二四六
位置 一二四七
位置 一二四八
位置 一二四九
位置 一二五〇
位置 一二五一
位置 一二五二
位置 一二五三
位置 一二五四
位置 一二五五
位置 一二五六
位置 一二五七
位置 一二五八
位置 一二五九
位置 一二六〇
位置 一二六一
位置 一二六二
位置 一二六三
位置 一二六四
位置 一二六五
位置 一二六六
位置 一二六七
位置 一二六八
位置 一二六九
位置 一二七〇
位置 一二七一
位置 一二七二
位置 一二七三
位置 一二七四
位置 一二七五
位置 一二七六
位置 一二七七
位置 一二七八
位置 一二七九
位置 一二八〇
位置 一二八一
位置 一二八二
位置 一二八三
位置 一二八四
位置 一二八五
位置 一二八六
位置 一二八七
位置 一二八八
位置 一二八九
位置 一二九〇
位置 一二九一
位置 一二九二
位置 一二九三
位置 一二九四
位置 一二九五
位置 一二九六
位置 一二九七
位置 一二九八
位置 一二九九
位置 一三〇〇
位置 一三〇一
位置 一三〇二
位置 一三〇三
位置 一三〇四
位置 一三〇五
位置 一三〇六
位置 一三〇七
位置 一三〇八
位置 一三〇九
位置 一三一〇
位置 一三一一
位置 一三一二
位置 一三一三
位置 一三一四
位置 一三一五
位置 一三一六
位置 一三一七
位置 一三一八
位置 一三一九
位置 一三二〇
位置 一三二一
位置 一三二二
位置 一三二三
位置 一三二四
位置 一三二五
位置 一三二六
位置 一三二七
位置 一三二八
位置 一三二九
位置 一三三〇
位置 一三三一
位置 一三三二
位置 一三三三
位置 一三三四
位置 一三三五
位置 一三三六
位置 一三三七
位置 一三三八
位置 一三三九
位置 一三四〇
位置 一三四一
位置 一三四二
位置 一三四三
位置 一三四四
位置 一三四五
位置 一三四六
位置 一三四七
位置 一三四八
位置 一三四九
位置 一三五〇
位置 一三五一
位置 一三五二
位置 一三五三
位置 一三五四
位置 一三五五
位置 一三五六
位置 一三五七
位置 一三五八
位置 一三五九
位置 一三六〇
位置 一三六一
位置 一三六二
位置 一三六三
位置 一三六四
位置 一三六五
位置 一三六六
位置 一三六七
位置 一三六八
位置 一三六九
位置 一三七〇
位置 一三七一
位置 一三七二
位置 一三七三
位置 一三七四
位置 一三七五
位置 一三七六
位置 一三七七
位置 一三七八
位置 一三七九
位置 一三八〇
位置 一三八一
位置 一三八二
位置 一三八三
位置 一三八四
位置 一三八五
位置 一三八六
位置 一三八七
位置 一三八八
位置 一三八九
位置 一三九〇
位置 一三九一
位置 一三九二
位置 一三九三
位置 一三九四
位置 一三九五
位置 一三九六
位置 一三九七
位置 一三九八
位置 一三九九
位置 一四〇〇
位置 一四〇一
位置 一四〇二
位置 一四〇三
位置 一四〇四
位置 一四〇五
位置 一四〇六
位置 一四〇七
位置 一四〇八
位置 一四〇九
位置 一四一〇
位置 一四一一
位置 一四一二
位置 一四一三
位置 一四一四
位置 一四一五
位置 一四一六
位置 一四一七
位置 一四一八
位置 一四一九
位置 一四二〇
位置 一四二一
位置 一四二二
位置 一四二三
位置 一四二四
位置 一四二五
位置 一四二六
位置 一四二七
位置 一四二八
位置 一四二九
位置 一四三〇
位置 一四三一
位置 一四三二
位置 一四三三
位置 一四三四
位置 一四三五
位置 一四三六
位置 一四三七
位置 一四三八
位置 一四三九
位置 一四四〇
位置 一四四一
位置 一四四二
位置 一四四三
位置 一四四四
位置 一四四五
位置 一四四六
位置 一四四七
位置 一四四八
位置 一四四九
位置 一四五〇
位置 一四五一
位置 一四五二
位置 一四五三
位置 一四五四
位置 一四五五
位置 一四五六
位置 一四五七
位置 一四五八
位置 一四五九
位置 一四六〇
位置 一四六一
位置 一四六二
位置 一四六三
位置 一四六四
位置 一四六五
位置 一四六六
位置 一四六七
位置 一四六八
位置 一四六九
位置 一四七〇
位置 一四七一
位置 一四七二
位置 一四七三
位置 一四七四
位置 一四七五
位置 一四七六
位置 一四七七
位置 一四七八
位置 一四七九
位置 一四八〇
位置 一四八一
位置 一四八二
位置 一四八三
位置 一四八四
位置 一四八五
位置 一四八六
位置 一四八七
位置 一四八八
位置 一四八九
位置 一四九〇
位置 一四九一
位置 一四九二
位置 一四九三
位置 一四九四
位置 一四九五
位置 一四九六
位置 一四九七
位置 一四九八
位置 一四九九
位置 一五〇〇
位置 一五〇一
位置 一五〇二
位置 一五〇三
位置 一五〇四
位置 一五〇五
位置 一五〇六
位置 一五〇七
位置 一五〇八
位置 一五〇九
位置 一五一〇
位置 一五一一
位置 一五一二
位置 一五一三
位置 一五一四
位置 一五一五
位置 一五一六
位置 一五一七
位置 一五一八
位置 一五一九
位置 一五二〇
位置 一五二一
位置 一五二二
位置 一五二三
位置 一五二四
位置 一五二五
位置 一五二六
位置 一五二七
位置 一五二八
位置 一五二九
位置 一五三〇
位置 一五三一
位置 一五三二
位置 一五三三
位置 一五三四
位置 一五三五
位置 一五三六
位置 一五三七
位置 一五三八
位置 一五三九
位置 一五四〇
位置 一五四一
位置 一五四二
位置 一五四三
位置 一五四四
位置 一五四五
位置 一五四六
位置 一五四七
位置 一五四八
位置 一五四九
位置 一五五〇
位置 一五五一
位置 一五五二
位置 一五五三
位置 一五五四
位置 一五五五
位置 一五五六
位置 一五五七
位置 一五五八
位置 一五五九
位置 一五六〇
位置 一五六一
位置 一五六二
位置 一五六三
位置 一五六四
位置 一五六五
位置 一五六六
位置 一五六七
位置 一五六八
位置 一五六九
位置 一五七〇
位置 一五七一
位置 一五七二
位置 一五七三
位置 一五七四
位置 一五七五
位置 一五七六
位置 一五七七
位置 一五七八
位置 一五七九
位置 一五八〇
位置 一五八一
位置 一五八二
位置 一五八三
位置 一五八四
位置 一五八五
位置 一五八六
位置 一五八七
位置 一五八八
位置 一五八九
位置 一五九〇
位置 一五九一
位置 一五九二
位置 一五九三
位置 一五九四
位置 一五九五
位置 一五九六
位置 一五九七
位置 一五九八
位置 一五九九
位置 一六〇〇
位置 一六〇一
位置 一六〇二
位置 一六〇三
位置 一六〇四
位置 一六〇五
位置 一六〇六
位置 一六〇七
位置 一六〇八
位置 一六〇九
位置 一六一〇
位置 一六一一
位置 一六一二
位置 一六一三
位置 一六一四
位置 一六一五
位置 一六一六
位置 一六一七
位置 一六一八
位置 一六一九
位置 一六二〇
位置 一六二一
位置 一六二二
位置 一六二三
位置 一六二四
位置 一六二五
位置 一六二六
位置 一六二七
位置 一六二八
位置 一六二九
位置 一六三〇
位置 一六三一
位置 一六三二
位置 一六三三
位置 一六三四
位置 一六三五
位置 一六三六
位置 一六三七
位置 一六三八
位置 一六三九
位置 一六四〇
位置 一六四一
位置 一六四二
位置 一六四三
位置 一六四四
位置 一六四五
位置 一六四六
位置 一六四七
位置 一六四八
位置 一六四九
位置 一六五〇
位置 一六五一
位置 一六五二
位置 一六五三
位置 一六五四
位置 一六五五
位置 一六五六
位置 一六五七
位置 一六五八
位置 一六五九
位置 一六六〇
位置 一六六一
位置 一六六二
位置 一六六三
位置 一六六四
位置 一六六五
位置 一六六六
位置 一六六七
位置 一六六八
位置 一六六九
位置 一六七〇
位置 一六七一
位置 一六七二
位置 一六七三
位置 一六七四
位置 一六七五
位置 一六七六
位置 一六七七
位置 一六七八
位置 一六七九
位置 一六八〇
位置 一六八一
位置 一六八二
位置 一六八三
位置 一六八四
位置 一六八五
位置 一六八六
位置 一六八七
位置 一六八八
位置 一六八九
位置 一六九〇
位置 一六九一
位置 一六九二
位置 一六九三
位置 一六九四
位置 一六九五
位置 一六九六
位置 一六九七
位置 一六九八
位置 一六九九
位置 一七〇〇
位置 一七〇一
位置 一七〇二
位置 一七〇三
位置 一七〇四
位置 一七〇五
位置 一七〇六
位置 一七〇七
位置 一七〇八
位置 一七〇九
位置 一七一〇
位置 一七一一
位置 一七一二
位置 一七一三
位置 一七一四
位置 一七一五
位置 一七一六
位置 一七一七
位置 一七一八
位置 一七一九
位置 一七二〇
位置 一七二一
位置 一七二二
位置 一七二三
位置 一七二四
位置 一七二五
位置 一七二六
位置 一七二七
位置 一七二八
位置 一七二九
位置 一七三〇
位置 一七三一
位置 一七三二
位置 一七三三
位置 一七三四
位置 一七三五
位置 一七三六
位置 一七三七
位置 一七三八
位置 一七三九
位置 一七四〇
位置 一七四一
位置 一七四二
位置 一七四三
位置 一七四四
位置 一七四五
位置 一七四六
位置 一七四七
位置 一七四八
位置 一七四九
位置 一七五〇
位置 一七五一
位置 一七五二
位置 一七五三
位置 一七五四
位置 一七五五
位置 一七五六
位置 一七五七
位置 一七五八
位置 一七五九
位置 一七六〇
位置 一七六一
位置 一七六二
位置 一七六三
位置 一七六四
位置 一七六五
位置 一七六六
位置 一七六七
位置 一七六八
位置 一七六九
位置 一七七〇
位置 一七七一
位置 一七七二
位置 一七七三
位置 一七七四
位置 一七七五
位置 一七七六
位置 一七七七
位置 一七七八
位置 一七七九
位置 一七八〇
位置 一七八一
位置 一七八二
位置 一七八三
位置 一七八四
位置 一七八五
位置 一七八六
位置 一七八七
位置 一七八八
位置 一七八九
位置 一七九〇
位置 一七九一
位置 一七九二
位置 一七九三
位置 一七九四
位置 一七九五
位置 一七九六
位置 一七九七
位置 一七九八
位置 一七九九
位置 一八〇〇
位置 一八〇一
位置 一八〇二
位置 一八〇三
位置 一八〇四
位置 一八〇五
位置 一八〇六
位置 一八〇七
位置 一八〇八
位置 一八〇九
位置 一八一〇
位置 一八一一
位置 一八一二
位置 一八一三
位置 一八一四
位置 一八一五
位置 一八一六
位置 一八一七
位置 一八一八
位置 一八一九
位置 一八二〇
位置 一八二一
位置 一八二二
位置 一八二三
位置 一八二四
位置 一八二五
位置 一八二六
位置 一八二七
位置 一八二八
位置 一八二九
位置 一八三〇
位置 一八三一
位置 一八三二
位置 一八三三
位置 一八三四
位置 一八三五
位置 一八三六
位置 一八三七
位置 一八三八
位置 一八三九
位置 一八四〇
位置 一八四一
位置 一八四二
位置 一八四三
位置 一八四四
位置 一八四五
位置 一八四六
位置 一八四七
位置 一八四八
位置 一八四九
位置 一八五〇
位置 一八五一
位置 一八五二
位置 一八五三
位置 一八五四
位置 一八五五
位置 一八五六
位置 一八五七
位置 一八五八
位置 一八五九
位置 一八六〇
位置 一八六一
位置 一八六二
位置 一八六三
位置 一八六四
位置 一八六五
位置 一八六六
位置 一八六七
位置 一八六八
位置 一八六九
位置 一八七〇
位置 一八七一
位置 一八七二
位置 一八七三
位置 一八七四
位置 一八七五
位置 一八七六
位置 一八七七
位置 一八七八
位置 一八七九
位置 一八八〇
位置 一八八一
位置 一八八二
位置 一八八三
位置 一八八四
位置 一八八五
位置 一八八六
位置 一八八七
位置 一八八八
位置 一八八九
位置 一八九〇
位置 一八九一
位置 一八九二
位置 一八九三
位置 一八九四
位置 一八九五
位置 一八九六
位置 一八九七
位置 一八九八
位置 一八九九
位置 一九〇〇
位置 一九〇一
位置 一九〇二
位置 一九〇三
位置 一九〇四
位置 一九〇五
位置 一九〇六
位置 一九〇七
位置 一九〇八
位置 一九〇九
位置 一九一〇
位置 一九一一
位置 一九一二
位置 一九一三
位置 一九一四
位置 一九一五
位置 一九一六
位置 一九一七
位置 一九一八
位置 一九一九
位置 一九二〇
位置 一九二一
位置 一九二二
位置 一九二三
位置 一九二四
位置 一九二五
位置 一九二六
位置 一九二七
位置 一九二八
位置 一九二九
位置 一九三〇
位置 一九三一
位置 一九三二
位置 一九三三
位置 一九三四
位置 一九三五
位置 一九三六
位置 一九三七
位置 一九三八
位置 一九三九
位置 一九四〇
位置 一九四一
位置 一九四二
位置 一九四三
位置 一九四四
位置 一九四五
位置 一九四六
位置 一九四七
位置 一九四八
位置 一九四九
位置 一九五〇
位置 一九五一
位置 一九五二
位置 一九五三
位置 一九五四
位置 一九五五
位置 一九五六
位置 一九五七
位置 一九五八
位置 一九五九
位置 一九六〇
位置 一九六一
位置 一九六二
位置 一九六三
位置 一九六四
位置 一九六五
位置 一九六六
位置 一九六七
位置 一九六八
位置 一九六九
位置 一九七〇
位置 一九七一
位置 一九七二
位置 一九七三
位置 一九七四
位置 一九七五
位置 一九七六
位置 一九七七
位置 一九七八
位置 一九七九
位置 一九八〇
位置 一九八一
位置 一九八二
位置 一九八三
位置 一九八四
位置 一九八五
位置 一九八六
位置 一九八七
位置 一九八八
位置 一九八九
位置 一九九〇
位置 一九九一
位置 一九九二
位置 一九九三
位置 一九九四
位置 一九九五
位置 一九九六
位置 一九九七
位置 一九九八
位置 一九九九
位置 二〇〇〇
位置 二〇〇一
位置 二〇〇二
位置 二〇〇三
位置 二〇〇四
位置 二〇〇五
位置 二〇〇六
位置 二〇〇七
位置 二〇〇八
位置 二〇〇九
位置 二〇一〇
位置 二〇一一
位置 二〇一二
位置 二〇一三
位置 二〇一四
位置 二〇一五
位置 二〇一六
位置 二〇一七
位置 二〇一八
位置 二〇一九
位置 二〇二〇
位置 二〇二一
位置 二〇二二
位置 二〇二三
位置 二〇二四
位置 二〇二五
位置 二〇二六
位置 二〇二七
位置 二〇二八
位置 二〇二九
位置 二〇三〇
位置 二〇三一
位置 二〇三二
位置 二〇三三
位置 二〇三四
位置 二〇三五
位置 二〇三六
位置 二〇三七
位置 二〇三八
位置 二〇三九
位置 二〇四〇
位置 二〇四一
位置 二〇四二
位置 二〇四三
位置 二〇四四
位置 二〇四五
位置 二〇四六
位置 二〇四七
位置 二〇四八
位置 二〇四九
位置 二〇五〇
位置 二〇五一
位置 二〇五二
位置 二〇五三
位置 二〇五四
位置 二〇五五
位置 二〇五六
位置 二〇五七
位置 二〇五八
位置 二〇五九
位置 二〇六〇
位置 二〇六一
位置 二〇六二
位置 二〇六三
位置 二〇六四
位置 二〇六五
位置 二〇六六
位置 二〇六七
位置 二〇六八
位置 二〇六九
位置 二〇七〇
位置 二〇七一
位置 二〇七二
位置 二〇七三
位置 二〇七四
位置 二〇七五
位置 二〇七六
位置 二〇七七
位置 二〇七八
位置 二〇七九
位置 二〇八〇
位置 二〇八一
位置 二〇八二
位置 二〇八三
位置 二〇八四
位置 二〇八五
位置 二〇八六
位置 二〇八七
位置 二〇八八
位置 二〇八九
位置 二〇九〇
位置 二〇九一
位置 二〇九二
位置 二〇九三
位置 二〇九四
位置 二〇九五
位置 二〇九六
位置 二〇九七
位置 二〇九八
位置 二〇九九
位置 二一〇〇
位置 二一〇一
位置 二一〇二
位置 二一〇三
位置 二一〇四
位置 二一〇五
位置 二一〇六
位置 二一〇七
位置 二一〇八
位置 二一〇九
位置 二一一〇
位置 二一一一
位置 二一一二
位置 二一一三
位置 二一一四
位置 二一一五
位置 二一一六
位置 二一一七
位置 二一一八
位置 二一一九
位置 二一二〇
位置 二一二一
位置 二一二二
位置 二一二三
位置 二一二四
位置 二一二五
位置 二一二六
位置 二一二七
位置 二一二八
位置 二一二九
位置 二一三〇
位置 二一三一
位置 二一三二
位置 二一三三
位置 二一三四
位置 二一三五
位置 二一三六
位置 二一三七
位置 二一三八
位置 二一三九
位置 二一四〇
位置 二一四一
位置 二一四二
位置 二一四三
位置 二一四四
位置 二一四五
位置 二一四六
位置 二一四七
位置 二一四八
位置 二一四九
位置 二一五〇
位置 二一五一
位置 二一五二
位置 二一五三
位置 二一五四
位置 二一五五
位置 二一五六
位置 二一五七
位置 二一五八
位置 二一五九
位置 二一六〇
位置 二一六一
位置 二一六二
位置 二一六三
位置 二一六四
位置 二一六五
位置 二一六六
位置 二一六七
位置 二一六八
位置 二一六九
位置 二一七〇
位置 二一七一
位置 二一七二
位置 二一七三
位置 二一七四
位置 二一七五
位置 二一七六
位置 二一七七
位置 二一七八
位置 二一七九
位置 二一八〇
位置 二一八一
位置 二一八二
位置 二一八三
位置 二一八四
位置 二一八五
位置 二一八六
位置 二一八七
位置 二一八八
位置 二一八九
位置 二一九〇
位置 二一九一
位置 二一九二
位置 二一九三
位置 二一九四
位置 二一九五
位置 二一九六
位置 二一九七
位置 二一九八
位置 二一九九
位置 二二〇〇
位置 二二〇一
位置 二二〇二
位置 二二〇三
位置 二二〇四
位置 二二〇五
位置 二二〇六
位置 二二〇七
位置 二二〇八
位置 二二〇九
位置 二二一〇
位置 二二一一
位置 二二一二
位置 二二一三
位置 二二一四
位置 二二一五
位置 二二一六
位置 二二一七
位置 二二一八
位置 二二一九
位置 二二二〇
位置 二二二一
位置 二二二二
位置 二二二三
位置 二二二四
位置 二二二五
位置 二二二六
位置 二二二七
位置 二二二八
位置 二二二九
位置 二二三〇
位置 二二三一
位置 二二三二
位置 二二三三
位置 二二三四
位置 二二三五
位置 二二三六
位置 二二三七
位置 二二三八
位置 二二三九
位置 二二四〇
位置 二二四一
位置 二二四二
位置 二二四三
位置 二二四四
位置 二二四五
位置 二二四六
位置 二二四七
位置 二二四八
位置 二二四九
位置 二二五〇
位置 二二五一
位置 二二五二
位置 二二五三
位置 二二五四
位置 二二五五
位置 二二五六
位置 二二五七
位置 二二五八
位置 二二五九
位置 二二六〇
位置 二二六一
位置 二二六二
位置 二二六三
位置 二二六四
位置 二二六五
位置 二二六六
位置 二二六七
位置 二二六八
位置 二二六九
位置 二二七〇
位置 二二七一
位置 二二七二
位置 二二七三
位置 二二七四
位置 二二七五
位置 二二七六
位置 二二七七
位置 二二七八
位置 二二七九
位置 二二八〇
位置 二二八一
位置 二二八二
位置 二二八三
位置 二二八四
位置 二二八五
位置 二二八六
位置 二二八七
位置 二二八八
位置 二二八九
位置 二二九〇
位置 二二九一
位置 二二九二
位置 二二九三
位置 二二九四
位置 二二九五
位置 二二九六
位置 二二九七
位置 二二九八
位置 二二九九
位置 二三〇〇
位置 二三〇一
位置 二三〇二
位置 二三〇三
位置 二三〇四
位置 二三〇五
位置 二三〇六
位置 二三〇七
位置 二三〇八
位置 二三〇九
位置 二三一〇
位置 二三一一
位置 二三一二
位置 二三一三
位置 二三一四
位置 二三一五
位置 二三一六
位置 二三一七
位置 二三一八
位置 二三一九
位置 二三二〇
位置 二三二一
位置 二三二二
位置 二三二三
位置 二三二四
位置 二三二五
位置 二三二六
位置 二三二七
位置 二三二八
位置 二三二九
位置 二三三〇
位置 二三三一
位置 二三三二
位置 二三三三
位置 二三三四
位置 二三三五
位置 二三三六
位置 二三三七
位置 二三三八
位置 二三三九
位置 二三四〇
位置 二三四一
位置 二三四二
位置 二三四三
位置 二三四四
位置 二三四五
位置 二三四六
位置 二三四七
位置 二三四八
位置 二三四九
位置 二三五〇
位置 二三五一
位置 二三五二
位置 二三五三
位置 二三五四
位置 二三五五
位置 二三五六
位置 二三五七
位置 二三五八
位置 二三五九
位置 二三六〇
位置 二三六一
位置 二三六二
位置 二三六三
位置 二三六四
位置 二三六五
位置 二三六六
位置 二三六七
位置 二三六八
位置 二三六九
位置 二三七〇
位置 二三七一
位置 二三七二
位置 二三七三
位置 二三七四
位置 二三七五
位置 二三七六
位置 二三七七
位置 二三七八
位置 二三七九
位置 二三八〇
位置 二三八一
位置 二三八二
位置 二三八三
位置 二三八四
位置 二三八五
位置 二三八六
位置 二三八七
位置 二三八八
位置 二三八九
位置 二三九〇
位置 二三九一
位置 二三九二
位置 二三九三
位置 二三九四
位置 二三九五
位置 二三九六
位置 二三九七
位置 二三九八
位置 二三九九
位置 二四〇〇
位置 二四〇一
位置 二四〇二
位置 二四〇三
位置 二四〇四
位置 二四〇五
位置 二四〇六
位置 二四〇七
位置 二四〇八
位置 二四〇九
位置 二四一〇
位置 二四一一
位置 二四一二
位置 二四一三
位置 二四一四
位置 二四一五
位置 二四一六
位置 二四一七
位置 二四一八
位置 二四一九
位置 二四二〇
位置 二四二一
位置 二四二二
位置 二四二三
位置 二四二四
位置 二四二五
位置 二四二六
位置 二四二七
位置 二四二八
位置 二四二九
位置 二四三〇
位置 二四三一
位置 二四三二
位置 二四三三
位置 二四三四
位置 二四三五
位置 二四三六
位置 二四三七
位置 二四三八
位置 二四三九
位置 二四四〇
位置 二四四一
位置 二四四二
位置 二四四三
位置 二四四四
位置 二四四五
位置 二四四六
位置 二四四七
位置 二四四八
位置 二四四九
位置 二四五〇
位置 二四五一
位置 二四五二
位置 二四五三
位置 二四五四
位置 二四五五
位置 二四五六
位置 二四五七
位置 二四五八
位置 二四五九
位置 二四六〇
位置 二四六一
位置 二四六二
位置 二四六三
位置 二四六四
位置 二四六五
位置 二四六六
位置 二四六七
位置 二四六八
位置 二四六九
位置 二四七〇
位置 二四七一
位置 二四七二
位置 二四七三
位置 二四七四
位置 二四七五
位置 二四七六
位置 二四七七
位置 二四七八
位置 二四七九
位置 二四八〇
位置 二四八一
位置 二四八二
位置 二四八三
位置 二四八四
位置 二四八五
位置 二四八六
位置 二四八七
位置 二四八八
位置 二四八九
位置 二四九〇
位置 二四九一
位置 二四九二
位置 二四九三
位置 二四九四
位置 二四九五
位置 二四九六
位置 二四九七
位置 二四九八
位置 二四九九
位置 二五〇〇
位置 二五〇一
位置 二五〇二
位置 二五〇三
位置 二五〇四
位置 二五〇五
位置 二五〇六
位置 二五〇七
位置 二五〇八
位置 二五〇九
位置 二五一〇
位置 二五一一
位置 二五一二
位置 二五一三
位置 二五一四
位置 二五一五
位置 二五一六
位置 二五一七
位置 二五一八
位置 二五一九
位置 二五二〇
位置 二五二一
位置 二五二二
位置 二五二三
位置 二五二四
位置 二五二五
位置 二五二六
位置 二五二七
位置 二五二八
位置 二五二九
位置 二五三〇
位置 二五三一
位置 二五三二
位置 二五三三
位置 二五三四
位置 二五三五
位置 二五三六
位置 二五三七
位置 二五三八
位置 二五三九
位置 二五四〇
位置 二五四一
位置 二五四二
位置 二五四三
位置 二五四四
位置 二五四五
位置 二五四六
位置 二五四七
位置 二五四八
位置 二五四九
位置 二五五〇
位置 二五五一
位置 二五五二
位置 二五五三
位置 二五五四
位置 二五五五
位置 二五五六
位置 二五五七
位置 二五五八
位置 二五五九
位置 二五六〇
位置 二五六一
位置 二五六二
位置 二五六三
位置 二五六四
位置 二五六五
位置 二五六六
位置 二五六七
位置 二五六八
位置 二五六九
位置 二五七〇
位置 二五七一
位置 二五七二
位置 二五七三
位置 二五七四
位置 二五七五
位置 二五七六
位置 二五七七
位置 二五七八
位置 二五七九
位置 二五八〇
位置 二五八一
位置 二五八二
位置 二五八三
位置 二五八四
位置 二五八五
位置 二五八六
位置 二五八七
位置 二五八八
位置 二五八九
位置 二五九〇
位置 二五九一
位置 二五九二
位置 二五九三
位置 二五九四
位置 二五九五
位置 二五九六
位置 二五九七
位置 二五九八
位置 二五九九
位置 二六〇〇
位置 二六〇一
位置 二六〇二
位置 二六〇三
位置 二六〇四
位置 二六〇五
位置 二六〇六
位置 二六〇七
位置 二六〇八
位置 二六〇九
位置 二六一〇
位置 二六一一
位置

卻劫克努杓芍灼迦茅伽卵些助豆巡困坐求把局尿辰究完糺役夾抖判系但杷甫
妥沆孜杠厄況余佚肝弟沙忙抑沒住私坂杓快形床恒更序沃罕昕呎坎抉敦彷沛

(却)却　七五　(尿)尿　二四　(沃)沃懸地の敲
(却)劫火　二〇五　(辰)辰巳　二三　(罕)罕少
(克)克己　六七　(究)究る　一三七　(昕)昕然
(努)努　五六七　(完)完聚　四六〇　(呎)呎
(杓)杓　四四四　完璧　二一〇　(坎)坎坎
芍)芍薬の諺　二六二　(糺)糺問　二一三　坎井
(灼)灼爛　二六三　(役)役役　四四〇　沙彌尼
(迦)迦々し　三三三　(夾)夾城　二一八　沙羅雙樹
(芋)芋粥　四三　(抖)抖擻　一五二　(妣)妣
(伽)伽藍　一一七　(判)判官代　四二〇　(抉)抉る
(卵)卵塔　五八〇　(系)系　四二六　(玖)玖波
(些)些に　六一三　(但)但聞四壁蟲聲唧唧　(彷)彷彿
(助)助力　二七二　(杷)杷憂　(沛)沛然
(豆)豆を煮るに箕を燃く　一九　(甫)甫周(桂川)　八書
(巡)巡錫　五二〇　(妥)妥當　(乳)乳母
(困)困憊　二六七　(沆)沆瀣　五四三　乳母子
(坐)坐禪　二〇八　(孜)孜孜　四〇三　乳臭
(求)求る　三三一　(杠)杠谷樹　三四五　乳の實の
(把)把住　八　(厄)厄弱　二〇二　(事)事立つ
(局)局　四二九　(況)況いて　二〇三　事殺ぐ
三六一　(余)余吾湖　二〇〇　事痛し

事様　二〇二　(個)個庵(古賀)　一九二　刺客　二三五
事冷めて　二〇三　(倔)倔傀　二一〇　刺衝　二三九　(享)享く　三〇　夜陰　五五三
事任の社　二〇三　(侘)侘ぶ　(到)到る　(享)殿　(夜)夜
事代主神　三六一　侘人　六二二　(刮)刮目　(卒)卒然　二六六　(亦)亦
事に臨みて懼れ　二〇三　(侏)侏離　二六二　(刷)刷子　四八五　卒塔婆　一三九　(依)依
(岡)岡崎　六二一　(佳)佳境　九〇　(刹)刹那　二九五　卒爾　三〇七　(依)依
岡本宮　六二一　(侑)侑　二七九　刹帝利　(京)京尹　一七二　(供)供
岡部大人　六二一　(佶)佶倔　一二九　(幸)幸　二一三　京兆尹　一七四　供
岡麿(海犬養)　六二一　(命)命中　二四一　幸奈　京傳(岩瀬)　三六　供
(依)依す　一六　五七一　命婦　五三三　幸若　(社)社交　二六一　供
依依　三三　命緣義　四四　幸震　社稷　二六二　供
依違　四四　(舍)舍人　三三三　幸長(淺野)　社會學　二六二　(侯)侯
依怙　六〇　舍弟　五四二　幸典(海野)　(尚)尚書　二九八　侯
依稀と　二五　(初)初老　二六二　幸順(武川法眼)　尚方斬馬　二九五　(侯)侯の錦
依平(石川)　六　初位　二七二　(夜)夜の宿直し　尚齋(三宅)　三五三　(侯)侯
(供)供張　四一　初夜　二七二　夜の錦　尚政(永井)　三九五　(侯)侯
供帳　四一　初國　四二〇　夜叉　(炎)炎炎　六一　(侯)侯
供給　四〇　初島　四三〇　夜見國　炎帝　六三　(侯)侯
供御　四七　初山踏　五三　夜明の明星　炎精　六二　(侯)侯
(侍)侍臣　五一七　(剌)剌を投す　二七五　夜討曾我　(宗)宗と　五二九　(侯)侯
侍中　二四三　劇刀　五七五　夜御殿　宗々しき者　五三九　(侯)侯

(侍)侍侗侃侏侑佶命舎初剌到刮刷剎幸夜享卒京社尚炎宗

宗廟 三〇四
宗良親王 五三九
宗五郎(佐倉) 二一九
宗全(山名) 五六一
宗行(藤原) 四七七
宗因(西山) 四〇五
宗武(徳川、田安) 三八〇
宗高(那須) 三九六
宗棠(松浦) 五一四
宗茂(立花) 三三〇
宗鑑(山崎) 五五九
(定)定額 三六三
定紋 三五一
定期船 三六三
定省温清 三六五
定朝 三五一
定(源) 五二八
定信(松平) 五一五
定家(藤原) 四七二
(官)官召 三五七
官符 一七〇
官家 三〇四
(宛)宛宛 五三九
宛轉 二一九
宛源(三田源次) 五六一
(宕)宕陰(鹽谷) 四七七
(和)和む 四〇五
和君 三五
和韻 一六
和鷲 二三四
和璧 二三三
和讃 二三四
和稻 二三四
和栲 二三四
和豫す 二三四
和名鈔 三三〇
和田岬 二五一
和田の千島 二八四
和御魂 三八四
和歌所 二一六
和歌山 八八
和歌の浦 九五
和歌三神 三
和氣洋々 一三
和銅開珍 一三
和衷協力 一三
和漢朗詠集 一三
和宇正濫鈔 一三
和泉三郎 一三五
(東)東の對 一三
東の龜の鑑 一三
東鑑 一三
東八箇國 一三
東大寺 一三
東寺 一三
東道 一三
東宮 一三
東風 一三
東雲 一三
東竪子 一三
東郭 一三
東金 一三
東叡山 一三
(咖)咖啡 一九一
(呼)呼喝 一九二
(呟)呟く 四五六
(咆)咆哮 四一八
(呪)呪しし 四一五
(呢)呢絨 三四四
(咄)咄咄怪事 四一
(呵)呵也 四一
呵呵 四一
呵責 四一
(呟)呟呟 四一

東遊記 三七五
東海道名所記 三七五
東照宮 三七六
東方朔 三七七
東坡(蘇) 三〇七
東三條の大將 三七六
東麿(荷田) 九二
東岡(高橋) 三四
東江(澤田) 三四
東涯(伊藤) 三六
東里(伊藤) 三六
東湖(藤田) 四七一
(松)松の濤 五一五
松柏の節操 二六九
松虫の音に友を偲ぶ 五一五
松山 五一五
松代藩 五一五
松明 三一八
松烟 二三八
松輪崎 五一六
松雞 五七六
松下禪尼 五一四
松名(和氣) 五一五
松陰(吉田) 五七三
松陰(後藤) 二〇三
(林)林立 九二
林塘 三四
林に宿る鵙鶲 三四
林間暖酒燒紅葉 三六
林子平の姉 三六
林太郎(森) 四七一
林宗(青池) 五一五
(來)來者 五一五
來迎 二六九
來經行 五一五
來目部 五一五
(枝)枝梧 五一五
枝繫金鈴 五一五
枝直(加藤) 三一八
(杯)杯中蛇影 二三八
杯盤狼藉 四一七
(枕)枕詞 五三
枕草紙 五一三
(板)板魚 四三五
板鼻 三〇
(枉)枉駕 六〇五
(枌)枌檜 四八四
(枚)枚擧 五〇九
(枠)枠 六一〇
(杼)杼 四四〇
(枡)枡鑿相容れず 二八六
(果)果然 一六六
果毅 一六四
果敢 一六四
果敢なき業 四三
果敢な氣に 四三
(杲)杲杲 八一
(杳)杳杳 五九
(明)明 五三二
明六 六
明日もありとて頼むべからじ 一〇
明白に 四
明主は一咄一笑を惜む 五四一
明治 五四一
明星 五三
明盲 四
明障子 四
明禮堂 四
明鏡も其の裏を照さず 五四三
明太宗 五三
明兆 五三
明道先生 五四一
明惠上人 五三二
(昊)昊天 八六
(旺)旺盛 六〇七
(易)易方 六〇
易象 一〇
易於反掌 三三

(昆)昆明池の障子 二〇八
昆陽の暇なき政 三六一
昆陽(青木) 二 二一七
(昌)昌 二五七
昌言 二六〇
昌平橋 二六〇
昌福堂 五九九
昌景(山縣) 一〇四
(河)河伯 八八
河海不擇細流 八九
河漢 九〇
河魚之患 一一六
河陽館 一〇五
河原者 一〇五
河原の大宮 一〇五
河原左大臣 一四九
河成(百濟) 四一六
(波)波士弓 四一三
波及 四二七
波蕩 四九七
波蘭 五〇七
波羅 三九六
波瀲院 四八五
(法)法 四一五
法の薪 四一五
法王 五〇四
法皇 五〇四
法名 五〇四
法衣 五〇三
法印 五〇二
法相 五〇二
法橋 五〇二
法眼 四三一
法燈 五〇四
法度 五〇四
法樂 五〇二
法會 四三三
法師 四三一
法曹 四三一
法華宗 四三一
法華堂 四三一
法華經 四三一
法住寺 四三三
法成寺 四三三
法性寺 四三三
法興寺 四三四
法隆寺 五〇七
法論味噌 三五二
(注)注 三〇七
注 二七四
注連繩 二三一
(油)油油 一五
油桐 一五
油然 五六六
油斷 五六六
(治)治に居て亂を忘れず 三四六
治化 三四九
治命 三四九
治憲(上杉) 五二
(沮)沮む 四三三
沮洳 二七二
(泥)泥 三六四
泥滓 二一
(泡)泡雪 四一八
泡影 一八三
(泣)泣然 五六五
(泪)泪杯 二一
(沫)沫雪 四〇九
(沼)沼津 四七九
(沸)沸騰 一三四
(泣)泣血 二三八
(泗)泗上 一〇七
(沽)沽 一七二
(沽)沽補 三〇八
(沿)沿ふ 六三
沿襲 一五〇
(沓)沓懸 五九六
(冷)冷然 五四七
(抵)抵掌 三六四
抵梧 三六四
抵觸 四一三
(拗)拗 五八
拗音

(抹)抹殺 五一四
抹金鏤 五一四
(拙)拙齋(西山) 四〇四
拙堂(齋藤) 二一三
(拔)拔書 四〇九
拔萃 四三〇
拔擢 四三一
(抽)抽く 四〇九
抽籤 三四一
(招)招商局 二九〇
(拍)拍子木 四一九
(拓)拓跋氏 三二六
(拘)拘拘 一四七
(抱)抱石入淵 二九
(拂)拂士 四七九
拂底 四七九
拂曉 四七九
拂鬚塵 六六
(押)押 六五
押手 六五
押字 一四
押形 六〇
押附の板 三六八
(披)披披 三六九
披閲 三六九
披瀝 三七三
披講 三六九
(姉)姉川 四三
姉妹艦 三七三
(姑)姑 一四八
姑息 一四九
(妹)妹 一四九
(始)始馭國天皇 一四七
始如處女敵人開戸 三七
(妻)妻戸 一〇
(妾)妾 一五
(妁)妁妁 九
(委)委ぬ 二
委委
委棄
委曲
(近)近習 一三七
近衆 一三七
近衛府 二〇四
近江八景 一五
近古史談 一三六
近世叢語 一三七
近世畸人傳 一三七
近院の大臣 二〇八
(迎)迎講 五三六
(返)返申 一〇八
(其)其文字 三〇九
其の大なる者を云々 三〇八
其の智には及ぶべく云々 三〇八
其の德を恒にす 三〇八
其れも然る者にて 三一〇
其れ然しもあらず 三一〇
其角(榎本) 六二
其磧(江島) 六〇
(典)典雅 三六八
典故 三六九
典型 三七三
典藥 三六九
典護軍 四三
典鑄司 三七三
典麗の文 一四八
(具)具臣 一四八
具狀 一四九
具然 一四九
具饌 一四九
具足 一四九
具足す 三七
具平親王 三八七
具視(岩倉) 一〇
(阿)阿字を書きて緣を結ばしむ 一五
阿保 九
阿修羅 二
阿衡

阿堵 三
阿堵物 三
阿蒙 一五
阿房 一三
阿諛 一九
阿閣梨 八
阿媽港 一五
阿里之比布木 二〇
阿佛尼 一四
阿直岐 二
阿知使主 二
阿部伊勢守 一五
(往)往日 六〇六
往生 六〇六
往代 六〇七
往往に 六〇八
往事 六〇六
往時 六〇六
往來 五五五
往來物 六〇八
(彼)彼の新發意か迎の舟 一〇三
彼岸 四四五
彼黍離々 二
(征)征矢 三
征瞻 二三
(孟)孟春 六六
孟夏 一七
孟浪 四八
孟輒 四五三
孟子 四五一
孟東野 二〇六
孟尚書 五五一
孟嘗君 一四九
孟賁之勇 八六
(季)季諾 一
季吟(北村) 一
季鷹(加茂) 一
(忠)忠を拙づ 三
忠言 三
忠恕 三
忠信を主とす 三
忠實 五
忠仁公 四四一
忠武侯 一〇三
忠信(佐藤) 三〇九
忠實(藤原) 二八六
忠平(藤原) 五一〇
忠相(大岡) 五〇九
忠長(德川) 五一〇
忠通(藤原) 五〇九
忠清上總守(藤原) 五一〇
忠敬(伊能) 五一〇
忠雅(藤原) 五一〇
忠恵(石黒) 五一〇
忠勝(向井) 二八
忠朝(本多) 一二五
(念)念ふ 三五三
念ず 三五二
念齋(原) 三五二
(忽)忽必烈 三五二
(怱)怱 三五二
(怳)怳然 五二〇
(怫)怫然 四四五
(快)快々 二
(怡)怡怡 二三
(怖)怖る 六六
(怪)怪しう 一七七
怪訝 七三
(乘)乘釣 一六〇
乘燭 四八八
(狒)狒狒 四五三
(狐)狐の疑 四五一
(狛)狛鉾 一三〇
(狙)狙山(森) 二〇六
(狗)狗盜 五五一
(青)青山 一四九
青山を枯山如す江き 八六
枯す 三
青反吐 三
青田掻く 三
青海波 三
青海原振放け見れば 三
青出於藍而青於藍 三
青葉山を飾る 三
青柳が花 三三
青馬 三三
青魚 二
青磁 四〇四
青盲 二六六
青侍 二六八
青島 三
青帝 二
青鈍 二六七
青蠅なす 二三
青蓮院宮 三四
(肺)肺肝 二六九
(肱)肱を掣く 四一六
肱當 四一六
(肥)肥馬の塵を望む 二〇一
(育)育生 四五一
(服)服 四四四
服ふ 四四三
服從ふ 五一六
服役 四六二
服膺 四六二
(股)股 四六四
股肱 二八七
股肱之臣 一九五
股栗 四二
股慄 二三
(花)花田 四二
花月亭筆記 四二
花分衣 四二
花苔 四二
花定の博士 四二
花粉 四三
花柳 一七
花橘 四三
花幔 一七
花御史 一七
花崗石 四二
(芳)芳山嵐峡 四一九
芳山の一口一樹の先導者 四一九
芳埜 四六二
芳野 四六四
芳野(榊原) 一八七
芳洲(雨森) 一九五
芳樹(近藤) 一九五
芳宜園 二〇九
(苅)苅萱 四三二
苅除く 一六五
(芭)芭蕉 四三二
芭蕉(松尾) 四三二
(芹)芹川 四三二
(芙)芙蓉 四三三
(斐)斐除 一六七
(祁)祁連 一七二
祁寒 四三三
(邵)邵雍 一六七
(邯)邯鄲の枕 一六四
(阜)阜圧 一六三
(陀)陀羅尼 四一九
(附)附庸褊小の國 四八五
附會の說 四六五
(阻)阻む 四三三
阻絕 三〇七
(物)物 五四八
物す 五四九
物物し 五四九
物色 四七九
物怖 五四八
物狂し 五四八
物故 四七九
物部 五四九
物具 五四九
物議 四七八
物張 五四九
物頭 五四八
物騒 四七九
物憂し 五四八
物憂くす 五四八
物被く 五四八
物崇調ず 五四九

物離れたる所 五四九
（軋）軋轢 一三
（武）武人 三六一
武士道 四六七
武門 四八五
武運 四八〇
武邊 四八二
武斷 四七〇
武具 三六一
武惟揚 四八六
武學拾粹 四八一
武將感狀記 四八八
武夷山 四五八
武陵の桃源 四八六
武藏野 五三七
武藏野の草の緣 五三七
武甕槌神 三一七
武衡（清原） 一四三
（長）長上 三五〇
長者 三五〇
長策 三五〇
長月 三九三
長押 三九六
長絹 四九〇
長程 三五一
長寢 四八五
長田 四八〇
長歌 四八二
長歌の座主 四七〇
長唄 三六一
長安 四八六
長濱 四八一
長篠 四八八
長淑 四五八
長長し 三一七
長久手 五三七
長府侯 五三七
長岡宮 一四三
長慶集 三五〇
長神の人 三五〇
長汀曲浦 三五〇
長閑呼ぶ 三五〇
長柄神島 三九五
長鋏歸來乎 三四九
長嘯子 三五〇
長嘯（木下） 一三三
長可（森） 五五一
長明（鴨） 一二五
長谷雄（紀） 一三三
長良（藤原） 四七五
長年（名和） 四〇二
長盛（增田） 五一三
長政（淺野） 七
長矩（淺野） 七
長英（高野） 三一四
長生（小笠原） 六二一
長孺（河口） 一〇四
（直）直人 三九八
直土 四四六
直日靈 三九九
直江津 三九八
直面 四四五
直衣 三九二
直接 三五四
直接國稅 三五四
直路 四四六
直訴 三四二
直島 三九八
直垂 四四五
直兜 三五四
直覺力 四四六
直額に頽る 一五六
直（久米） 二三三
直方（佐藤） 一一五
直兄（加茂） 六六
直亮（落合） 六六
直澄（落合） 一五三
直家（熊谷） 一五三
直實（熊谷） 六一四
直孝（井伊） 三九五
直道（永井） 三三〇
直幹（橘） 一九五
（虎）虎口 一九五
虎子（不入虎穴則不得虎子） 一九五
虎穴（不入虎穴則不得虎子） 一九五
虎穴（入虎穴探龍頷） 一九五
虎賁 二〇六
虎韜 二〇〇
虎狼の牙 二〇九
虎狼の國 二〇九
虎の尾を踏む恐 三八九
虎の威を借る狐 三八八
虎の蝟を負ふが如し 三八八
虎山（坂井） 二一八
（金）金烏 三五五
金革 三五五
金氣 三五五
金波 三五七
金襴 三八
金山 三六
金澤 一〇三
金覆輪 一三七
金鐘兒 二七九
金絲雀 三六
金石文 一三七
金石交 一三七
金葉集 一三五
金閣寺 一三五
金華山 一三五
金角港 二〇六
金剛山 一三六
金公子 一三五
金衣公子 一三五
金蘭之交 一三八
金科玉條 一三五
金城湯池 一三六
金湯之固 一三六
金谷の花 一三七
金胎兩部 一九九
金岡（巨勢） 二一七
金時（坂田）（門）門に倚りて望む 五五〇
門市の如し 五四九
門出す 一〇二
門田 五五〇
門地 五五〇
門閥 五五〇
門廡 五五〇
門附 一〇二
門跡 五五〇
門司の山本 五四六
門左衞門（近松） 三四二
（雨）雨不破壞 一八
雨如車軸 一八
雨包 一五
雨降の神 一五
雨露 五六
雨岡（吉田） 五七一
雨錫（劉） 五八二
（雨）雨性花 五八九
雨部神道 五九〇
雨所權現 五九〇
雨造 五九〇
兩儀 五八九
兩虎爭 五八九
（非）非凡 四五二
非時 三七九
非時 四四四
非常 四四四
非情 四四四
非道 四四五
非番 四五一
非重代 四四六
非參議 四四四
非藏人 四四二
（放）放 四四三
放出 四四三
放樂 五〇四
放擲 四三〇
放鶴亭 四一九
（於）於邑 六四
（空）空 五〇
空中樓閣 一四六
空事 五三九

空空　一四六
空翠　一四六
空蟬　五〇
空薫物　三一〇
空穂物語　五一
空に知られぬ雪　三一〇
空に聲せぬ浪　三一〇
（亞）亞丁　三
亞父　一五
亞相　九
亞槐　六
（承）承く　四六
承塵　二六九
承光堂　二六八
承明門　二六九
承明門院　二六九
承久の亂　二六八
承けぬ顏　四六
（知）知音　三四一
知行　三四三
知遇　三四三
知言　一四六
知命　三四九
知蓋草　四一三
知紀（八田）　四三〇
知紀（盲人蛇におそれず　五一
（盲）盲官　三一〇
盲者の杖を失ふが如し　三
盲暦　一五
盲龜の浮木　九
（居）居丈高　四六
居守　二六九
居然　二六八
居待月　二六九
居勢祝　二六八
（屈）屈　四六
屈折　三四一
屈託　三四三
屈原　三四三
（坡）坡狀　四二六
坡陀　四二七
（坪）坪　三六一
坪馬場　四四七
（坤）坤　二〇八
坤輿　八九
（坷）坷坎　三三九
（坦）坦途　四六五
（府）府庫　四六五
府君　四六四
（庚）庚申夜　八四
（庖）庖犧氏　四一八
（弩）弩　二九
（穹）穹窿　一三
（弦）弦袋　三六二
（奇）奇計　三五
奇特　三一〇
奇貨可居　三五
奇偉　一四五
奇觀　一四五
（奄）奄奄　四六
奄有　四六
奄有天下　三六九
（奈）奈良　四〇一
奈落　四〇一
奈留別志　四〇三
（奉）奉公　四九五
奉行　四六三
奉書　四九五
（版）版籍　四三六
版圖　四三六
（戕）戕賊　二五八
（卓）卓越　三二六
卓犖　三二六
（圄）圄圖　五九五
（斧）斧鉞　四八七
斧劈　四八二
斧質　四六七
（虱）虱與住于褌何擇　二七三
（采）采地　二一三
采邑　二一二
采薪之憂　二一三

（牧）牧澤伍一郎　五二
牧之（杜）　三八六
牧之（鈴木）　二七
（爭）爭臣　二二五
（卷）卷上の簟　五二
卷舒　一八三
（卸）卸し　七五
（受）受　四六
受領　二八一
受禪　二六五
（取）取捺ばやの大將　二八九
（叔）叔倫（戴）　三一五
叔敖（孫）　三〇九
（垂）垂氷　三四〇
垂拱　六二
垂乳根　三四〇
垂涎　二八三
垂髫　二八三
垂簾　二八四
垂籠　三四〇
（兎）兎影　三七八
兎園小說　三九〇
（卑）卑屈　四四二
（所）所去り聞えむ　三六二
所司代　二七二
所化寮　二七二
所得顏　三六二
所得たる侍　二七二
所從　二八一
所狹く　二六五
所存の外　二七一
所勞　三〇
（肩）肩上　三一五
肩衣　三〇九
肩身　三四〇
肩摩轂擊　六二
（房）房成（備前）　三四〇
（岩）岩見銀山　二八三
岩魚　二八三
岩梨　二八四
岩茸　三四〇
岩清水八幡宮　三七
岩間寺　三八
岩疊　三八
（岳）岳父　九一
岳飛　九一
岳武穆　九二
岳陽樓　九二
（表）表る　二一〇
表裏　五五
表與影　七四
（臥）臥亞　一八七
臥待月　四六八
臥遊　一五九
臥龍　一七二
（欣）欣欣　一三五
（帖）帖木兒　三四九
（的）的證　四六
（爬）爬沙　四六
（肚）肚洋　二四七
（亟）亟　五五
（盃）盃圈盃　三七

九畳

（俊）俊德　二六七
俊惠　二六八
俊賴（源）　五二九
俊成（藤原）　四七四
俊通（須藤）　二七九
俊基（藤原）　四七四
（俚）俚言　五八六
俚諺　五八六
（俛）俛　一三
（促）促迫　三〇六
（俛）俛焉　四九一
（俠）俠客　一七九
（係）係累　一七五
（俄）俄然　九六
（俑）俑を作る　五七〇
（信）信太の森　二四五
信太の浮島　二四〇
信任　五七三
信西　二五三

信吉(中山) 三九五
信秀(織田) 六六
信實(藤原) 四七五
信頼(藤原) 四七五
信綱(伊豆守) 三四
信綱(松平) 五一五
信綱(田代) 三三八
信綱(佐々木) 三一一
信房(馬場) 四三三
信淵(佐藤) 三三三
(保)保 四九四
保姆 五〇四
保護色 四九九
保釋 五〇〇
保元物語 四九五
保(瓜生) 五五
保則(藤原) 四七七
保輔(袴垂) 四三三
(便)便便 四九二
便船 四五二
便辟 四九二
便嬖 四九二
(風)風 六六
風土 四五五
風土記 四七五
風不鳴枝 三四
風化 五一五
風化石灰 三三八
風俗 三一一
風俗 四三三
風伯 三三三
風傳 四九四
風丰 五〇四
風月 四九九
風待月 五〇〇
風味 四九五
風采 五五
風流閑雅 四七七
風流韵士 四三三
風潮 四九二
風塵 四五二
風靡 四九二
風骨 四五八
風鑑 四六〇
風鎮 四八〇
風敎 九六
風擁 四五九
風姿 四五九
風情 三六八
風雅 四五九
風致 四六〇
風景 九六
風概 四六〇
風習 四五九
風靈 四六〇
風評 四五九
風間 四六〇
風眼 九六
風箏 四六〇
風袋 四六〇
風琴 四六〇
風帆船 四六〇
風雲の變 四六〇
風聲鶴唳 四五九
(威)威毛 四五九
威風凛々 六一七
威海衛 四六〇
威稜 六一八
威權 六一五
威儀 六一四
威儀の命婦 六一四
威儀棣棣 六一四
威公 六一五
威猛 二五
(背)背面 四五九
背面 四六〇
背く 三〇七
背馳 九四
背水の陣 四一七
背燭共憐深夜月 二七〇
(胡)胡床 五
胡床 四五九
胡笳 一九八
胡笳 一九一
胡頽子 一五四
胡盞 四七
胡簶 五五八
胡蝶の夢 二〇二
胡滄淹 二〇〇
(胄)胄子 二四二
(宣)宣下 二九八
宣言 二九八
宣旨 二九八
宣告 二九八
宣命 三〇一
宣命版 三〇一
宣德 三〇〇
宣光(寺部) 三七四
宣長(本居) 五四八
(客)客地 九一
客氣 四〇〇
(室)室津 五四〇〇
室町 五四〇〇
室蘭 五四〇〇
(宥)宥坐の器 二四
(南)南山有竹不糅自直 三九九
南山の影を浸さねど 四〇〇
南北朝 四〇〇
南都 四〇〇
南都 四〇一
南風不競 四〇〇
南村輟耕錄 四〇〇
南島巡航記 四〇〇
南部 四〇〇
南部盲曆 四〇〇
南無 四〇〇
南無歸命頂禮 四〇〇
南鄙 四〇〇
南宮社 四〇〇
南柯の夢 四〇一
南樓の月 三九九
南華篇 四〇一
南圓堂 四〇〇
南禪寺 四〇〇
南船北馬 四〇〇
南陽縣の菊水 四〇〇
南陽の舊廬 四〇一
南望則有關路之長 四〇〇
南溟(龜井) 一二五
南郭(服部) 四三一
南谿(宮川) 五三三
(穿)穿乍 四〇〇
穿窬の才(斗筲穿窬) 三八三
(封)封 四九四
封土 四九六
封戶 四六六
封事 四九五
封建 四九四
封蠟 四九五
封豕長蛇 四九五
(建)建言 一八一
建極 一八〇
建禮門 一八五
建禮門院 一八五
建武式目 一八四
建津之身命 三三六
建樹(大和田) 七〇一
(美)美事 四四四
美稱 四四四
美祿 四五七
美術 四四五
美人蕉 四四四
美奈能川 五一七
美成(山崎) 五六〇
(貞)貞永式目 三四九
貞宗(岡崎) 二三三
貞丈(伊勢) 二九
貞世(今川) 三九
貞幹(神澤) 二二
貞幹(藤井) 四七八
貞能(平) 三三五
貞胤(千葉介) 三四六
(皇)皇甫冉 一六三
皇別 一六三

皇皇 一六一
皇考 一六一
皇帝 一六一
皇祖 一六三
皇堂 一六三
(皆)皆紅 五二七
皆練 七八
皆既 七六
(飛)飛白 四五一
飛帛 四五一
飛魚 三八五
飛語 四四三
飛錫 四四四
飛脚屋 四四二
飛鳥川 一一〇
(軍)軍の庭 二六
軍を見て矢を作る
軍産 二五
軍港 一五四
軍圍 一五五
軍伏野時、飛雁亂列 一五五
(軌)軌範 一六一
軌模 一六三
(負)負く 三〇八
負笈 一三四
負債 四六六
負擔 四七〇
負氣無 七〇
(冠)冠 八七
冠 八九
冠者 一六五
冠冕 一七〇
冠蓋相望 一六八
冠帶變而爲左衽 四九九
(星)星合 五〇〇
星月夜 四九九
星祭 五〇〇
星兜 四九九
星霜 六六
星羅 二八八
星羅棊布 一五五
(春)春の急 一三三
春分 一三四
春色 三〇八
春光 一三四
春秋の十二諸侯 四六六
春秋高 四七〇
春秋富 七〇
春社 八七
春宮 八九
春盤 一六五
春袗輕筠 一七〇
春日 一六八
春日山 一六九
春日局 四九九
春村(黑川) 五〇〇
春海(村田) 五〇〇
春庭(本居) 四九九
春陣(橘)(宮川) 六六
春臺(太宰) 二八八
(映)映 二八九
映 四二九
映映 四二九
(昭)昭宮 二六七
昭慶門 二六七
昭宣公 二六六
(昂)昂〻 二六六
昂昂 二六六
昂然 二六七
(味)味谷 二六七
昧爽 五七五
(重)重祚 二六七
重荷に小付 九五
重儀の節會 九五
重寶 九五
重陽 一五九
重籐の弓 二三七
重譯 五四〇
重之(源) 五四八
重成(木村) 三〇
重忠(畠山) 三一八
重治(竹中) 三一六
重宗(板倉) 三〇
重恭(末廣) 二八四
(面)面を振らず
面目 七四
面伏 五四四
面向 七四
面向不背 七三
面折 五四三
面持 七四
面魄 三六二
面輔 三六二
面貌 三六二
面縛 五四四
(若)若宮 六〇九
若衆 六〇八
若年寄 六〇九
若草山 六〇八
若踏虎尾涉春氷 三八九
若越人視秦人之肥瘠 六二九
若林欽 六〇九
(黄)黄殃 二三八
黄責 七四
黄政 九五
黄政猛於虎 七四
(苦)苦言 七四
苦楚 七三
苦獄 五四三
苦肉之計 五四三
(范)范曄 七四
范增 三六二
范鑫 三六二
范仲淹 三六二
范祖禹 五四四
(英)英姿 六〇九
英華 六〇八
英傑 六〇九
英明(源) 六〇八
(茅)茅 三八九
茅花 六二九
(指)指物 六〇九
指顧 六〇九
指月山 二四二
(持)持戒 三四二
持重 三四五
持佛堂 三四六
持明院 三四七
持滿 五一〇
(拯)拯 二七七
拯難 二六九
(按)按司 七
按察使 一七三
(挂)挂冠 七
(拷)拷問 一四一
(拱)拱手 一六八
(拮)拮据 一六六
(括)括囊 四四一
(拾)拾芥抄 四四一
(函)函人 五〇四
函丈 二四五
函谷關 四五三
函谷の鷄鳴 一三
(施)施きて習となる 一三七
施施 二三八
施從 二三九
施恩勿念 七四
(屋)屋下架屋 六二三
屋形 五五五
屋船 五五九
屋烏之愛 六二三
屋漏に恥ぢず 五九
(要)要言 五九
要服 五九
要擊 五九
要害 四一三
(音)音を泣く 四一二
音色 四一二
音物 四一二
音韻 七四
(品)品 五〇四
品定 二四五
品彙 四五三
(哀)哀 一三
哀哀 一三

哀吟 一
(禹)禹王 五六
禹之行水 五三
禹域 五六
(叙)叙位 二七一
叙事 二七一
叙情詩 二七一
(政)政所 五一九
政宗(伊達) 三三三
政勝(本多) 五〇五
(故)故郷 四八六
故故し 五六八
故を温ねて新を知る 七三
(亭)亭午 三六四
亭亭 三六五
亭子院 三六四
段段 二六
段大尉 三六九
(厚)厚誼 三三七
厚朴 八二
厚岸 五六
(首)首陽山 五三
首鼠兩端 五六
(狩)狩 二七一
狩式 二七一
狩狩 二七一
(食)食 五一九
食言 三三三
食無求飽 五〇五
(幽)幽幽 四八六
幽玄 五六八
幽邃 七三
(卽)卽 三六四
卽世 三六五
(帝)帝 三六四
帝道王道 二六
(帥)帥乘 三三九
(炭)炭山 三三七
炭坐 八二
(峠)峠 五〇四
(玻)玻璃 一一
(玲)玲瓏 二六八
(珍)珍羞 二六五
(契)契冲 一三
契闊 一四一
(奕)奕世 一四一
奕奕 一七三
(畏)畏 一七〇
畏る 一七〇
(省)省庵(安藤) 一三
(看)看督長 一三
看做す 二四
(眉)眉宇 五五五
眉目如畫 三〇五
(彦)彦山 三六三
彦麿(齋藤) 三六五
(郁)郁李子 二八三
郁離子 二八〇
(耶)耶 二六〇
耶馬溪 三一九
耶蘇敎徒の亂 五五七
(郊)郊 七九
郊祭 八三
(毘)毘沙門 四四四
毘首羯磨 四四四
(勃)勃焉 五〇三
勃然 五〇三
(奏)奏 一〇三
奏閼 三〇三
(削)削末 一七〇
(則)則 二八〇
則闕の官 三〇五
(前)前 二七九
前立 五一七
前句附 五一七
前車の轍 二九九
前提 三〇〇
前栽 二九八
前腰 五一七
前途程遠馳 三〇一
前漢書 二九七

(盈)盈昃 一五八
盈虛 五七
盈滿之戒 五八
(盆)盆 五〇四
(缸)缸壓水中天(缾は穿つ) 二三三
(型)型 一七二
(垣)垣楯 一七八
(垠)垠 三六七
(拜)拜 三六五
(祇)祇園精舍 二四五
(耆)耆然 一六四
(砂)砂 二七
(砌)砌 五三三
(庠)庠序 一五八
(笈)笈 六七
(竿)竿牘 二一三
(匍)匍匐 五〇四
(糊)糊 四九
(狡)狡猾 八一
(狡)狡童 五七
狡兎死良狗煮 五八
(狩)狩坐 五〇四
狩袴 二三三
狩野川 一七二
狩野家 一七八
(相)相生 三六七
相生 三六五
相伴 二四五
相圖 一六四
相國 二七
相埒 五三
相阿彌 一五八
相撲取 六七
相鼠有皮人而無儀 二一三
(柱)柱石 三五七
柱に膠す 四三九
(柄)柄 三五七
柄燭 四五三
(柏)柏心 四五四
柏原天皇 九四
(椙)椙殼 一四
椙棋 一三六
(梅)梅 一八四
(柳)柳の五衣 一三六
柳本 三六八
柳宮 三六五
柳營 三五七
柳蔭 三五八
柳絮 三五八
柳腰 五八三
柳樽 五八二
柳庵雜筆 五九八
柳櫻摺りたる貝鞍 五八二
柳櫻を扱き雜ぜたる都の錦 五五八
柳子厚 五五八
(柳)柳宗元 五八三
柳北(成島) 四〇二
(椎)椎 一九二
(椈)椈 四四七
(栂)栂 四五一
(柞)柞葉 四三三
(柴)柴門 二一三
(柿)柿の衣 九〇
(柯)柯如青銅 六〇
(柔)柔す 五五九
柔媚面諛 三三四
(東)東察加 一一三
東埔寨 二一四
(韋)韋帶 六一五
韋駄天 六一五
韋編三絕 六一七
韋叡 六二四
(紅)紅花 四九一
紅茶 一九〇
紅葉(林間暖酒) 五八八
紅葉山 五四九

紅海 一八七
紅塵 一九〇
紅蓮 一五九
紅杜鵑 一九〇
紅梅の衣 一九〇
紅梅殿 一九〇
紅拂 一九一
(紀)紀行 一三三
紀綱 一三三
紀傳體 一三〇
紀傳道 一三〇
(紘)紘素 一六九
紘綺 一六八
紘綺之徒 一六八
(約)約に 三五〇
約束 五五五
(紆)紆餘 五五
(秋)秋 三七八
秋の宮 五
秋水 一三三
秋田實 四
秋田歎多 四
秋風の樂 二三四
秋風起兮白雲飛 二三四
秋月の亂 四
秋津洲 四
秋霜 二三三
秋毫 二三三
秋夜長物語 二三三
秋色櫻 二三三
秋女 一三〇
秋成(上田) 一六九
秋香(中村) 一六八
(科)科學 一六八
科戸神 三五〇
(秒)秒忽 五五五
(秕)秕政 五五
(香)香の直垂 五五
香山 三七八
香華 五
香港 一三三
香爐峰 四
香椎宮 四
香樔(池原) 二三四
(津)津 二三四
津山 四
津津 四
津梁 二三三
津綏子 二三三
津國の昆陽の云々 二三三
(洋)洋琴 四
洋洋 五二
洋洋社談 五九四
洋學所 一六三
(洲)洲屋明神 二四五
(洒)洒落 四八九
洒脫 四四五
(洞)洞庭 八六
洞巖(佐久間) 九二
(活)活計 八二
活目天皇 一六六
(洪)洪庵(緒方) 二三
(洸)洸潰 九四
(洟)洟 二七
(洽)洽 二五六
(洶)洶洶 三六二
(洪)洪蕩 二五二
(洛)洛陽 二五五
洛陽の紙價貴し 二三
(洗)洗雪 五七九
洗革鎧 二九
(洙)洙泗の學 二〇
(染)染羽の矢 二六四
染絲に悲歎す 三〇九
染殿 二九八
(泉)泉下 三〇九
泉下の人 二九七
(後)後の二房 二九七
後の如月 四一四
後世 四一四
後生 一九九
後生の思出 一九八
後生可畏 一九八
後方へ退き 二七四
後光 一九五
後月輪陵 四一四
後月輪東山陵 四一五
後目痛心 四一五
後材 四七
後攻 二六四
後見 二九九
後進 四七
後陣 四七
後備 二〇〇
後園 一九一
後昆 四七
後會期遙(前途程遠) 一八八
後中書王 一八九
後京極大臣 一八九
後德大寺の左大臣 一八九
(律)律詩 三六〇
律師 九一
律義 三七〇
律令格式 三七〇
(待)待賢門 三七〇
待宵小侍從 三四
(迦)迦具土神 一六二
迦陵頻迦 一六二
(迫)迫る 三〇
(迯)迯齋(林) 三八六
(陋)陋習 三四
陋巷 三四
(限)限りの旅 三四
(降)降頻 三四
(恒)恒の產 三四
恒其德 三四
恒信風 三四
恒星 三四
恒雪線 三四
恒世親王 三四
(恪)恪遵 三四
恪勤 三四
(恬)恬不怪 三四
恬談 三四
恬然 三四
(恤)恤 三四
(恃)恃む 三四
(恢)恢復 一六二
(恍)恍惚 一六二
(急)急 三〇
急 三八六
急猝 三四
急急如律令 三四
(思)思休 三四
思猶豫ふ 三四
思ふ同志 三四
(怒)怒 三五
怒物作太刀 三五

十畫

(高)高士 八三
高千穗嶽 三三
高名の木上り 八七
高坏 三三
高足 八五
高良 八七
高松城 三四
高松殿 三四
高勾麗 八三
高麗 八七
高麗縁 八七
高祿 一六
高紐 三四
高臥 八二
高會 八二
高踏 八五
高崎 三三
高御座 三三五
高野山 八七

高雄山 三五
高雄寺 三五
高倉宮 三三
高瀨舟 三三
高鳥盡良弓藏 八六
高家 八二
高家（小山田） 六二五
高漸離 八五
高野天皇 三三四
高志（佐々木） 三三〇
高尙（藤井） 四七八
高見（物集） 五四七
高時（北條） 四九六
高虎（藤堂） 三七七
高賴（佐々木） 三三一
高綱（佐々木） 三三〇
（唐）唐 三一八
唐山 三三〇
唐土 五五二
唐土も近くなる夢路 五五二
唐宋八大家 三七六
唐衣 一一六
唐皮 一一七
唐松 一一七
唐桃 一一七
唐檨 一一七
唐櫃 一一六
唐詩 一一九
唐音 三一一
唐突 三一一
唐彪 一一七
唐門 一一六
唐金 一一六
唐草 一一六
唐津 一一七
唐物語 一一六
唐崎の松 三六五
唐崎明神 三六五
唐虞化 一一六
唐綾 三六五
（庭）庭闈 一一六
庭訓 一一六
庭訓往來 一一六
（席）席卷 一一七
（眞）眞 一一七
眞人 一一七
眞字 一一七
眞名 一一六
眞名子 一一六
眞名鶴 三一九
眞名鶴崎 三一一
眞木の島 三一一
眞柱 一一七
眞葛 一一六
眞菰 一一六
眞赭 一一六
眞赭薄 一一七
眞弓 一一六
眞帆 一一六
眞澄鏡 三一九
眞西山 一一六
眞辟の葛 三六五
眞髮觸 五二一
眞鹿兒矢 五二一
眞吉備（吉備） 一三三
眞虎（大石） 六八
眞實（日高） 四四五
眞淵（加茂） 一二五
（家）家人 一七八
家什 九四
家令 一八六
家乘 九五
家言 九二
家嚴 九二
家道 九六
家風を興す 三九
家治（德川） 三八〇
家貞（平） 三三四
家實（藤原） 四七一
家隆（藤原） 四七一
家齊（德川） 三八〇
家熙（近衛） 二〇四
（容）容 四三
容色 五六九
容易 五六九
容與 五七〇
容豫 五六九
容赦 五六九
容積 五六九
容儀 五六九
容齋（菊池） 一二四
（宮）宮の渡 五二四
宮戶 五二四
宮內卿 一五二
宮娃 一一九
宮島 五二三
宮瀧 五二四
宮津 四
宮城野 五二三
宮闕 一三〇
（宵）宵吁 二九〇
宵衣吁食 二六九
（宴）宴安 六二
宴松原 六二
（宸）宸儀 一二五
宸襟 二五一
（宰）宰衡 二一二
（害）害物 三〇
（案）案比 一八
（冤）冤罪 一三〇
（時）時鳥 五三六
時儀 一三六
時宜 四九六
時柄 四九六
時津風 三七九
時得顏 三七九
時雨の化 二三四
時雨の御茶屋 二三七
時移事去樂盡悲來 一五
時政（北條） 三七九
時賴（北條） 四九六
時宗（北條） 四九六
時堯（種子島） 三三三
時貞（天草） 一五
時元（豐原） 三八八
時中（谷） 三三三
時彥（西村） 四〇四
（鳥）鳥有 四五
鳥羽玉 三三
鳥合之衆 四五
鳥雲之陣 四五
鳥黑 四六
鳥帽子子 六一九
鳥帽子親 六一〇
鳥頭白くなる 一一六
鳥鵲渡橋 四七
鳥鵲のわたせる橋 九三
鳥鵲南すと咏せし君 四七
鳥兎 五一
鳥號 四五
鳥滸 六三
（馬）馬力 四三九
馬口港 五〇九
馬耳東風 四二六
馬頭 五三
馬寮 五四四
馬緤 四七
馬場 四二六
馬筏 五三
馬蘭 九〇
馬鈴薯 四二九
馬舞の災 五三
馬鬪海峽 四二五
馬子（蘇我） 三〇四
馬琴（瀧澤） 三三五
（氣）氣比社 一七九
氣色す 二八
氣憎し 二八
氣慨 二三
氣海觀瀾 二三
氣無性 二三四
氣焰 二三
氣骨 二二六
氣隨 二三七
氣轉 二三〇

氣運 三一
氣壓 一九
氣霽風梳新柳髮 一三
（鬼）鬼の間 六七
鬼方 一三
鬼丸 六七
鬼切 六七
鬼谷子 一二六
鬼奴川 一三一
鬼怒川 一三一
鬼胎 二八
鬼遣らひ 六七
鬼栗毛 六七
鬼神 一二七
鬼亭 一三三
（浮）浮世 四六九
浮言 四六五
浮涼 四六五
浮寢 四五
浮蕩 四六一
浮影 四六一
浮圖 四八〇
浮線綾 四六九
浮島原 四五
浮雲の思 四六〇
浮雲の志 四六〇
（流）流に水求むる鼠 三九五
流石 五三四
流民 八
流用 五三
流布 七九
流行 七九
流寓 七九
流竄 一三七
流離 一三三
流離 四六九
流言 四六五
流星 四六五
流芳 四五
流庸 四六一
流例 四六一
流易 四八〇
流麗 四六九
流轉 四五
流暢 四六〇
流連の樂 四六〇
（海）海 三九五
海士の栲繩 一三一
海月 五八三
海里 五八三
海原 五九三
海神 五八二
海洋島 五八三
海津 五八三
海澄 三一
海若 五八三
海參 五九三
海參歲 五八三
海帶 五八三
海幸 五八三
海豚 五八三
海松 五三四
海獺島 八
海坊主 五三
海島風土記 七九
海道 七九
海犬養岡麿 一六
（酒）酒仙 二六五
酒勾 二一八
酒宴 四八
酒盞 五三四
酒池肉林 二六五
酒者天之美祿 二一〇
（浩）浩浩 八一
浩瀚 八五
浩蕩 八五
浩穰 八四
浩然 八五
浩然之氣 八五
（浦）浦の濱木綿 五五
浦安 五五
浦賀 五五
浦港 四九九
浦鹽斯德 五五
（消）消火山 二九〇
消息 二九一
消難に 一三三
消閑雜記 二五〇
（浪）浪速 三九七
浪華 三九七
浪速の海 三九六
（涓）涓涓 一八一
涓滴 一八三
（淩）淩 三三一
淩渠 二六七
（涅）涅 五〇九
（涅）涅槃 四一三
（狹）狹旬 二九六
（涉）涉獵 二九四
（涕）涕泗 三六四
（素）素立 二七九
素糸の染まむことを悲む 二七三
素封 四三
素養 三九八
素襖 二九〇
素餐 二九一
素堂（山口） 一三三
（紙）紙子 二五〇
紙捻 三九七
紙縒 三九七
紙魚 三九六
紙鳶 一八一
紙障子 一八三
（紐）紐刀 一三一
紐育 二六七
紐解 五〇九
紐鏡 四一三
（紛）紛紜 二九六
紛糾 二九四
紛紛 三六四
（索）索寞 二七九
索然 二七三
（純）純友（藤原） 四三
神島 三九五
神酒 五三四
神漏岐神漏美 一一四
神閑 一〇九
神籬 四五三
神頭 二五四
神無月 一一三
神農氏 二五四
神皇正統記 二五一
（祝）祝髮 二六四
祝詞 四二五
（祖）祖述 三〇六
祖道 三〇七
祖禹（范） 四三六
祖榮（伊東） 一三六
（祐）祐亨（伊東） 一三六
祐經（工藤） 一五一
祐成（曾我） 三〇四
祐泰（河津） 一〇四
（被）被 四三八
（祇）祇役 二三五
（桃）桃山御殿 五五一

桃李不言下自成蹊
桃花毛
桃岡家訓
桃尻
桃源
(栗)栗毛
栗形
栗栖野
栗山(柴野)
栗園(中村)
(桑)桑名
桑田成海
桑門
桑楡
桑蓬之志
(根)根分
根本中堂
根來
根込に
根籠に

(株)株 三三三
(桐)桐が谷 三五七
桐壺 三一九
(桂)桂 五五〇
桂園一枝 三一九
桂州(陳) 一五八
(格)格子の坪 一五八
格格 一五八
格物 一五八
格物入門 二四七
(桓)桓公 三九五
桓桓 一五三
桓魋 二一五
(桁)桁槇 二一六
(校)校正 二一六
校閲 四一三
校倉 二〇八
(框)框 四二一
(桃)桃榔 四二一
(桎)桎梏 四二一
(栖)栖鳳樓

(栃)栃檀の板 一三五
(桔)桔梗の花 一四四
(栲)栲縄(海士の栲縄) 一四四
一六
(秘)秘訣 一七五
秘本 三四七
秘置く 八四
秘を探ぐる 九〇
(秩)秩父川 九一
秩序 九一
秩秩 一一〇
(秣)秣 一六八
(秋)秋雞 一六九
(振)振古 四五四
振延 八四
振延へ給へる御文 八四
一一〇
振放見る 六一〇
振棄 五一七
(挺)挺く 二四三
挺然 二六八

(挨)挨拶 三〇〇
(挽)挽回 二三九
(誘)挽く 四〇九
(捂)捂く 一六
(捏)捏造 四四三
(捕)捕拿 四五二
(拳)拳拳 四五三
(俳)俳諧 四五七
俳諧歌 四五七
(倚)倚賴 三四五
倚廬 三四五
倚門之望 三四五
(値)値嘉 五一一
値遇 一五三
(修)修式堂 二五一
修善寺 四八六
修羅 四八六
修明門院 四八六
修二(大槻) 四〇九
(倬)卓詭 四〇九
(倜)倜儻 三六五

(倥)倥傯 一八九
(倦)倦く 三〇八
(倫)倫敦 一四一
(倏)倏忽 六〇四
四
(俯)俯仰低徊 四六二
(俱)俱不戴天仇 一五三
(借)借賊兵而齎盜糧者也 三〇六
(徒)徒 一〇
徒 九八
徒人 三二九
徒物 三〇
徒法 三八五
徒歩 九八
徒跣 三八四
徒然 三八四
徒然草 三六三
徒隷 三八九
(徑)徑庭 一七四
(恚)恚る 二五

(息)息 一八九
息吹 三〇八
息緒 一四一
息軒(安井) 六〇四
四
(恖)恖然 四六二
(恕)恕軒(信夫) 一五三
(怨)怨徹骨髄 三〇六
(恐)恐し 三〇六
恐る 一〇
恐くも 九八
(恩)恩賚 三二九
恩を施しては念ふ勿れ 三〇
(悌)悌 三八五
(悔)悔 九八
(悃)悃愊 三八四
悄悄 三八四
悄然 三六三
(悃)悃愊 三八九
(悌)悌悶 一七四
(逆)逆板 二五

(逆)逆修 二五
逆旅 三九
逆鱗 二五
逆鉾 五五六
逆取順守 三七三
逆茂木 二四六
(追)追手 五五
追手 九四
追捲 六六
追儺 九四
追尾 七四
追念 七四
(退)退食 七四
退然 三六三
退轉 三九
退避 二九〇
(迷)迷信 二九一
迷執 二〇七
迷廬 六六
(送)送 六六
(草)草木黄落 二一六

草薙劍 一四〇
草枕 一七七
草草 一七六
草莽 二一七
草莽之臣 一四〇
草合 二一七
草摺 六八
草創 七一
草昧 六八
草結 三六二
草加 三六二
草書 三六二
草藁 三一五
(荒)荒布 三一六
荒涼じ 三一六
荒涼の使 二七四
荒海障子 五四一
荒金 五四一
荒唐 五四二
荒蕪の地 六五
(荊)荊を負ふ 二一六

荊棘 六七
荊棘 一七三
荊軻 一七二
(茶)茶の湯 三五二
茶筅髻 三五二
茶臼山 三五〇
(茗)茗 四三一
茗醾 五四一
茗園 四八九
(茫)茫然 四三〇
茫洋として玄間を窮む 四二
(茵)茵 二四五
茵褥 四一
(茜)茜 三
(茯)茯苓 四六四
(荇)荇菜 八三
(荏)荏苒 二五三
(茱)茱萸 二六八
(笑)笑 二六〇
笑止 二九〇

笑中に刀 四三
(笏)笏 四三
(書)書尺 一三
書林 三四七
書物奉行 五四二
書經 五四二
書契 五四二
書肆 五四二
書博士 五四二
(院)院 五四二
院中 四二
院本 四〇
院司 四二
院宣 四二
院家 四二
院參 四〇
(陛)陛下 五三五
(除)除目 三三三
(陟)陟罰 三三三
(陣)陣 三三三
陣陣 三三三

(兼)兼明親王 一〇三
兼行(肝付) 一三八
兼行(藤原) 四三二
兼好(吉田)(卜部) 五七二
兼良(一條) 三二
兼康(瀨尾) 二九六
兼輔(藤原) 四七二
兼平(今井) 四一〇
(泰)泰山に登りて天下を云々 三一三
泰山溜積久穿石 三一三
泰斗 三一六
泰西の學 三三五
泰山(小川) 六二一
泰時(北條) 四九六
(破)破山中賊易破天荒 二六八
破竹の勢 四三一
破子 六二三
破風 四三三

破顏 四三
破戒無慙 四三
(砧)砧 四三
砧根 五四二
(冥)冥土の鳥 五三二
冥見 五三二
冥冥 五四二
冥加 五三二
冥罰 五四二
冥福 五四二
(冢)冢子 三五三
(殷)殷阜 四二
殷殷 四〇
殷賑 四一
殷繁 四二
殷鑑 四〇
殷湯夏臺に囚はる 四二
(殺)殺身以爲仁 五三五
殺青 三三三
殺氣 三三三
殺風景 三三三

(師)師表 二四七
師屯 二四七
師團 二四〇
師尹(藤原) 四七七
師輔(藤原) 四七七
師宣(菱川) 四四四
(差)差次に 三一
差別 六〇五
差捂く 三一一
差含む 三一一
差掬む 三一一
(疾)疾 三六六
疾日 二四三
疾風 二三八
疾風知勁草 二四四
疾鳥迅雲不及 二四三
(病)病革る 五六二
病從口入 五六二
病痾 四五三
(疱)疱瘡 四一九
(疥)疥癩 一五八

(疼)疼ぐ 二四七
(畔)畔錥 二四〇
(料)料 四七七
料るに 四四四
料足 三一一
料簡 三一一
(粉)粉本 六〇五
粉紙 三一一
粉骨 三一一
粉碎 三一一
(殊)殊功 三六六
殊死 二四三
殊更 二三八
殊勝 二四四
(殉)殉死 二四三
殉難錄稿 五六二
(狹)狹く 四五二
狹田 四五三
狹丹頬相 四一九
狹衣物語 一五八

狹間 四五二
(狠)狠戾 一五九
狠狽 一〇三
狠藉 二七四
狠煙 四三
(狷)狷介 六四
(射)射干玉 五九七
射向の袖 四八四
射場殿 一九二
射翳 四八三
(躬)躬行 四八三
(郡)郡曲 二六四
(郡)郡内 二六四
郡司 二〇二
郡領 二六五
郡縣 二六六
(郎)郎 二六七
郎君 二一九
郎黨 三九三
(脇)脇 二三三
脇立 二一〇

脇差 二三五
(脊)脊嚇 五七八
(胴)胴金 五七七
(脈)脈搏 五七七
(朕)朕 五七七
(脂)脂燭 一七九
(脆)脆弱 四二〇
(胸)胸膈 四一
(朔)朔 五六六
(耿)耿介 五一七
耿耿 一二九
耿耿 五七
耿潔 二五五
(致)致賛 一五四
致仕 一五五
致役 一五四
(赦)赦赦 五七七
(晏)晏駕 五七七
晏子 五七七
晏嬰 五七七
晏平仲 六〇九

(留)留 五九三
留針 三八七
留別 五八三
(姬)姬 四五三
姬宮 四五三
姬御前 四五三
姬踏鞴五十鈴姫 二六二
娑婆 八八
娥娥 四五一
娓娓 二七九
(晉)晉む 二五三
晉書 二五三
晉唐書道の名家 一二五三
(夏)夏畦 九二
夏臺 九六
夏島 三九七
夏越の祓 三九六
(益)益荒男 五一三
益無くとも 五五四
益軒(貝原) 一〇六
(盤)盤 五四九

(埋)埋火 一八八
埋木 一七七
埋葬 五四三
(城)城の長 四五三
城下の盟 二四三
城府 二五四
(堺)堺 二五一
(垸)垸飯 五一六
(衷)衷甲 五四三
衷情 五四三
衷を裁す 二五三
(衰)衰經 二五三
(剛)剛毅 四二
剛(川田) 一
剛立(麻田) 一
(剖)剖く 二五
(孫)孫手 五九
孫庇 二五
孫兵衛(後藤) 四
(能)能 五一
能因法師 四一四
能信(藤原) 四七八
(峨)峨峨 八八
峨艦 八九
峨眉山 一〇六
(峴)峴莊(劉) 五八三
(峻)峻峭 二六七
(峭)峭絕 二九一
(耻)耻ある一矢 四二八
耻之於人大矣 四二八
耻辱 五四三
(畝)畝火山 四九四
畝傍山 五一
(般)般若寺 四三六
(舫)舫 四三九
(班)班白 五三九
班鳩宮 二五
(島)島司 三
島原一揆 二五〇
(芻)芻豢 二七六

(哥)哥哥 二〇八
哥亞 一八七
(畜)畜生 五四三
畜德錄 二四三
(秦)秦風與子同袍 二五四
秦檜 二五一
(皆)皆 五一六
(毗)毗 五一六
(昵)昵 四五三
昵惑 二八五
(貢)貢擧 二八八
貢綿 二八八
(骨)骨董 二〇一
骨を換へ體を脫す 一六八
(凌)凌競 二七八
凌駕 五九一
(凄)凄 二七八
(准)准后 二六四
(扇)扇動 二〇〇
扇の芝 一四

(軒)軒の玉水 四一四
(翁)翁冠 二六一
(烘)烘箱 一八八
(配)配所の月 四一七
(財)財散則民聚 二一二
(施)施 四一六
(起)起證文 二二七
(栽)栽 四五
(栴)栴虎 八二
(窖)窖渺 五九
(窖)窖然 五九
(原)原始時代 八二
(釿)釿 三五八
(針)針葉樹 二五〇
(祇)祇嬪の愛 二四四
(蚩)蚩蚩之民 三三八
(蚋)蚋蜉 四五一
(蛟)蛟龍雲霧 八八
(辰)辰子 一七三
(屑)屑屑 二九五
(唆)唆 三〇七

(哺)哺乳獸類 四一四
(哨)哨船 二六一
(哮)哮虓 一八八
(哲)哲次郎(井上) 四一七
(哩)哩 二一二
(埜)埜 四一六
(旁)旁若無人 二二七
(釜)釜山 四五
(爹)爹兒 八二
(袁)袁隨園 五九
(臭)臭味 五九
(隻)隻手 一八二
(倉)倉卒 三五八
(乘)乘鞍嶽 二五〇
(奄)奄 二四四
(豹)豹變 四五一
(豺)豺狼當路 三三八

十一畫

(御)御 八八
御成 一七三
御所 一九一
御舍 八三
御掟 六一六
御林 五〇九
御間 四三三
御厩 四三〇
御髮 四六七
御嶽 三六七
御座 六一〇
御室 三三五
御封 二九三
御柳 二一五
御祓 四一五
御邊 四六六
御納戸 四九〇
御書所 二一三
御齋會 一九七
御家人 一九五
御家流 六四
御名殘 七三
御幸 五三四
御先遂ふ 九三
御氣色給る 五一二
御息所 五三
御臺所 二〇〇
御佛名 五三一
御國讓 五三
御門邊 五三一
御溝水 五三三
御廁人 五三三
御垣守 五三
御洗米 六六
御伽草紙 六六
御膳都水 五三
御朱印船 一九八
御厨 五三
御厨子棚 五六六
御津の濱 五六六
御裳濯川 五三二
御史大夫 一四二
御引直衣 六八
御堂關白 五一四

御肇國天皇　四二九
御杖(富士谷)　四六七
(從)從　二〇〇
從手亡　三六八
從容として　二九九
(得)得失　三八二
得附く　六三
得不言　四〇三
得罷らじ　三八二
得長壽院　四一六
(俳)俳徊　二八〇
(術)術もなく　二四三
(清)清元　二八七
清楚　二八八
清豫　二八六
清顏　二八五
清華　一四三
清見潟　一四三
清見寺　二八六
清水寺　一四三
清水流る、柳蔭　二五〇
清和井　二九二
清野の第　二八八
清獻公　二八六
清凉近高生煩熱委靜　二八九
消　二八九
清凉殿　二八九
清正(加藤)　一〇二
清亮(作並)　二一九
清矩(小中村)　六三
清庵(建部)　三八二
清信(鳥居)　四一六
清忠(坊門)　二八〇
清氏(細川)　一四三
清行(三善)　二八六
(淨)淨土　二八八
淨房　二八五
淨瑠璃　一四三
淨見原宮　二八六
淨海　二八六
(深)深沈　四六一
深草　四六一
深綠　四六一
深手　四六一
深見草　四六一
(淺)淺茅生　七
淺緋　六
淺間嶽　八
淺茅原　七
淺香山の言の葉　七
(淡)淡水　三三八
淡海湖　一四
淡路瀨戸　一三
(淫)淫祠　四一
淫佚　四〇
淫霖　四三
(淳)淳美　二六七
淳漓　二六六
淳庵(中川)　二六七
(淵)淵叢　二六七
淵源　二六七
淵乎　二六七
(淋)淋慄　二六七
淋漓　五九
淋離　五九
(淑)淑均　二六三
淑媛　二六四
(添)添　二〇八
添水　二〇八
(淤)淤泥　六六
淤菟　六六
(淇)淇園(皆川)　五七
淇園(柳澤)　五五
(淳)淳　三八
(淮)淮南　六一九
(淀)淀河　五七四
(淙)淙躁　三四三
(涯)涯分　七九
(混)混沌　二〇八
(淅)淅瀝　二九四
(陸)陸離と　五六
陸續と　五六
陸梁と　五八六
陸王二氏の說　五八六
陸奥山の物　五四
陸游　五八九
陸務觀　五八五
(陶)陶　二八四
陶器　三一九
陶鑄　三一
陶化　三一九
陶然　三一〇
陶汰　三一〇
陶朱の富　三一〇
陶淵明　三一三
(陵)陵戶　二
陵替　五九一
陵夷　五九一
陵遲　五九一
陵轢　五九一
(陳)陳腐　三四八
陳蕃　三四八
陳亮　三四八
陳平　三四八
陳重(穗積)　五〇三
健御雷神　三二七
健御名方刀美神　三二七
(假)假初　一二七
假床　三一一
假言許　九三
假體言　九六
假名手本忠臣藏　一〇三
(條)條款　三六六
條件　三六六
條里をわる　三六七
(偕)偕偕　七六
偕老　三
偕老魚　七九
偕老同穴　七六
偕樂園　七九
偕に樂むといふ園　二八七
(偏)偏帆　九七
偏旁　五九二
(側)側見　四
側樣　三〇八
(偶)偶語　三〇八
偶然　一四六
(偉)偉勳　六五
(偈)偈　一七二
(傀)傀儡　六一
傀鼠飲河　六二
(倔)倔强　一五〇
倔促　一七二
(莊)莊園　五
莊周の夢　二六〇
(莫)莫大　二一四
莫逆　四四
莫逆の友　四四
(荷)荷先　四四
荷前　四四
(茶)茶毘　四四
茶蘼　三三四
(荻)荻の上風　三八五
荻生徂徠　六二
(莞)莞爾　六三
莞爾(丸岡)　一六八

(梁)梁飯 五九〇
梁王の苑 五九〇
梁上の君子 五九〇
梁惠王 五九〇
(梅)梅雨 四一六
梅聖俞 四一七
梅里公常山 四一八
梅園(三浦) 五三
(梨)梨壺 三九六
梨園 五九二
梨本集 三九六
(梓)梓 二
梓里 二七三
梓宮 二三六
(梗)梗概 八〇
梗塞 八五
(梟)梟惡 一七五
梟首 一七六
(梳)梳 一四八
(梭)梭 四四〇
(梃)梃銀 三六三
(彬)彬々 四五二
(梲)梲に畫く 二九六
(梧)梧陰存稿 一八七
(通)通謁 三五六
通欵 三五六
通曉 三五六
通乎 三五六
通視 三五七
通鑑覽要 八六
通盛(河野) 八六
通有(河野) 三九六
通言(得能) 三八一
通治(土居) 三九〇
通高(那珂) 三九四
通庸(三島) 五九九
(連)連俳 五九九
連絡 五九九
連理 五九九
連累 五九九
連枝 五九九
連錢葦毛 五九八
連山如波濤 五九八
(逐)逐次 三四三
逐逐 三四三
逐電 三四三
逐鹿者不見山 三三六
(造)造詣 二一四
造次顚沛 二七六
造化の妙技 二一四
(透)透垣 二七六
透了 三七八
(逡)逡巡 二六七
逡巡 二三八
(逢)逢 一四
逢阪關 一四
(逗)逗留 三七八
逗子 三五九
(逕)逕庭 一七四
(逍)逍遙 二六九
(逝)逝去 二六五
(速)速吸の門 四三八
(常)常規 二五〇
常住 二五〇
常套 二五八
常備兵 二五九
常陸帶 四四六
常綠木 三七九
常世の橘 三八三
常山紀談 二五七
常山の蛇勢 二五七
常の御座所 三六〇
常憲院 二五七
常則(飛鳥部) 一〇
常樹(橘) 三三〇
常山(梅里公) 四一八
常長(支倉) 四三七
常嗣(藤ノ) 四七四
常矩(最上) 五四五
(野)野 四〇九
野心 五五六
野史 五五六
野分 四一五
野干 五五五
野乘 五五六
野路 四一四
野伏 四一五
野武士 四一五
野羽玉 四〇九
野馬 五九九
野馬溪 五五九
野田玉川 四一四
野獸已盡獵狗烹 五五六
野火燒不盡春風吹復生 五五五
(鳥)鳥子 三八九
鳥目 三六六
鳥羽 三八五
鳥羽繪 三八五
鳥羽殿 三八五
鳥雲陣 三四九
鳥部野 三八九
鳥居峠 三八九
鳥養御物 三八九
鳥之將死其鳴也哀 三八九
鳥捕部萬 三八四
(張)張皇 四三九
張興 四三九
張本 三三一
張昭 三三一
張湯 三三一
張載 三三一
張巡 三三一
張良 三三一
張魯 三三一
張世傑 三三一
張昌宗 三三一
張之洞 三三一
(國)國守 三五二
國寃 三五二
國後 三五二
國府津 三五二
國偲ぶ人 三五二
國持大名 三五二
國破山河在 二五二
國千代 二五二
國臣(平野) 四五六
國長(多治見) 三三一
(異)異しう 一七七
異同 三六六
異等 三六〇
異學 三六〇
異腹 三六〇
異木 三六〇
異樣 三六〇
異端 三六〇
異域 三六〇
異域之鬼 三六〇
異株花 三六〇
異口同辭 三六〇
異工同曲 三六〇
(雪)雪頽 三九七
雪見草 五六五
雪山の薪 二九四
雪消の水 五六五
雪白比良山一角 五六五
雪似鵝毛飛散亂 五六五
雪舟 二九四
(雫)雫の田居 二四三
(船)船棚 二九二
船裝 四八一
船催 四八一
船渡 四八一
船渠 三八四
船岡 四八一
船逍遙 四八一
船上山 四八一
(舳)舳艫 三四四
(舵)舵取 九八
舵手 三八
(移)移の馬 五八〇
移ふ 五二
(許)許多 三〇六
許多 一九六
許山 一四〇
許六(森川) 五五一

(訛)訛　訛言　一九
紺叢濃　紺青の色　一六五
(設)設　(終)終の別　五二
(誦)誦々　終日　一四〇
(累)累葉　終南山　五九三
累家　終如脱兎　五九三
累遷　(紹)紹介　五九三
累卵　紹述　五九三
累重　(網)網齋(淺見)　五九三
累累然　(紿)紿　五九四
(細)細說　(絆)絆　二一三
細殿　(細)細き管もて大空を　五〇一
細太刀　窺く　五〇一
細布衣　(惟)惟ふ　五〇一
(紫)紫雲　惟神　二三五
紫辭　惟喬親王　二三八
紫蘭　惟中(岡西)　二七三
紫鴛白鷗　惟方(別當、藤原)　二七五
紫文製錦　(情)情緒　二四八
紫式部日記　(悸)悸　五三九
(紺)紺掻　(惘)惘然　二〇六

(惆)惆悵　二〇八
(悵)悵々乎　二〇七
(惕)惕齋(中村)　三六一
(悠)悠久　四五〇
悠々　三三四
(帷)帷幄　四三六
帷幕の籌策　二八九
(帳)帳　二九〇
(祥)祥瑞五郎　八
(被)被　八
被衣　五〇一
被風　五〇一
被籠　七四
被管　一一三
被談合　二〇九
(袖)袖手傍觀　六二一
(袈)袈裟　二五八
(衰)衰衣　一三〇
衰龍　二〇五
衰冕十二章

(朝)朝散大夫　三四一
朝三暮四　三五一
(朗)朗朗　三九五
朗詠　七三
(脣)脣亡齒寒　二三
(脱)脱穎　六一四
脱兎　六一七
(豚)豚兒　三八五
(脚)脚巾　二七二
(脯)脯脩　九九
(脛)脛巾　九九
脛衣　四五一
(推)推演　二一六
推敲　四四三
推歩　九八
推理力　六
(控)控御　二六三
控弦　一七七
(掖)掖　二〇五
掖庭　二〇八
掖齋(狩谷)　二〇八

三三六
三六六
四九七
五七七
一五〇
五八
三三一
三八七
四三三
四九九
四三三
四三二
二八一
二八三
二八三
二八四
一八八
一八八
六〇九
一二八

(探)探題　探幽(狩野)　三三九
(捪)捪克　一〇三
(措)措辭　四九五
措を失ふ　三〇六
(捨)捨人　三一〇
(捧)捧腹　二七九
(提)提經　四九七
(掛)掛卷　二九〇
(符)符節　九二
符契　四六九
(笛)笛待落　四六五
笛藤の弓　四六一
(笠)笠懸　九三
笠置山　四九三
(笞)笞　二五六
笞刑　二四四
(笹)笹舟　三三一
(筒)筒　一七二
(笙)笙　二五六
(第)第門　三一八

(參)參軍　三三五
參差　二五二
參酌　一三七
參議　三〇六
參勤　三一〇
參勤交代　二七九
參々伍々　四九七
參商の二星　二九〇
參次(三上)　九二
(乾)乾德　四六九
乾綱　四六五
乾淤　四六一
乾隆　九三
乾飯　四九三
乾山燒　二五六
乾山(尾形)　二四四
(魚)魚子　三三一
魚袋　一七二
魚鱗構　二五六
魚麗之陣　三一八
魚腹に葬らる　一四三
魚彦(楫取)　一〇三
(梵)梵天　四九五
梵刹　三〇六
梵唄　三一〇
梵論字　二七九
(鹿)鹿　四九七
鹿首　二九〇
鹿柵　九二
鹿苑　四六九
鹿鳴　四六五
鹿砦　四六一
鹿の子斑に　九三
(勘)勘事　四九三
勘文　二五六
勘當　二四四
勘解由使　三九七
勘兵衞(毛利)　四四三
(望)望鄕臺　一四三
望湖亭　四三
望鄕の鬼　一四二

望月の駒　五四七
望肥馬之塵　四五一
(理)理　六八二
理窟　五八五
理不盡　五八八
理無き事　六一三
理學類篇　三三九
(蛋)蛋白　二九九
(蚺)蚺蛇　三一九
(蛇)蛇足　二六二
蛇籠　二六二
蛇味線　二六二
蛇皮線　二六二
(窓)窓　五一六
窓蓋　二一三
窓梅北面雪封寒　五一六
窓の須佐美　五一六
(寂)寂　二六二
寂々　二九三
寂々　二一四
寂然　二九三

寂滅 二六一
(寄)寄任 五七三
寄語 二六
寄進 二七
寄稿 二一
(宿)宿志 二六三
宿業 二七七
宿憤 二六四
宿鶉毛 二三四
宿直物 三八五
宿命論 二六四
宿學鴻儒 二六三
(堂)堂上 三一〇
堂々 三一〇
堂々の陣 三一二
(庸)庸人 五六九
庸作 五六九
庸何 四〇〇
庸中の佼佼 五七〇
(商)商 二四
商估 二五七

商法 二九
商山四皓 二五七
(皐)皐々 八一
皐蘭 八八
皐門 八七
皐月 三三
(堅)堅唾 二七七
堅鹽 二六四
堅田 二三四
堅白異同辨 二六三
(埴)埴輪 二六三
埴安池 三一〇
埴生の小屋 三一〇
(堀)堀川の徒 三一二
堀金の井 五六九
堀河殿 五六九
(埠)埠頭 四〇〇
(培)培 五七〇
(基)基光(藤原) 二四
基經(藤原) 二五七
(執)執

執贄 四〇六
執金吾 二四二
執牛耳 二一〇
(猛)猛惡 五〇九
猛者 五四六
猛虎鼠となる 五〇九
(猗)猗與 一
猗々 二三
猗頓之富 二六
(猖)猖獗 二五七
(猜)猜忌 二三一
猜疑 二一二
(將)將軍 二五六
將門(平) 三三五
將監(石川) 二八
(現)現身 五〇
現當 一八三
(聊)聊事 二七
聊爾 五九七
(動)動搖 三七五
動勢的活動 三七六

(麻)麻被 八
麻姑 五一三
麻酔 五一三
(庶)庶乎 二〇五
庶幾 二七一
庶子 二七一
庶僚 八一
(康)康熙 四八四
康樂堂 八八
康秀(文屋) 四八四
(處)處理 二七二
處士 二七一
處狹く 二八二
(屏)屏幔 四八九
屏中門 四八九
屏風岩 四五四
(密)密煎 五三
密邇 五六
密敎の秘法 五三五
(敗)敗績 四一七
敗衂 四一七

敗北 四一八
敗軍將不可言勇 四一六
(敏)敏捷 四五三
敏鍊 三七八
敏き時は功あり 三三
(救)救荒 二一〇
(勅)勅勘 三五四
(敎)敎案 一七六
敎經(平) 三三五
敎盛(平) 三三五
(祭)祭粢 二一四
祭酒 二一三
(崩)崩 一五七
崩御 四九四
崩折 一五一
(崇)崇 四
崇拜 二六三
崇山 三三三
(嵬)嵬然 一五一
嵬起 一五〇

嵬山 一四五
(崖)崖 六二〇
(嵯)嵯山 六二〇
(崎)崎嶇 六二〇
(崔)崔嵬 四三九
(崑)崑崙 四二六
(虛)虛言 一〇
虛喝 二九六
(眷)眷々 二一三
眷戀 二一四
眷族 四四
(眶)眶 五三七
眶 四四七
(眼)眼尾 四四七
眼孔小也 三一三
(專)專途 六五
專女 四四七
專齋(江村) 四四七
(既)既望 一六七
既往 一六七

既往不諫 一四五
(婉)婉婉 六二〇
婉順 六二〇
婉容 四三九
(婆)婆羅門 四二六
婆娑 一〇
(婀)婀娜 二九六
婀娜 二九六
(婗)婗好 二三三
(爽)爽爽 二一四
爽塏 二一五
(麥)麥隴 五三七
麥秀漸漸 四四
(帶)帶解 六八
帶鉤 三一三
(紕)紕笨 六五
紕野 三〇九
(粒)粒粒辛苦 五八八
(啞)啞啞 一
(唯)唯唯 四四七
(唯)唯諾 六六
(啓)啓發 一六七

(羞)羞し 五五五
(牽)牽牛花 六
(曼)曼陀羅 五一九
曼陀羅華 五一九
(釣)釣 一三五
釣名之人無賢士焉 四〇二
(族)族 三〇五
族隷 三〇六
(斬)斬新 三一七
斬蛇劍 三一八
(彩)彩色 四四
彩衣 四四
(規)規模 一三四
規規 一三
(粗)粗笨 三〇八
粗野 三〇九
(粒)粒粒辛苦 五八八
(啞)啞啞 一
(唯)唯唯 七六
(唯)唯諾 六六
(啓)啓發 一六七

啓 啓(佐久間)
(曹)曹子
曹司住
曹洞宗
曹孟德
(晤)晤言
(晡)晡時
(晦)晦庵(朱)
(區)區々
區宇
(研)研覈
(晨)晨(孫)
(祗)祗る
(欸)欸款
(欲)欲有事
(減)減らぬ體
(閉)閉門注所
(閉)閉門
(焦)焦眉
焦熱地獄
(黄)黄泉
黄白
然 然るべく別宜
然らぬ體
(然)然諾
(焔)焔硝
(焚)焚松
(焔)焔々
無遠慮有近憂
無何有の郷
無量壽院
無常の念
無爲の政
無下の民
無告の長物
無用の用
黄口
黄石公
黄菊
黄金
黄金花咲く
黄河の水
黄羊
黄老の道
黄桃花毛毛
黄土器
黄蘗山
黄花菜
黄顙魚
黄昏
黄昏鳥
黄巾賊
黄金鎖
黄金調
黄門
黄鳥
黄牛
黄海
黄爐
黄弓
(菩)菩提薩
菩提所
菩提樹
(菱)菱
菱る
菱縮
菱凋む
(菅)菅根(藤原)
菅の根の
(菟)菟田
菟裘
(萠)萠黄
萠黄句
萠黄の鎧
(菘)菘
(菜)菜る
菜色
(菖)菖蒲
菖蒲草く
目
(菱)菱四
菱形
(雲)雲林
(閉)閉注
(閉)閉門
(閑)閑
(開)開
(間)間
(閒)閒
(閙)閙
(剞)剞劂
(剰)剰
(副)副
(貨)貨物よ
(貪)貪道
(転)転籾
(竟)竟宴
(章)章臺
(飛)飛然
(厠)厠養
(烽)烽火
(寇)寇賊
(硝)硝意
(飢)飢者易爲餓
(飢)飢目の
食
(酘)酘酒
(欺)欺
(祗)祗
(翌)翌日
翌晷
(略)略符
(匿)匿ら
(勗)勗む
(産)産土
(寅)寅次郎(吉田)
(鹵)鹵簿
(兜)兜巾
(巣)巣父
(扈)扈從
(毫)毫釐差致千里之謬
(奉)奉由
(成)成里
(雀)雀躍
(痕)痕跡
(晩)晩節
晩餐
晩香坡
(透)透移
透逸
(無)無
無爲
無爲公子徒
無法の法
無賴の徒
無勝
無正事
無盡藏
無丁字
無雙
無慮
無聊
無音狀
無禮
無德
無辜
無我緣
無量壽
無限
無用の用
無用の長物
無告の民
無爲の政
無下の民
無常の念
無何有の郷
無遠慮有近憂
無焔
無用
焚
焔
然
焦
黄
菲
菊
菩
菱
菅
菟
萠
菘
菜
菖
菱
雲

雲霄　五四
雲仍　五四
雲孫　一五四
雲助　一五六
雲隱　四五一
雲雀　五四
雲裔織　五四
雲龍井蛙　五三
雲烟過眼　五四
雲泥萬里　五四
雲泥不管　五四
雲萍雜誌　一五六
雲は馬頭より生ず　一五六
雲は秦嶺に横りて　一五六
雲な隠しそと禁めけむ云々　一五六
雲居の御事　一五七
雲居禪師　五四
雲濱（梅田）　五四

（霧）霧圍氣　二七二
（森）森山　二六八
森嚴　四八九
森羅萬象　四九〇
（棧）棧橋　三三六
棧敷　三三七
棧雲峽雨日記　二五九
（棲）棲宿　一九九
棲息　三三九
棲遑　六一
（棟）棟梁　五〇二
棟梁の府　七六
（棺）棺　三九六
棺槨　四九〇
棺を蓋うて事定る　三六
（棋）棋子　七三
棋楠樹　七三
（椋）椋　一〇四
（椚）椚　三八二
（椒）椒房　六一二

（植）植　四八五
（棚）棚機　五五二
（椀）椀飯　二五一
（渠）渠魁　二五五
（棕）棕梠　二五九
（椎）椎柴　三一
（椁）椁は穿つ波の上の月を　三三五
（棒）棒讀　二八七
（集）集　二八五
集る　三
（程）程合　三七八
程程　四四七
程朱の學　四四七
程顥　一七一
程願　一七二
（稀）稀有　二六
稀人　一七五
（税）税　五二〇
（稂）稂莠　二四二
（稓）稓叔夜　五七五

（黍）黍離々　四五
黍苗如仰陰雨　三三
（滋）滋賀花園　三三六
滋籐の弓　三三七
（湘）湘南　二五九
（湖）湖壖　一九九
（湛）湛碧　三三九
（湮）湮欝　六一
（渤）渤海　二
（潜）潜潜　五〇二
（渚）渚院　七六
（渺）渺瀰粘大　三九六
（溫）溫泉　四九〇
溫雅　三六
溫菘　七三
溫古知新　七三
溫山（河北）　一〇四
（渡）渡月橋　三八二
渡津海　五七五

（渇）渇仰　九九
渇迎　九九
渇不飲盜泉水　一〇〇
（湯）湯桶訓　五六六
湯鏖罪　三一九
湯河原　五六四
湯武の放伐　三二一
（滾）滾つ　三二五
滾滾と　二〇七
（游）游子悲故郷　二〇四
游子猶行於殘月　二〇四
（渾）渾沌　二〇四
渾圓球上　二〇八
（揶）揶揄す　五六三
（揣）揣摩　二八三
（插）插花筒　二一四
（換）換骨脱體　一六八
（揚）揚ぐ　五
揚巻　六
揚張　六
揚坐敷　四

（提）提携　三六三
提刑　三六四
提封　三六五
提子　四四四
（揭）揭焉　一七七
揭焉に　一七七
（揖）揖讓　三九
（揄）揄揚　三五
（揮）揮擢　二〇七
（描）描金　二四
（掣）掣肘　二四
（掌）掌客　二〇四
掌大　二〇八
掌を反すより易し　五六三
（卿）卿相雲客　二一四
（都）都の巽　一六八
都鳥　三一
都誇　三一
都尉　三一
都廣侯　三一

都路節　三一三
都志村　三一四
都波八重事代主神　三一五
都府樓纔看瓦色　三一六
（隅）隅目　一四六
隅中　一四六
隅櫃　二八〇
隅無く　一四四
（隆）隆　二一七
隆國（源）　五二八
隆資（四條）　二四四
隆正（野々口）　四一五
隆能（藤原）　四七三
隆信（藤原）　四七三
（陽）陽　五五三
陽關　五五三
陽炎　九三
陽時　五五四
陽虎　五五三
陽城　五五四

陽明門　五五四
陽氣發處金石亦透　五五三
（隋）隋　二八一
隋唐　二八三
（階）階前萬里　七八
（朝）朝す　三六六
朝夕　六
朝顔　六
朝駈　六
朝開　七
朝臣　一〇
朝憲　三六三
朝宗　三六六
朝覲　三六六
朝集堂　三六六
朝堂院　七
朝餉間　三六六
朝野薇塞　三六七
朝陽の鳳鳴　三六六
朝聞道夕死可矣　九

朝綱(大江) 六九
朝獷(惠見) 六一〇
朝風(堤) 三六〇
朝光(結城) 五六六
朝彦親王(久邇宮) 一五二
(勝)勝 二七七
勝見 一〇〇
勝妙瀧 二六九
勝地無主 三一六
勝頼(武田) 三〇〇
勝元(細川) 四六六
(脹)脹に 四三八
脹皷 四五〇
(脾)脾肉 四五〇
脾肉の嘆 六〇九
(腋)腋 二一七
(葬)葬 二三五
(期)期月 五
(惡)惡瘡 五
惡漢 六一三
惡者 六一〇
惡事傳千里 三六〇
(悲)悲觀 五六六
悲劇 二六九
悲田院 一五二
(惠)惠心禪師 二七七
(愀)愀然 一〇〇
(慍)慍る 二六九
(慍)慍慍 二六九
(愉)愉色 三一六
(惻)惻隱の心 五〇〇
(惴)惴惶(藤原) 四六六
(絕)絕句 四三八
絕唱 四五〇
絕倫 四五〇
絕世 六〇九
絕倒 二一七
絕域 二三五
絕對上 五
(給)給ふ 六一三
給仕 四四三
(結)結體 四四七
結繩 六一九
結緣 二八三
(絡)絡繹 六一九
(絲)絲履 二三四
(統)統計學 二五
(評)評定 二八三
評定衆 五六九
評定所 三〇五
(詞)詞章 四七三
詞の玉の緒 二九四
(註)註 二九五
(詔)詔勅 二九六
(訴)訴訟法 二九五
(傅)傅 二九五
傅 二九六
傅子 二九六
(傍)傍痛 三二一
傍廂 三一四
傍葛剌灣 四九一
(傀)傀儡 一六二
傀儡子 一四七
(傔)傔仗 一八三
(進)進止 二五三
(逮)逮捕 三一九
(復)復命 四六四
復籍 四六三
復號の事 四六二
(循)循ふ 二四〇
(徧)徧ねし 一六
(欽)欽欽 一三五
欽定 一三七
欽明 一三八
欽差 一三六
欽羨 一三七
(猪)猪口 六一四
猪頸 六一四
猪頸に著る 六一四
猪武者 六一七
猪の上手 二三八
(猶)猶豫 二一
猶豫 三四〇
猶子 二四
(猩)猩々緋 二五八
(猥)猥雜 六〇五
(猫)猫股 四二一
(越)越度 六一三
越後名寄 六一九
越王會稽に降る 六一九
越人の秦人の肥瘠を 六一九
越前伊豫守 六一九
(超)超世 三六六
超涯 三六五
(趁)趁る 四三七
趁趕 二一七
(雁)雁 二一四
雁皮 二一七
雁の玉章 二一二
雁山の雲 三五九
(厨)厨子 二一
(博)博勞漏 四二五
博浪沙 四二四
博言學 四二四
博物館 四二五
博物新編 四二五
博物標本 四二五
博雅三位 二一〇
(黑)黑柒 一九五
黑鍬 一九四
黑潮 一九五
黑帥 一九五
黑糟毛 一九五
黑革威 一九五
黑羽の矢 一九五
黑戸御所 一九五
黑木の御所 一九五
黑主(大伴) 七一
(雄)雄圖 五六四
雄渾 五六四
雄飛 五六四
雄辯 五六四
雄花 五六四
雄島の苫屋 四二五
雄藏(坪內) 四二五
(雅)雅言 四二五
雅趣 四二五
雅心 四二五
雅經(藤原) 四三
雅望(石川) 二一〇
雅嘉(尾崎) 一九四
(發)發心 一九五
發句 一九五
發意 一九五
發途 一九五
發端 一九五
發駕 一九五
發石と 七一
(爲)爲體 五六四
爲鬼所笑 五六四
爲可かんめり 五六四
爲氏(宅磨) 五六四
爲氏(藤原) 四七四
爲頼(淺原) 七
爲頼(源) 五二九
爲章(安藤) 一七
爲成(宅磨) 三二六
爲業(藤原) 四七四
爲朝(源) 五二八
爲義(源) 五九六
爲兼(冷泉) 三七五
(等)等閑 三七七
等持院 三七七
(筐)筐中 一三九
(筏)筏師 二五
(筋)筋無し 二七九
(策)策名 二一九
策を帷幄の中に運らす 二一〇
(答)答 二〇〇
答射 三三五
答兒 二六七
(筆)筆者 四四七

筆跡 四四七
筆勢 四四七
筆意 四四六
筆耕 四四六
筆頭 四四七
筆架 四四六
筆筒 四四七
筆の海 四八〇
筆力扛鼎 四四七
(筑)筑紫 三五八
筑紫琴 三五八
筑波嶺 三五九
筑波山にかけて君を願ひ 三五九
(寐)寐首 四二一
寐覺月 四二一
寐待の月 四二一
(富)富士山 四六七
富士川 四六八
富士日記 四六八
富津津岬 四七九
富國策 四四七
富有天下 四四七
富貴 四四六
富貴の家を觀るに祿位重疊云々 四四九
富家殿 四四六
富南(秋山) 五
(寒)寒心 四八〇
寒食 四四七
寒喧 三五八
寒素 三五八
寒風澤 三五九
寒夜に民の肌を思す 三一四
(寓)寓目 四二一
寓言 四二一
寓意 四二一
寓書 四六七
(開)開埠 四六八
開關 四六八
開閫 四七九
開塞 四六六
開拓使 三八六
開成所 四五九
(間)間居 四四六
間行 四五九
間接 四六五
間者 五
間遠に 二一一
間關流離 二一一
間不容髮 二一〇
(閑)閑雅 二一三
閑田文章 二一四
閑田耕筆 二一四
閑院左府 二一四
閑院宮諡號事件 二一四
(閊)閊癢 二一四
(圍)圍ふ 二一四
圍む 一四六
圍まふ 七九
(散)散く 六九
散文 七六
散位 二二〇
散佚 二二五
散逸 二三五
散飯 二二四
散樂 二二一
散亂 六二三
(敦)敦厚 三八六
敦賀 三六二
敦仁親王 一一
(敏)敏れたる縕袍 五五九
(敢)敢志 二一二
敢無榮 一一
(敍)敍器 二二三
(順)順ふ 二四〇
順ふ 五一六
順化 二六六
順境 二六六
順德院の禁中の事ども云々 二六七
順(源) 五六八
順庵(木下) 二三三

(童)童丱 三七六
童孩 三七五
童謠 三七五
童然 三七六
童蒙有訓 三七七
童話長篇 三七八
(皓)皓天 八六
皓然 八五
皓皓 八〇
(象)象潟 四八五
象頭山 二七九
象山(佐久間) 四一六
(最)最手 一六四
最勝寺 一六四
最明寺入道 一六六
(尊)尊者 一六五
尊俎 一六七
尊圓法親王 二〇二
(衆)衆議判 二六三
衆生界 二六五
衆口鑠金 二三三
(善)善道 五三
善惡之應殃慶立至 二九七
善吉(永田) 二九三
(曾)曾孫 四五一
曾我物語 三〇五
曾文溪 八〇八
(硜)硜硜 八二
(硬)硬骨 四八五
(硝)硝子壜 二七九
(硯)硯の海 四一六
(媒)媒介 一六四
(畫)畫局 一六六
畫策 一六五
畫博 一六七
畫匠 二〇四
畫餅 二〇九
畫龍點睛 二六三
(酬)酬豕 二六五
(視)視官 二三七
(猝)猝 五六四
(強)強力 八八
強梗 二三八
強顏 二三二
強訴 八五
強裝束 二〇四
(痛)痛言 二〇八
痛切 八〇
痛快 八二
痛痒 四八五
痛楚 二七九
痛矢 四一六
(痙)痙攣 一六四
(痘)痘瘡 一六四
(着)着想 一六六
着到 一六五
着込 一六七
着綿 一七二
(報)報効 二一〇
報賽 二三七
報謝 五六四
(登)登極 二七五
登遐 二七五
登庸 二七八
登龍門 二七八
登蓮法師 二七九
(盛)盛 二一七
盛者必衰 二六七
盛國(平) 二三五
盛政(佐久間) 二一九
(屠)屠る 五〇四
屠狗 二〇八
屠蘇 二八四
屠所の羊 二八三
(劃)劃切 七五
劃悌 七六
(劃)劃く 二一八
劃愛 九九
劃籠 六二三
劃鷄焉用牛刀 四〇六
(景)景迹 二三九
景迹 一七四

景樹(香川) 八九
景時(梶原) 九八
景季(梶原) 九八
景濂(宋) 三〇三
景山(徳川) 三六〇
景山(堀) 五〇七
景祐(澁川) 二四八
景綱(古市伊藤武者) 四八六
(晴)晴く 四三九
晴賢(陶) 二八四
(普)普ねし 一六
普及 四六二
普請 四六八
普國 四六六
普化宗 四六五
普天率土 四八〇
(智)智恩院 三四二
(琴)琴平 一三六
琴瑟不和 二〇三
琴舍文集 二〇三
(廂)廂の車 四一七
(則)則寶 四九四
(度)度公が樓 四九四
(粟)粟津原 六五
粟田口 四三
粟田殿 四三六
(蛙)蛙鳴 四三四
蛙鳴蟬聲 二六三
(蛭)蛭子 二五二
(蛩)蛩々 二五二
蛩然 一三八
(跌)跌宕 一三六
跌蕩 四五五
(跋)跋扈 四七
跋渉 四七
(塒)塒壘壁 一三
(堙)堙滅 四七
(堰)堰 四七
堰代 四七
(勞)勞 四七
勞役 四七
勞を慕る 五七八
勞無くして冠を得 五七八
(賀)賀易語 四九四
賀賀嵐 六五
(貽)貽る 四三
貽謀 四三六
(番)番場 四三四
番記 二六三
(肅)肅然 二六三
肅愼 二五二
(尋)尋常 二五二
尋承 一三八
(窘)窘歩 一三六
窘蹙 五四五
(喪)喪 四七
喪す 四七
喪家の犬(るゐるゐとして) 五九五
(嵐)嵐峡(芳山嵐峡) 四一九
嵐雪(服部) 四三一
(嵎)嵎夷 一四六
(凱)凱歌 三
凱歌 三
凱風 三
凱旋門 八
(喋)喋喋 四五七
(喧)喧囂 一四〇
喧豗 一四一
(喈)喈喈 三六八
(喝)喝 三六八
喝采 四三〇
(啾)啾啾 四三〇
(喟)喟然 一六三
(單)單皮 四三
單性花 六一五
(貴)貴に 六一四
貴人 三〇
貴公子 五七七
(買)買 五七七

(靭)靭 五六四
靭 五一
(帽)帽額 五一
(幄)幄 五
(幇)幇間 三一三
幇助 四九五
(項)項羽が山を抜く力 八〇
(斑)斑 四二八
斑蘭の雲梯 四三五
(彭)彭湃 四九六
彭侯 二〇〇
(琵)琵琶 四五〇
琵琶法師 四五一
(房)房弱に 二
房麗 二〇二
(牌)牌 四一六
(殖)殖る 四六一
(殘)殘酷 二一八
(馭)馭戎慨言 一四二
(舒)舒緩 二六一
(犄)犄角 二四四
(犂)犂鋤 五六五
(翔)翔鸞樓 一三
(翁)翁然 二
(須)須佐の入江 二
(紬)紬藥 二
(斯)斯く有んなり 二
(觚)觚稜 二
(幾)幾十 二
(憂)憂然 二
(覃)覃(太田) 二
(費)費府 四
(貴)貴育 四
(巽)巽 四
(堯)堯の子の云々 二
(舜)舜水(朱) 二
(袴)袴着 二
(裂)裂 二
(準)準繩を左にし云々 二
(壺)壺 二
壺奥 二
壺裝束 二
壺切太刀 二
十三畫
(壺)壺 二
壺馬場 二
(道)道化 二
道服 二
道祖神 二
道觸の神 二
道不同不相爲謀 五
道弘むといふ館 五
道も狹に 五
道を盲に問ふ 五
道に君子あり小人あり 五
道の長手を縮めけむ 五
道元 三
道臣命 五
道眞(菅原) 二
道隆(藤原) 四
道兼(藤原) 四
道家(藤原) 四
道長(藤原) 四
道貫(野津) 四
道憲(藤原) 四
道鬼(山本) 五
道風(小野) 六
(遊)遊 二
遊山 二
遊冶 二
遊道 二
遊豫 二
遊衍 三
遊屐 三
遊燕 三
遊宴 三
遊擊隊 三
遊仙窟 二

(逸)逸豫 三五
逸居 三五
逸樂 三五
逸樂を以て労を待つ 三五
逸勢(楯) 三五
(運)運籌 四五
運搬 四五
運慶 四五
(過)過料 三七
過差 三七
過去帳 三七
過猶不及 三七
過ぬ知りて能く改むるに 一九
過而不改謂過矣 一九
(遍)遍る 三九
過塞 四七
過迫 四七
(違)違勅 三五
違警罪 三五
(遇)遇 四
萬事不成須責吾志 五九
萬能達一心不足 五九
萬仞の青壁 五九
萬姓統譜 四三
萬機の政 四三
萬戸侯 四三
萬歳樂 一九
萬葉考 一九
萬葉集 一九
萬葉集古今小櫛 一九
萬葉代匠記 一九
萬葉集 一九
萬歳 一九
萬額 一九
萬釣 一九
萬象 一九
(遁)遁辞 三五
(遁)遁走 三五
(遑)遑 三五
(遖)遖古 三五
(遍)遍し 三五
遍路 三五
遍歴 三五
(遠)遠慮 三五
遠近 三五
遠国 三五
遠山 三五
遠州 三五
遠祖 三五
遠島 三五
遠浅 三五
遠方 三五
遠里(帆足) 三五
(葱)葱嶺 三五
葱嶺の数 三五
葱花輦 三五
(葛)葛花 三五
葛折 三五
葛葉 三五
葛藤 三五
葛裘 三五
葛籠 三五
葛城の高嶺 三五
葛原親王 三五
葛井親王 三五
葛山(星野) 三五
葛藤(藤原) 三五
(落)落入 三五
落居 三五
落丁 三五
落莫 三五
落葉 三五
落葉松 三五
落花枝にかへる 三五
(葎)葎手物語 三五
葎毛 三五
葎茅 三五
葎田鶴 三五
葎穂山 三五
葎原千五百秋瑞穂國 三五
葎の戸 三五
落葉松 三五
落葉 三五
落葉飾 三五
落葉影 三五
落葉繁 三五
落首 三五
落欵 三五
落成 三五
落髪 三五
落魄 三五
落落 三五

(蒸)蒸世 七
(葆)葆光 四
(覆)覆掌 九
(著)著 三〇
(葡)葡萄糖 四七
(葉)葉櫻日記 四三
(源)源氏物語 二六
源三位 二六
源都督 二六
源宋(楓原) 二六
源内(平賀) 四五
(漫)漫者 三五
(滄)滄海 三三
滄桑の變 三四
滄洲(赤松) 三
(溢)溢美 八
(滴)滴滴 八
(混)混濁 三
(溺)溺死 五
(滑)滑稽 三〇一
(溝)溝渠 三
(溷)溷厠 三
(溽)溽暑 三
(滲)滲漏 三
(滞)滞留 三
(溌)溌剌 三
(溜)溜飲 三
(滅)滅罪 三
滅後 三
滅亡 三
滅却心頭火自涼 三
(滝)滝口 三
滝川 三
滝沢馬琴 三
(滑)滑稽 三
(溺)溺死 五
(溽)溽暑 三
(滲)滲漏 三
(滞)滞留 三
(溌)溌剌 三
(溜)溜飲 三
(滅)滅罪 三
滅後 三
滅亡 三
滅却心頭火自涼 三
(滝)滝口 三
滝川 三
滝沢馬琴 三

(經)經 一七
經度 一七
經倫 一七
經緯 一七
經營 一七
經營 一七
經驗 一七
經義 一七
經書 一七
經上る 一七
經濟學 一七
經帷子 一三
經津主神 一七
經信(源) 一七
經盛(平) 一七
經隆(土佐) 一七
(絹)絹 一三
絹絲 一三
絹川 一三
(絞)絞 一三
(締)締 一三
(縋)縋袍 一三
(愛)愛子 一三
愛子 一三
愛し 一三
愛しむ 一三
愛染 一
(感)感 一〇
感激 一〇
感狀 一〇
感應 一〇
感受性 一〇
感應寺 一〇
(慈)慈光 一三
慈延 一三
慈覚大師 一三
(極)極 一三
極楽寺 一三
極めの盡す 一三
(業)業 一三
業火 一三
(想)想公移山 一四
想夫 一四
想案 一四
(意)意趣 一三
意馬心猿 一三
意次(田沼) 一三
(愆)愆る 一三
(愁)愁訴 一三
(想)想ふ 一四
(愼)愼德公 一三
(慄)慄慄と 一五
(楊)楊畢 一五
楊雄 一五
楊震 一五
楊貴妃 一五
楊巨源 一五

棄處　四〇一
棄平（在原）　二〇
（楫）楫取　一一三
（楡）楡　四〇八
（楢）楢　四〇一
（梶）梶棚　二八一
（楚）楚　二五六
楚楚　三〇七
楚歌の聲　三〇四
（棄）棄捐　二三
（掻）掻鳴す　九〇
掻屈る　七六
掻埒す　九〇
掻練　七八
掻餅　七九
掻絶え　九〇
掻口說く　九〇
掻遣捨つ　七九
掻伴れて　七八
（搖）搖搖　五九
搖籃　五九
搖蕩　五八
搖り滿ゝて　五九
（搜）搜る　一一九
（搦）搦手　二一五
（詭）詭譎　一五四
詭道　五九一
詭辯　五九二
（詰）詰朝　四七八
詰旦　三四一
詰問　六一〇
（詬）詬罵　六〇九
詬辱　四一六
（詩）詩　三七〇
詩經　五七〇
詩佛（大窪）　三八
傳衣鉢　五九三
（僂）僂指　五六
（傴）傴僂　一七四
（傾）傾聽　二一三
（催）催馬樂　八五
（傲）傲然　三四〇
腹稿　四六三
腹鼓　四三八
腹赤贄　四三八
（腰）腰輿　三八
腰鏘　一四八
腰越　一九七
腰當　一九七
（腦）腦裏　三九二
（膃）膃肭臍　六三
（腥）腥血如滴　二八六
（禁）禁色　一三六
禁闥　一三六
禁錮　一三六
禁掖　一三五
禁秘御抄　一三七
（稟）稟く　四六
（補）補任　四八一
補弼　五〇三
補遺　五〇八
（裔）裔　五七
裔民　五八
裔胄　五九
（裘）裘葛　一一九
（裝）裝齋　二一五
（裙）裙釵之流　一五四
（稜）稜稜　五九二
稜疊　五九一
稜威　五九二
稜威（藤井）　四七八
（稠）稠密　三四一
（稚）稚子　六一〇
稚郎子　六〇九
（稗）稗　四一六
（傳）傳奏　三七〇
傳疏　三七〇

（徼）徼笑む　五〇四
徼運　四四〇
徼行　四四一
徼塵　五二五
（衙）衙門　一一六
（鄕）鄕愿　一三九
鄕貫　一三九
鄕關　一三九
鄕先生　八五
（鄒）鄒魯　二七六
（隔）隔靴掻痒　一五一
（筵）筵籍　六三
筵席　六三
（篋）篋　六三三
（箋）箋仕　二八六
（新）新玉　二〇
新治　四〇六
新代　二〇
新魂　二〇
新嘗　四〇六
新墾　四〇六
新渡　一六〇
新谷　一六〇
新島　一六〇
新島守　一六〇
新參　一六〇
新發意　一六〇
新羅松　一六〇
新内節　一六〇
新嘉坡　一六〇
新葉集　一六〇
新柳の髮　一六〇
新學異見　一六〇
新西班牙　一六〇
新築室祝壽詞　一六〇
新助（關）　一六〇
（義）義勇兵　一六〇
義太夫節　一六〇
義經記　一六〇
義經（源）　一六〇
義山（李）　一六〇
義公（水戸）　一六〇
義隆（大内）　六九
義象（池邊）　二七
義光（源）　五三〇
義光（村上）　五三九
義景（安達）（秋田城介）　二五九
義高（陶山）　二八一
義賢（帶刀先生）　三三一
義顯（新田）　四〇六
義成（新田）　四〇六
義信（平賀）　四五六
義親（源）　五三〇
義廣（源）　五三〇
義平（源）　五三〇
義仲（源）　五三〇
義助（脇屋）　六一〇
（群）群品　二一五
群書類從　二五五
（會）會得　六一九
會釋　六一九
會課　一六〇
會計　一六〇
會稽山　一六〇
會稽の恥　一六〇
會者定離　一六〇
（頑）頑なる人　九七
（頒）頒白　四三六
（頓）頓て　五五五
頓着　三八七
頓悟　三八六
頓挫　三八六
頓首　三八六
頓踣　三八七
（塗）塗弓　四一〇
塗弦　四一〇
塗籠　四一〇
塗籠籐の弓　四一〇
塗炭の苦　三八四
塗目の鏑矢　四〇九
（塞）塞　四六六
塞翁馬　二一三
塞き敢へず　二九二

(瑞)瑞垣 五二五
瑞枝 五二五
瑞穗國 五二六
瑞岡萌 五二六
瑞巖寺 二八二
瑞龍山 二八四
瑞軒(河村) 一〇五
(塋)塋域 五八
(塘)塘雨(百井) 一〇五
(痂)痂疾 一九八
(痴)痴 六二三
痴心 二七四
痴漢 三四〇
痴業 二七四
痴人の夢 三四四
(廉)廉潔 五九八
廉恥の心 五九八
廉頗 五九九
(圓)圓座 六二〇
圓居 五一六
圓滿 六二〇

圓渾沌 五二五
(零)零落 五二六
零碎 五二六
零餘子 五二六
零丁 二八二
零丁洋の詩 二八四
(雷)雷 一〇五
雷霆 五八
雷鳥 一〇五
雷同 一九八
雷鳴壺 六二三
(電)電光朝露 二七四
(聖)聖 三四〇
聖護院 二七四
聖德太子 三四四
聖謨(川路) 五九八
(資)資望 五九九
資斧 五九九
資治通鑑 六二〇
資紀(樺山) 五一六
(賈)賈人 六二〇

(賄)賄賂 五二一
(賊)賊に兵を借し盜に糧を與ふ 五九六 五九五
(鼎)鼎鐺 四〇九
鼎鑊 五九六
鼎を扛ぐ 四〇二
鼎の中なる一切の肉 五七六 五七八
(敬)敬稱 五七六
敬慕 二〇九
敬宇(中村) 三六九
敬彥(金澤) 四四五
(解)解由 二五七
解菜 二五六
解洗衣 一〇四
解脫幘相の法衣 二四六
(毀)毀梓 二四八
(殿)殿上人 二四一
殿上の男 一〇五
殿上の間 九四

殿守の伴の造 三八五
(跡)跡川柳 一二
(跳)跳梁 三六七
(蹺)蹺く 四四四
(路)路宴 六〇一
路導 五二四
路傍の人 六〇三
路の衢に岐れんことを嘆く 五二四
(獅)獅子の丸 二三八
獅子心中の虫 二三八
(猿)猿樂 二三二
猿島 二三一
猿澤の池 二三一
猿丸太夫 二三三
(雌)雌蕊 二三九
雌雄 二三三
雌雄を決す 二六三
雌伏せんよりは雄飛すべし 二四八
(暗)暗合 一七

暗暗 一六
暗憺 一七
暗誦 一七
(暘)暘谷 五五二
(暖)暖簾師 四一五
(暉)暉章堂 二七
(煩)煩 六二三
煩惱 五〇六
(煌)煌煌 一六二
煌煌 一四三
煌星 一四四
(煨)煨炎 六〇五
(煉)煉鍔 四二三
(煙)煙屋 一八五
(煮)煮豆燃萁 五一〇
(照)照得 三七三
(煦)煦煦 一四七
(煎)煎茶 三〇
(筌)筌獨 一七四
(飫)飫く 五
(飲)飲泣 四〇

(飯)飯匙倩 一七
(幌)幌 一七
幌泉 一七
(辟)辟易 五五二
(虞)虞舜 四一五
虞芮 二七
虞初 六二三
(畸)畸人 五〇六
(當)當座 一六二
當時 一四三
(衾)衾言 一四四
衾議 六〇五
(凰)鳳算 四一三
鳳捕る猫は爪を云々 一八五
(勤)勤 四一三
勤身 五一〇
(勢)勢猛に 三七三
勢如破竹 一四七
勢語臆斷 三〇
(勵)勵す 一四七
(碁)碁局 五
碁所 四二三

(踐)踐 五〇七
(碓)碓氷嶺 五〇七
(碌)碌碌 四九〇
(蛹)蛹 一四八
(蜃)蜃の噓 一四九
(蜂)蜂仔 一四八
(蛾)蛾眉 一四八
(蜃)蜃氣樓 一二七
(蜉)蜉蝣 三〇七
蜉蝣 二九八
蜉蝣の身 二九七
(鉤)鉤 四一一
(鉆)鉆鉇 五一〇
(鉦)鉦鼓 三〇
(蜀)蜀魂 三〇
蜀魂 二五
蜀犬吠月 二五
(鉢)鉢 二八六
(睚)睚眦之怨 三五九
(鉗)鉗口 一二四

鉗狂人 二〇三
(鈴)鈴屋集 九二
鈴鹿山 四八
(睥)睥睨 六〇三
(睚)睚然 六〇三
(督)督 一六
(雎)雎鳩 四九五
(睦)睦月 一〇六
(嗟)嗟 二五一
嗟來食 九三
(嗅)嗅官 四五八
(噸)噸物造の太刀 四五八 一八七
(嗚)嗚呼 二〇六
嗚呼 二〇六
嗚咽 二五七
(輅)輅車 二七〇
(軾)軾 二七〇
(載)載籍 五〇三
(鳩)鳩灌 四二八
(亂)亂 七
亂離 二一〇

亂杭 五八〇
(孀)孀々 三六六
(嫁)嫁奩 二六
(牒)牒 三六八
(粮)粮秣 五七八
(殖)殖す 一四一
(馴)馴鹿 三八四
(酪)酪 五七八
(駟)駟騾 三四四
駝騁 三四六
(奥)奥人 一三
奥義 二
奥義 六五
奥津御年 六五
奥の細道
(犍)犍陀衛 一三
(幹)幹文(久米) 一五六
(靴)靴を隔て、痒をか く 一五一
(雍)雍州府志 五六九
(暑)暑苦 一二

(號)號旗 八一
(盟)盟文 三四五
(嵩)嵩 九四
(置)置酒 三四三
(罪)罪障 二一三
(農)農は國家の大本な り 四一〇
(黽)黽勉 四五三
(孵)孵化 四六四
(歲)歲月不待人 二一一
(竪)竪子 二六四

十四畫

(實)實 二三四
實子 五一六
實用 二四二
實學 二四三
實否 四四四
實しく 五一三
實しやかに 五一二
實語經 二四三

實朝(源) 五二八
實盛(齋藤) 二一三
實氏(藤原) 四七二
實定(藤原) 四七二
實政(北條) 四九六
實美(三條) 二三九
實則(德大寺) 三八一
實盛 五九七
實舍 五九七
(寥)寥廓 五九七
(寧)寧樂 四〇
寧王 四二
寧馨兒 四二
(賓)賓客 五二〇
賓旅 四五三
賓頭盧 四五二
(寡)寡人 一六五
寡君 一六四
(與)與力 五七四
與國 五七一
與島 五七二
與子同袍 二四五

與一(角倉) 二八〇
與清(高田)(小山田) 三三三
與三郎(竹越) 三二六
(精)精 二七三
精覈 二六五
精衛 二九
精舍 二五八
精淨 二五八
精悍 二五八
精進 二五八
精進物 二五五
精里(古賀) 一九二
(對)對ふ 二〇〇
對の屋 三二六
對句 三五六
對晤 三一三
對鷗亭 三一一
對抗運動 三一一
對偶聲律之文 三一三
(噉)噉々 八二

(鳴)鳴條 五四一
鳴神 四〇二
鳴板 四〇一
鳴瀧 四〇二
鳴海潟 四〇二
鳴弦の音 四〇一
鳴戸の瀬戸 四〇二
(鳶)鳶鷹を生む 三八五
(鳳)鳳凰 四九七
鳳闕 四九四
鳳輦 四九七
鳳梨 四一八
鳳林寺 四九七
鳳洲(土屋) 三五九
(臺)臺閣 三一一
臺槐 三一三
臺榭 三一三
臺座 三一四
臺南 三一三
臺盤所 三一六
(歌)歌枕 三一七

歌吹 四九五
歌仙 九六
歌舞 一〇六
(彰)彰る 二〇
彰化 二五七
彰義隊 二五六
彰考館 二五六
(寢)寢及 四一三
寢穢し 二五
寢覺草 四一二
寢屋處 四一三
(嘉)嘉禮 一一八
嘉謨 一〇八
嘉儀 九〇
嘉卉 九〇
嘉義 九〇
嘉明(加藤左馬助) 一〇一
嘉兵衛(高田屋) 三三三
(輕)輕薄 一七四
輕部川 一一八

輕井澤 一一八
輕命於鴻毛 三七
輕島の明の宮 一一八
輕舟已過萬重山 一七三
(輔)輔翼 五〇六
輔親(大中臣) 七一
(端)端緒 三三八
端倪 三三八
端午 三三八
端袖 四一七
端坐 三三八
端居 四一七
(旗)旗亭 一三〇
旗艦 一三三
旗下人 四一七
旗手の靡 一一七
旗幟鮮明 四一七
旗の蟬本 五七七
(領)領ず 五八九
領家 五九〇
領袖

領収 五九〇
(魁)魁 一九九
魁偉 一六一
魁梧 一六〇
魁岸 一六〇
(壽)壽 四九七
壽詞 五七一
壽藏 二六四
壽永の嵐 二三六
(豪)豪逸 八〇
豪邁 八七
豪傑 八二
豪奪 八五
(齊)齊民 二八八
齊宣王 二八八
齊桓晉文 二八五
齊世親王 二七九
齊昭(德川) 二八〇
齊彬(島津) 二五〇
(榮)榮井 二六
榮華 五七

榮華物語　一三七
榮枯盛衰　一三七
榮吉（鎌田）　一〇八
（聞）聞く　一三四
聞え　一三六
聞召　一三六
聞食　一三六
聞継ぐ人も語り継ぐがね　一三三
（閣）閣閣　九〇
閣下　九〇
閣道　九二
（膏）膏腹　八七
膏壌　八四
膏粱　八八
膏露　八八
膏血　八二
（鼻）鼻祖　四四五
鼻準　四四五
鼻高　四四一
鼻白む　四三一
鼻息を仰ぐ　一五七
（酸）酸痲　一五七
酸痲　一〇八
酸鼻　一三四
（監）監察　一三六
監察御史　一三六
監本四書　一三六
（跟）跟蹌　一三六
（跼）跼蹐　一三三
跼天蹐地（天にせくまり）　九〇
（踊）踊躍　九二
踊念佛　八七
（鞅）鞅掌　八四
鞅鞅　八八
（颯）颯と　八八
颯颯と　八二
（飽）飽く　四四五
飽暖　四四五
（碟）碟子　四四一
（碧）碧潭　四四五
碧旻　四四五
（碩）碩學　二三九
碩儒　二三九
（碣）碣　二三九
（銀）銀杏　二二一
銀河落九天　二二一
（銅）銅拍子　二一四
銅銘　五七五
（煽）煽煽　一四二
煽動　三七一
（熔）熔化　五七〇
（趙）趙充國　六三三
趙欧北　二
（趕）趕逐　二
（瑠）瑠璃　二三三
瑠璃光如來　二三三
（瑰）瑰麗　二三三
（瑤）瑤臺　五
（瓚）瓚尾　四二〇
（熊）熊襲　三六八
熊本の亂　四九〇
熊の皮の尻鞘　一五四
熊野三山　一五四
（詔）詔　二九二
詔武　一七七
（疑）疑兵　三六
疑是銀河落九天　一三五
（皷）皷吹　三七七
皷腹　五四一
（聚）聚る　二九九
聚落　三〇〇
（翠）翠徽　五六九
翠蓋　三六六
（團）團欒　三六五
團圞　一二三
（蜥）蜥蜴　五九三
（蜩）蜩　五九三
蜩康　一六一
（蜻）蜻蛉　五九
蜻蛉洲　二三四
蜻蛉日記　一五四
（蜿）蜿蜒　一五四

蜿蜒　六二〇
（蜚）蜚語　四四三
（蜘）蜘蛛　二七七
蜘蛛網　一五六
閙中　四五三
閨閾　一七四
閧の聲　二七九
（嬬）嬬娥　二五六
嫡妻　五三六
嫗癲　四六〇
（瘈）瘈痛　二八六
（塵）塵添壒嚢鈔　二四八
廓廓清　一六四
（閥）閥人　一七八
（贍）贍事　六五
（賑）賑恤　三七六
（骰）骰子　三四七
（粽）粽　一三八
（境）境界　三三六
（魂）魂合へる友　四四九
（獄）獄　六二〇
（酘）酘醸　四四三
（舞）舞踏　二七七
（嘖）嘖嘖　一五六
（斡）斡旋　四五三
（臧）否　一七四
（腐）腐爛　二七九
（肇）肇國　二五六
（蜑）蜑緣　五三六
（髣）髣髴　四六〇
（歜）歜歳　三八六
（赫）赫赫巧　三四八
（兢）兢兢　一六四
（甍）甍庵（中井）　一七八
（奩）奩　六五
（綿）綿衣　二五三
綿上　三七六
綿絹　三四七
綿醬　一三八
綿繻　三三六
綿亘　四四九
綿に針を包む　三八五
（維）維新　四七〇
維新　二一八
維持　一一
維摩　二一六
維摩會　四八五
維盛（平）　四二九
維貞（大佛）　四〇
（綱）綱目　四二〇
綱紀　一八一
綱吉（德川）　九一
（網）網代　一四〇
網引　三九五
網羅　五九八
（綸）綸子　六一一
綸命　六一一
綸言如汗　六一一
（綾）綾子　六一一
綾羅紗　六一一
（綟）綟子　五四三
絲杣　六一一
綿屬（文屋）　四八四
（綺）綺ふ　二〇
綺語　六一五
綺羅　五六七
（緋）緋甲　五六七
（綢）綢繆　三三四
（緊）緊捉　三三四
（綜）綜核　六五
（綴）綴の錦　八七
（綽）綽綽有餘裕　八一
（滿）滿　三八〇
滿州　九
滿を持す　一四
滿身渾是膽　五一〇
滿誓　五八八
（漁）漁　五八九
漁人　五八九
漁火　一九
漁父之利　五二七
（漏）漏刻　五九二
漏泄　五九二
綠碧　五九二

漏斗　六〇〇
漏屋　六〇一
(漸)漸及　二七七
漸漸醸　二七七
漸(松林)　二七七
(漫)漫事　二七六
漫涙　二七六
漫漫と　二七五
漫吟集　二七五
漫な死　二七五
(漢)漢音　二七五
漢辨　二七四
漢籍心　二七四
漢字三音考　二七三
漢書　二七三
漢の張湯が例　二七三
漢高　二七二
(激)激石枕流　二六九
(滴)滴汗　二六九
(漠)漠然　二六四

管窺　二六七
管帯　二六六
(槍)槍鐵　二六六
(榕)榕樹　二六六
(植)植杆　二六六
(楊)楊　二六五
(槐)槐安の都　二六五
(楯)楯の火　二六五
(楫)楫　二六五
楼峰　二六四
楼木　二六四
(槁)槁死　二六四
(榛)榛蓁(宇田川)　二六四
榛榛　二六四
榛　二六四
(榜)榜牌　二六三
(榕)榕城　二六三
榕園　二六三
(構)構ふ　二六三
(槇)槇　二六三
(様)様　二六二
(漂)漂泊　二六二
(漆)漆器　二六二
(漣)漣漪　二六二
漁父の辞　二六一
(漁)漁火　二六一
漁村　二六一
(漏)漏洩　二六〇

福岡　二四六
福山　二四六
福田　二四六
福原　二四六
(福)福祿壽　二四六
(箙)箙　二四五
(箇)箇條　二四五
箇中　二四五
箇日　二四五
箇人　二四五
箇所　二四五
箇條書　二四五
箇　二四五
(箕)箕踞　二四五
箕座　二四五
箕裘　二四五
箕帚　二四五
箕子廟　二四五
(箪)箪食壺漿　二四五
箪笥　二四五
(算)算博士　二四五
算法統宗　二四五
(箝)箝口　二四五
箝制　二四五
(箙)箙　二四五
(箱)箱　二四五
(箸)箸　二四五
(箪)箪瓢　二四五
箪笥　二四五
(管)管窺　二四五
管帯　二四五
管玉　二四五

(漂)漂泊　二四五
(漆)漆器　二四五
(漣)漣漪　二四五
(様)様　二四五
様様　二四五
様葬　二四五
様(宇田川)　二四五
(槁)槁死　二四五
槁木　二四五
槁悴　二四五
(楫)楫　二四五
楫の火　二四五
(楊)楊　二四五
(槐)槐安の都　二四五
(楯)楯の門　二四五
(楫)楫　二四五
(榕)榕樹　二四五
(植)植杆　二四五
(楊)楊　二四五
(槍)槍鐵　二四五
(榕)榕樹　二四五
(管)管帯　二四五
管窺　二四五

管を用て天を闚ふ　一七〇
管子　一五〇
管仲　一五〇
管城子　一五〇
(箕)箕裘　一五〇
箕踞　一五〇
箕帚　一五〇
箕子廟　一五〇
(箪)箪博士　一五〇
箪法統宗　一五〇
(箝)箝口　一五〇
箝制　一五〇
(箙)箙　一五〇
(箱)箱　一五〇
(箸)箸　一五〇
(箪)箪瓢　一五〇
箪笥　一五〇
(管)管窺　一五〇
管帯　一五〇
管玉　一五〇

福禍令禍之所伏　四六四
(禍)禍を招く　四六四
禍禍を嫁す　四六四
禍禍之所伏　四六四
禍禍津日神　四六四
禍禍池魚に及ぶ　四六四
禍令福之所倚福令禍之所伏　四六四
禍福は糾へる縄　四六四
(盡)盡瘁　四六四
盡日　四六四
盡信書則不如無書　四六四
(遠)遠聞　四六四
遠遠侍賀　四六四
遠遠白髪　四六四
遠遠慮無ければ近憂あり　四六四
遠栄　四六四
(遥)遥位　四六四
(遺)遺水　四六四
(原)原　四六四
原朴　四六四
(慘)慘酷　四六四
(慊)慊殿慙し　四六四
(慵)慵る　四六四
(慨)慨然　四六四
(慣)慣習　四六四
(夢)夢想　四六四
夢窓　四六四
夢想　四六四
夢幻泡影　四六四
夢得(劉)　四六四
(蒼)蒼天　四六四
蒼生　四六四

福福岡　四六四
福福田　四六四
福福原　四六四
(福)福祿壽　四六四
(箙)箙　四六四
(箇)箇條　四六四
箇中　四六四
箇日　四六四
箇人　四六四
箇所　四六四
箇條書　四六四
箇　四六四
(箕)箕踞　四六四
箕座　四六四
箕裘　四六四
箕帚　四六四
箕子廟　四六四
(箪)箪博士　四六四
箪法統宗　四六四
(箝)箝口　四六四
箝制　四六四
(箙)箙　四六四
(箱)箱　四六四
(箸)箸　四六四
(箪)箪瓢　四六四
箪笥　四六四
(管)管窺　四六四
管帯　四六四
管玉　四六四

(福)福惠全書　四六三
福翁雜話　四六三
福之所倚　四六四
福令禍之所伏　四六四
(禍)禍を招く　四六四
禍を嫁す　四六四
禍之所伏　四六四
禍津日神　四六四
禍池魚に及ぶ　四六四
禍令福之所倚　四六四
禍福は糾へる縄　四六四
所伏　四六四
(盡)盡瘁　四六四
盡日　四六四
盡信書則不如無書　四六四
(遠)遠聞　四六四
遠侍賀　四六四
遠白髪　四六四
遠慮無ければ近憂あり　四六四
遠栄　四六四
(遥)遥位　四六四
(遺)遺水　四六四
(原)原　四六四
原朴　四六四
(慘)慘酷　四六四
(慊)慊殿慙し　四六四
(慵)慵る　四六四
(慨)慨然　四六四
(慣)慣習　四六四
(夢)夢想　四六四
夢窓　四六四
夢想　四六四
夢幻泡影　四六四
夢得(劉)　四六四
(蒼)蒼天　四六四
蒼生　四六四

(種)種　四六三
種子島　四六三
種繼(藤原)　四六四
(裳)裳着　四六四
裳着　四六四
(裾)裾金物　四六五
裾廻の田居　四六五
(補)補襦　四六五
(褌)褌　四六五
(膚)膚力　四六五

(誣)誣言　四六五
誣告誹謗　四六五
(誤)誤る　四六五
(語)語部　四六五
(誥)誥誓　四六五
(誘)誘ふ　四六五
誘拔　四六五
(說)說教講錄　四六五
(僧)僧　四六五
僧正　四六五
僧都　四六五
僧位僧官　四六五
(僥)僥ふ　四六五
(僑)僑居　四六五
(鄙)鄙　四六五
鄙ぶ　四六五
(障)障碍　四六五
(際)際　四六五
(稀)稀〻　四六五

(薄)薄氷　四六五
(薙)薙ぐ　四六五
(薦)薦む　四六五
(薩)薩摩守　四六五
(薪)薪水　四六五
(薫)薫陶　四六五
(蕃)蕃息　四六五
(蓋)蓋し　四六五
(蒲)蒲柳の質　四六五
蒲冠者　四六五
蒲原　四六五
(蒙)蒙古襲來　四六五
蒙昧　四六五
(蒼)蒼頭　四六五
蒼黄　四六五
蒼皇　四六五
蒼生　四六五
蒼龍樓　四六五
蒼蠅を憎む賦　四六五
(蒙)蒙塵　四六五
(蓬)蓬頭　四六五
(蓮)蓮池　四六五
(蓄)蓄妾　四六五
(蓑)蓑笠　四六五
(蒸)蒸す　四六五
(蒐)蒐狩　四六五
(蒔)蒔繪の細太刀　四六五
(幕)幕の内　四六五
(墓)墓誌銘　四六五
墓の碣　四六五
(慕)慕ふ　四六五
(慢)慢心　四六五
(慣)慣れ　四六五
(慚)慚愧　四六五
(慟)慟哭　四六五
(慮)慮外　四六五
(慧)慧眼　四六五
(慰)慰藉　四六五
(慈)慈悲　四六五
(態)態度　四六五
(慇)慇懃　四六五
(愿)愿ふ　四六五
(愚)愚痴　四六五
(愉)愉快　四六五
(愁)愁訴　四六五
(愈)愈〻　四六五
(愍)愍然　四六五
(愕)愕然　四六五
(愁)愁眉　四六五
(愁)愁嘆　四六五
(愁)愁傷　四六五
(愁)愁雲　四六五
(愁)愁色　四六五
(愁)愁思　四六五
(愁)愁人　四六五
(愁)愁殺　四六五
(愁)愁ふ　四六五
(愁)愁ひ　四六五
(愁)愁

儀兵衛（山川屋）五五九
（儁）儁逸　二六六
（儕）儕石の儲　三三九
（徳）徳附く　三八一
徳川幕府　三八〇
徳川實記　三八〇
徳吉凶あり　三八一
徳者本也財者末也　三八二
徳義清愼公平恪勤の四善を採る　三八一
徳民（紀）　一三一
徳本（永田）　三九三
（衙）衙居　三五六
衙立　三五六
衙重　三五六
衙口發　二六八
（慫）慫慂　二六九
（徴）徴兵　三五三
（贖）贖然　一六〇
（鄰）鄰里　五八九
鄰々と　二六六
（鄭）鄭成功　三三九
（誰）誰何　三八一
誰彼　三八〇
誰哉行燈　三八〇
（談）談取る　三八一
談合る　三五六
談林風　三五六
（論）論　三八二
論ふ　三八二
論語よみの論語しらず　六〇四
（調）調子　三九三
調進　三五六
課度懸　三五六
調鶴集　三五六
調閑（長坂）　二六八
（請）請而　二六九
請文　三五三
（諒）諒察　一六〇
諒闇　五八九
（諄）諄々　二六六
（誹）誹　三〇七
（誡）誡訪湖　二八〇
（遅）遅々　三四五
遅日　三四四
遅疑　三三一
遅鈍　四一五
（適）適切　三六七
適千里者三月聚糧　三〇一
（遭）遭ふ　一四
（葬）葬　三九一
（葬）葬菜　二六六
（蔓）蔓衍　五一八
（蓼）蓼蟲辛を知らず　五九七
（蔭）蔭官　四一
（慰）慰て　二七八
慰撫　六一七
慰藉　六一五
（憐）憐　一三
（憎）憎蒼蠅賦　五七七
（憧）憧る　二一六
（憮）憮然　五
（憔）憔悴　四八九
（悉）悉擬　二九〇
（悶）悶む　二九九
悶然に　一三
（練）練緯　四五二
練鍔　四一三
練行　四一三
練習　五九八
練磨　五九八
練色　五九九
練塀　四一三
（編）編戸　四一三
編年體　一六
（緩）緩急　四九二
緩慢　一六八
（緞）緞子　一七〇
（縁）縁起　三八七
憐し　六一
（憫）憫笑　二一六
（憧）憧憬　五
（憮）憮然　四八九
（憔）憔悴　二九〇
（悉）悉擬　二九九
（悶）悶然に　一三
（練）練緯　四五二
練鍔　四一三
練行　五九八
練習　五九八
練磨　五九九
練色　四一三
練塀　四一三
（編）編戸　四一三
編年體　四九二
（緩）緩急　一六八
緩慢　一七〇
（緞）緞子　三八七
（縁）縁起　六一
（潤）潤ふ　五八九
（潤）潤色　二六七
潤次郎（細川）　三〇七
（潜）潜勢力　二八〇
潜確確類書　三四五
（潮）潮泡　四五二
潮水　三四四
潮垂　三三一
（潔）潔齋　三三一
（潺）潺湲　三九八
（潅）潅渕　二六九
（澆）澆季　三六九
（澣）澣陽江　三六九
（稲）稲津浦　四一三
稲廠竹葦　四一三
（稼）稼穡　五九八
（穀）穀堂　五九八
（褐）褐　五九九
褐色　五九九
褐を釋く　四一三
（褞）褞袍　四一三
（撓）撓る　四一三
（撓）撓ふ　四一三
（撫）撫子　四一三
（撥）撥亂　四一三
（播）播磨灘　四一三
（撈）撈和　四一三
（撲）撲つ　四一三
撲滅　四一三
（撫）撫恤　四一三
（撫）撫育　四一三
（撫）撫民　四一三
（撫）撫慰　四一三
（撫）撫子　四一三
（撫）撫機　四一三
（撫）撫要　四一三
（撫）撫機　四一三
（撫）撫密院

(窮)窮る　一三三
窮理　一三三
窮鬼　一一九
窮策　一三〇
窮措大　一三一
窮寇勿追　一一九
窮鳥懷に入る　一三一
窮鼠却嚙猫　一三一
(履)履端　五八六
履踐　五九二
履歷　五八三
履行有素　九六
履霜堅氷至　二五六
履軒(中井)　三九五
(樂)樂府　一〇七
樂天　五七九
樂訓　五七八
樂浪の　三一二
樂は苦の種　五七九
樂天(白)　四二五
樂翁公　五七
(劇)劇草　一一
劇場　一一九
(劈)劈く　一三〇
劈頭　一三一
(劉)劉寬　一一九
劉亮　五八三
劉備　五八三
劉基　五八三
劉青田　五八三
劉雨錫　五八三
劉元帥　五八三
劉坤一　五八三
劉宋周　五八三
(節)節　一〇七
節制　五七九
節忌　五七八
節度　三一二
節度使　五七九
節用集　四二五
(數)數　五七九
數奇　九〇
數寄　一七六
數獻　二一八
數具　四九〇
數馬(渡邊)　五八四
(輪)輪　五八四
輪奐　五八三
輪達の　五八三
輪田の御崎　五八三
輪王寺宮　五八二
(齒)齒德　五八三
齒朶　五九一
齒黑の　五九一
齒固め　五五九
齒輪軌道　二九五
(盤)盤栁　二九四
盤桓　二九五
盤旋　二九五
盤古の世　二九六
盤根錯節　二四七
(磐)磐水(大槻)　二七六
磐里(大槻)　二七七
磐溪(大槻)　二七八
磐根(安部井)　一六
(賣)賣僧　一六一
賣國　六〇五
賣己　六〇五
賣柑者言　六一一
(魯)魯魚の誤　五八九
魯般が雲の梯　二四四
魯陽の才　二四〇
魯陽が日を返す勢　二四三
魯仲連　四三五
(暴)暴戾　二七四
暴露　一五三
暴虎憑河　四三五
暴骨中野　四三六
(震)震怒　四三五
震懾　四三五
震撼す　四三五
震天撼地　二五四
(賢)賢し　九四
賢佐　一八一
賢所　九四
賢聖の障子　一八二
賢且　二五四
(墨)墨守　四九八
墨斗　五五七
墨翟の飛鳶　四九八
墨氏が飛燕　四九八
(賦)賦　四五八
賦性　四五八
賦稅　四五九
(賤)賤者　四六九
賤が嶽　一三〇
賤が績麻　二四二
(慶)慶安　二四二
慶恩(住吉)　一七三
慶永(松平)　二八〇
(影)影　五一五
影向　九三
影響　五七
(蝟)蝟盧　一七一
蝟牛　一八四
蝟角の爭　一六三
(蝸)蝸蝌　一六六
蝸蝌の書　一六〇
(凜)凜烈　五九九
凜々と　五九八
凜然と　四九八
(彈)彈藥　四九八
彈丸黑子の地　四五八
彈正臺　四六九
(敷)敷衍　一三〇
敷島の　二四二
敷島の道　二四二
(醉)醉翁亭　一七三
醉生夢死　二六〇
(醃)醃藏　五一五
(醇)醇醪　四三二
(碼)碼頭　六一
(磅)磅　一七一
(確)確乎不拔　一六四
確(長野)　一六三
(磊)磊々　一六六
磊落　一六〇
磊砢　五九九
(鴆)鴆　五八九
鴆毒　五八八
(缺)缺舌　三七三
缺舌　三三八
(駘)駘蕩　三三八
(驚)驚下　四六一
(駐)駐劄　三三六
駐紮　二三八
(駒)駒牽き渡る　二八四
駒込　二八三
(駟)駟も舌に及ばず　六一
(增)增鏡　二六八
增賀聖　四三二
(踏)踏襲　五三三
踏歌　三一五
(鋒)鋒鋩　四九六
鋒頭堡　一四六
(耦)耦耕　一四七
耦進　五六九
(鞍)鞍馬　一五七
(鞴)鞴　五一六
鞴蓋　五六九
(翩)翩々と　四九二
翩翻　四九二
(敵)敵愾心　三六七
敵國外患なき者は國恒に亡ぶ　三六七
(毅)毅魄　一三三
毅(井上)　六一六
(梵)梵寵　四三七
梵唄　四三五
(髮)髮髢　五一
髮亂　三六六
(賞)賞嘆　二五八

《十五》 幣斃撮篆篇篁範箱嘯嘶噦嚀噎嘲嶂瞶瞑瞠瞞蝸蝦閘閖閙閾黎黍黛黜齎齟齠齡齪齦齧齪齬齲齶齷齲齶齷齲齶齷

學(三好)五四
(獨)獨斷 三六二
(龜)龜鑑 弁 三三二
龜山 獨木 三二五
(豫)豫に 龜山殿 三二五
豫言 豫讓 五二〇
(錢)錢 八二六
錢塘 錢屋五兵衛 三二六
(疑)疑定 三三六
疑禦 三六二
(曉)曉暢 四六二
曉の明星 四六二
曉入梁王之苑雪滿軍 四六三
(頗)頗紅 山 四六九
(磚)磚茶 井浦 三三九
(鞍)鞍 三四九
(醒)醒 閑の寶 三三〇
(錨)錨鉄 三六二
(檀)檀 三三九
(錫)錫 三四二
(錮)錮 三四三
(劒)劒 太刀 三四四
(錠)錠 三四五
(錐)錐 刀 三四五
(餓)餓死 三四六
(餞)餞 三四六
(餔)餔る 獸 三四七
(鮒)鮒 馬 三四七
(鮭)鮭 三四八
(鵠)鵠 三四八
(霎)霎 三四九
(霍)霍光 三四九
(噸)噸 三五〇
(噲)噲 三五〇

(頬)頬杖 五四四
(鳴)鳴呼 五四四
(輸)輸林院 五四四
輸墓 五四四
(麿)麿墨 五四五
麿くに 他山の石を以 五四五
麿而不磷 涅而不緇 五四五
(頸)頸城 五四五
頸柵 五四五
(頚)頚川の水に耳を洗ひ 五四六
賢人賢し 五四六
(頻)頻々 五四六
頻伽鳥 五四六
(糒)糒 五四七
(駱)駱譯 五四七
駱賓王 五四七
(靡)靡 五四八

(賭)賭物 五四九
賭鳥 五四九
(鏘)鏘刀 五四九
鏘を以て地を指す 五四九
(鴨)鴨脚 五五〇
鴨里(岡田) 五五〇
(鴟)鴟尾 五五〇
鴟梟 五五〇
(諦)諦證 五五一
(鮑)鮑魚 五五一
鮑魚臭 五五一
(鰈)鰈る 五五一
鰈醢 五五一
(鰥)鰥扇 五五二
鰥書 五五二
(瓢)瓢箪 瓢や 瓢や我汝を愛す 五五二

(醫)醫華 五五三
(器)器物 五五三
器竿水 五五三
(圀)圀仰 五五四
圀仰詔詞解 五五四
(靡)靡朝 五五四
(鼈)鼈甲 五五四
(鼬)鼬 五五五
(蹊)蹊蹺 五五五
(蹄)蹄視 五五五
(蹌)蹌等 五五五
(融)融通念佛宗 五五六
(螟)螟蛉 五五六
(螢)螢雪の功 五五七
(燈)燈明寺 五五七
燈前漫筆 五五七
(燼)燼 五五七
(燃)燃え火に薪 五五八
(顙)顙る 五五八
(噦)噦若 五五八
(噎)噎 五五八

(膃)膃肭 五六〇
(膨)膨脹 五六〇
(膩)膩 五六〇
(膝)膝 五六〇
(膕)膕 五六〇
(膂)膂力 五六〇
(膀)膀胱 五六〇
(膃)膃肭 五六〇
(膈)膈 五六〇
(臆)臆 五六〇
(臂)臂 五六〇
(臀)臀 五六〇
(臍)臍 五六〇
(臈)臈 五六〇
(臆)臆 五六〇
(臆)臆 五六〇
(臆)臆

(篠)篠原 二四五
(簜)簜蟲 五三一
(積)積習 二九三
積極 二九二
積德叢談 二九三
(稽)稽古 一七三
稽首 一七三
(穆)穆王八疋の駒 四九九
(隨)隨身 二八二
隨分 六八
隨神 二一三
隨ふ 二四〇
(懊)懊休 二
懊咍 二
懊惱 二
懊氣 二
(憑)憑む 三四
憑弔 四五五
(憶)憶ふ 七四
憶良(山上) 五六一
(想)想ふ 二七
(儒)儒林 二五二
(僂)僂氣に 二五二
(儕)儕輩 二七七
(衡)衡行 六六六
衡門 八〇
衡宇 五三三
衡山 二一四
衡(林) 五一五
(諸)諸生 九九
諸鐙 六〇
諸矢 三〇〇
諸成 六〇
諸生 四五七
諸越 四五七
諸行無常 二九〇
諸衙の陣 二九一
諸子百家 二九〇
諸葛亮 二九一
諸平(加納) 二九〇
諸成(狛宿禰) 二九一
(諫)諫諍 二五二
諫議大夫 二五二
諫鼓鳥 二五二
(諷)諷諫 二七七
諷諭 六六六
諷刺 八〇
(諧)諧る 五三三
諧樂 二一四
諧冊二柱 五一五
(諧)諧謔 九九
(謁)謁す 三〇〇
(謗)謗謗 三〇〇
(謂)謂學不暇者雖暇亦不能學 六〇
(謀)謀を貽す 一七九
(諭)諭吉(福澤) 二九〇
(濡)濡標 二九一
(激)激湍 二九〇
(濁)濁惡の世 二九一
(濘)濘泊(安積) 四三七
(濃)濃茶 四三七
(褥)褥 四三五
(緒)緒紳 二五二
緒紳家 二五二
(絇)絇る 二七七
(緯)緯度 六六六
(縞)縞衣 八〇
(操)操 五三三
操觚者 二一四
操(松村) 五一五
(擔)擔ぐ 九九
擔保 三〇〇
(擅)擅長 三〇〇
(擇)擇捉島 六〇
(撿)撿非違使 一七九
(蕭)蕭殺 二九〇
蕭然 二九一
蕭森 二九〇
蕭條 二九一
蕭墻の內 二九〇
(蕃)蕃別 四三七
蕃雛 四三七
蕃薯 四三五

(燕)燕室 六三
燕子花 九〇
燕澤碑 三六一
燕趙悲歌之士 六三
燕雀安知鴻鵠之志乎 六三
(蓼)蓼 九〇
(蕞)蕞爾 二一三
(蕨)蕨粉 六一三
(蕩)蕩搖 六一九
(蕪)蕪村(谷口) 三三三
(蕾)蕾騰 四九六
(薨)薨樞 四一八
(甌)甌窶滿罇 六一
(遵)遺る 六五
遺獻 六一八
遺訓 六一五
遺烈 六一八
遺類 六一八
遺利 六一八
遺傳 六一六
遺恨 六一五
遺跡 五六六
遺腹 五六六
遺愛寺の草庵の寢覺 六一四
(遼)遼遠に 五九七
遼東の豕 五九七
(遢)遢羅 二三三
(遵)遵ふ 二四〇
(邂)邂逅に 六一〇
十七畫
(彌)彌縫 四七
彌生 四四〇
彌果 四四二
彌甚 四四三
彌山島 九五
彌太郎(岩崎) 九五
彌三郎(氣比) 三八六
(齎)齎戒 四三五
齎場 五六六
齎庭 五六六
齎部 四二
齎宮 二一一
齎楯 二一三
(磯)磯振 三〇
磯物 三〇
磯城の瑞雛の宮 二三六
磯城島の 二三六
磯城島の金剌の宮 二三六
(鞠)鞠育 二一四
鞠窮 二一四
鞠訊 二一四
鞠問 二一五
(醜)醜婆 三三四
醜態 六一三
醜女 二三八
醜の御楯 二三七
(翳)翳 五七
翳 二三二
翳蕾 四七
(貔)貔 四四〇
貔貅 四四二
貔虎 四四三
(霞)霞洞 九五
霞の衣 五五
霞州(土肥) 三八五
(糟)糟粕 二二六
糟湯酒 九五
糟糠の妻 二一四
(營)營 三六
營々 五七
營養 五八
(繁)繁衍 四三四
繁籐の弓 二三七
繁籐樹(夏山) 三九七
(壓)壓制 二二
壓倒 一二
(霜)霜の劒 二五六
霜を踏んで堅氷至と 二五六

(駿)駿馬の骨 二六七
(駿)駿蕘雜話 四六九
(厩)厩廐廁 四九五
(嫂)嫂蟻嫂 三六〇
(燦)燦然 三六〇
(韓)韓非子 三三四
(蹉)蹉跌之 三三三
(輿)輿地 三三二
(糙)糙華樹 三三〇
(鮫)鮫鮭 三三〇
(鍬)鍬鍛 三三〇
(穂)穂向取師 四五九
(織)織機 四五九
(檢)檢校 三六二
(檜)檜柏縦 三六〇
(樹)樹園文集 三五九
檀檀原の献火の宮 三五九
(檀)檀那林 三五九
(檀)檀原神宮 三五九
檀檀原の天皇 三五九
檜檜扇 四四〇
檜垣の船 四四一
檜紙 四四〇
(檜)檜垣の婦 四四一
(檜)檜垣船 四四一
(檜)檜 四四〇
(誄)誄文清 四六六
(憑)憑む 四七九
(謨)謨内 三三三
(簀)簀子 三三三
(盥)盥 三三三
(箪)箪笥 三三三
(笹)笹々 三三三
(篠)篠突く 三三三
(膽)膽欲大す 三三三
(膽)膽方断 三三三
(還)還幸 三三三
(還)還宅 三三三
(避)避暑 三三三
(遁)遁伯玉 三三三
(禪)禪僧 三三三
(禪)禪閤 三三三
(禪)禪宗 三三三
(禪)禪定 三三三
(禪)禪譲 三三三
(摺)摺く 三三三
(摺)摺衣 三三三
(濱)濱木綿 三三三
濱木綿(遠浦の) 三三三
濱木綿(遠浦の) 三三三
濱木綿(遠浦の)

總槻 三〇四
總綠 三〇四
總角 三〇三
(縷)縷述 五九三
縷々 五九三
(縲)縲縲 二六三
(縮)縮地の術 四九〇
(縹)縹渺 一八三
(黿)黿鼉 四〇九
(黽)黽く 三一八
(黛)黛を疑らす 一一九
(徽)徽音 三八八

十八畫

(豐)豐明 四九五
豐秋 四九五
豐島 四六五
豐樂院 四九四
豐下の姿 三八八
豐榮昇る 三八八
豐秋津洲 三一四
豐浦の宮 三四七
豐國大神 三四八
豐城入彦命 二四四
豐葦原瑞穗國 四〇九
豐穎(本居) 四四六
(顏)顏を干して諫む 一〇八
々 四四六
(鞦)鞦 二七四
鞦韆 三二四
鞦韆 四八五
(鵝)鵝毛 一〇八
(鵙)鵙 五四七
(翼)翼々 二三五
(翔)翔翔 八四
(翹)翹楚 一七六
(翻)翻覆 四三七
(戴)戴星而往 五〇〇
(蟲)蟲麿(高橋連) 三二四
(蠻)蠻尉 五九四
(鯆)鯆 二〇〇
(鮮)鮮鮓 一七七
(鎭)鎭遠 一四九
鎭火祭 一五一
鎭守府 五七五
鎭南浦 三四八
鎭とも寶とも 二四四
(額)額 四〇九
額髮 四四六
額に箭は立つとも云 四四六
々 二七四
(騏)騏驥も老いては驁 三三四
馬に劣る 三三六
(騎)騎虎之勢 五二
(鵜)鵜殿よの子 五二
鵜を學ぶ烏 一〇八
(鵙)鵙 五四七
(翼)翼々 五七二
(翔)翔翔 八四
(翹)翹楚 一七六
(翻)翻覆 四三七
(戴)戴星而往 五〇〇
(蟲)蟲麿(高橋連) 三二四
(蠻)蠻尉 五九四
(鯆)鯆 二〇〇
(鮮)鮮鮓 一七七
(曙)曙 六
(騏)騏驥も老いては驁 三三四
馬に劣る 三三六
(騎)騎虎之勢 五二
(鵜)鵜殿よの子 五二
鵜を學ぶ烏 一〇八
(鵙)鵙 五四七
(翼)翼々 五七二
(翔)翔翔 八四
(翹)翹楚 一七六
(翻)翻覆 四三七
(戴)戴星而往 五〇〇
(蟲)蟲麿(高橋連) 三二四
(蠻)蠻尉 五九四
(鯆)鯆 二〇〇
(鮮)鮮鮓 一七七
(曙)曙 六
(騏)騏驥も老いては驁 三三四
馬に劣る 三三六
(騎)騎虎之勢 五二
(鵜)鵜殿よの子 五二
鵜を學ぶ烏 一〇八
(鵙)鵙 五四七
(翼)翼々 五七二
(翔)翔翔 八四
(翹)翹楚 一七六
(翻)翻覆 四三七
(戴)戴星而往 五〇〇
(蟲)蟲麿(高橋連) 三二四
(蠻)蠻尉 五九四
(鯆)鯆 二〇〇
(鮮)鮮鮓 一七七

豐秋津洲 一四九
豐浦の宮 一五一
豐國大神 五七五
豐城入彦命 三四八
豐葦原瑞穗國 三四八
豐穎(本居) 六
(顏)顏を干して諫む 一〇八
々 四四六
(鞦)鞦 二七四
鞦韆 三二四
鞦韆 四八五
(鵝)鵝毛 一〇八
(鵙)鵙 五四七
(翼)翼々 五七二
(翔)翔翔 八四
(翹)翹楚 一七六
(翻)翻覆 四三七
(戴)戴星而往 五〇〇
(蟲)蟲麿(高橋連) 三二四
(蠻)蠻尉 五九四
(鯆)鯆 二〇〇
(鮮)鮮鮓 一七七
(曙)曙 六
(騏)騏驥も老いては驁 三三四
馬に劣る 三三六
(騎)騎虎之勢 五二
(鵜)鵜殿よの子 五二
鵜を學ぶ烏 一〇八
(鵙)鵙 五四七
(翼)翼々 五七二
(翔)翔翔 八四
(翹)翹楚 一七六
(翻)翻覆 四三七
(戴)戴星而往 五〇〇
(蟲)蟲麿(高橋連) 三二四
(蠻)蠻尉 五九四
(鯆)鯆 二〇〇
(鮮)鮮鮓 一七七
(曙)曙 六
(騏)騏驥も老いては驁 三三四
馬に劣る 三三六
(騎)騎虎之勢 五二
(鵜)鵜殿よの子 五二
鵜を學ぶ烏 一〇八
(鵙)鵙 五四七
(翼)翼々 五七二
(翔)翔翔 八四
(翹)翹楚 一七六
(翻)翻覆 四三七
(戴)戴星而往 五〇〇
(蟲)蟲麿(高橋連) 三二四
(蠻)蠻尉 五九四
(鯆)鯆 二〇〇
(鮮)鮮鮓 一七七

(闡)闡噎 三七三
(贅)贅疣 二八五
(贊)贊川 四〇六
(贇)贇步 一三四
(贍)贍望 三〇一
(贐)贐 二八九
(鬣)鬣 四六三
(鬣)鬣直垂 五九
鬣の總角 五七五
(鬣)鬣鎗 三
(鎬)鎬 二四五
(鎌)鎌倉 一〇八
鎌倉の大將 一〇八
鎌田兵衛 一〇八
(鬩)鬩晛 一七七
鬩官 一七八
鬩所 一七八
(斷)斷腸 三三九
斷末魔 三三九
斷金の交 三三八
(蟬)蟬本(旗の蟬本) 四二七
(舊)舊典 二三一
舊識 二一〇
舊故 二一〇
舊習 三一〇
舊勳 一二九
舊里 四八六
舊貫 二一〇
舊苔の鬣 二一〇
(薰)薰 一五七
薰染 一五五
薰陶 一五五
薰爐 一五五
薰猶同器 四四九
(藍)藍田山 一五八
藍より出で、藍水(田村) 二三三
(薩)薩埵山 二三三
(藏)藏す 九一
藏人 一五七
藏人所 一五七
(藐)藐姑射山 四二五
(蟬)蟬噪 五九五
蟬丸 五九五
(駢)駢馳 五九五
駢闐 五九五
(轉)轉 五九六
轉輪藏 四四
(獵)獵夫 一三四
獵男 一三四
獵狗煮らる 一三三
(闖)闖入 四六
(礑)礑と 二一二
(歟)歟に斯くに 二一三
歟 二一四
(鄕)鄕に 四九七
(甕)甕鷄 三三八
甕腸繩樞 四五三
(殯)殯 四五五
(嚮)嚮暁 二三七
(雕)雕 七七
(禮)禮 五九五
禮遇 五九五
禮曹 五九五
禮儀國 五九五
禮儀類典 五九五
禮部員外郎 五九六
(繡)繡 四四
繡腸 一三四
繡帳 一三四
繡錯書 一三三
(繧)繧繝緣の疊 四六
(簡)簡札 二一二
簡馬 二一三
簡兵 二一四
(簀)簀筵 四九七
(簟)簟食壺漿 三三八
(檳)檳榔樹 四五三
檳榔毛の車 四五五
(檜)檜 二三七
(櫂)櫂鎬 七七
(朦)朦々 五四五

朦朧 五四五
(濺)濺ぐ 三〇七
(瀏)瀏覽 五八三
瀏亮 五八三
(儲)儲君 三五四
儲君 五〇九
儲貳 三五四
儲蓄 三五四
(邇)邇焉 四二三
(遂)遂深 二八二
(遞)遞 一四二
(邇)邇麻の銀山 四〇七
(謫)謫劣 三〇二
(謫)謫居 三三五
(謬)謬 一九
謬擧 四四〇
(攅)攅竦 三三八
(擧)擧 二〇〇
擧ぐ 五
(颺)颺ぐ 五
(彝)彝倫 四三

(職)職田 二三六
職事 二三六
職山 二七〇
職原抄 二七〇
(魏)魏禧 二三三
魏闕 二三五
(雞)雞口となるとも 一七三
一七五
雞肋 一七五
雞林八道 一七五

十九畫

(羅)羅 二三六
羅衣 二三六
羅綺 二七〇
羅穀 二七〇
羅列 二三三
羅星 二三五
羅漢 一七九
羅馬 一七九
羅馬字 一七九
羅馬府 二三六
羅盤儀 二三六
羅從彦(羅山(林)) 二七〇
(覇)覇王 二三五
覇業 二三五
覇道 一七三
覇圖 一七五
覇府の地 一七五
(藤)藤枝 一七五
藤波 一七五
藤澤 一七五
藤袴 四八
藤壺 五七六
藤井原 五七八
藤原朝 五七九
藤原の宮 五八一
藤川紀行 五七九
藤孝(細川) 五七八
藤樹(中江) 六〇〇
(藩)藩屏 六〇〇
藩翰譜 四三四
(藝)藝林 一七五
(藪)藪 六七
(藜)藜藿 五九五
(藥)藥子(藤原) 四七二
(關)關ふ 四四
關白 一七〇
關東 一六九
關山 二九四
關山和尚 一六八
關の秋風 二九三
(寶)寶祚 一六
寶祚 四一〇
寶寺 四一九
寶相花 一二七
寶釧玉叙 四二〇
(寵)寵臣 一四四
(難)難波 三九七
難波の事 三九八
難波津の歌 三九八
難波の葦に伊勢の濱 三九八

(禊)禊 九八
難四之可他延梨の片枝 三九六
(邊)邊 八九
邊 八九
邊幅を修めず 八九
(盧)盧舍 八九
盧山 八九
盧山の瀧 一〇七
(繹)繹繹 五九三
繹騷 五九三
(繩)繩床 五二七
繩目 八三
(繪)繪畫 三二五
繪島 三二五
繪鞆岬 三二五
(繿)繿泉 二九〇
繿車 九一
(櫛)櫛風沐雨 二九
櫛形の穴 三五四
(櫓)櫓 三五四
(櫟)櫟 一六二

(韻)韻文 一六二
韻會 一六二
(韜)韜晦 四八九
韜略 二一
(鄕)鄕導 四九二
鄕導 六〇三
(霪)霪霖 六〇三
霪雨 一二七
(霧)霧島山 四〇九
(麗)麗麗 四〇六
麗澤 四八〇
(麒)麒麟兒 五六四
(羸)羸弱 五四八
羸憊 三五三
(鵆)鵆越 六一
(鶉)鶉鳥の床 六一八
(鶚)鶚 二一
鵬程万里 一七五
(嚱)嚱兒 八〇
(蟻)蟻垤 五八〇

《十九》 鏡鏑鍍鍼鏖鏗瀧瀦潜瀬瀕曠邊竈繹繩繿櫛櫟櫪櫺櫻櫺櫺 一〇九
戮戯懐懶懲懿懿曠曠朧朧朧

(蠔)蠔蜊 三三
(蟹)蟹眼針 三八七
(鮭)鮭 四〇四
(鯢)鯢波 一七四
(鰡)鰡の頭 三七九
(鯨)鯨鯢 四〇二
鯨波 一七三
(鼈)鼈斷の徒 三七九
(隴)隴を得て蜀を望む 六〇〇
(壟)壟土 六〇三
(獺)獺祭魚 三三二
(斷)斷斷 一三五
(顛)顛仆 三七二
(願)願車馬衣輕裘云々 四一二
(贈)贈 六五
(贇)贇鼻褌 三三五
(飄)風風 七九
糗餅の法螺の形

(靡)靡然 五五五
(孳)孳子 四五八
(爵)爵 四七〇
(觴)觴 四七〇
(疆)疆場 四七〇
(離)離離 二九八
離群衆居 二六一
(嚥)嚥下 二六一

二十畫

(蘇)蘇枋 四二六
蘇西運河 四二六
蘇迷廬山 四二六
蘇音機 四二六
蘇軾 四二六
蘇秦 四二六
蘇洵 四二六
蘇徹 四二六
蘇老泉 四二六
蘇源明 四二六
蘇顯濱 三〇四
蘇我宿禰 三〇五
(藻)藻屑 五四六
藻鹽草 五四七
藻鹽垂 五四七
(蘆)蘆崔 六〇
蘆庵(小澤) 六一三
(蘭)蘭笠 六一四
蘭相如 五八八
(蘊)蘊蓄 四
(嚴)嚴 二五
嚴瓮 三五
嚴政 三五
嚴有院 一七九
嚴夫(加部) 一〇七
嚴夫(宮地) 五二四
(警)警 一七二
警備 一七五
警衛 八三
警策 二一七
警軒(阪田) 三〇四
(譯)譯官 五五五
譯文童諭 四五八
(譜)譜 四七〇
譜第 四七〇
譜代 四七〇
(議)議奏 一三八
(譖)譖語 二九八
(釋)釋然 二六一
釋奠 二六一
釋菜 二九三
釋褐 一〇〇
釋迦 一六〇
釋迦の御形 二一七
(櫨)櫨 四二六
櫨樹 四二六
櫨弓 四二六
櫨の匂の鎧 四二六
(懸)懸 八九
懸念 一七九
懸河の辯 一八
懸けず氣壓さる 九三

(懺)悔懺 二二六
懺法 二二九
(繼)繼上下 三五七
繼子立 五一八
繼信(佐藤) 二三三
(纂)纂記 二三五
(勸)勸賞 一八二
勸修寺内大臣 一六九
勸修寺左衛門 一六九
(襤)襤褸 八九
襤褸 五八二
襤褸の袖 三六〇
襤褸させてふ蟲 三六〇
(轗)轗軻 一〇九
轗軻不遇 二一〇
(激)激灑 五九八
激灑 五九五
(渝)渝 五五五
渝味 五五五
(餌)餌 五三七
餌鼠 五三七

(磬)磬咳 二二六
磬(齋藤) 二二九
(騷)騷く 三五七
騷客 五一八
(騶)騶從 二三三
(醴)醴酪 二三五
醴酒 一八二
(獻)獻替 一六九
獻立 一六九
(鑐)鑐 八九
(鐘)鐘乳石 五八二
(饅)饅頭 三六〇
(贏)贏 三六〇
(黨)黨 一〇九
(璧)璧 二一〇
(曦)曦 五九八
(飄)飄逸 五九八
(艫)艫艫 五五五
(籍)籍甚 五五五
(籌)籌策を帷幄の中に 五三七

(犧)犧牲 二一三
(齬)齟齬 二二六
(臚)臚列 二二四
(朧)朧 二二四
朧明 二七六
朧氣に 五九六
(攘)攘夷論 五九六
(辮)辮髪 一八三
(覺)覺悟 二〇七
(歐)歐冶 四四五
(礫)礫川 二六九
(韃)韃靼 五一九
(霙)霙霙鑁 五七
(霞)霞降 三八

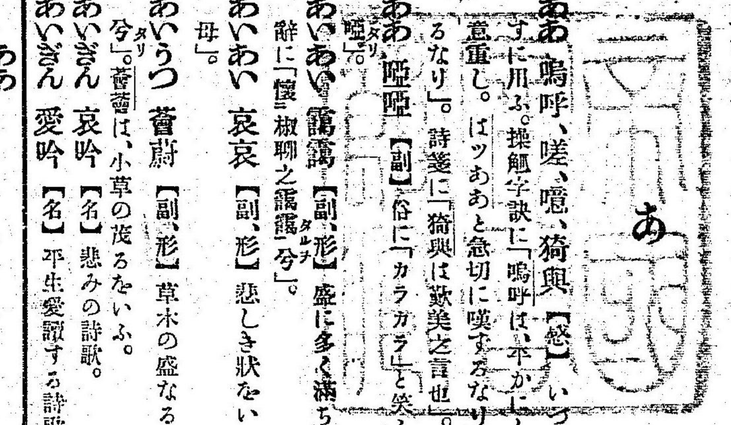
廿一畫

(鐵)鐵鍼 四八九
鐵筆 五四五
鐵疊 二九三
鐵騎 二九三
鐵漿 二九三

鐵面皮 二一
鐵面皮 三六八
鐵心石腸 三六八
鐵中錚々 三六八
鐵棚木室 三六八
(鑢)鑢 二四五
(鐸)鐸石別命 四〇九
(蘭)蘭 四七一
蘭塔 五八〇
蘭若 五八一
蘭學 五八〇
蘭麝の香 五八〇
蘭省花時錦帳下 三九五
蘭林(中村) 三〇七
蘭く 一七〇
(灌)灌芥 一七〇
灌頂 一六九
灌頂の瀧 一六九
灌佛會 一七〇
(灊)灊水(宇佐美) 四七
(露)露る 二〇

《廿一》 饒饒饑餓饉饐饒饑饉饐饒饑饉饐饒饑

歳裳子 三八
最疑重く 三六
(體)體認す 三六二
(髑)髑髏 五八八
(麟)麟噴(山田)麟祥(箕作) 五二五
自廿四至廿九畫
(羈)羈 四九〇
(囑)囑む 三三四
(離)離魂 五
(離)離然 二〇七
(靈)靈驗 五九五
靈山 五八九
靈時 五九五
(靄)靄靄 一
(邏)邏豆 四九二
(蠶)蠶食 三六
(鬢)鬢頬 四五三
(讓)譲葉 五六六
(顰)顰蹙 四五二
(顯)顯 三八
(鷁)鷁 三六
(鹽)鹽出 三六三
鹽梅 五八八
鹽解 五二五
鹽竈 一六九
鹽津 五三七
鹽土老翁 一六七
(鶯)鶯中 五〇
(鸚)鸚 五〇
(鶯)鶯歩 五〇
(鷹)鷹鷂 二九
鷹野 五〇
鷹場 五〇
(鹽)鹽 五九五
(鷆)鷆 二三九
(離)離 一六八
離落 一六八
離島 一三
(雙)雙鐘 一三七
(視)視念 一四五
視光 三一九
視勒 五九五
視音 一六九
視音崎 一六九
視音寺 一六九
視音經 一六九
視世音 一六九
視月橋 一六八
視者如堵 一六九
視無量壽經 一六九
視富貴之家祿位重疊猶再實之木其根必傷 四五九
視瀾(三宅) 五三
《雨》
(鱚)鱚 四二
(贔)贔 六一〇
(贔)曬齋 六〇三
(贔)贔 一九
驥足 一二八
驥尾 一三
驥を學ぶは 一四五
(讜)讜言 三一九
(欞)欞 五九五
(欞)欞然 一六九
(鸚)鸚鵡 五三七
(鸚)鸚鵡 一六七
(鬱)鬱陶 五〇
鬱與 五〇
鬱悒 五〇
鬱采 二九
鬱金香 五〇
(驪)驪宮 五八五
(鬱)鬱嫣 二三九



ああ 嗚呼、嗟、噫、猗與【感】いづれもなげきをあらはすに用ふ。操觚字訣に「嗚呼は平かにして長し。噫は、その意重し。はツあと急切に嘆ずるなり。嗟は、吝嗟咏歎するなり」。詩箋に「猗與は歎美之言也」。

ああ 唖唖【副】俗に「カラカラ」と笑ふ。易震卦に「笑言唖唖(タリ)」。

あいあい 靄靄【副、形】盛に多く滿ちわたる貌をいふ。楚辭に「懐椒聊之靄靄兮(タルヲ)」。

あいあい 哀哀【副、形】悲しき狀をいふ。詩經に「哀哀父母(タル)」。

あいうつ 萋萋【副、形】草木の盛なる貌。詩經に「萋兮(タリ)」。萋萋は、小草の茂るをいふ。

あいぎん 哀吟【名】悲みの詩歌。

あいぎん 愛吟【名】平生愛誦する詩歌。

あいさつ 挨拶【名】返辭。應答。應對。又單に、人に式代するにもいふ。また、返禮するにいふことあり。サ行變格に連用して、動詞ともする。葛長庚の文に「登二封泰山一、其時士庶相挨拶(スル)」。

あいじつ 愛日【名】冬の日をいふ。左傳に「趙衰冬日之日也、趙盾夏日之日也」。注に「冬日可レ愛、夏日可レ畏」とあるによる。

あいぜん 愛染【名】佛教にて明王の一、三面六臂の不動明王を云ふ。

あいたい 靉靆【副、形、名】雲のたなびく狀をいふ。彩雲靉靆すなどは、サ行變格の動詞とせるなり。又眼鏡をいふこともあり。その當は名詞。

あいなのさかえ 敢無榮【句】もとは敢無の榮(アエナサカヘ)の轉なるべし。はかなき榮、寸時の榮華などいふ意、あいなは、形容詞あいなしの語根なり。

あいろ 文色【名】文色(アヤイロ)の約、すぢ、わけ、差別などいふ義にて、同じ。

あうあう 央央【名、形、副】廣き貌。文選に「觀曲臺之央央」。「央央大厦（タル）」。又鮮明なる貌、又整の和さたる貌。この時は、音ヤウ。詩經に「新廟奕奕（タリ）」。同「和鈴央央（タリ）」。

あうあう 鞅鞅、怏怏【副、形】情の滿足せざるをいふ。「鞅鞅（トシテ）不レ樂」の如し。

あうき 懊氣【名】暖氣、又、甚熱の氣。前漢書の王褒傳に「不レ若二盛暑之懊一」。

あうぎ 奥義【名】奥深き義にて、すべて、藝術などの、秘奥をいふ。「奥義を極む」などいふ。オクギともいふ。

あうきう 懊休、懊咻、【名】温め安んずる義より、人の困窮を賑恤することをいふ。左傳に「民人痛疾、或懊二休之一」。

あうしやう 鞅掌【名】鞅は荷なり、掌は捧ぐるなり。忙しく事に從ふをいふ。詩經に「王事鞅掌（ニスアリ）」。

あうしゆくばい 鶯宿梅【名】梅の一種なり。鶯宿梅の故事、紀貫之の女、父の歿後、その愛樹たる梅を朝廷に獻せらるるに際し、「勅なれば、いともかしこし。鶯の、宿はと問はば、いかが答へむ」と詠みければ、村上天皇大に感ぜさせ給ひき。

あうなう 懊惱【名】なやみくるしむこと。

あえかに 纖弱【名】やさしきこと。よわきこと。あえかなるは形容句。

あか 閼伽【名】梵語、佛に供する水をいふ。もとは、佛に供する、水、香水を盛る器。閼伽棚は佛壇といふに同じ。

あかう 阿衡【名】宰相の一名なり。書經「不レ惠于阿衡」。と。殷の伊尹に始まる。阿衡佐は、良臣の補佐をいふ。史記に「魏雖レ得二阿衡之佐一、曷益乎」と。阿衡右は、宰相となるべき器あるをいふ。阿衡之事、宇多帝の、基經に下し給ひし詔勅の中に、「以二阿衡之任一」云々」とありしを、或人、阿衡は、官の名にして職の名にあらずといひしより、基經、大に怨みて病と稱し、宇多帝の御心を煩し奉りし事をいふ。

あかがし 赤樫、血儲【名】しらがしをみよ。

あかきこころ 赤き心【句】眞心といふに同じ。忠實なる精神をいふ。

あがく 足掻、踠【動力四】足にて掻く。動き活く。萬葉集「むこ川の、水を早みか、赤駒の、あがくそそきに、濡れにけるかも」。駒のあがきは名詞句。

あかごまのあがき 赤駒の踠【句】あがくをみよ。

あかさか 赤坂【名】地名。楠正成の赤坂城の址は、今河内國石川郡赤坂村にあり。

あかざは 赤澤【名】地名。伊豆國賀茂郡赤澤村。山あり、赤澤山といふ。

あかし 紅、赤、丹、緋【形】紅は桃色。赤は鮮明にあかきなり。丹は丹砂の色にて、大赤なり。緋は深紅色。

あかしがいけふ 明石海峽【名】淡路國の北端と、その對岸播磨國明石との間の瀬戸をいふ。

あかたもり 縣守【名】人名。仁德帝の頃の人。勇敢にして膂力あり。吉備の川嶋川といふに、大なる虬棲みけるを、一劍の下に殺しきと、日本書紀に見えたり。虬は、音「キウ」、訓「ミヅチ」、蛟龍といふに同じく、蛇の屬なり。

あかつきに、りやうわうのえんにいれば、ゆきは、ぐんざんにみてり、曉入二梁王之苑一、雪滿二軍山一。夜登二庾公之樓一月明二千里一。【文】謝靚が雪賦の句にて、文選にいづ。梁王は、梁の孝王にて、漢の武帝の子。雪の朝毎に、鄒生、枚叟などいふ才人を率ゐて、雪を翫び、苑内には、終布山、五台山などの名山に擬して、築山を造られしよしなり。庾公之樓は、庾亮が故事。「なんろうのつき」を見よ。

あかでみい Academy【名】希臘の哲學者「プラトー」が、「アゼンス」に近き「アカデムス」（Academus）の公園にて講莚を開き、學術を說きしより、西洋各國にて、高等なる學校をいふ稱。

あかね 茜【名】赤根の義にて、山野に自生の草の名、七八月の頃、花を開き、山椒に似たる實を結ぶ。根は染料、又は藥用とす。あかれさす、（茜刺、赤根刺）は、色の赤ばみたるをいひ、日の枕詞とす。「茜刺日の御旗」。

あかはら 赤原【名】奥羽地方の方言。碁盤太平記に「あかはらは、たれまさめ（偽は申しません）と。

あかひげ 赤髯【名】德川時代の末に、外國人を賤稱せし語。又「朝鮮ごま」の一名。

あかぷるこ Akapulco【名】墨西哥西海岸にある良港の名。

あかほ 赤穗【名】播磨國赤穗郡赤穗町。天正年中、備前の浮田直家此に城き、慶長五年、池田輝政、姫路の城主となりて、この地を領し、遂で、淺野長矩、此に居りしが、元祿十四年、吉良義央と刃傷して沒收せられ、一度永井氏の領となりしが、寛永三年後は、森氏累代の城主たり。赤穗鹽を產出するを以て名高し。

あかぼし 赤星【名】一に金星、又、明星（ミヤウジヤウ）、又、太白。「たいはく」を見よ。あかぼしのは「あくる」の枕詞。「明星（アクボシ）のあくると告げぬ」。

あかまつさうし 赤松滄洲【名】名は鴻、靜思翁と號す。赤穗侯森氏の儒員にて、遂に家老に至る。享和元年八十一歲にて歿す。

あかまつみつのり 赤松光範【名】則村の孫、範資の子、正平中、足利義詮に從ひて吉野を犯し、歸りて後、佐々木高

氏に陷れらる。

あかみづ 閼伽水 【名】「あか」に同じ。

あがむ 崇 【動マ下二】尊ぶ、敬ふに同じ。あがめかしづくは、敬ひ大切にすること。

あからさまとて、いぬ 倏忽として往ぬ 【句】烏渡ぎいひて出づ。暫時として他出す。

あからさまながら 倏忽ながら 【副】假初ながら、ちよつとではあるが。俄ながら。

あからさまに 明白に、倏忽に 【副】明に。俄に。忽に。ちよつと。

あからめ 側見、他見 【名】目的のものを見ずして、他に目を外すこと。わきめ。よそみ。

あがりざしき 揚坐敷 【名】あがりやの上等なる間。武家時代に、罪人を監禁したる所、身分のある者に限る。

あかりしやうじ 明障子 【名】今の障子なり。古は、今の襖、唐紙を障子といひ、今の紙障子を「あかりさうじ」といへり。

あがるひばりになりてしが、上る雲雀に爲りてしが 【句】萬葉集二十の卷に、筑紫に赴きたる敕使、安部沙美麻呂の歌に「朝な朝な、上るひばりに、爲りてしが、都に行きて、ばや歸り來む」とあり。てしがは希望の助辭にて、「なりたいものである」の義。暫時なりとも、都に行きたしの意なり。

あきこそことに 秋こそ殊に 【句】古今集に壬生忠岑の歌に「山里は、秋こそ殊に、わびしけれ。鹿の鳴く音に、眼をさましつつ」。

あきじこる 商 【動ラ四】商買仕損するをいふ。商に懲るる義。又、單に、商する義にも用ふ。「あきじこる市の巷」など。又、名詞に用ひたるもあり。萬葉集「四の市に、唯一人出でて、めならばず、歸りし衣の、あきじこりかも」。

あきじひ 明盲 【名】よそ目には見ゆるが如くして、見えぬ目。あきめくら

あきたぶき 秋田歎冬 【名】羽後の秋田郡邊に產するふきの名。莖の高七尺、葉の大さ傘ほどあり。

あきぢよ 秋女 【名】しうしきざくらを見よ。

あきづきのらん 秋月の亂 【名】明治九年十月廿七日、福岡縣士族宮崎庫之助、今井百太郎、益田政方等、舊秋月藩士四百餘人を率ゐ、熊本の城に應ず。幾もなく、宮崎自刃し、今井等捕へられ、叛黨平ぐ。

あきつしま 秋津洲、蜻蛉洲 【名】日本國の古名。神武天皇、大和にて國見し給ひて「あきつのとなめせるごとし」との給ひしに起れること、日本書紀にあり。

あきのたのみ 秋田實 【名】稻をいふ。田の實は稻にて、秋は、時を以て添へたる詞。古今集「のちまきに、遲れて生ふる苗なれど、あだにはならぬ、たのみとぞきく」。

あきのみや 秋の宮 【名】皇后宮を申す。漢書百官表に皇后宮を長秋宮といふより見えたるに始まれり。倭成家集「雲の上、遙に照す、月影を、秋の宮にて、見るぞうれしき」。倭成が皇后大夫となりし時なり。

あきのみや 昭宮 【名】歟仁親王を申す。今上天皇第四の皇子にましまして、明治二十年八月御誕生、翌年十一月薨去せらる。

あきのよながものがたり 秋夜長物語 【名】書名。後堀河院の時の僧、西山の證西上人の事をかけり。一卷。著者未詳。

あきやま ふみん 秋山富南 【名】名は章、伊豆韮山の儒者。文化五年歿す。年八十五。豆州志稿十三卷の著者。

あく 飽、饜、飫 【動カ四】飽は物を腹一ぱいに食ふこと、過食する義にあらず。論語に「食無求飽」と。饜は、大食する義なり。飫は馳走過ぎて、あき滿ちたる義。

あく 幄 【名】周圍を、幕にて張りまはしたる假屋。幄の座、幄下の座などいふことあり。

あぐ、擧、揚、稱、昂、颺 【動カ四】擧は下に在る者をあぐるなり。「擧動」「推擧人」。揚は飛びあがるなり。「發揚」「揚言」。稱は言語にて褒めあぐるなり。昂は仰ぐ意、「意氣昂然」。颺は揚に同じく、風に乘じてあがるなり。

あくかん 惡漢 【名】俗に「わるもの」。漢は男といふ意、老漢、痴漢、無賴漢など用ふ。

あくがる 憧 【動ラ下二】「あこがる」ともいふ。心の身に添はぬ意。心の浮かるゝこと。

あくげんだ 惡源太 【名】源義平のこと。叔父帶刀先生義賢を殺しゝにより、かくいふ。

あくさく 齷齪 【名】偓促に同じ。又、握齪ともかく。史記に「委瑣握齪」。あくそくを見よ。

あくじ、せんりにつたはる惡事傳二千里一 【文】事文類聚に「好事不レ出レ門、惡事傳二千里一」とありて、よき事は、人これを忘みて傳へず。惡事は、倏忽に傳播するをいふ。俗に「惡事千里」。

あくそく 偓促 【名】つまらぬことにかゝづらふ狀をいふ。こせこせすること。

あくのざ 幄座 【名】「あく」を見よ。

あくひつ 惡筆 【名】組造なる筆。輭にて、筆跡の拙きに用ふ。「手癖がわるい」「てすぢがわるい」で

あぐら 胡床 【名】倚子。腰掛。床几。輭にて、足をくみて座することにもいふ。簀居。

あぐらゐ 安坐居 【名】あぐらに同じ。

あくれい 惡癘 【名】惡しき氣を受けたる病。惡疫。疫

癌。

あくわい 亞槐【名】大納言の一名。三公を三槐といふより、大納言は、三公に亞ぐ官なるを以てかくいふ。

あげつらふ 論【動ハ四】論ず。理をあげて言を述ぶ。

あけのみやうじやう 曉明星【名】金星の異名。たいはくを見よ。

あげばり 揚張【名】和名抄（帳、和名阿計波利、大帳也）と。今の「テント」の類にて、假屋の四方と上とを圍ふ大なる幕なり。

あけぼの 曙【名】微茫の義。曉より朝までの間にて、空未だ少し暗き頃の稱、枕の草子「春は曙。山ぎは少しあかりて云々」と。

あげまき 總角、揚卷【名】少兒の髮の結ひ樣の名。髮を左右にわけて、雙角の如く結べるもの。詩經に「總角之宴、言笑晏々」と。また、紐の結び方の名。左右に輪を出し、中を石疊に結べるもの。鎧の總角は、紅色の組緒にて結び、背の逆板に附けたり。「さかいた」を見よ。

あけむつ 明六【名】維新前の時の數へ方。朝の六時をいふ。これに對して、夕の六時を「くれむつ」といふ。

あげを 緌、上緒【名】冠の緒をいふ。

あこ 吾兒、吾子【名】又「あこ」。吾が子をいひ、又、他人の子にても、親みよぶ時にいふ。

あこう 榕樹【名】アコノキともいふ。枝より根を下し、土中に入る。恰も、群林の連續せるもの、如き狀をなす。熱帶産の植物。

あこめ 袿【名】「あこめぎぬ」の略。中古の衣服の一種にて、婦人童女の、身に近く着る服。又、男子の裝束の下にも着る服。

あさあけ 淺緋【名】淺き赤色。順集「深みどり松にもあらわあさあけの衣さへにそしづめそめけむ」。

あさがけ 朝駈【名】朝早く敵陣に馳向ふこと。盛衰記に「一の谷、朝がけのこと」。

あさかごんさい 安積艮齋【名】名は重信、單に、信を以て行ふ。字は子明、通稱祐助、見山樓とも號す。奥州二本松の儒者。萬延元年十一月歿す。年七十一。

あさかたんぱく 安積澹泊【名】名は覺、字は子先、水戸の碩儒にて、朱舜水に學び、大日本史編纂上大功績あり。元文二年八十二歳にて歿す。明治三十六年一月、正五位を贈らる。

あさがほ 朝顔、牽牛花【名】蔓草の名。花期漏斗狀の花を開く。日光にあへば、直に凋む故に、はかなきことにたとへいふ。桔梗、木槿をも、古は、あさがほとよめり。源氏物語の巻の名。謡曲の篇の名にもあり。

あさかやまのことのは 淺香山の言の葉【句】昔、小兒の手習の始に習ひし歌にて、「あさか山、かげさへみゆる、山の井の、淺くは人を、わが思はなくに」。こは、葛城王の陸奥に遣はされし時、采女のよみたるなり。下の句、萬葉集には、「淺き心をわがもたなくに」とあり。

あさがれひのま 朝餉間【名】清涼殿内にあり。主上の朝餉をめさせ給ふ所。

あざけりあざむ 嘲惘【動マ四】そしり笑ふこと。ひやかしあなどること。

あざける 嘲、呀、嗤、俚【動ラ四】誇り笑ふこと。なぶること。

あざだかうりふ 麻田剛立【名】天文家。名は安彰、綾部藩の士、初、朽木侯の侍醫となり、後、大坂にありて醫を業とし、天文を研究し、深く造詣する處あり。寛政九年、幕府之を招かんとせしが、齢たけたるを以て辭し、高弟高橋作左衛門、間五郎兵衛を遣す。同十一年、六十六にて歿せり。

あさぢがはら 淺茅原【名】茅萱（ドガヤ）の淺く廣々と生えたる所をいふ。平家物語「古き都を、さて見れば、淺茅が原とぞ、あれにける」。

あさぢふ 淺茅生【名】淺茅の生え廣がれるところ。後撰集「淺茅生の、小野の篠原、しのぶれど、あまりてなどか、人の戀しき」。

あさのながのり 淺野長矩【名】播州赤穗の城主。元祿十四年三月十一日、敕使饗大納言藤原資廉等東下の節、吉良義央と共に、周旋方となりしが、義央貪慾にして、賄賂を得んとし、禮式上の事にて、長矩を辱めしかば、遂に、義央を殿中に傷け、領地を沒收せらる。

あさのながまさ 淺野長政【名】尾張の人、安井重繼の子。淺野長勝の嗣となり、天正十一年、秀吉に、賤ヶ岳の軍に從ひ功あり。遂に、甲斐二十萬四千石を食み、後、德川家に屬す。慶長十五年四月卒す。年六十五。

あさのゆきなが 淺野幸長【名】長政の子。幼より、秀吉に近侍し、後、左京大夫と稱し、紀州和歌山三十七萬石を食み、慶長十八年卒す。年三十八。

あさはらためより 淺原爲頼【名】甲斐の人、膂力あり、弓をよくす。正應二年、京に上り、其二子と、夜、禁中に入り、矢を放ちて、天子を脅し、衛士と戰ひしが、叶はずして遂に、二子と紫震殿に割腹す。時に流言あり、爲頼、龜山上皇の命をうけ、伏見天皇を弑せんとせし也。されど、後、事解く。

あさびらき 朝開【句】朝に、船の、港を出づること。「世の中を何に譬へん朝びらき、漕ぎいでし舟の、あとの白浪」。

あざぶすま 麻被【名】麻布の夜具なり。

あさまし 淺【形】驚くばかり甚しきをいふ。以ての外。あきれかへる。あさましうは副詞なり。

あさまのたけ 淺間嶽【名】信濃國北佐久郡にある有名の火山。直立一萬二千尺。伊勢物語「信濃なる、淺間の嶽に、たつけぶり、遠近人の、見やはとがめぬ」。

あさみ けいさい 淺見絅齋【名】京都の儒者。名は安正、望楠軒と號す。近江高島の人。後、京に出で、醫を業とし、高島順貞と稱せり。山崎闇齋を見るに及び、儒に志し、刻苦勉勵して、一家を成せり。正徳元年十月歿す。年六十。

あざむく 欺、紿【動マ四】欺は、侮りあざむくこと。紿は、計りあざむくこと。

あざり 阿闍梨【名】梵語「アザリヤ」の畧、師範の義。僧をいふ。又、僧職の名又、あじやりとも。

あさる 漁【動ラ四】鳥獸等の、食を求むること。魚介などを採ること。物を探れさがすこと。

あざる 戯、餒【動ラ下二】戯るはたはむるゝこと、餒は肉のくさること。土佐日記「鰒海のほとりにて、あざれあへり」のあざれは、兩方にかけていへり。

あし 錢【名】ぜにの異名。世に通用すること。足ありて行くが如き故にいふ。關東の方言にては、「おあし」といふ。

あしかがじだい 足利時代【名】延元三年より、天正元年まで。

あしかけ 足掛【名】踏蹉。これより彼に移るとき、假に足をかくるもの。あしがゝり。また、轉じて跨れるにいふ。「あしかけ三年目」など。

あしかじま 海獺嶋【名】相模三浦郡の東方にあり。一に寶島ともいふ。

あしかび 葦芽【名】葦の芽だち。その芽のもえいづるを、「葦芽のもえあがる」などいへるは、仰へ難き勢を譬へていへるなり。

あしがらやま 足柄山【名】相模國足柄上郡南足柄村より、駿河國駿東郡足柄村に至る坂路をいふ。古昔、東西の行路たり。足柄路、足柄坂、足柄嶺などの名あり。

あしがる 足輕【名】暇しき歩卒をいふ。後土御門院の頃より、此の名起れりといふ。

あしげ 葦毛、騅【名】馬の毛色の、白色に、黒き差毛（サシゲ）のあるもの。

あしごろのたち 足白太刀【名】太刀の總體を、金、又は銅金具にて飾り、足だけを、銀にて造れるをいふ。太刀の足とは、鞘に、帶取とて、緒を通す所、二つあるをいふ。白は、しろがね、即、銀なり。

あしぞろへ 足揃【名】人馬の足を揃へて、列を整ふこと。勢揃。

あしたづ 葦田鶴【名】鶴に同じ。葦の生えたる邊に、棲み居る故にいふ。あしたづのあゆみとは、鶴の歩みのごとき、緩かなる歩みぶりをいふ。

あしたにみちをきかば、ゆふべにしすともかなり 朝聞レ道夕死可矣【文】論語の語。道は、事物の當然なる理、苟もこれをきくことを得れば、朝にきゝて夕に死すとも、遺憾なしとの意。朝夕は、その時間の近きをいへり。

あしづつ 葭茅【名】奥儀抄に、「あしづゝは、蘆の節の中に、薄葉のやうにてある皮なり」といへり。

あしで 葦手【名】あしでがきともいふ。文字の形をくづして、葦の生ひたる狀にかきたるもの。水の流れたる狀に書きなすを水手、歌の意を繪にかきて、「てにをは」などを假名にてかきそへたるを歌繪といふ。三者、よく似たるものにて、要するに、歌繪は、繪をもとゝして文字をまじへ、葦手は、字を多くして繪は附けあはせたるのみのもの。

あしなへ 足蹇、蹇、躄【名】足の自在ならぬ不具者。あしなへは、下二段活用の動詞の名詞法なり。ねざり。

あしば 足場【名】材を組みて、高き所に登る足掛りとするもの。あしゐろ又、あしろともいふ。

あしはらのちいほあきのみづほのくに 葦原千五百秋瑞穗國【名】日本國の別稱。古、國の四圍の海濱に葦の叢生せしより葦原といひ、年々の秋の限なき意にて千五百秋といひ、みづほしき穗、即、稻の美しきが、よく實る故に、瑞穗國といへり。

あしびきの 足引【枕】山につゞくる枕詞。又轉じては直に、山の意に用ふ。「足引（名詞）の石根」。

あしほやま 葦穗山【名】常陸國新治郡と眞壁郡とに跨る、筑波山脈の一峯にして、加波山の中間にあり。

あしやう 亞相【名】大納言の唐名。

あじやり 阿闍梨【名】あざりを見よ。

あしゆら 阿修羅【名】梵語「アスラ」。佛說に、六界の一、略して修羅とも云。「修羅の巷」の如し。修羅道は阿修羅道の略。阿修羅に行く道なりと。阿修羅王は、佛經の神の名、力強くして、梵天帝釋と權を爭ひ戰ふといふ。軍記などに「阿修羅王のあれ廻る如く」などいふ。

あしよわぐるま 足弱車【名】すゝみのにぶき車。又、常には、車を引く牛の足の弱きをいふといへり。

あじろ 網代【名】竹、葦などを、薄く細くして、斜に組合せたるもの。あじろ輿は、外部を、青竹の網代にて張りたる輿、板輿につきて、晴（ハレ）の時に用ふ。網代車は同じく網代にて、張

りたる車、大臣、納言などの、直衣を着せしとき、或は略儀遠行に用ふる車。

あじをかきて、えんをむすばしむ 阿字を書きて縁を結ばしむ【文】眞言宗にて説く所に、阿字の功德多し。阿は梵語。譯して不生といふ。華嚴經に、阿字を唱ふる時は、菩薩の力を以て、無差別の境界に入るといへり。故に、僧侶が、死人に引導をなす代りに、阿字をかきて成佛すべき縁を結ばしむ。

あすかがはのふちせ 飛鳥川の淵瀬【句】飛鳥川は、大和國高市郡にあり。川流の變化多きをもて、古今集「世の中は、何か常なる。飛鳥川、昨日の淵ぞ、今日は瀬となる」。徒然草「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば云々」などいひて、世の變遷、常なきにたとへていふ。

あすかべつねのり 飛鳥部常則【名】畫家なり。巨勢公望等と名を等うし、延喜天暦の二朝に仕へたり。

あすもありとてたのむべからじ 明日も有りとて頼むべからじ【文】人生のはかなきは、朝露のごとし。いかで、明日を頼むことを得べきとの意。拾遺集に「うき世をば、背かば今日も、背きなむ。明日もありとは、頼むべからじ」。

あぜくら 校倉【名】角なる木を、角を外面に出し、四方より組み上げ、隅々を打違へて、井樓といふもの〻如くに造れる倉庫をいふ。古、文書寶物などを收むるに用ひたり。今も稀に神社等にのこれり。

あぜち 按察使【名】諸國におきて、敎化、風俗を觀察し、國司の政の正否を巡察せしめんとて、養老三年始めて置かれし官。後には、奥羽にのみありしが、それも、後には、公卿の兼官となりて、空名を存するのみとなれり。

あそみ 朝臣【名】姓（カバネ）の名なり。八姓の中、第二等に位す。「アソン」と音便にも訓む。又、人を親みてよぶ稱。

あだ 徒【名】無益なること。「あだなるすさび」。あだごとは徒なること。むだごと。浮きたること。あだしは、形容詞にて、異の義、他の義。あだごころは、誠なくて他にうつり易き心。あだしひとは、他人のこと。

あだ 婀娜【副、形】艶に美しきこと。洛神賦に「華容婀娜」。

あたかのせき 安宅關【名】關趾詳ならず。文治二年、この關を構へて源義經の北國に逃ぐるを防ぎたり。今加賀國能美郡に安宅町あり。

あだならむひとにはみせじ 徒ならむ人には見せじ【文】夫木集「あだならむ、人には見せじ。嚴島、波のぬれぎぬ、着せむものかは」。

あたみ 熱海【名】伊豆國賀茂郡熱海町。温泉を以て名高し。國府津との間に、電車鐵道の設あり。

あだむす 安針【名】英國人、ウヰリアム、アダムス。わが國に歸化して、徳川家康に仕へたり。横須賀十三峠にその墓あり。三浦安針と改名したりと。

あだむ すみす【名】スコットランドの經濟學者なり。西暦一千七百三十二年に生れ、一千七百九十年に死せり。

あたらごと 可惜事【句】俗にアッタラコト。惜しきこと。惜しむべきこと。

あたり 邊【名】ほとり。其處近邊。其時頃。わたりともいふ。「池のあたりに行けば」。「去年あたりとは代れり」。

あぢき 阿直岐【名】百濟の人にて、應神天皇の十五年、日本に使し、經典に通ぜるを以て、太子の師となれり。子孫は、史部となりて、朝廷に仕へたり。

あぢきなきすさび【句】無味の遊。つまらなき事。面白からぬなぐさみ。詮もなきいたづら。

あぢのおみ 阿知使主【名】漢の孝靈帝の曾孫。仁德天皇の時、十七縣の人口を率ゐて、歸化せし人。

あつかはし 熱苦、暑苦【形】あつぐるし。夏の日の、何となく、むしあつきをいふ。

あつかましし 鐵面皮【形】恥をも恥と思はぬこと。俗に「ツラノ皮ノアツイ」ことと。

あづきがゆ 小豆粥【名】粥の中に、小豆を入れたるもの。正月十五日に、之を食する式あり。支那、吳縣の張成が故事に起れるよし、續齊諧記に見ゆ。

あづきしま 小豆嶋【名】讃岐國に屬す。播磨灘の西部にある大島なり。

あつきみしんわう 敦仁親王【名】醍醐天皇なり。

あつげし 厚岸【名】北海道釧路國厚岸村。

あづさゆみ 梓弓【名】梓といふ木にて作りたる弓。古は、專、この木にて弓を作りしかば、單に、弓といふべきに、梓弓といへり。また、弓はひくものなれば、ひくにかけ、また、引けば本と末とがよるゆゑ、よる、もと、すゑ、はるなどにかけていふ枕詞に用ふ。

あつせい 厭制【名】無理に抑へつけること。抑制。

あつせん 斡旋【名】周旋と同じく、世話をすること。とりもつこと。「一二鄕大夫代ル天斡旋」。

あつたう 厭倒【名】むりにおしたふすこと。勢にて負かすこと。壓服。

あつたじんぐう 熱田神宮【名】尾張國愛知郡熱田にあり。三種の神寶の一、草薙劍を奉齋し、日本武尊、其他四座の神を並祀せり。官幣大社。

あつたのやつるぎ 熱田八劍【句】熱田神宮の攝社八劍神社をいふ。神宮の南三町にあり。

あづまかがみ 吾妻鏡、東鑑【名】鎌倉幕府の記錄にて、治承三年より文永七年に至る八十七年間の事件を、生硬なる漢文體に記せり。五十二卷あり。

あづまのかめのかゞみ 東の龜の鑑【句】十六夜日記に「あづまのかめのかゞみにうつさば云々」。鎌倉の政道をいへり。龜の鑑の語は、祖庭事苑に「龜鑑、龜所三以決二猶豫一鑑所三以辨二妍蚩一」とあるに出づ。

あづまばし 吾妻橋【名】東京市淺草區花川戸より本所區中の鄉に架せる隅田川の橋。

あつまる 聚、集、輯、萃【動ラ四】聚は、一所によりあふこと。「十年生聚」。「聚ル友」。集は、衆鳥の木にあつまる義、散在したるものを一所にあつめよするに用ふ。「集ル友」。「文集」。聚友は、一ケ所にまとまること。集友は諸方の友を一所によすること。輯は集と同義。編輯。萃は、聚と同義。「士卒稍萃」。

あづまわらは 東竪子【名】公事根源「あづまわらはといふは、內侍司の被管にあるものにて、行幸のとき、姫松とて、なかしき馬にのりて供奉する、是れがことなり。これは、みつ子を用ゐらるゝにや」。

あつらに 【副】厚くの義。

あつれき 軋轢【名】車のきしり合ふこと。轉じて、不和、紛爭などの意にいふ。

あてに 貴【副】上品に。やさしく。しなやかに。うつくしく。

あでん 亞丁【名】亞剌比亞の南端、紅海の南口を出でたる所の地にて、前面を亞丁灣といふ。英國の屬地にて、地中海に向ひて蘇士を航するもの、亞弗利加東海を航するもの、、必、立寄る要港なり。

あと 阿堵【名】ぜにのことにて、晉の王衍の故事より起れり。又阿堵は、支那の方言にて、俗に「コンナモノ」といふに同じ。阿堵物を見よ。

あとかはやなぎ 跡川柳【名】「みそぎせしあと川柳」など歌にいへるは、御祓せし跡の川の柳の意に用ひたり。萬葉集に「あられふり、きほつあふみの、あど川柳、かれゝども、またもおふちふ、あど川柳」とよめるあど川は、近江國の逢江の地なる阿波川といへる川の名なり。

あとのしらなみにみをよするあした 跡の白波に身を寄する朝【句】拾遺集、沙彌滿誓の「世の中を、何にたとへん、朝ぼらけ、漕ぎ行く舟の、あとの白波」とある歌によりて、身を果敢なく思ふ時といふ意に用ひたる句。

あとぶつ 阿堵物【名】ぜにゝ。晉書に「王衍妻郭氏、喜二聚斂一。衍惡二其貪鄙一、故口未二嘗言一レ錢。妻欲レ試レ之、令二婢以レ錢遶レ床、使レ不レ得レ行。衍早起見レ錢、謂レ婢曰、舉二此阿堵物一去」と。

あなぐまのたけきえものをのたぐひならで、かしこきひとえたるためし 穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たる例【句】周の文王(西伯)將に田獵せんとす。卜者曰はく、渭陽に獵せば、大に獲物あるべし。但、それは虎に非ず、羆にあらずして、公侯なり。是れ、天の、君に、師をおくるなりと。文王、乃ち渭陽に太公望の垂釣せるをみて、載せ歸り、師となせりといへる故事をいへり。

あなづらはし 侮【形】侮るべくあり。馬鹿らしく見ゆる意。あさはかに、こゝもなく見ゆる意。

あねがは 姉川【名】近江國東淺井郡にある川。源を金糞嶽より發し、南流して琵琶湖に注ぐ。元龜元年四月、德川家康が、信長を援けて、朝倉義景朝井長政の兵を破りし古戰場は、此の川の沿岸の地。

あののまつばら 安濃松原【名】伊勢國安濃郡阿漕ヶ浦にありし松原なるべし。今、海となりて趾なしといふ。

あはう 阿房【名】愚もの。秦の始皇帝、前殿を阿房に作り、令名を選びて之に命ぜんとせしが、その成らざるに、秦は亡びたり。秦帝、臣民の膏血を絞り、怨を臣民に受けしのみにて、之に住むことを得ざりしを以て、その愚計を笑ひて、阿房と稱せるに起るといふ。阿房は、地名なり。杜牧之の阿房宮賦あり。

あはせもの 合物【名】物と物とを合せたるもの。また、合盛(アハセモリ)といふに同じ。酒食の有りて、一の器物に、數品盛り合せたるもの。また、酒食に添へたる肴。

あはだぐち 粟田口【名】山城の地名。近江の逢坂關近き所にあり。又、大和鍛工粟田口のうちたる刀劍をよぶ。

あはだの 粟田殿【名】藤原道兼をいふ。

あはぢのせと 淡路瀨戸【名】「あかしかいけふ」に同じ。

あはづのはら 粟津原【名】近江國滋賀郡勢多村より、膳所村に至る街道の松原をいふ。

あはれ 天晴、嗚呼、哀【感】すべて、心の物に感動したる時に發する詞。されば、悲しきにも、嬉しきにも、おもしろきにも、苦しきにもいへり。又、不便(フビン)に思はるること。

あはれことしのあきもいぬめり 嗚呼今年の秋も往ぬめり【文】千載集藤原基俊の歌「契りおきしさせもが露を命にて云々」。

あはれむ 憐、哀、憫、矜、恤【動マ四】憐は、いとしがること。愛翫すること。「名ノ憐」「憐ノ月」。哀は、樂の反にて、悲しむこと。憫は、心に不便に思ふこと。「憫ノ世」。矜は憫に同じ。恤は愛の義。

あひ 相【接頭】動詞の上につけていふ語。互に、共にの義。「相思ふ」。「相伴ふ」。また、意味無くも用ふ。「相逢す」。「相なるべく」。

あひおひ 相生【名】同じ處に諸共に生ひ出づるをいふ。古今集序に、「高砂住吉の松もあひおひのやうにおぼえ」。また、夫木集に「いかばかり、ふる川のべに、年もへぬ。いつあひおひの二本の杉」。

あひき 網引【名】漁夫の、魚をとるために網をひくをいふ。

あひくち 匕首【名】短刀をいふ。

あひざは せいし 會澤正志【名】名は安、通稱は恒藏、水戸の儒臣。彰考館總裁となり、病を以て辭し、文久三年、八十二歳にて歿す。新論、孝經考、正志齋雜記など、著述多し。

あひづ 合圖、相圖【名】約束の義。かねて約束し置きてその通りに知らせつぐることをいふ。「のろしをあひづに、ひた下りに、攻めかゝる」。

あひひとし 相埒【句】埒は等に同じ。國語に「叔向、子産、晏嬰之才相埒等也」。

あふ 遇、遭、合、逢【動ノ四】遇は、期せずして會するなり。「五伏兵二大敗」で遭は、兩方より行きあふなり。合は、物と物との、よく合ふこと。符合。結合。合併。逢は遭と同じ。

あふぎのしば 扇の芝【名】山城國宇治の平等院の堂傍に、扇の芝といふ所あり。源三位頼政自刃のところなりと。

あふこ 枌【名】今いふ、天秤棒。兩方に、物をさげて擔ぐ棒をいふ。

あふさかのせき 逢阪關【名】近江國大津市の南方の地。延暦前ここに關あり。その後も京より東國への街道なれば、史上の事蹟多し。拾遺集に紀貫之「相坂の、關の清水に、影見えて、今やひくらん、望月の駒」。

あふさきるさに 【副】合ふさ離るさに。左右に。此方彼方に。兎に角に。これにつけかれにつけ。一方よければ一方わろくて、等の義。古今集「そへにとて、とすればかゝり、斯くすれば、あないひしらず、あふさきるさに」。徒然草「あふさきるさに思ひ亂れて」。

あふじ 押字【名】くわあふを見よ。

あぶつに 阿佛尼【名】藤原爲家の妻。初め、安嘉門院邦子内親王に仕へ、四條乂、右衛門佐といひ、薙髪して、北林禪尼とも、阿佛尼ともいへり。十六夜日記、夜の鶴等の著あり。

あふとつ 凹凸【名】土の窪めるを凹といひ、土の高きを凸といふ。神異記「大荒石湖千里無二凹凸一平滿無二高下一」。

あふみのうみ 淡海湖【名】琵琶湖のこと。

あふみのみふね 淡海三船【名】葛野王の孫。神武天皇以

来持統天皇までの諡號の撰者。又、懷風藻にて日本にて始めての詩集の撰者。

あふみはつけい 近江八景【名】支那瀟湘の八景に倣ひて、明應頃よりいひ出せる琵琶湖の景の稱。三井ノ晩鐘。石山ノ秋月。堅田ノ落雁。粟津ノ晴嵐。矢走ノ歸帆。比良ノ暮雪。唐崎ノ夜雨。勢多ノ夕照。

あぶらぎり 油桐【名】木の名。その實を絞りて、桐油（トウユ）を取り、傘、合羽などにぬる。

あふりのかみ 雨降の神【名】相模國中郡なる雨降神社。祭神は大山祇命。

あべ いせのかみ 阿部伊勢守【名】名は正弘、德川幕府の老中として有名なり。安政四年卒す。實に、幕末の一偉人なり。

あべ なかまろ 安部仲麿【名】元正天皇の靈龜二年、遣唐留學生となりて入唐し、朝衡と改名して、玄宗皇帝に仕ふ。勝寶中、遣唐大使藤原清河と共に歸朝せんとし、「青海原、ふりさけ見れば、春日なる、三笠の山に、出でし月かも」の咏を遺し、船出しけるが、海上、颶にあひて安南に漂流し、又彼の地に引きかへして遂に唐土に卒せり。年七十。李白、王維等と交り、親善なりき。

あべの 安部野【名】攝津國東成郡、天王寺の南方、住吉社に至る一帶の沙丘をいふ。

あべる いはね 安部井磐根【名】岩代の人、曾て代議士たり。

あふ 亞父【名】亞は次なり。之を尊敬することば、父に亞ぐの義にて、國君の、功臣をよぶ語。また、諸父といふに同じ。

あほ 阿保【名】阿は倚なり、保は養なり。倚頼して養育せらるゝをいふ。

あま 漁人、海士、蜑、白水郎【名】漁夫。漁（スナトリ）を業とするもの。

あまう 阿蒙【名】支那俗語にて、こどもの義。「こかのきうあまう」を見よ。

あまかう 阿媽港【名】今の澳門なり。支那廣東省の一小半島にして、葡萄牙の屬地たり。

あまかける 天翔【動ヲ四】空を翔ること。鳥などにも、また、靈魂などにつけてもいへり。

あまくさ ときさだ 天草時貞【名】四郎と稱す。肥前の人。寛永十四年芦塚忠右衛門等の耶蘇教徒、時貞を要して、島原の故城によりて叛す。幕府、板倉重昌等をして攻めしめしが克たず。更に、松平信綱を遣し之を陷れしかば、時貞、自殺せり。時に、寛永十五年二月。兵をあげしより五ケ月、之を天草の亂といふ。

あまくに 天國【名】刀劍師なり。文武帝の時に、大和國宇陀郡に住せり。平氏傳寶の小烏丸の作者。又、崇神天皇の時、天皇護身の御璽たる劍を作れりと傳ふる天國あり。これは天目一箇命の裔なりとぞ。

あまさかる 天離【枕】都より田舍を見れば、天と共に遠く離(サカ)りて見ゆる故に、鄙(ヒナ)の枕詞とせり。

あまさへ 剩【副】「あまつさへ」に同じ。

あまそそる 天翔【動ラ四】空高く聳ゆるをいふ。

あまたくだり 數具【名】一具は「ひとそろへ」といふに同じ。衣服あまたくだりといへば、着物幾かされもなり。源氏物語「あまたくだり、いと清らに、仕立て給へるを」。

あまづつみ 雨包【名】雨隱れなり。雨にぬれまじとよくくるゝ、又、雨をよけて籠り居ること。萬葉集「ひさかたの、雨もふらぬか。あまづつみ、君にたぐひて、此日くらさむ」。

あまつひつぎ 天津日嗣、寶祚【名】天皇の御位を申す。天つ日の御神より、つぎ〳〵傳へ嗣ぎ給ふ義。

あまづら 甘葛、千歳蘿【名】蔓草にて、古、この草を煎じて其の液汁を取りて、今の砂糖の如くに用ひたり。之を甘葛煎(アマヅラ)とも、密煎(ミツ)ともいへり。

あまつよばひ 天壽【名】天より授かりたる壽命。

あまなづな 甘薺【名】甘菜(アマナ)に同じ。すべて、味甘き菜。

あまね 普【副】あんべいちうを見よ。

あまねし 洽、普、徧、遍、周【形】洽は、潤ひの、あまれくしみわたる義。「恩澤洽レ民」。普は、博く、大きくの義。一面にあまれくかゝること。「普及二一切一」。徧は、至るなり。密なり。ゆきとゞくの義。「徧探レ之」。遍は、徧の俗字。周は、徧と同義にて、その煮重し。「知周乎天下而道濟二天下一」。

あまのいわかひのをかまろ 海犬養岡麿【名】人名。萬葉集の作者の一人。

あまのさへづり 蜑の囀【句】漁夫のもの言ひをいふ。船頭などの詞の、訛りて、烏の囀づるに似たるを譬へたり。

あまのたくなは 海士の栲繩【句】海士の引く網につけたる繩。た繰るものなれば、くりかへすなどの序に用ふ。栲繩は栲にて作れる繩なり。栲(タク)は楮の皮にて作れる布。

あまのなかがは 天中川【名】てんりゅうがはを見よ。

あまのはしだて 天橋立【名】丹後國與佐郡與佐海に突出したる白砂青松の地。日本三景の一。

あみど 編戸【名】竹、また、片木を編みて作れる戸。

あんあん 暗暗【副、形】暗きありさま。聲の、遠く仄に聞ゆる狀。文選「暗暗而靚深」。暗暗裏は、心の中にての義。「それとなく」といふに同じ

あんいつ 安逸、安佚【名】勞苦せずして、安樂に過すこと。孟子に、「四肢之於二安逸一也云々」。

あんえい 晏嬰【名】あんべいちうを見よ。

あんえいけんげう 安永檢校【名】本名未詳。安永頃の人。京都に在りて、三絃の上手たる瞽者なり。檢校は、盲人の官。

あんが 晏駕【名】天子の崩ぜしをいふ。史記「宮車一日晏駕」の注に、「天子は當に早起すべし。故に崩御をいふ」と。

あんがふ 闇合、暗合【名】事物の期せずして偶然に符合するをいふ。詩歌などの同一の者、自然に出來たるが如きをいふ。

あんぐう 行宮【名】行在所に同じ。天皇の、京城以外に行幸ませるときの假の御所。

あんぐろさきそん Anglo Saxon【名】英國民の人種をアングロサキソン民族といふ。アングロ、サキソン、共に、今の獨逸の北方の族なりしが、五世紀の中頃に、此の人種等、英吉利を侵し、其の土人ブリトン種を逐ひて七王國を建てしが、其の七國相戰うて止まず、九世紀の末に、其の一國王エグバード、よく他の六國を併せ、遂に英吉利を一統して、今の英國を創始せるなり。

あんざいしよ 行在所【名】あんぐうに同じ。

あんし 晏子【名】名は嬰、字は平仲、支那戰國時代の人にて、齊の靈公・景公に仕へて名相たり。博聞強記、古今に通じ簡儉力行を以て推されたりとぞ。

あんしやう 暗誦【名】そらよみ。暗記して口に讀むをいふ。

あんす 按司【名】琉球國の昔時の官。今の郡長の如し。

あむすてるだむ Amsterdam【名】荷蘭國の首府。アムスタル河上の濕地にあり。人口四十萬。貿易工業盛なり。

あんたん 暗憺【名】暗くして靜なるをいふ。また、さびしきにもいふ。

あんど 安堵【名】(堵は牆なり)、牆内に安じ居るをいふ。陳琳の書「百姓安堵四民反業」。やがて、安心すること。心の落つくこと。また、知行を賜ふとき、其の領地の名、及、何處より何處に至るまでといふことを記したる書附をもいふ。安堵奉行は、室町幕府幕府の官名。

あんどう せいあん 安東省庵【名】筑後柳川藩の儒臣。名は守約、性勇敢、島原の亂の時、病瘼にありしが、奮て征伐に從ひ、また、朱舜水の明より來奔せる時、其の祿の半を割ち與へて、師事せりと。元祿十四年十月、八十歳にて歿す。

あんどう ためあきら 安藤爲章【名】年山と號す。丹波の人。水戸の義公に召されて、大日本史、禮儀類典などの編輯に與る。又、公命により、契沖につきて古學を問へり。享保元年十月五十八歳にて歿す。

あんばい 鹽梅【名】よき程にかげんすること。書經の說命に「若作二和羹一爾惟鹽梅」とあり。大政を輔佐する臣を鹽梅之臣ともいへり。又轉じては、身體の加減、氣分などの意にもいへり。

あんばいや Umpire【名】審判官。行事(相撲の)。仲裁人。

あんび 案比【名】年貌を案驗して、比ぶること。後漢書「至二歲時縣當二案比一」。

あんべいちう 晏平仲【名】あんしを見よ。

あんらくがは 安樂川【名】伊勢の鈴鹿川の支流。

あんらくじ 安樂寺【名】筑前國筑紫郡にあり。菅原道眞の葬地なり。

あんらくじゅゐん 安樂壽院【名】山城國紀伊郡竹田村に在り。もと、鳥羽上皇の離宮たりしを、保安四年寺院としたまへるものにて、同上皇の仙骨を、此に葬り奉りて、安樂壽院の陵と稱せり。近衛天皇の陵も、此にありて、安樂壽院の南の陵と申せり。

あんり 行李【名】使者をいふ。左傳に「行李之往來」とあり。唐の時には、隨從の人をいへり。後、行裝の義にも用ふ。いはものにいふ行李(カウリ)は、これより轉じしもの。

あめい 蛙鳴【名】蛙の鳴くをいふ。其の聲さわがしきものなれば、騷しき形容にもいへり。

あめいぜんせい 蛙鳴蟬聲【名】前と同義。

あめうし 黃牛【名】淡黃褐色(メイロ)なる牛。牝牛。むかし、天皇の御車は、この牛を附けてひかせたり。

あめ、しやぢくのごとし、雨如二車軸一【文】大雨の形容。長阿含經「漸降二大雨一滴如二車軸一」とあるよりいづ。

あめ、つちくれをやぶらず 雨不レ破レ壞【文】かぜえだをならさずを見よ。

あめにもくし、かぜにくしけづる、沐レ雨櫛レ風【句】風塵の中に奔走して勞苦するをいふ。猶しつぶうもくうを見よ。

あめのかぐやま 天香具山【名】大和國十市郡香久山村にあり。畝傍山、耳無山と互に鼎立の地位をなせり。

あめのはばや 天羽羽矢【名】天の眞鹿兒矢ともいふ。鹿など射るに用ひたる神代の矢。

あめもり はうしう 雨森芳洲【名】名は俊良、字は伯陽、通稱東五郎、木下順庵の門に出で、對馬侯の文學となる。寶曆五年正月歿す。年八十八。年八十の時、初めて和歌に志し、古今集を誦する千遍、みづから一萬首の咏を出せりと。橘窓茶話、文集、漫錄、たはれ草などの著あり。

あめのやすかは 天安川【名】天上にありといふ川の名。古事記「是以八百萬神於二天安河原一神集集而云云」。

あめもりつく 天降附(アマクダ)【枕】天降りつく義といふ。香具山、鹿

背山などの枕詞とす。萬葉集「天降附、あめのかぐ山、霞立ち春に至れば云々」。

あやなきわざ 文無事【句】不道理なること。漫りなること。甚しくよからぬこと。餘りなること。大義にそむける事。わけのわからぬこと。

あやなし 文無【形】道理たゝず。道理わからず。見わきがつかぬ。風情なし。模樣なし。樣わるし。あやとは、物の種々の象、模樣、仕組、すぢなどの意。古今集「春の夜の、やみあはやなし。梅の花云々」。

あやまちてあらためむをあやまちといふ 過而不レ改是謂レ過矣【文】論語の「過則勿レ憚レ改」と、ほゞ同じ意にて、孔子の語なり。

あやまちをしりてよくあらたむ【文】左傳に「人非二聖人一誰無レ過。過能改、善莫レ大焉」とあり。前のと同じほどの義。

あやまる 誤、謬、訛、錯、愆、【動ラ四】誤は、氣づかずしてあやまるなり。誤字。誤文。謬は、繆ともかき、織物の絲の違ひたる義より、道に外れたるをいふ。繆見。訛は、だんだんにあやまること。訛言。訛語。なまる。錯は、彼是取ちがへたるあやまりをいふ。「錯二認金根一爲二金銀者一」。愆は、思ひちがひなり。過は、惡心なくして、犯したる罪をいふ。

あやめふく 菖蒲葺く【句】古より五月五日端午の節句に、軒端にあやめをふくをいふ。「あやめふく軒のしづく」。

あやめがさ 綾蘭笠【名】ねがさを見よ。

あゆ 阿諛【名】へつらふこと。おもねること。面諛と同じく、對手の氣に入るやうにすること。史記「怪迂阿諛苟合之徒」。諂訣。

あゆる あせ 滴汗【句】したたる汗、あゆるはヤ行下二段の動詞にて、滴る、落つ、流るの義。

あらうみのしやうじ 荒海障子【名】清涼殿の廂の長の隅にある障子。あらうみに手長足長の畫をかきたり。障子は、今の襖、などの製にて、これは衝立障子なり。

あらがねの 荒金【枕】まだ鍛へぬ金、即、あらがねは、地中にあるもの故、地の枕詞に用ふ。

あらきまたゑもん 荒木又右衛門【名】伊賀の人、劍道の達人にして、大和國郡山の城主本多政勝に仕へて、劍道師範たり。義弟渡邊數馬と共に義父の仇河合又五郎を討つ。後藤堂家に仕へ、寛永十四年、歿せり。

あらきだもりたけ 荒木田守武【名】伊勢內宮の神官、正四位に叙せられ、薗田長官と稱す。俳諧體の連歌の主唱者にて、江戶時代の俳道の祖と稱せらる。天文十八年八月歿す。年七十七。その人口に膾炙する句、「元日や、神代のことも、

思はる〳〵」。「撫子や、夏野の原の、おとしだね」。その辭世、「朝貝に、今日は見ゆらむ、我世哉」。

あらく 散 【動カ下二】 ちり〴〵になる。ちらばる。

あらすか Alaska 【名】 北亞米利加洲の北西端の地。一衣帶水にて亞細亞と隔つ。合衆國の領土たり。

あらたまの 新玉、新魂 【枕】 年、月、夜などの枕詞。新問（アラタマ）の義なりとも、璞の意なりともいふ。

あらたよ 新代、維新 【名】 改まりたる御代。御代の盛大を稱へていふ語。

あらめすさび 【句】 有るまじき遊戯、わるいたづら、といふに同じ。すさびは、心の進みて爲す事にて、慰みなり。

あらはる 現、見、著、顯、露、表、彰 【動ラ下二】 現は、隱れたるもの〳〵現はるゝなり。出現。現金。見は現に同じ。發見。見在。著は、明に見ゆる義。著明。顯は、光也、見也、明也など注す。輝きわたるほどに、顯はるゝなり。顯官。顯達。露は、むきだしにすること。露骨。露出。表は、外部にあらはすこと。表出。表面。彰は、章ともかく。物の模樣などの、明に見ゆる義。表彰。

あらひがはのよろひ 洗革鎧 【名】 薄紅に染めたる革を以て縅したる鎧なり。洗ひはがして、薄紅にしたる意なりと。革は、なめしがは。

あらまし 大略、大概 【名、副】 たいてい。大凡。

あらましごと 欲有事 【句】 おくありたしと思ひしこと。

あらめ 荒布、海帶、黑菜 【名】 海底の岩石に生する草の名。色は黑く、昆布に似て、葉に皺あり。

あられふり 霰降 【枕】 霰の降るは、音のかしましきもの故、鹿島にかけていふ。萬葉、あられふり、鹿島の崎を、波高み、過ぎてや行かむ、戀しきものを」。鹿島の崎は、常陸國鹿島神社のある所の岬。

あらゐはくせき 新井白石 【名】 名は君美。德川家宣の侍講となり、政務に參與して、改革する所ありき。從五位下筑前守に任ぜらる。享保十年五月、六十にて歿す。博學にして、政治、經濟、歷史、語學等の著書、數百種あり。

ありとしある 【句】 有りとある。あらゆる。有る限りの。有るほどの。

ありのひふき 阿里之比布木 【名】 きちかうに同じ。

ありのみ 有實 【名】 梨の異名。なしは、無に通ずるを忌みていふなり。

ありはら なりひら 在原業平 【名】 阿保親王の第五子。天長中、兄の行平と共に、在原の姓を賜はりて、臣下に列せらる。世に在五中將といふ。和歌は巧みにて六歌仙の一人なり。元慶四年五月、五十六にて歿せり。

ありはら ゆきひら 在原行平 【名】 業平の兄。仁和の初、陸奥出羽按察使を兼ねたり。寬平五年、七十六にて歿す。

ありふるわざ 在經る事 【句】 世を經る事業。生活をなす業。世にながらへて居ること。

あるさす Alsace 【名】 獨逸の地名。西曆一千八百七十年、普佛戰爭の結果、佛國より和を請ひてプロシアに割讓せし一州なり。この時、また、外にロウレンス(Lorraine)州と、償金五億フランを添ふ。

あるじす 饗す 【動サ變】 饗應をなす。驅走す。あるじは名詞にて、主人をいひ、また、ここの如く、其の主人が饗應することをもいへり。

あるじまうけ 饗設 【名】 饗應の用意。伊勢物語「左中辨藤原のまさちかといふをなむ、まらうどざねにて、其の日は、あるじまうけしたりける」。

あるばとろす 【名】 海鳥にて、形大に、翼狹長にして、永き飛行に堪ふといふ。

あれきさんどりや Alexandria 【名】 埃及の都府。亞弗利加の東北隅にあり。「ナイル」河口にして、地中海を隔てゝ土耳古に對し、埃及中、最貿易盛大の港。また、「スエズ」運河に近く、この地より「カイロウ」に至り、更に「スエズ」に達す。「カイロウ」よりは、「ナイル」河上流地方に達する鐵道線路あり。

あわゆき 泡雪、沫雪 【名】 たゞ雪のことなり。また、春の雪をいふ。泡の如く消え易きよりいふ。「泡雪なす。消ゆべき命」。なすはの如くの意。

あをいけ りんそう 青池林宗 【名】 江戸の醫家にて、杉山矣の侍醫、快庵の子。名は盈、字は子遠。杉田玄卿、宇田川玄眞等と蘭方を以て一家をなす。天保三年、水戸侯に聘せられ、四年二月歿す。年五十九。

あをうなばらふりさけみれば 青海原振り放け見れば 【句】 安部仲麿の歌。古今集には、初句を「天の原」とせり。百人一首も然り。あべのなかまろを見よ。

あをうま 青馬、白馬 【名】 むかし、正月七日、白馬の節會といふあり。左右馬寮より、白馬三十一疋を引き渡すを、主上の上覽あらせられし式なり。公事根源「白馬の節會を、青馬の節會とも申すなり。その故は、馬は陽の獸なり。青は春の色なり。これによりて、正月七日に青馬を見れば、年中の邪氣を除くといふ本文侍るなり云々」。

あをがしま 青嶋 【名】 古は、鬼ヶ島と稱せり。伊豆の八丈島の南八里餘にあり。周回五里、八丈島に屬す。時々噴火ありと。

あをき こんやう 青木昆陽 【名】 名は敦書、通稱文藏。武

識の人。幕府の儒官となる。寛保二年、命を受けて、大に天下の遺書古記を索む。また、救荒の備として、幕府に陳じて、諸國に甘藷を植ゑしむ。世民、其の利に賴り、甘藷先生と呼べり。明和六年十月、七十二歳にて歿す。蘭學の鼻祖ともいはる。

あをざむらひ　青侍【名】年若く未熟なる侍。

あをだかく　青田掻【句】稻の青々と生えたるを、青田といふ。掻くは、草をぬくことにて、田の草を取ること。

あをにび　青鈍【名】縹（ハナダ）の青ばみたる色。あをにぶともいふ。やや年よれる男の服色。

あをは、あをよりいでて、あをよりあをし　青出於藍、而青於藍【文】弟子の師に勝るにたとへていふ。しゆつらんを見よ。

あをばやまをかざる　青葉山を飾る【文】垂仁天皇の皇子譽津別（ホンヅワケ）尊の、出雲大社に參詣ありて還りますとき、出雲國造が、肥河（ヒ）に黒木の橋を作り、假宮を設けて、座（マヽ）させ奉り、庭として、河下に靑葉山を飾りしこと、古事記に見ゆ。

あをへど　青反吐【名】青き反吐。食物などは無くて、青みたる汁液を、口より吐きだすをいふ。へどは嘔吐なり。

あをやぎがはな　青柳が花【句】催馬樂に「大路に、添ひて上れる、靑柳が花や。靑柳が花や。靑柳が、しなひを見れば、今さかりなりや」といふ歌あり。

あをやぎの　青柳乃【枕】靑々としたる柳にて、髮にもかくるものなれば、かつらにかけていひ、また、柳の枝は、糸のごとくなればいとにかけてもいふ。萬葉集「靑やぎの、かつらぎ山に、たなびける、白雲がくり云々」。古今集序「靑柳の糸たえず、松の葉の、ちりうせずして云々」。

あをやま　のぶみつ　青山延光【名】水戸の儒臣。延于の子。佩弦齋、晩翠、春夢居士などの號あり。彰考館の編修總裁となり、弘道館立つに及びて、烈公に擢でられて教授となる。當時、會澤正志、藤田東湖等と相並びて、一藩の敎化を翼賛せり。明治二年、朝廷に徵されて大學中博士となり、從六位に叙せられ、翌年九月歿す。年六十四。

あをやまをからやまなすなきからす　青山を枯山如す泣き枯す【文】生ひ茂りたる山を、枯らすをいふ。古事記に「速須佐之男命、不レ知二所レ命之國一而八拳須至二于心前一、啼伊佐知伎也。其泣狀者、靑山如二枯山一泣枯、海河悉泣乾。云々」。

いい　依依【副、形】柔弱の貌。木のしげれる貌。思ひすてがたき貌。詩經「楊柳依々」。

いい　怡怡【副、形】嬉しき狀。よろこばしき意。たのしき意。論語「切切偲偲怡怡如也」。

いい　猗猗【副、形】美しく盛なる貌。詩經「綠竹猗猗」。

いい　意苡【名】よくいを見よ。

いうあく　優渥【名】恩澤のてあつくしてあまねきをいふ。「天恩優渥」。

いういう　優游【副、形】閑暇の義。又、自得の狀。詩經「優游休矣」。又、優柔と通じ用ひ、決しかねる狀にもいふ。「優游不斷」など。

いういう　呦呦【副、形】鹿の鳴く聲。詩經「呦呦鹿鳴（ト）」。

いういう　悠悠【副、形】おちつきたる態度をいふ。「悠々閑々」。ゆつくりと。ぼんやりと。悠久と。

いういう　油油【副、形】水の流るる狀。楚辭「油油湘江、長流汨兮」。

いういう　幽幽【副、形】かすかに。奥深し。詩經「幽幽南山」。

いうえき　誘掖【名】誘は、前に在りて導くこと、掖は、側より扶くること。人を敎誨するにいふ。詩經「誘二掖其君一也」。

いうえん　遊衍、遊燕、遊宴【名】いづれも放蕩に同じ。

いうぎ　友誼【名】友達のよしみ。朋友の情義。樓鑰の詩「臨」別提二斯語一、少盡二交朋誼一」。

いうきう　悠久【名】奥深く、迫らずして、永久なること。禮記「悠久所二以成一レ物也」。

いうきかい　有機界【名】動植物の如く、その體に生活機關を具へて、生命あるものを、一般にいふ。

いうきたい　有機體【名】化學の術語。自己の力によりて、組織の新陳代謝をなし、以て、自體を保護維持する所の實體をいふにて、動植物の如き、是れなり。すなはち、生活生長の機能を具備せるもの。

いうきぶつ　有機物【名】生活作用をなすもの。

いうげき　遊屐【名】足跡、遊行などの意。屐は足駄。

いうげきたい　遊撃隊【名】部屬を定めず、臨機應變に、味方を助け、敵を攻むる隊をいふ。

いうげん　幽玄【名】趣深くして容易に探り知る可らざる貌。

いうこし　有扈氏【名】支那の古代に夏さいひし國と同姓の國にて、今、陝西省西安府鄠縣の地。

いうざのき 宥坐の器【句】宥は右なり、座右におきて戒と爲すに足る器物をいふ。また、一説に、宥は侑に同じく、勧の義にて、勧戒の器といふ意なりと。きき(敬器)を見よ。

いうし 有司【名】つかさある人。官吏。役人。

いうし 猶子【名】兄弟の子をいふ。猶、己れの子の如しの義。兄弟親族などの子を養子とせる時にも云ふ。、比兒といふも同じ。

いうし、ここやうをかなしむ 游子悲二故郷一【文】游子は、旅客なり。史記に「高祖乃起舞、慷慨傷懐、泣數行下。乃謂二沛父兄一曰、游子悲二故郷一云々」と。

いうし、なほさんげつにゆく 游子猶行二於殘月一【文】中唐の賈島が曉賦に「佳人盡飾二於晨粧一、魏宮鐘動、游子猶行二於殘月一、函谷雞啼」と。殘月は、夜明けて後まで殘れる月をいふ。かんこくのけいめいを見よ。

いうする 幽邃【名】邃は深遠の狀。奥深く。清くして靜かなる。

いうぜん 油然【副、形】雲の沸く狀。孟子「天油然成レ雲」。又、すゝまぬ狀にも、物の初めて生ずる狀にもいふ。

いうせんくつ 遊仙窟【名】唐の張文成が。仙窟に遊びたることを記したる支那小説。

いうそく 有識【名】有職とかくは轉化したるなり。有識とかくを正しくす。ものしり。又、古の儀式作法を明むる學問をいふ。されば、その研究する人を有識家、又、略して有識とのみもいふ。

いうだう 遊道【名】交遊に同じ。史記に「爲二用益餘、遊道日廣一」。

いうぶつ 尤物【名】(尤は異の義)。女貌の妖(アデヤカ)なるもの。美女。晉の叔向、巫臣氏を娶らんとせるとき、その母曰はく「夫尤物者、以足レ移レ人。苟非二德義一、則必及レ禍」。

いうや 遊冶【名】容貌をのみ飾り遊び居るをいふ。放蕩といふに同じ。遊冶郎。

いうよ 猶豫【名】疑ひ多くして決斷せざるにいふ。猶も豫も、獸にして、性、疑多し。毎に、樹に上りて、久しく四方を伺ひ、人無ければ下り、須臾にしてまた上る。此の如くすること一再に非ず。故に決しかぬるものにいふ。「優柔不斷」。「狐疑不レ決」。轉じて、延期する意に用ふ。

いうよ 遊豫【名】あそびたのしむこと。孟子「一遊一豫爲二諸侯之度一」。遊冶。放蕩。

いうれき 遊歴【名】諸國を歴めぐること。

いかけぢのくら 鋳掛地鞍、沃懸地の鞍、【名】漆地の上に、金銀の粉を蒔きかけたる鞍をいふ。平義器談に「いかけは、今にいふいつかけといふものなり。沃懸とかくなり。いかけ地は、鞍のみに非ず、太刀の鞘、または手筥、文臺、硯箱などの類も、いかけ地にするなり。何にても、其の器を、一面に、金粉をひまなく沃ぎかくるを、いかけ地といふなり。其のいかけ地の上に、色々の蒔繪をするなり云々」と。

いかだし 筏師【名】筏に棹して、水上を行るを業とするもの。筏は、木竹などの材を編みて、船の如くに水に流して、運搬するもの。

いかのぼり 紙鳶、凧、風箏【名】關東にてたこ、奥羽にてテンバタ天旗、などいふ、皆同じ。小兒の玩具にて、竹をそぎて編みて骨を作り、これに紙を張り絲をつけて、空中に飛揚せしむるもの　事物紀原に曰はく、「紙鳶、俗謂二之風箏一。古今相傳曰、是韓信所レ作云々」と。

いかめしう 嚴、威猛【副】いかめしくの音便。おごそかに。厳重に。たけきさまに。えらく。甚しく。

いかものづくりのたち 喰物造の太刀、怒物作太刀、【名】毛皮の尻鞘(シリザヤ)などをかけて、その體、いかめしく拵へなしたる太刀をいふ。

いかる 怒、忿、慍、恚、嗔、【動ラ四】怒は喜の反にて、いかりの、面にあらはるゝをいふ。「喜怒不レ形レ色」。「帝嘗怒」。忿は、心中にいかりうらむこと。「心雖レ忿面從」。慍は少し怒ること。むつとすること。「人不レ知而不レ慍、赤不二君

子一哉」。恚は、恨み怒るにて、長くいかることなり。忿恚と熟用す。嗔は、目にかど立てゝ怒ること。史記「瞋レ目而見レ羽」。

いかるがのみや 班鳩宮【名】推古天皇の九年、聖德太子の建てし宮。その子山背大兄王も此に居りき。皇極天皇の二年。蘇我入鹿、兵を遣して之を焼く。王自經して薨ず。今、大和國法隆寺境内の夢殿の邊は、その跡なりといふ。

いきうし 行憂【形】行きたくなし。行くがいやなり。行きづらし。古今集「人やりの、道ならなくに、大方は、行きうしといひて、いざかへりなむ」。

いきたなし 寝穢【形】眠を貪ること。ねぼう。いさぎよくなし。

いきと 依稀と【副】字書に「依稀猶二彷彿一」とあり。よく似たる。そっくりと。

いきのを 息緒、【名】命のこと。玉の緒。息の緒に思ふは、命にかけて、大切に思ふといふ意。

いきほひ、はちくのごとし 勢如二破竹一【文】はちくのいきほひを見よ。

いきほひまうに 勢猛に【副】勢たけく。勢さかんに。徒然草「勢まうにのゝしりたるにつけて　いみじとは見えず」。

いきまふ 息【動ハ下二】息を張りてりきむこと。いきまくこと。

いくさのには 軍の庭【名】戰場。軍陣。

いくさをみそやをはぐ 見軍作矢【文】豫め用意なくして、事物に遭ひて、俄に力を盡すとも益なきことの例にいふ。盜人を捕へて繩を綯ふと同じき意。說苑に曰はく、「越石父曰、人勿レ言也。譬レ之猶二渴而穿レ井、臨レ難而鑄レ兵。雖レ疾、從而不レ及也」。

いくそ 幾十【名】いくばく。若干。幾許。

いくめのすめらみこと 活目天皇【名】垂仁天皇を申す。(イクノイリヒコーリチノ)「日本書紀」活目入彦五十狹茅天皇」。

いくりし 郁李子【名】木の名。にはうめ。蘡薁。白棣樹。古代は、單に郁とのみ言へり。

いくりし 郁離子【名】劉基、字は伯溫の號。

いくわん 衣冠【名】臣下の衣冠姿は、冠をつけ、袍を着、指貫をはく。この指貫を、大口袴に代へ下襲を着て、裾を曳き、石帶して帶劍したるを、束帶といふなり。

いくゐ、さくゐ 生井、榮井【名】生井神、榮井神、共に御井の神なり。所年祭の祝詞には「生井、榮井、津長井」と三座にわけていへり。榮井は、福井とも書く。福、榮、幸、皆同義。

いけだのしゆく 池田宿【名】遠江國磐田郡池田村。古、この宿の長者なる熊野(ユヤ)といふ者の娘に、侍從といふがありて、平宗盛に仕へけるよし、軍記物語などに見えたり。また、謠曲に「熊野」といふもあり。

いけだ みつまさ 池田光政【名】輝政の孫、寛永三年檜少將に任ぜられ、新太郎少將と稱せり。同九年、備前に封ぜられ、岡山に城を下し、熊澤蕃山をあげて國政を任じ、學校を起し、敎化大に行はれ、名君の稱あり。天和二年五月薨ず。年七十四。

いけづき 生唼、池月、生食【名】馬の名。賴朝二駿馬をもいふ。禪尼は、清盛の繼母にて、平治の亂の時、賴朝の命を助けて、伊豆に流さしめたる人。これによりて、遂に、平家の滅亡をいたしゝかば、紀州の歌人土岐光秋「池どのに、潛みし龍の、時を得て、雲こそ起せ、ひんがしの空」。

いけの たいが 池野大雅【名】畫家。通稱秋平、名は無名、又、大雅堂、霞樵の號あり。清人伊孚九につきて、畫法を學び、一家をなす。其の妻玉瀾もまた、夫の意を得、よく筆管をふるひ、三絃を彈じて、敢て、一錢なきを憂へず、畸人を以て目せられたり。安永五年四月歿す。年五十四。

いけはら かわか 池原香稼【名】長崎の人、眼科醫なり。漢學、國學に達し、宮內省文學御用掛を命ぜられき。今は、故人となれり。

いけひややかにして、みつにさんぷくのなつなし 池冷、水無三伏夏、松高、風有二一聲秋一【文】源英明の納涼の詠なり。和漢朗詠集に出づ。さんぷくを見よ。

いけべよしかた 池邊義象【名】肥後熊本の人、東京大學古典講習科出身なり。曾て佛國に遊び、今、京都法科大學講師たり。

いこうどうじ 異口同辭【句】各人のいふところの言、皆一致するをいふ。「異口同辨」に「異口同音」。

いこうどうきよく 異工同曲【句】工人は異なれど、その作りかたの同じきこと。別の方法なし、別の意見なしなどの意にいふ。

いこふ 息、憩、休、【動ハ四】休息する。やすむ。又、いこへりは息ひてありの約まれる語。

いさご 砂【名】すな。沙。細沙。纖沙。

いざここにわがよはへなむ いざ此處に我が世は經なむ【文】古今集「雪ふれば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞさきける」の次の歌。

わがよはへなむは世をば送らむなり。

いざことはむみやこどり いざ言問はむ都鳥【句】伊勢物語「武藏國と下總國との中に、いと大きなる川あり。それを隅田川といふ。(中略)、さるをりしも、白き鳥の、嘴と足と赤き、鴫の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず。渡守に問ひければ、是なむ都鳥といふをきゝて、「名にしおはゞ、いざこととはむ、都鳥、わが思ふ人は、ありやなしやと」。

いささけわざ 聊事、聊業【名】いさゝかなるしわざ。はんのしろしばかりの事。聊の禮返。

いざといはましを【句】古今集「小黒崎、みつの兒島の、人ならば、都のつとに、いざといはましを」。伊勢物語「栗原の、あれはの松の、人ならば、都のつとに、いざといはましを」。

いさよひにつき 十六夜日記【名】藤原爲家の室、阿佛尼が、夫の沒後、その實子爲相の所領たる播州細川の莊を、その先妻の子爲氏に押領せられたるより、鎌倉の裁決を仰ぎて、取返さん爲に、後宇多天皇の建治三年十月、京都を發して、鎌倉に下りし時の道中日記なり。

いしうちのそや 石打の征矢【名】鷹の尾羽の、第一第二の羽を石打の羽といふ。その羽をもて作りたる征矢なり。征矢とは、的矢に對して、軍陣に用ふる矢をいふ。

いしがつせん　石合戰、石戰戲【名】いんぢうちを見よ。

いしかはしやうげん　石川將監【名】名は忠房、德川幕府の旗下にして右近將監なり。目附、勘定奉行より、本丸留守役に進み、文政七年歿せり。年八十二。

いしかは　まさもち　石川雅望【名】狂歌師。江戸小傳馬町の旅人宿の子にて、通稱は糠屋七兵衛といひ、六樹園、宿屋飯盛、五老、蜿蜒齋等の號あり。天保元年三月歿す。年七十八。その著に、雅言集覽、都の手ぶり等あり。

いしかは　よりひら　石川依平【名】柳園、また、櫪が本と號す。遠州の和學者にて、本居宣長の門人。安政六年九月歿す。年六十九。柳園詠草あり。

いしぐろ　ちうとく　石黒忠悳【名】況齋と號す。越後の人。陸軍軍醫總監に進み、男爵を授けられぬ。明治三十四年職を辭し、今閑地にあり

いしづ　石津【名】地名。和泉國泉北郡にあり。

いしづき　石突、槍鐓【名】矛、槍、薙刀などの柄の本を包める金具にて、尖りたるを鐏といひ、平なるを鐓といふ。

いしにくちそそぎ、ながれにまくらす　漱ㇾ石枕ㇾ流【文】まけ惜みの強きこと。晉の孫子、荊王武子に謂つて曰はく、「當ニ枕ㇾ流漱ㇾ石ニ」と、王曰はく「石はそゝぐべきに非ず、流は枕すべきに非ず」と、孫子曰はく、「枕ㇾ流は、其の耳を清めんため、漱ㇾ石は、その齒を研がんためなり」と。

いしのてつてい　意志の徹底【句】徹は透ること、志のよく通りて、餘蘊なきこと。

いしのまき　石卷【名】陸前國牡鹿郡石卷町。仙臺を去ること十三里に在る港灣なり。

いしばら　まさあきら　石原正明【名】本居宣長の門人。尾張の國學者。其著尾張の家苞は新古今集中の歌につき注釋批評をなせるものなり。文政四年歿す。年六十二。

いしびや　石火矢【名】中世に用ひたる大砲の名。初は、丸に石を用ひ、後には、鐵、鉛などを用ひたり。

いしぶし　石伏、杜父魚【名】魚の名、形「ハゼ」に似て大なり。清流の石間に居り、腹に圓き鰭ありて、石に吸ひつきて、水面に浮ばず。ゴリ、カハカジカ、イシモチ、などもいふ。

いしやまでら　石山寺【名】近江國滋賀郡石山村にある眞宗の寺、如意輪觀音を本尊とす。山中風光に富み、その、秋の月は、近江八景の一に數へらる。「源氏の間」とて、紫式部が源氏物語をかけりと稱する部屋あり。

いしゆ　意趣【名】心のむくところ。こゝろばせ。また、「恨む意趣」より轉じて、遺恨の意にもいふ。

いしゆくわ　異株花【名】花には、一花に雄蘂と雌蘂とを具有せるものあり。是を兩性花といふ。而して、其の一を缺くものあり。これを單性花といふ。即ち一花に雄蘂のみの者と、雌蘂のみの者とあり。その雄蘂のみの花は、之を雄花といひ、雌蘂のみの花は、これを雌花といふ。而して又、胡瓜、栗などの如く、一株のうちに、其の雄花と雌花と、共に咲くものあり。之を雌雄同株といふ。又之に反して、麻、銀杏の如く、雄花と、雌花と株を異にして咲くものあり、これを、雌雄異株花といふ。

いしゆみ　石弓、弩【名】石を敵陣に投げやる機械。

いしよくたりて、れいせつをしる　衣食足而知ニ禮節一【文】管子に、「倉廩實而知ニ禮節一、衣食足而知ニ榮辱一」とあり。飢寒に苦しむものは、禮義も名譽も忘るとの義。

いしをいだいて、ふちにいる　抱ㇾ石入ㇾ淵【文】愚昧にして、己れ自ら、己れの害をなすをいふ。二程全書「釋氏其實是愛ㇾ身放不ㇾ得。故說許多。譬抱ㇾ石沈ㇾ河、以其重愈沈、途不ㇾ放下石頭、惟嫌重也」と。「抱薪救ㇾ火」「抱炭救ㇾ涼」など同義なり。すべて、行ふ所と、望む所と、反對するをいふ。

いしんでんしん　以心傳心【句】心より心に傳ふること。默示。暗々裏に示す。口にて述べ盡せぬ理法。佛經の語なり。

いせ　伊勢【名】三十六歌仙の一人。前の伊勢守藤繼蔭の女。七條后の宮人にして、寬平の末年、皇子を生む。

いせ、ていぢやう　伊勢貞丈【名】通稱は平藏、安齋と號す。國典故實に委く、安齋隨筆、貞丈雜記等の著あり。皆有職家の貫ぶ所なり。天明四年五月歿す。年七十。

いせのへいしは、すがめなりけり　伊勢瓶子（平氏）は素瓶（眇）なりけり【文】平家物語の中に出づ。伊勢守平（スガメ）忠盛を嘲笑せし語にて、瓶子は平氏、素瓶は、忠盛の右眼眇なりしによりて、其の國の陶器に準へしなり。

いせんせんせい　伊川先生【名】支那宋時代の儒者。名は頤、字は正叔、程顥の弟、少より高識あり、禮にあらざれば動かず。兄と共に一世の景仰する所となり、卒して伊川と諡せらる。世に程伊川といふ。

いせものがたり　伊勢物語【名】書名、二卷あり。業平の和歌を骨子として、その一代記の如く趣向をなせる物語。此の著、はじめは、在原業平の筆になれるを、後人の潤飾を加へしものなるべしといふ。

いせより、すまにまゐりけむも　伊勢より須磨に參りけむも【句】源氏の大將、須磨に下り給ひしとき、六條の御息所、伊勢より消息を贈られし源氏物語中の故事を思ひ出して。その境遇の類似せるを歎きたる平家物語月見の條の文句。

いそがばまはれ 急がば回れ【文】柴屋軒宗長の詠に「武夫の、矢走のわたし、早くとも、急がばまはれ、瀬田の長橋」といふがあり。

いそぎ 急【名】用意、支度、準備などの意。動詞よりなれる名詞。夫木集「年くれて、送り迎ふる、人毎に、いづれをいそぐ、いそぎなるらむ」。

いそしきみ 勤身【句】勤務に急がはしき身。

いそぶり 磯振【名】磯に寄する波。

いそもの 磯物【名】海藻の稱。磯にて取るゝものにて、昆布。鹿尾菜、若布の類、すべていふ。

いたがる 痛がる、感がる【動ラ四】心いたく思ふ。心にしみて思ふ。

いたくら しげむね 板倉重宗【名】勝重の長子、元和六年、父に代りて、京都所司代となる。後、國宿の城主となり、明暦二年十月、七十歳にて卒す。

いたこ 潮來【名】地名、常陸國行方郡の南端、霞浦の東岸にあり。

いたづき 勞、所勞【名】勉むること。骨折りすること。また、病氣。動詞より名詞となれるもの。

いたづく 勞【動カ四】勤勞する。ねぎらふ。懇切にす。また、病み煩ふ。

いたづらもの 徒物、害物【名】所行あしきもの。無益の人物。用なきもの。かひなきもの。わるさをするもの。惡戯者。また、鼠の異名。

いたはな 板鼻【名】中仙道の驛の名、上野國碓氷郡安中驛の東一里にあり。謡曲鉢の木「碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡につきにけり」。

いがく 異學【名】異端の學派。德川時代に、幕府にて朱子學をとりしより、他の學派を異學といひて禁止せり。

いご 咿唔【名】讀書の聲をいふ。「聞二咿唔之聲一」。

いたん 異端【名】正しからざる道。邪道。朱子曰く、「非二聖人之道一而別爲二一端一、如二楊墨一是也」。

いためがは 撓革【名】煉革ともいふ。膠を薄く解したる水に牛皮を浸し、水の徹りたるを見て、取出して、鐵鎚にてよくうち、日に乾して製す。幾枚も重ねて打てば厚くなる。之を以て鎧の札を作り、また、煉鍔などにも用ふ。

いたや 痛矢【名】身に深く中れる矢。

いたやのせき 板谷關【名】板谷は羽前の地名、岩代との國境にあり。米澤と福島との通路にて、昔時、米澤藩の關所ありし所。

いたる 至、到、臻、詣【動ラ四】至に至極にて、行きついたること。「至二富士川一而渡矣」。到は、彼方より此處に到着のこと。「至二新橋一到二神戸一」。臻は、聚り至る義。「敵兵莅臻」。詣は、進む、往くの義。學問の深きを「造詣」といふ。

いちかは くわくめい 市川鶴鳴【名】名は匡、字は子人、多門と稱す。上州高崎の儒者、藩侯の侍講たり。寛政七年七月歿す。年五十六。

いちかは べいあん 市川米庵【名】名は三亥、字は孔陽、米元章の書法をよくして大名あり。安政五年七月歿す。年八十。

いちがや 市谷【名】東京市四谷區の地。元、又、市谷門外に尾州の藩邸ありしにより、其の邸をさして市谷といへることもあり。

いちぎ 一義【名】一理。わけ。一理屈。

いちじせんきん 一字千金【句】非常に珍重すべきもの〻例にいふ。晉書「不レ貴レ勇而貴レ忍。此眞一字千金之兵法也」。

いちじつさんしうのおもひ 一日三秋思【句】詩經に「彼采レ蕭兮。一日不レ見、如二三秋一兮」の注に、「思念の深き、未だ久しからずして、久しく思はるゝをいふ」とあり。三秋は三ヶ月なり。

いちじのけたいは、いつしやうのけたいとなる 一時の懈怠は一生の懈怠となる【文】徒然草の中に出づ。一時の怠りよりして、一生をあやまるをいふ。佛書に「夫懈怠者、衆行之累。在家懈怠則衣食不レ供、産業不レ營。出家懈怠則不レ能レ出二離生死之苦一」などあり。

いちかはくわくめい 一字之師【句】陶岳の五代補に曰はく、「鄭谷在二遠州一、齊己携レ詩詣レ之。有二早梅詩一云、前村深雪裏、昨夜數枝開。谷曰、數枝非レ早也、不レ如二一枝一。齊己不レ覺下拜。自レ是士林以レ谷爲二一字師一」と。

いちじん 一人【名】天子を申す。さて、一の人といふは、攝政關白たる人をいひ、一の上といふは、左大臣なり。

いちじゆのかげのやどり 一樹の蔭の宿【句】說法明眼論に「宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結緣」と見えたり。

いちじやうゐん 一乘院【名】大和國奈良にある寺、興福寺の寺務門跡なり。

いちだんぐわんのち 一彈丸之地【句】鐵砲玉の如き狹き地をいふ。戰國策に「此彈丸之地、猶不レ予也」と。

いちぢやう 一定【副】かならず。きつと。確に。

いちでう かねら 一條兼良【名】關白藤原經嗣の二子。後花園天皇の永享四年攝政に、文安三年、太政大臣に、四年關白となる。享德二年、職を辭して三宮に准ぜらる。應仁元年また、關白となり、文明二年辭し、剃髮して勸惠と號し、世に一條禪閤と稱す。同十三四年の頃薨ず。年八十。博學弘才に

して著書多し。後世、その庇を蒙ること多し。

いちにん、しごかぬんのしよく　一任四五箇年の職【句】神皇正統記にある句。國守の任ぜられたるに、國守の任期は、初め六年なりしが、文武天皇の時四年に改め、孝謙天皇の時また六年となり、後には、國の遠近によりて、四年、五年の制となれり。

いちのかみ　一の上【名】左大臣をいふ。左大臣なき時は、右大臣をもいふ。いちじんを見よ。

いちのたに　一谷【名】攝永年間、平氏の城を構へし地。攝津國武庫郡須磨村にある溪谷なり。一ノ谷、二ノ谷、三ノ谷あり。

いちのひと　一の人【名】攝政關白たる人をいふ。いちじんを見よ。

いちのみや　一の宮【名】第一の皇子をいふ。後醍醐天皇の一の宮といへば、尊良親王なるが如し。また、延喜式神名帳に記載せられたる、國々の第一位にある神社をいふ。

いちぶ　一分【名】國司の下官に、史生（シシヤウ）あり。これを一分と稱せり。神皇正統記に「國司の一分に至るまで」。職原抄に「史生謂二之一分一」と。諸國に公廨（クガイ）稻といふものありて、之を、國司ある、守、介、掾、目、史生の五人に分配するとき、五、四、三、二、一の差法を以てす。すなはち、史生は十五分一をうくればいふ。

いちりつ　一律【名】一樣に同じ。「千遍一律」。

いちみどうしん　一味同心【名】心を合せて味方をするをいふ。

いちりづか　一里塚【名】行程の知れ易き爲に設けたる塚。豐太閤の時よりなりと。

いちれん　一聯【名】律詩の一對句を聯といふ。又、聯句ともいふ。「道愛寺鐘歇枕聽、香爐峯雪捲簾看」。これにて一聯なり。

いちやういふく　一陽來復【名】冬至をいふ。陰窮まりて、陽、生ずる時なり。冬至は、日の最短季故、是より一日ましに日長くなるなり。また、好運が向きくることにいふ。

いちやうのは　一葦水【名】一葦とは一葉の片舟に譬ふ。一葉の片舟にて渡り得べき水程をいふ。もと「一衣帶水」を「一葦帶水」に誤用せるより出づ。

いつかく　一角【名】角魚ともいふ。北極の海獸、鯨の類にて、形「すなめり」に似たり。二本の牙あり、一は短く、一は長くして、長きは一丈にあまるもありて、象牙にも勝れりと。藥用に供す。洋名ウニコール（ツウ）。

いつかく　一角【名】一通の義。「公文一角」は公文一通なり。

いつかくのねむり　一覺之眠【句】秦觀の詩に「布衾一覺

睡。身世成渺茫」とあり。

いつかげん　一家言【名】自己の主張して唱へたる一派の論說。史記の敘傳に「畧以拾遺補闕、成二一家之言一」と。又獨斷の言論。

いつきかせい　一氣呵成【句】一息に出來上ること。速に出來ること。休まず爲（ナ）あぐることなり。

いつきに、とたびたちて、てんかのたみをねぎらふ　一饋十起、以勞二天下之民一【文】（饋は、食を進むるなり。禹が一飯に十たびもたちて、天下の民を慰勞せしをいふ。吐哺握髮と同義。

いつきのつちをもて、たいがのながれをささふるにことならず　一簣の土を以て、大河の流れを支ふるに異ならず【句】（簣は、竹又は草を編て作りたる土をもる器）。微力をもて、大亂を救はんとするに同じく、成し得べからざるをいひ、力及ばざるに喩ふ。漢書「武嘉區々、以二一簣一障二江河一、用況二其身一」とあるより取れり。

いつくわくせんきん　一攫千金【句】一つかみに千金を得る意にて、冒險事業をなすに喩ふ。

いつくわん　一貫【名】貫は通の義。首尾相貫はれるを。論語「吾道一以貫之」。主義をかくさるを「主義一貫」なと。

いつこくせんきん　一刻千金【句】時間の貴きをいふ諺。東坡の詩に「春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺人寂寂、鞦韆院落夜沈沈」とあるよりいづ。英國の諺にも、(Time is money)といふがあり。

いつきよ　逸居【名】怠りて暮すこと。孟子「飽食暖衣逸居、而無レ教、近二禽獸一」。

いつきよりやうとく　一舉兩得【句】一つの事にて、兩方とも都合よくなること。類書纂要に「爲レ學看二文學一、爲レ心靜看。即滴養究索之功、一舉兩得」とあり。

いつしやう　一餉【名】一飯に同じ。韓退之の詩「蹔レ得二餉樂一、有レ如二聚飛一蚊」と。

いつしやうさんたん　一倡三歎【句】倡は唱に同じく、詩歌を吟ずること。もと琴音一たび唱へて、僅に三人之に和するをいふ。禮記「一唱而三歎、有二遺音一矣」と。三歎は、三たび歎息する義に非ず。然るに、後世繆りて、詩文の巧妙を稱する語に用ふ。

いつしやうこうなりて、ばんこつかる　一將功成萬骨枯【文】一將の功の成るには、萬卒の生の損するをいふ。唐人の詩に、「澤國江山入二戰圖一、生民何計樂二樵蘇一、憑レ君莫レ說二封侯事一、一將功成萬骨枯」と。

いつしん、すべてきもなり　一心都是膽【文】剛膽なる人をいふ。三國志に、趙雲寡兵を以て、曹操の大軍を破る。劉備

之を稱して「一手龍一身泄是謬」と。

いつしんふらん　一心不亂【句】心を一方にのみそゝぎて他を顧かざるをいふ。

いつしをきらば　いつしをきるべし　一枝を切らば一指を斷るべし【文】豫州須磨寺に「若木櫻」といふ名木あり。又、この木に「辨慶が筆」と稱する制札あり。其の文に「此花江南所無也。一枝於折盜之輩者、任天永紅葉之例、後一枝、可斷一指。嘉永三年二月二日」とあり。

いつたさんれい　一刀三禮【句】佛像を彫刻するに敬意を表して「一刀を入るゝごとに三度禮をするゝこと。

いつたうりやうだん　一刀兩斷【句】利刀を以て兩斷するが如く、決斷の速なるをいふ。

いつたんのし　いつぺうのいん　一簞食、一瓢飲【句】清貧に甘んずるをいふ。孔子が顏回を稱せる語にて、論語にあり。

いつてい　一丁字【句】一文字。文字一箇。一个字。文字を知らざるものを「目無一丁字」といふ。

いつつう　一通【名】字典に「首尾貫曰一通」と。

いつてういつせき　一朝一夕【句】時間の短き義なれど、多くは「容易に」物の成る時に用ふ。王陽明の文に「嗚呼其又也豈一朝一夕之故哉」と。周易より出でし語。

いつしんふらん　一心不亂【句】心を一方にのみそゝぎて他を顧かざるをいふ。

いつしをきらば　いつしをきるべし　一枝を切らば一指を斷るべし【文】豫州須磨寺に「若木櫻」といふ名木あり。又、この木に「辨慶が筆」と稱する制札あり。其の文に「此花江南所無也。一枝於折盜之輩者、任天永紅葉之例、後一枝、可斷一指。嘉永三年二月二日」とあり。

いつたさんれい　一刀三禮【句】佛像を彫刻するに敬意を表して「一刀を入るゝごとに三度禮をするゝこと。

いつたうりやうだん　一刀兩斷【句】利刀を以て兩斷するが如く、決斷の速なるをいふ。

いつたんのし　いつぺうのいん　一簞食、一瓢飲【句】清貧に甘んずるをいふ。孔子が顏回を稱せる語にて、論語にあり。

いつてい　一丁字【句】一文字。文字一箇。一个字。文字を知らざるものを「目無一丁字」といふ。

いつつう　一通【名】字典に「首尾貫曰一通」と。

いつてういつせき　一朝一夕【句】時間の短き義なれど、多くは「容易に」物の成る時に用ふ。王陽明の文に「嗚呼其又也豈一朝一夕之故哉」と。周易より出でし語。

いつしんこう　一點紅【句】もと妓女の異稱なり。後には尤物と同義に用ひ、或は「ひとり衆に秀でたる」又「衆と異りて目に立つに譬ふ」といふ。「滿綠叢中紅一點」と。

いつちゆうぶし　一中節【名】淨瑠璃節の一派にて、都一中に創る。一中は「京都本願寺派の僧なりしが、淨瑠璃を好み、年十二歳の時還俗して「山本土佐掾の門に入り、遂に一機軸を出し、名を一時に博せり。初名を須手朴といひ、後に都太夫一中といへり。享保八年九月歿す。

いつつぎぬ　五衣【名】やなぎのいつゝぎぬを見よ。

いつつのくるま　五車【名】莊子天下篇に「惠施多方、其書五車」とありて、五車に藏むほどの書籍の多きをいふ。されば、成語考に「博學之儒、學富五車」ともいへり。

いつとものをのかみ　五部神、五伴緒神【句】五部は、ミヲ臣、忌部、猿女、鏡作、玉造にして、各、其の長を伴緒といふ。即ち、天孫降臨のとき、此の五部屬を統率して從ひまつれる、天ノ兒屋ノ命（中臣）、天太玉ノ命、忌部）、天鈿女ノ命（猿女）、石凝姥ノ命、天ノ玉祖ノ命（玉作）の五神、これなり。

いつのかみのぶつな　伊豆守信綱【名】松平信綱なり。

いつはのおらそひ　鵝蚌爭【句】戰國策に「趙使蘇代爲燕將、謂趙王曰、川蚌出曝而鷸啄其肉、蚌合而箝其喙、鷸曰、今日不雨明日不雨、必有死蚌、蚌亦謂鷸曰、今日不出明日不出、必有死鷸、兩者不肯相捨、漁者得而并擒之。今趙且伐燕、燕趙久相支以敝大兵、臣恐強秦之爲漁夫也」とあり。二人相爭ふ時、他の一人之に乘じて奇利を博するにいふ。「漁父之利」といふもと同義。

いつび　溢美【名】過賞なり。ほめすぎるをいふ。韓子「夫傳言兩喜兩怒之言、天下之雖者也。夫兩喜必多溢美之言、兩怒必多溢惡之言」と。

いつぱん　一般、一班、一斑【名】一般は、おしなべて、總じて、全體、などの義に用ふ。郎康節の詩に「一月到天心處、風來水面時、一般清意味、料得少人知」と。一班は、一班は階位、列の義、一級、一列などいふに同じ。「一班の俗人」。一斑は一部分の義。一部を見れば、全部を知るなどの義に用ふ。豹の皮の斑より出でし語。「一斑之美、可以察全豹」と。

いつべ　嚴瓮【名】鹽を清めたる瓮。祭事に用ふる陶器をいふ。

いつぽんごしよどころ　一本御書所【名】内裡の東の、建春門内の侍從所の南に、寫所と並びてあり。相承有職鈔に、「公卿を以て別當とす。世間の書一本、公家に獻ずるを納めらるゝ所なり。月奏あり」と見ゆ。

いつまつりごと　嚴政【名】よき政治をいふ。

いつみがはら　泉川【名】山背川の一名。今木津川といふ。木津を作ればに從し、山城國の淀に至りて淀川に合し、大坂灣に入る。

いつみさぶらう　和泉三郎【名】藤原秀衡の子忠衡。秀衡の諸子、秀衡の死後、義經に叛きしを、忠衡獨り父の遺言を守りて義經を輔け、遂に諸子と戰ひて死せり。

いつもののくにのみやつこ　出雲國造【名】天穗日命の後にて、代々出雲大社に仕へて、祭祀を掌れり。國造とは、上古の地方長官なり。出雲の國造が新任せられたる時、朝廷に出でゝ、奏する詞を「出雲國ノ國造ノ神賀詞」といひて、今に傳はれり。

いつや　乙夜【名】夜二更、今の午後十時なり。淡窗殘に「五夜を甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜。爾雅甲乙相傳、謂五更」とあり。乙夜之覽は、天子の讀書せらるゝをいふ。唐書「太宗甲夜視事、乙夜觀書」とあるに本づく。

いつよ　逍豫【名】逍遙と同義。いうよを見よ。

いつらく　佚樂、逸樂【名】前と同義。

いつをもつてらうをまつ　以逸待勞【文】勞は疲るゝをいひ、逸は安んずるをいふ。孫子軍爭篇「以近待遠、以逸待勞、以飽待飢、此治力者也」とありて、大に氣力を貯へて、疲勞したる者に對ふをいふ。

いでいな【感】これこれやさあなどいふに同じ。

いとふ 銀杏、公孫樹、鴨脚【名】木の名。此の樹の幹より、乳状の木實垂るゝゆゑ、乳の木ともいふ。ちゝのみの條を見よ。

いでゆ 出湯、温泉【名】山などより自然に沸き出づる故、かくいふ。

いといがは 糸魚川【名】越後國西頸城郡にある川。

いとう 伊東【名】地名、伊豆國賀茂郡伊東村。鎌倉時代の舊蹟多し。温泉あり。

いとう 異等【名】特別に異りて、人物の勝れたるをいふ。漢書武帝紀「吏民有二茂才異等一可レ爲下將相及使二絶國一者上」と。

いどう 異同【名】同じきと異るとゝ。又、同の義にも、異の義にも用ふ。前後の句意によりて區別すべし。

いとうじんさい 伊藤仁齋【名】復古派の儒者。名は維楨、字は源吾、平安の人。寶永二年三月歿す。年七十九。古學先生と諡す。篤行を以て稱せられ、學博く、一世の鴻儒たり。

いとうすけやす 伊東祐亨【名】舊鹿兒島藩士、日清戰役の際、海軍聯合艦隊司令長官として戰功あり。現に、正三位勳一等功二級子爵海軍大將たり。

いとうとうがい 伊藤東涯【名】名は長胤、字は源藏、皆々齋と號す。仁齋の長子。京師に住し、元文五年歿す。年六十七。

いとうとうり 伊藤東里【名】東涯の孫、名は弘美、通稱延藏。文化十四年歿す。年六十一。

いとく 懿德【名】美德に同じ。懿は醇美なり。詩經周頌に「我求二懿德一」と。

いとぐつ 絲履【名】生糸にて編みたる履。

いとなみ 營【名】營業。活計。また、準備、支度などの義にも用ふ。

いとのきて 彌甚【副】いとゞしく。甚しく。

いとんのとみ 猗頓之富【句】猗頓は古の巨富人。孔叢子に「子產問二子順一曰、臣乏於財、聞二猗頓善貨殖一、欲レ學レ之云々」また、成語考に、「貲財敵二王侯之富一、陶朱猗頓」とあり。豪富者をさして、猗頓の富といふは、猗氏に本づけり。

いながきはくがん 稻垣白嵓【名】名は長章、字は稚明、白嵓、探園等の號あり。太宰春臺の門人。安永六年六月歿す。年八十三。

いなづのうら 稻津浦【名】伯耆國の地名。後醍醐天皇の隱岐を出でまして名和長年に依られしとき、船を着けさせられし地。梅松論には奈和庄野津浦とありて、增鏡には稻津浦とあり。

いなとみ いがにふだう 稻富伊賀入道【名】砲術に達す。稻富流の祖、初細川忠興に仕へ、後德川家康に聘せらる。

いなば いつてつ 稻葉一徹【名】名は貞通、美濃の人、入道して一徹、仙齋と號す。齋藤氏に仕へ、後信長に歸し、遂に秀吉に事へ功あり、三位法印に叙せらる。天正十六年十一月卒す。年七十三。

いなみのはら 印南原【名】播磨國印南郡にあり。拾遺集「女郎花、吾にやどかせ、伊なみ野の、いなといふとも、髮を過ぎめや」は、いなみの原に辭むとかけたる歌なり。

いにしへのかづしか 古の葛飾【句】古は、今の東京市の隅田川を隔てゝ、中川に沿へる東方一帶の地は、すべて、下總國葛飾郡なりき。

いぬやま 犬山【名】獵の名。獸を犬に逐はせて獵ること。

いぬゐ 犬居【名】犬のつくばひたる如く蹲踞したるをいふ。

いのうただより 伊能忠敬【名】字は子齋、東河と號す。下總國香取郡の人。星曆の學を好み、寛政六年、家產を、子の景敬に委ねて江都に出で、高橋東岡に就きて學び、後幕府に仕へ、五畿七道殆ど歩測せぬ處なくして、盡く測量を行ひ、圖を製す。推歩測量の精識、當時ひとり忠敬を推せり。文化四年四月歿す。年七十七。明治十六年、正四位を贈らる。

いのちをこうまうよりもかろんず 輕二命於鴻毛一【文】義に臨みては、身命を抛ちても、遂行することをいふ。司馬遷の文に「人固有二一死一。死或重二於泰山一、或輕二於鴻毛一」とあるより、世俗「義は泰山より重く、命は鴻毛より輕し」といふ。鴻は、鳥の名なり。

いはくらともよし 岩倉具視【名】舊公家にて維新の功臣なり。明治三年、外務卿より右大臣に遷り、明治十六年七月、大勳位公爵を以て薨ず。年五十九。太政大臣を贈らる。今の公爵具定の先代なり。

いはさきやたらう 岩崎彌太郎【名】三菱郵船會社の創立者にして、今の、男爵彌之助の先代なり。土佐國安藝郡井之口村に生る。本邦航海業上に功ありしを以て、從五位に叙せられぬ。一代にて、第一流の富を致しゝは、凡ならずといふべし。明治十八年二月七日歿す。年五十二。

いはさまたべゑ 岩佐又兵衛【名】浮世繪の元祖にて、世に浮世又兵衛といふ。名は勝重、荒木村重の子なり。父の死後、京に出でゝ、土佐光則の門に大和繪を學び、遂に一家をなし、當時の風俗を寫出して、名を博せり。

いはしみづのはちまんぐう 岩清水八幡宮【名】山城國綴喜郡八幡町に在り。宇佐大社たり。

いはたけ 岩茸【名】菌の一種にて、深山の岩間に生ず。形きくらげに似て、其の色、表は褐色、裏は深黑色なり。乾し

て食用とす。

いはせ きやうでん 岩瀬京傳 【名】人情小說の大家。名は醒、號は山東庵、又、京傳。文化十三年九月歿す。年五十六。

いはだたみ 岩疊 【名】平面なる岩の、幾箇もたゝみかさなれるをいふ。

いはつをつたふ 傳ニ衣鉢一 【文】佛家の語よりいでゝ、師道を傳ふるをいふ。傳燈錄に「初祖達摩、奉ニ佛衣鉢一來ニ東土一、得道者付レ之、以爲ニ眞印一。至ニ大祖大鑑一、乃置ニ其衣一而無レ傳焉」。

いはな 岩魚 【名】魚の名。谷川の岩の穴に住む。形あゆに似て、少し白し。味淡泊にして、食用に適す。

いはなし 岩梨、巖裳子 【名】木の名。高山の頂等にあり。高二三寸にして、地に附きて繁る。葉のさま、黃楊の如く、實は南天に似て、熟すれば赤くなる。味甘美なり。

いはねさくみて 岩根踏分て 【句】岩根の根は接尾語。さくみは、踏み分くること、マ行四段活用の動詞。萬葉「山河をいはれさくみて、踏み通り、國まぎしつゝ」。

いはばしの 石橋 【枕】石橋は、流にとび石を据ゑて渡るをいふ。その石と石との間、近くあるもの故、間近しにかけ、間の意より、又、逢ふ、近江などにかけていふ。

いばしんゑん 意馬心猿 【名】情意の制し難きをいふ。心地觀經に「心如ニ猿猴一、遊ニ五欲樹一、不ニ暫住一。故云々」。梵網經に「心馬馳ニ惡道一、放逸難レ禁」などあるより出でし語。

いはばしる 石走 【枕】瀧の、岩上を走り流るゝ義より、たぎ(瀧)たるみ(垂水)にかく。垂水は瀧をいふ。又攝津の地名にも垂水(タルミ)といふあり。

いはほごりしく 巖凝重く 【句】岩石の重疊せるをいふ。しくは繁くの義なり。副詞句、形容句として用ふ。

いはまでら 岩間寺 【名】近江國滋賀郡石山村の岩間山にあり。正法山と號し、千手觀音を本尊とす。石山寺を去る一里半ばかり。

いはみぎんざん 岩見銀山 【名】鼠とり藥をいふ。もと、石見國邇摩の銀山より出づる礬石にて製せしかば、此の名あり。

いばゆ 嘶 【動ヤ下二】いななくに同じ。太平記「匹馬風に嘶えて」。

いはれほのめく 言はれ仄めく 【動カ四】言はるゝ樣子なり。噂せらるゝ樣なり。

いひおこす 言遣 【動サ下二】云うでよこす。言ひ送る。

いひしらず 言知らず 【句】何ともいはれず。いふ事を知らず。いひやうもない。「いひしらず、をかし」は、何ともいひやうのなき程面白しとの意にて、副詞句。

いひだ としびら 飯田年平 【名】通稱七郎、石園と號す。因幡の人、萬延元年鳥取藩の國學所の教授となる。明治に至り、神祇大史となり、式部職御用掛に轉じ、從六位に叙せらる。十九年歿す。年六十七。

いふいふ 悒悒 【名】心安からず憂ふること。くよくよする。ふさぐ。悒鬱。憂悒。

いふがひなきこと 言詮なき事 【句】言ひても詮なきことの義。こんな事。つまらぬ事。いくちのないこと。

いぶきやま 伊吹山 【名】美濃國池田郡にある山。この山より艾を産し、いぶきもぐさとて有名なり。

いぶく 息吹 【動カ四】いきふくの約。息を吐くこと。

いふく 異腹 【名】はらちがひ。はらがはり。ことはら。「異腹の兄」は母の異なる兄。

いふじやう 揖讓 【名】互に禮して讓り合ふこと。支那の禮法なり。遜讓、謙讓などいふに同じ。

いぶせし 鬱悒 【形】心の結ぼれて、晴れやかならぬをいふ。また、「いぶせき住居」は、むさぐるしく見苦しき家。

いへのかぜをおこす 家風を興す 【文】菅原道眞の母の歌に「久方の、月の桂も、をるばかり、家の風をも、ふかせてしがな」。家の名譽をあぐるほど、立身出世すること。

いほざり 五百霧 【名】深くこめたる霧をいふ。

いまかがみ 今鏡 【名】一名續世繼。後一條天皇より高倉天皇に至るまでの、假名書の歷史なり。著者不詳。

いまがは さだよ 今川貞世 【名】上總介範國の次子。足利義詮に仕へて、遠江守護職を受け、後、髮を剃りて了俊と號す。義滿の時、鎭西探題となり、應永の末歿す。文學あり。また、和歌をよくす。難太平記、今川双紙、九州合戰記、道行ぶり等の著あり。

いまし 汝 【代】なんぢにおなじ。みまし(御坐)。

いますがごと、まことをつくす 在すが如、誠を盡す 【句】父母の歿せし後も、其の存生の時の如く、誠を盡して祭るをいふ。論語「祭如レ生、祭レ神如レ在レ神」。また「事レ死如レ事レ生、事レ亡如レ事レ存」で

いまどき 今時 【名】現時。現今。當時。當世。

いまは 今は 【句】「今は限り」といふ句の略にて、「今はと出でたつ」、「月も今はの山の端」などいひ、又、人の死ぬる時をいふ。最後。臨終。

いままゐり 今參、新參 【名】新に仕へたるもの。又新に仲間入りして事に慣れぬもの。今俗に、新參者(シンサンモノ)、しんまへなどいふ。

いまめかし 【形】わざと改めて。當世風。「いまめかしき御詮」は、今改めていふに及ばぬ仰せといふほどの意。

いまもみてしが 今も見てしが【句】以前に見たりし如くに、今も見たしとの意。しがは願望をいふ助辭。古今集「あなこひし、今も見てしが、山がづの、垣ほに咲ける、大和撫子」。

いまやう 今樣【名】歌の一體。古體に對して、今樣歌といふ意。七五、七五、七五、七五の四節、八句より成れる歌。又、今風。當世風。

いまりやき 伊萬里燒【名】肥前國伊萬里にて燒きたる陶器の名。略して、いまりともいふ。

いまゐきうゑもん 今井久右衛門【名】東京麴町區飯田町の商人にて、龜屋久右衛門と稱す。太田蜀山人の門人。文政十一年、二世蜀山人の號を繼ぎ、十二年三月歿す。

いまゐかねひら 今井兼平【名】中原檜守兼遠の子。根井行親、樋親忠、及、兄の樋口兼光と共に、木曾義仲の四天王と稱せらる。

いん 印【名】印形。印章。漢官儀に曰く「吏秩比二千石以上一、銀印龜鈕。其文曰レ章、刻曰二某官之章一。二百石以上、銅印龜鈕。其文曰レ印、刻曰二某官之印一」とありて、もと官用の者なりしが、後世、一般に用ふ。

いん 引【名】文章の一體。大略、序の如くにて、稍短簡なり。

いんいん 殷殷【副、形】雷聲をいふ。詩經「殷其雷」の注に、音盛なる貌とあり。また「轔轔殷殷」などゝ連用す。

いんいつ 淫佚【名】放逸に同じ。心の欲するまゝに、なすこともなさで遊ぶをいふ。安佚。樂佚。

いんう 霪雨【名】なが雨をいふ。禮記に「霪雨霏降」。霪霖。陰雨は暑同義なれど、かきくらしふる雨にもいふ。

いんうん 絪縕【名】天地の氣相合して和するをいふ。易の繫辭に「天地絪縕萬物化醇」とあり。

いんえん 姻緣【名】連續せるをいふ。文選「賓二緣山岳之臣一」。他につきまつはる意にもいふ。

いんえん 因緣【名】いんねんともいふ。たより。ゆかり。てづる。ちなみ。佛教の語。いんれんづくは宿世の緣の義。

いんかん 殷鑑【名】鑑み戒むべき例。かゞみ。失敗の模範、過失の實證などいふ義。殷鑑不レ遠は殷鑑は眼前に在りの意。

いんきふ 飮泣【名】すゝりなきすること。聲を立てずに泣くこと。漢書に「飮泣吞聲」。

いんぎん 慇懃【名】よしみ。交り。れんごろ。ていれい。

いんくんし 隱君子【名】菊の異名。隱逸花ともいふ。菊は春芳を競はず、群卉に後れて開く。故に、山林に隱れたる君子に比し、又隱逸の士に比して、かくいふ。周茂叔の愛蓮說に「菊花之隱逸者也」。

いんごふ 因果【名】原因と結果。前になしたる業の報い。佛教の語。因緣と同義にも用ふ。いんぐわづくなどのごとし。なほ、次の語を見よ。

いんぐわおうはう 因果應報【句】因果と同義。華嚴經に「擧レ果知レ因、譬如二蓮華一、方吐二其芳一、果具二其中一」。

いんくわつ 隱栝【名】曲れる木を正す器。荀子に「枸木必待二隱栝烝矯一然後直」。枸は曲木なり。記錄の誤を正すをいふ。正誤。校正。訂正。

いんくわん 蔭官【名】恩人をいふ。世話になりし人。笑林廣記「復被二一蔭官一延入レ幕」。

いんけつ 引決【名】自殺すること。責を引いて身を殺すこと。司馬遷の文「不レ能二引決自裁一」。

いんけん 引見【名】眼前に召して見ること。相對面すること。接見。

いんけん 隱見【名】少し見ゆる。ほのかに見ゆる。見え隱れする。「僅知二燈火隱見一」。

いむけのそで 射向の袖【名】鎧の左の袖。弓を射る時敵の方に向くる故にいふ。矢石の間を進む時は、肩より外して眞向にかざして楯の代りになして進む。

いんご 隱語【名】謎。あひことば。符徽。

いんこう 咽喉【名】のど。又、要害の地。

いんごふ 因業【名】頑固。無情。佛經の「因緣ある惡業」より轉ぜし語。

いんし 淫祠【名】祀るべき理由なきに祭れる神。怪しき社。淫祀。

いんしふ 因襲【名】從來のしきたり。ならはせ。これまでのくせ。「因襲之久至二于玆一矣」。

いんしん 殷賑【名】にぎやか。ゆたか。富み足ること。西京賦に「鄕邑殷賑」。殷軫。殷阜。殷富。繁昌。

いんしやう 印象【名】印を以て白紙に捺す時、其の痕跡を殘すと均しく、感覺の結果が、心中に殘留すること。

いんしよう 引證【名】證據をひくこと。「引證該博」。

いんじゆ 印綬【名】綬は印を佩ぶる組なり。すなはち、官印をいふ。「帶二封國之印綬一」。

いんじゆん 因循【名】ぐづぐづすること。決斷に乏しきこと。敢爲の氣象なきこと。姑息。

いんじよく 茵褥【名】しきもの。しとね。夜具。魏史「不二茵褥綠飾一」。

いんせき 姻戚【名】親戚。親族。

いんぜふ 引接【名】佛經の語、引導に同じ。彌陀佛の來迎して淨土に導き往生を遂げしむること。また轉じて、誘ふ意

に用ふ。

いんぜん 院宣【名】後白河天皇より以來、上皇、院中に在りて政をきかせ賜ふ。これを院政といひ、その命令を院宣とも、院の宣旨ともいふ。

いんたう 允當【名】正しく當れること。適當。正當。

いんたう かだいにとらはる 殷湯夏臺に囚はる【文】殷湯は、夏の桀王を鳴條に破りて、殷の國を創立したる人。はじめ、桀の爲に夏臺に囚へられ、後釋されてより、伊尹を輔相とし、遂に、兵を率あて桀を伐ち、これを放ちて、自ら、天子の位につけり。たうぶのはうばづを見よ。

いんだう 引導【名】いんぜふに同じ。

いんち 尺【名】英尺一呎の十二分の一(inch)。わが曲尺八分三厘六毛餘。

いんぢうち 印地打【名】五月五日、小童の河原に出で、小弓を持ちて左右に分れ、戰爭のまねすること。又、石合戰をもいふことあり。

いんとく 陰德【名】人に知らぬやう善を行ふこと。訟苑「有二陰德一者心享二其榮一以及二子孫一」。

いんとく 隱匿【名】かくすこと。惡意ありて隱すをいふ。隱慝。

いんとん 隱遁【名】世の中を厭ひて、山林などに隱るいこと。その人を隱遁者、隱士などいふ。

いんねん 因緣【名】いんえんの轉音。

いんぱん 殷繁【名】殷阜に同じ。

いんぷ 殷阜【名】殷賑に同じ。楊子法言「務在二殷一民阜一財」。

いんび 隱微【名】微(カス)かにして顯はれざること。幽微。玄微。

いんぶんいんぶ 允文允武【句】文武に長じたるをいふ。允は信なり。まことにと訓す。書經「允文允武克讓」。允の音正しくは、ゐん。

いむべ 忌部、齋部【名】上古の氏族の名。ながさみを見よ。

いむべ ひろなり 齋部廣成【名】嵯峨天皇の大同頃の人。世々祭官の職たり。古語拾遺の著者。

いんめつ 堙滅【名】堙もれ消ゆること。自然に廢れて跡方なくなること。

いんもつ 音物【名】好意を通ずる爲に贈る物品。

いんやく 隱約【名】隱微にして簡約なること。大略しか知られぬこと。あらはれずして困窮すること。

いんよう 引用【名】引證。又、引證に用ふる書物。

いんりん 淫霖 霪霖【名】ながあめ。爾雅の釋天に「久雨謂二之淫一淫謂二之霖一」。霪雨。

いんろう 印籠【名】德川時代に、腰に帶びて藥をいれしもの。

いもがゆ 芋粥【名】古の芋粥は、山の芋の粥なり。薯預粥。

いもなね 妹【代】女を親みていふ詞。妹(イモ)といふに同じ。

いものづかさ 典鑄司【名】大寶令の制に、大藏省の被管に屬し、「正一人、掌二造鑄金銀銅鐵塗飭瑠璃(謂火齊珠也)玉作云々」とあり。瑠璃は玻璃といふに同じく、硝子なり。いもんづかさともいふ。

いもんののぞみ 倚門之望【句】親の鄕里に待ち居ることをいふ。戰國策「王孫賈之母、謂レ賈曰、汝朝出而晚來、吾則倚二門而望一、暮出而不レ還、吾則倚二閭而望一」とあるに本づく。外に居る者にて、故園に、母の存する者を、「倚門之望あり」ともいふ。

いやはて 彌果【名】最後。最終。にをそへて副詞に用ふ。

いゆうと 雄圖【名】大なる計畫。

いゆうひ 雄飛【名】大になすところあるをいふ。

いゆきはばかる い行き憚る【動ラ四】熟語の動詞、いは接頭語。行き憚るにて、行きかぬる意。萬葉集に「白雲も、いゆきはゞかり、飛ぶ鳥も、飛びものばらず」。

いよず 伊豫簾【名】伊豫國浮穴郡父之川村より產出する簾。露の峯の山中の篠、極めて細く六七尺にも延ぶ。その莖にて編めるものをいふ。又、莖にて編めるをもいふ。

いらい 倚賴【名】人に倚りたのむこと。後漢書「自二天子一及二大臣一、皆倚二賴之一」。依賴ともかく。

いらうざき 石廊崎【名】伊豆國賀茂郡の極南の海中に斗出せる地。燈臺あり。南端に祠あり、石室神社(イラウ)といふ。昔時、石室の權現と稱せしもの。

いりひをも、まねきかへさんずいきほひ 入日をも招き返さむず勢【句】返さむずは返さんとするの約略。ろやうがひをかへすを見よ。

いりん 彝倫【名】(彝は常、倫は理なり)人たるものの、常に守るべき道理。書經「我不レ知二其彝倫攸一レ敍」。

いる 入、納、容【動ラ四】入は出の反對にて、外より中に進み入ること。納は、物を受けいるゝ義。受納。收納。納稅。容は、器中に物をいるゝなり。「容レ人」は、心を器にたとへていへるなり。

いるか 鯨魚、海豚【名】海獸にて、形鯨に似たり。脂は燈油とし、肉は食用とす。

いろ 倚廬【名】喪中に籠り居る假屋のこと。

いろあせたるさくら 色褪櫻【句】花の紅の色のさめて薄くなれる櫻。

いろくづ 鱗【名】轉じて、魚にもいふ。新撰六帖「男山、秋の

けふとや、醬ひけむ、川瀬に放つ、よものいろくづ」。

いろこきぎぬに、しろきあこめきたらむやうにみえて 色濃き衣に、白き袖着たらむ樣に見えて【句】更科日記に「富士山は云々、いと世に見えぬさまなり。樣異なる山の姿の、紺青（コンジヤウ）を塗りたるやうなるに、雪の、消ゆる世もなく積りたれば、色濃き衣に、白きあこめ着たらむやうに見えて、山の頂の、すこし平らぎたるより、烟は立ち上る。夕暮は、火の燃え立つも見ゆ」とあり。富士の白雪に、紫雲の棚引けるさまを、下に白き袍を着て、上に紫の濃き色なる衣を着たるさまに見立てたるなり。袍は婦人童女などの、身に近く着る服、又男子の裝束の下に著る服。

いろごろも 色衣、彩衣【名】種々の色に染めたる衣服。色の美なる衣服。

いろどり 繡、彩色【名】種々の色を施すこと。繪などに「色どりのよい」などいふ。

いろせ 兄【名】兄。又、親しき男子にもいふ。

いろふ 弄、關渉、綺【動ハ四】取扱ふ。係り合ふ。また、色をそふるにもいふ。

いろをもてきく 色を以て聽く【文】大寶令の獄令に、「凡察獄の官は、まづ五聽を備へよ」とあり。五聽とは、辭、色、氣、耳、目をいふ。その中の色聽とは、察獄の官が、罪人の顏色を見て、善惡を察するをいふ。

いろ 依違【名】決しかねる貌。依るが如く、違ふが如きなり。「依違不レ決」。依違としていふときは副詞なり。

いろき 異域【名】外國をいふ。

いろきのおに 異域之鬼【句】外國にて死ぬることにいふ。「深入二於蠻地一爲二異域之鬼一」。

う

う 宇【名】屋根の四方に差出でたる所。軒。易に「上棟下宇」など。轉じて、直に、家にもいひて、「堂宇」など熟用し、それを「一宇」「二宇」など數ふ。人の品性度量などの廣く高きにいふこともあり。「器宇宏雅」「氣宇調暢」。

うあんくうばあ 晩香坡 Vancowver【名】北米の地名。一にニューカエストミンスターともいふ。英領加拿陀のブリンチス、コロンビヤにありて、東洋諸國より、歐米各國に赴かんとする者は、大抵、こゝより、加奈陀太平洋鉄道による常とす。鉄道は紐育に通ぜり。

うい 羽衣【名】はごろもを見よ。

ういう 烏有【名】いづくんぞ有らんやの意にて、何もなしとの意。すべて、物の失せはてたるにいふ。火災にて、家産の燒盡したるを、「烏有に歸したり」などいふ。

うう 植、種、栽、樹【動ヲ下ニ】植は、立ち木の類をうるなり。「植二松于庭一」。種は、草木の種をまくこと。「種瓜」。栽は、若き木をうゑるなり。「栽培」と熟用す。樹は、長けたる木をうゑること。「五畝之宅樹レ之以レ桑」。

ううんのおん 烏雲之陣【名】變化極まりなき陣立。烏散じて雲合ふが如く、聚散常なき陣立。山林などに陣を取り、敵に、味方の兵數、及動靜を知らざらしむる法とぞ。

うえすがいあす 【名】伊太利の山名。半島の南、カンパニヤ州の海岸にて、子ープルス市に近き所にあり。歐洲にて有名なる噴火山なり。

うがう 烏號【名】黃帝軒轅氏の弓の名。漢書郊祀志に「有レ龍垂レ髯下迎。黃帝上騎墜レ弓。百姓乃抱二其弓一而號。因名レ之曰二烏號一」。烏も號も、なげきさけぶ意より命ぜり。「烏號之弓」ともいふ。

うかく 羽客【名】仙人なり。羽人ともいふ。道術を得れば、身、羽毛を生ずる故にいふ。山海經「有二羽人之國一、不死之民一」。

うがふのしゆう 烏合之衆【句】寄り集りの軍勢。文選に「新起之寇、烏合之衆、非二吳蜀之敵一也」、注に「烏合の衆とは、部分なきをいふなり」と。

うがら 親族【名】血脈の親戚。

うきしまがはら 浮島原【名】駿河國駿東郡にある地。原に沼あり、浮島沼とも、富士沼ともいふ。

うきね 浮寢【名】水に浮びて寢るをいひ、また、落ちつきて寢られぬにもいふ。

うきやうしき 右京職【名】みさのみさとのつかさと訓

む。むかし、京都の地を左右に別ちて、左京、右京といへり。職は、その地の宅地、戸籍、租調、訴訟等を掌りし役所なり。左京職も同じ。

うきよ　憂世【名】世の中をつらく憂(ウ)く思ふよりいへる語。

うきよ　浮世【名】この世の浮きて定めなき意よりいへる語。たゞ、世といふに違はず。

うきよゑ　浮世繪【名】江戸繪、錦繪などの類にて、當時の風俗を畫きたる繪。岩佐又兵衛に始まる。

うく　受、承、享、禀【動カ下ニ】受は、手にてうけとるなり。承は、上よりの賜物をうくるなり。「承(ウケ)恩」。享は、饗をうくるなり。また、受と同義にも用ふ。禀は、受に同じけれど、無形物をうくるに用ふ。「享(ウケ)命」。

うぐひす　鶯、黃鳥【名】黃鶯、黃袍、黃鱗、金衣公子、倉庚、などの異稱あり。

うぐひすだに　鶯谷【名】東京上野公園の北の麓の地名。

うくわ　羽化【名】動物學の術語。蛹より羽のつきたる蟲に化するをいふ。また、仙人となることにもいふ。「羽化而登仙」。

うくわい　迂廻【名】廻りみちすること。

うくわつ　迂濶【名】廻り遠きこと。物に行屆かぬこと。ぼんやりすること。迂遠。

うげさ　羽檄【名】檄は木簡なり。長一尺二寸、徵召に用ふ。急事あれば、之に鳥羽を加へて、迅速の意を示す。史記「吾以二羽檄一徵二天下之兵一」。

うげながら　穿仗【副】鉄けながら。うげは、加行下二段活の動詞にして、物の破損して穴のあくをいへり。

うけばる　諾【動ラ四】ひきうく。承諾する。おもふ通りになす。

うけぬかほ　承けぬ顔【句】承知の出來ぬ顔。合點のゆかぬ顔つき。承け引かれざる顔つき。

うけぶみ　請文【名】命令を承りたる由かける文書。受書。請書。

うげんべりのたたみ　繧繝縁の疊【名】繧繝は錦の名、赤地に、種々の糸を以て、菱形花形などを織出したるもの。それを縁とせる疊なり。うんげんべりのたたみともいふ。

うけること　浮ける事【句】虚言。浮きたる事にて根なき事。徒然草「御相傳、うける事には侍らじなれど」。

うこく　烏黑【名】眞黑なること。また、眞暗(マックラ)の意。

うこんのたちばな　右近の橘【名】さこんのさくらを見よ。

うさはちまんぐう　宇佐八幡宮【名】今の、官幣大社宇佐神宮。豐前國宇佐郡宇佐町にあり。和銅五年の創建にて、譽田別尊、比賣神、大帶姫尊の三柱を祭る。

うさみ　せんすゐ　宇佐美濶水【名】名は惠、字は子迪、上總の人、物徂徠の門に學び、後に、雲州侯に仕へ、安永五年八月歿す。享年六十七。

うさん　胡盞【名】茶碗の名。茶人の用ふる茶碗にて、また、けんさんともいひ、名物七種の一。

うしかひ　牛飼【名】牛を飼ひ、または、使ふもの。「牛飼童に至るまで」。

うしとみしよぞいまはこひしき　憂しと見し世ぞ今は戀しき【文】新古今集藤原清輔「ながらへば、又この頃や、忍ばれむ云々」。生き永らへたらば、又、今が思はるゝならんか。昔は、つらしと思ひしことも、戀しく慕はしとの意。

うしねい　鵜士寧【名】幕府の士、名は孟一、通稱は左膳、士寧は字なり。鵜殿氏なれど、自修して鵜といふ。物徂徠の學を好み、服部南郭に學べり。安永三年十月十日歿す。享年六十五。桃花園稿、雞肋集などの著あり。

うしはあへげど　牛は喘げど【句】牛は息をきれどなり。藏書の多きを、「牛は喘げど、積み盡さず」などいへり。

うしにあせしむなぎにみつ　汗牛充棟【文】前のと同義。

うしや　巧者【名】左傳の注に「塗者也」とあり。ぬりもの師をいふ。

うじやくとけう　烏鵲渡橋【句】支那の傳説に、七月七日、牽牛織女の相あはんために、鵲(カサギ)が羽にて橋を渡すといふよりいふ。

うじやくみなみすとえいぜしきみ　烏鵲南すと咏ぜし君【句】魏の曹操をいふ。曹操(字は孟德)の、短歌行に「月明星稀、烏鵲南飛、繞レ樹三匝、無二枝可一レ依」といふ句あるによれり。

うしろまき　後圍、後卷【名】敵軍を、後より取りまく勢をいふ。

うしろみ　後見【名】動詞活用の轉成せる詞。後に居りて、人の身の上を助くること。又、後見人。

うしやう　羽觴【名】美しき杯をいふ。生雀の形に象り、頭尾羽翼あるもの。楚辭「酌二羽觴一兮銷レ憂」。

うしろめたきこころ　後目痛心【句】うしろぐらき心。後目痛しは、心にかゝる、心もとなしなどいふほどの意。

うす　有珠【名】北海道膽振國有珠郡朱珠村。

うす　失、喪亡【動サ下二】失は得の反。とりうしなふ義。仕損ずる義。喪は、失にも亡にも通ず。「喪心」「喪氣」。亡は、「滅亡」「死亡」など用ひ、なくなること。たゆること。

うず　髻華【名】上代に、冠の上にかざしたる餝。

うすあを　薄青【名】織色の名にて、經の白に緯の青なるも

の。また、衣服の、表は黄青にして、裏の青、若くは、白なるをいふ。

うすえふ 薄葉 【名】紙の名、薄様ともかく。鳥の子、または、雁皮紙の、極めて薄く漉きたるもの。

うすがね 薄金 【名】源家重代の鎧の名。鎧は、もと、皮革をもて製れるを、薄金にて作れるが珍らしければ、名付けしなるべし。●はちりゆう参照。

うすぎぬ 薄衣 【名】薄きころも。羅の衣。夏服などにいふ。

うすちや 薄茶 【名】こいちやを見よ。

うすひたうげ 碓氷嶺 【名】「碓日」、「碓井」、「臼井」、「笛吹」などもかく。信濃國北佐久郡輕井澤より、上州碓氷郡坂本町に至る峻坂をいふ。通路は、新舊二道あり。行客の不便非常なりしかど、今は「アプト」式鐵道の布設ありて、一睡の間に越ゆることを得。

うすべうのけのや 護田鳥の毛の矢 【句】護田鳥(オスノドリ)の羽にて矧ぎたる矢をいふ。護田鳥は、溝五位(ミソコヰ)ならむかとも、鵯(バン)ならむかともいひて、定かならず。また、鷲の羽の、薄くして黒き所少きものにて、矧ぎたる矢をもいへり。

うすもの 羅、薄物 【名】紗、絽の類の、薄く織りたるもの。

うそぶく 嘯 【動カ四】口すさむ。打眺む。ある風情に對して、口吟する。又長く烈しき聲を出す。

うだ 菟田 【名】大和國の地名。宇陀郡宇陀町なり。

うだい 宇内 【名】宇は天地四方をいふ。天下。世界。

うたいのみ 有待の身 【句】凡夫の身といふが如し。有待は、佛典より出でし語。老少不定などの意。

うだがは けんずゐ 宇田川玄隨 【名】槐園と號す。名は晋。宇は明卿、津山藩の醫、蘭學に委しかりき。寛政六年十二月歿す。年四十三。

うだがは しんさい 宇田川榛齋 【名】玄眞と稱す。玄隨の男。名は璞、衣鉢をつぎて、津山藩の醫たり。天保五年十二月歿す。享年六十六。

うたがふらくは、これ、ぎんがのきうてんよりおつるかと疑是銀河落二九天一 【文】李太白の盧山の瀑布をよめる詩。「日照二香爐一生二紫煙一、遙見瀑布挂二長川一、飛流直下三千尺、疑是銀河落二九天一」。天の川の、天空より落ち來るかと疑はるとの意。

うたげ 酒宴 【名】さかもり。語源は、拍上(ウチアグ)の約にて、掌を拍ちあげてさわぐ意。

うたて 轉 【副】うたゝともいふ。其の事の、いよ〳〵進みて甚しきにいへり。

うだのまつばら 宇田の松原 【名】地名。土佐國香郡の磯部にあり。

うたまくら 歌枕 【名】歌に詠み入るべき名所をいふ。「歌枕見てまゐれとて」。

うち 內 【名】內裏。禁中。みかど。

うちう 宇宙 【名】天地間。又、世界。淮南子に「往古來今、謂二之宇一。四方上下、謂二之宙一」。

うぢがは 宇治河 【名】源を近江の琵琶湖に發し、勢田を過ぎ、西流して山城の宇治に入り、伏見、淀を經て大阪灣に注ぐ。上流を勢田川といひ、宇治郡に入りて宇治河と稱し、下流を淀川と稱す。

うちかぶと 內冑 【名】冑のうちをいふ。冑の內側(ウチガハ)より、矢の射通りたるを「內冑を射る」などいへり。又。人におのが弱味を見られるゝを「內冑を見透かさる」等いふ。

うぢがみ 氏神 【名】神として祭れる先祖をいふ。同系同族にてまつる神なり。轉じて、後世は產土神(ウブスナ)をいへり。

うちぎぬ 打衣 【名】女の、單、または、袖(アコメ)などの上に着るもの。枕草紙いと、つや〳〵かなる打衣の、霧にいたくしめりたるを」。

うちくつす 打屈 【動サ變】氣のくじけるをいふ。心の引きたゝぬこと。

うぢこ 氏子 【名】氏神の末裔の義なり。然るを、今は、產土(ウブスナ)神の守護の下にある人をいへり。

うぢしふゐものがたり 宇治拾遺物語 【名】書名、十五卷あり。著者未詳。或はいふ、原本は源隆國の作にて、今昔物語の拾遺なりと。或はいふ、今昔物語を、宇治大納言物語といへるやうに、この稿本の、侍從後眞のもとにありしをもて、侍從の唐名を取りて、宇治拾遺の物語といふなりと。

うちしをる 打萎 【動ラ下二】しをるに同じ。うちは接頭語。

うぢだいなごん 宇治大納言 【名】源隆國なり。今昔物語の著者。

うちつけにさびしくもあるか 【句】古今集哀傷部に、近院(コンヰン)大臣源能有の歌に「河原のおほいまうち君の、身まかりての秋、彼の家のあたりをまかりけるに、紅葉の、色、まだ深くもあらざりけるを見て、かの家に、よみて入れたりける」と、端書ありて「打ちつけに、淋しくもあるか、もみぢ葉も、主なき宿は、色なかりけり」とあり。

うちつけめ 打付目 【名】ふと見たる目。俗に、一寸(チヨット)見。よく目といふに同じ。

うちつもののべ 內物部 【名】上古、朝廷に親しく仕へ奉りし武士。物部は、後に氏となれり。

うちでのはま 打出濱 【名】近江國滋賀郡にあり。拾遺集「近江なる、打出の濱の打出でて、恨みやせまし、人の心を」。

うちでら 氏寺【名】其の氏族の祖を祀れる寺なり。氏神參照。

うちと 内外【名】内と外と。

うちどの 宇治殿【名】藤原頼通をいふ。

うちにかへりみてやましからず 内省不レ疚【文】悪意惡行なければ、何も憂ふる事なしとの意。良心の咎むるやうの意ひなしとの意。論語「子曰、内省不レ疚、何憂何懼」。

うちひそむ 打潜【動マ四】隠れ居る。忍び居る。心の沈む。心ひきたたず。

うちひそむ 打顰【動マ下二】憂ひを面に現はすこと。

うちぶ 打歩【名】送金を頼む時に仕拂ふ、手數料をいふ。また、商家の取引に、他人の買ひたる品を譲り受くる時に出す増金をいふ。

うちふくだむ 打俯【動マ四】ふくだむを見よ。

うつ 伐、討、撃、打、撲【動ヤ四】伐は、罪を鳴らして伐つなり。征伐は、上より下をうつなり。討は、罪を數へたてうつなり。「天討二有罪一」。「朝議數レ之討」。撃は、手、或は物にて強くうつなり。打は撃に同じく、また、虚辭にも用ふ。打聽の打のごとし。撲は輕く撃つなり。「雪撲レ衣」。

うつうつ 鬱鬱【副、形】むすぼほれたる貌。志を得ざる貌。史記「鬱々久居レ之乎」。また、草木の繁茂せるにもいふ。後漢書「鬱々蒼々」。

うつおう 鬱奥【名】むし暑きこと。あつぐろしきこと。漢書「不レ苦二盛夏之鬱奥一」。

うつく 空【動カ下二】内の空虚になる義。心を失ふ。忙然とす。空になる。

うつくしむ 愛しむ【動マ四】可愛がる。慈愛する。いつくしむといふも同じ。

うつこ 鬱乎【形、副】うつうつに同じ。

うつこんかう 鬱金香【名】百合の類にて、香のよき草。

うつしごころ 顯心【名】顯しき心。夢心地の反對にて、はつきりとしたる心地をいふ。

うつしのうま 移の馬【名】乗替の馬。空穂物語「御厩より、うつしの馬どもひきたり」。

うつせみ 空蟬【名】蟬といふ虫の蛻殻。轉じては、單に蟬をもいふ。又、現身の意に、空蟬の字をあててもかけり。又、世、命などの枕詞。又、蟬の聲は騒しき者故、「かしまし」などの語にかけていふ序詞ともせり。また、源氏物語の巻の名。

うつそみ 現身【名】うつせみの轉化。

うつたう 鬱陶【名】心のむすぼれたるをいふ。書經「鬱陶乎予心」。うつたうしと形容詞にも活用す。

うつたへに 【副】一向に。只管に。ひとむきに。ひとへに。專心に。

うつつ 移、映、變【動ハ四】うつるの延びたる語。此れより彼れに移ること。光、または影の映ること。色の變ること。心のうつることなど。又、花紅葉などの散るにもいふ。

うと 烏兎【名】烏と兎とを、日と月とにたとへて、日月、または光陰のことにいふ。「烏兎匆々」など用ふ。

うどのうみ 有渡海【名】駿河國安部郡三保、久能、大谷三村に跨れる海濱の稱にして、風光佳絶の地なり。もとは、有渡郡なりし故、郡名を取りて名とせしを、明治二十九年、安部、有渡二郡を合併して、安部郡とせり。

うどのしねい 鵜殿士寧【名】うしねいを見よ。

うどのよのこ 鵜殿よの子【名】加茂眞淵の門人にて、熊門の三才女の一人。幕府の士、鵜殿左膳の妹。紀州侯の殿中に仕へて瀬川とよび、後に尼となれり。天明八年、六十才にて歿す。遺稿を涼月遺草といふ。

うなゐ 髫髪【名】幼少なる男女の頂に垂れたる髪の稱なり。轉じては、幼兒をもいふ。

うにこうる 一角【名】Unicorn（英語）いつかくを見よ。

うねの 宇禰野【名】近江國蒲生郡にあり。蒲生野ともいふ。古今集「近江より、朝立ちくれば、宇禰の野に、田鶴ぞなくなる、明けぬ此の夜は」。

うねびやま 畝火山【名】大和國高市郡橿原村の中央にあり。

心に。

うつのやま 宇都山、宇津山【名】宇津谷嶺（ウツノヤタウゲ）と稱す。駿河國安倍郡にあり。東海道の國道に横りたれば、今は隧道（トンネル）を穿ちて汽車を通ぜり。伊勢物語に「東の方に住むべき國求めにとて行きけり。云々、行き〳〵て駿河國に至りぬ。うつの山にいたりて、我が入らむとする道は、いと暗う心細きに、蔦かへではしげり、云々、駿河なる、うつの山邊の、うつゝにも、夢にも人のあはぬなりけり」。

うつは 器物【名】道具。また、人の器量の意にもいふ。うつはものといふも同じ。

うつぼ 靫【名】矢をもる器。

うつぼものがたり 宇都保物語、空穂物語【名】書名、二十巻あり。我が國にて最も古き物語なり。作者未詳。枕草紙に「物語は住吉、空穂の類」とあるにても、その古きを知るべし。

うづみび 埋火【名】火桶すびつなどに、灰を被ひて埋めたる火。

うづらのとこ 鶉の床【名】鶉のねどこ。鶉の巣は、草深き野邊等にあるものなるより、人の野邊などにいねるを、「鶉の床に臥す」などいふ。太平記、熊野落の條「露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ」。

る山。

うのし 宇野士新【名】名は新、明霞と號す。漢學者なり。延享二年四月歿す。年六十五。

うのはな 卯花【名】うつぎの花。四月の頃白き小き花、五寸許の穗をなして開く。また、その似たるより、豆腐のからをも、卵のはななどいふ。又、此の頃の天氣を卯花ぐもりといへり。

うのまねするから 學レ鵜之鴉【句】鵜は水鳥なれば、游泳自在なり。さるを、鴉は鵜のまねして水にいり、溺れ死すといふより、人の、おのが身の程を知らずして他の者に倣ひて失敗するにたとふ。「うのまねする鴉水におぼる」などいふ。

うのみづをさむるは、みづのみちなり 禹之行レ水水之道也【文】夏の禹王が治水の法は、水の性に從ひて、高きより低きに流すやうに、水路を査察して、治めたるなりとの意。孟子に「白圭曰、丹之治レ水也、愈レ禹。孟子曰、子過矣。禹之治レ水、水之道也」。禹が、水を治めたること書經に見えたり。

うばい 優婆夷【名】佛典の語。梵語にて、有髮にて佛道を修行する男を優婆塞、女を優婆夷といふと、釋氏要覽にあり。

うばぐすり 釉藥【名】つや藥、瀬戸物の上に塗りて光澤を出す藥。

うばそく 優婆塞【名】うばいを見よ。

うばたまの 烏羽玉【枕】ぬばたまを見よ。

うひやまぶみ 初山踏【名】山の麓に入り立つにいふ意にて、初めて學に入るをいふ。

うぶすな 産土【名】うぶは產、すなは土の義、人々の出產せる地をいふ。さて、產土神は、其の出產せる土地を守る神をいふ。されば、產土ノ神を、單に產土ともいへり。

うへ 上【名】主上を呼び奉る語。又、貴人の妻の稱。又、殿上をもいふ。うへびと(殿上人)。

うへすぎはるのり 上杉治憲【名】米澤の藩主、天明五年老して鷹山と號す。學を好み、紀平洲、細井廣澤、澁井老德等を迎へて講を聽く。米澤の興讓館は、即、鷹山の創設なり。文政五年三月卒す。年七十二。治憲、實は秋月種美の次男にして、上杉重定の養子となれり。

うへだあきなり 上田秋成【名】餘齋、無腸、鵜の家などの號あり。大阪の人。後に京都に徙り居る。文才あり。著作多し。文化六年十一月歿す。年七十八。

うへのをのこ 殿上の男【名】殿上人に同じ。

うへぶし 上臥【名】いにしへ、禁中に宿直するをいへり。

うまい 熟鮓【名】よくれむること。

うまいかだ 馬筏【名】馬を水中に並べて、筏の如くしたるをいふ。

うましみち 良道、善道【名】よき道なり。うましは美しの義。故に、よき人を「うましびと」又「うまびと」ともいふ。

うまのかみ 右馬頭、馬頭【名】右馬寮の長官をいふ。伊勢物語に、馬の頭といへるは、在原業平を指せるなり。三代實錄貞觀七年三月「左近衛權少將在原業平爲二右馬頭一」。

うまのはなむけ 餞別【名】旅立(タビダチ)のとき、其の行く人の乘れる馬の鼻先を、彼方へ向けしめて恙なくなどいひ、又は、物を贈るよりいひ出せる語。轉じては、ただ、旅立する人に贈る品物をもいへり。土佐日記に「船路なれど、うまのはなむけす」と船出にいへるは、馬は陸行のものなれば、戲れていへるなり。

うまびと 貴人、君子【名】うましびと。

うみさち 海幸【名】海上に漁して得たる獲物をいふ。古事記「山佐知母(ヤマサチモ)、己之佐知佐知(オノガサチサチ)」。幸は幸福の意なり。

うみにざりける 海にざりける【句】土佐日記に、貫之の歌に「照る月の、流るゝ見れば、あまの川、いづる湊は、海にざりける」。ざりはぞありの約。

うみばう 海坊主【名】海龜(ウミガメ)の大なるもの、また、海上に現はるといふ妖怪の名。

うんあう 蘊奥【名】おくふかきこと、事物の道理の深秘。「學問の蘊奥を極む」「美術の蘊奥を明む」など。

うんうん 云云【名】「しかじか」、「これこれ」などに同く、多くの詞を略するに用ふる詞。音便に「うんぬん」といふ。

うんえんくわがん 雲烟過眼【句】(東坡の寶綸堂記中の語)。一時の愉快をいふ。長く執着せざる樂。轉じては、事物を、深く留意せずして見過ごす意にも用ふ。

うんか 雲霞【名】かすみ。杜甫の詩句に「雲霞出二海曙一」。また、群集の意にいふ。

うんが 運河【名】水運の便に供せん爲、陸地を割廻して通ぜる河。ほりわり。ほりえ。

うんかん 雲漢【名】天の河。銀河ともいふ。大空に、白く長く一帶の川の如く見ゆる群星。單に大空といふ意にも用ふ。

うんけい 運慶【名】有名の佛師なり。康慶の子、備中法印と號す。初は京師に居り、後に鎌倉に移る。鎌倉佛師の祖なり。後鳥羽帝より順德帝の頃の人。

うんげいをのぞむがごとし 如望二雲霓一【句】望の切なる意にいふ。たいかんにうんげいをのぞむを見よ。

うんげんべりのたたみ 【名】うげんべりのたたみを見よ。

うんごぜんじ　雲居禪師【名】元和中、攝津國勝尾寺に寓せし僧なり。仙臺の伊達政宗、其の耆德を聞き、招きて松島の瑞嚴寺に住せしむ。

うんさいおり　雲齋織【名】織物の名。木綿布の一種にて、地あらく、厚く織り成したるもの。多くは、足袋の底に用ふ。雲齋といふ人創めたればいふとぞ。

うんし　耘耔【名】耘は、くさぎること。耔は、つちかふことすなはち、農の業をいふ。

うんじやう　雲仍【名】遠孫をいふ。爾雅に「昆孫之子爲二雲仍一」とあり。

うんすゐ　雲水【名】雲か水かのやうに、居所も定まらぬ義にて、行脚の僧をいふ。豐干禪師の詩に「一身如二雲水一(ブガン)悠々任二去來一」。

うんせう　雲霄【名】大空をいふ。蒼空。碧空。

うんそん　雲孫【名】仍孫の子の稱。

うんちう　運籌【名】はかりごとをめぐらすこと。史記「運二籌帷幄之中一(ニ)、決二勝千里之外一(ヲ)」。

うんちく　蘊蓄【名】深き蓄へ。深く修養をつみたること。素養の深きこと。

うんでいばんり　雲泥萬里【句】諺草に「俗に雲天萬天といふ。又雲天ともいふ。並に訛なり。雲泥のちがひともいふ」。晉書に「雲泥異レ途、邈矣隔絕」。とありて、事物の相違甚しきにいふ。なほ、つぎを見よ。

うんでいもだたならず　雲泥不レ啻【句】雲は天に在り、泥は海底にあるもの、懸隔の甚しきをいふ詞。霄壤の差。

うんのゆきすけ　海野幸典【名】本姓滋野氏。號は遊翁。蝦夷の士、嘉永元年十一月歿す。年六十。

うんぱん　運搬【名】はこぶこと。運輸。運送。搬移。輸送。輸致。輸遞。

うんぺうざつし　雲萍雜誌【名】柳澤淇園の隨筆。多く、勸善懲惡の說話を錄せるもの。

うんぺう　雲表【名】雲の外なり。高きをいひ、天をいふ。

うんりうせいあ　雲龍井蛙【句】懸隔の甚しきをいふ詞。類書纂要に曰く「雲龍は貴に喩へ、井蛙は賤に喩ふるなり」と。また曰はく「翔泳異レ勢。注に鳥高く飛ぶを翔といひ、水底に行くを泳といふ」。

うんりん　雲林【名】臺灣島彰化縣の東南、約十二里にある一市にて、要害の地なり。

うめだ　うんぴん　梅田雲濱【名】若狹小濱の藩士矢部某の子、後、同藩士梅田氏に養はる。名は定明、通稱源次郎、京都の儒者なり。安政の時、尊攘の說を唱へて幕府に忌まれ、捕へられ、安政六年九月、江戸の獄舍に死せり。年四十四。

うめづ　梅津【名】地名。山城國葛野郡梅津村。

うめつぼ　梅壺【名】凝華舍をいへり。內裡の一殿にして、後涼殿の北、藤壺と雷鳴壺との間にあり。

うもれぎ　埋木【名】木幹の土中に埋れたるものをいふ。また、人の身の、世に捨てられて、あるかなきかのさまなるを、「埋木の身」などいへり。源頼政「埋木の、花さくことも、なかりしに、身のなる果は、あはれなりけり」。

うよ　紆餘【名】まはり遠きこと。うねりめぐりたること。韓退之の進學解「紆餘爲レ妍、卓犖爲レ傑」。

うよく　羽翼【名】羽と翼との義より轉じて、輔佐することを。援助すること。六韜に「王者師レ師者、心有二股肱羽翼一」。

うらうへ　表裏【名】表裏を異にするをいふ。反對なること。うらはら。あべこべ。うらうへには副詞。

うらうらと【副】長閑なるさま。遲々。

うらが　浦賀【名】地名。相摸國三浦郡浦賀町。橫須賀を南に距る一里三十二町にある港。

うらかた　占形、占兆、【名】占に現はれたる吉凶の象をいふ。

うらじおそとつく　(Vladiostok)　海參威、浦鹽斯德【名】亞細亞魯西亞の要港なり。朝鮮との國境にあり。此の語意は、東海王の義なりとぞ。以て、魯國が、この港に對する眞慾を知るべし。冬期は寒くして、每年氷結すること、殆三月に及ぶといふ。

うらのはまゆふ　浦の濱木綿【句】濱木綿は草の名なり。莖は芭蕉の如く、皮幾重にも重なり、葉は萬年青に似て長く、花は幣に木綿四手かけたるが如し。紀伊、伊勢の海濱に多しと。萬葉集「三熊野の、浦の濱ゆふ、百重なす、心はおもへど、たゞにあはぬかも」。

うらぼん　盂蘭盆【名】七月十五日、百味の飮食を盛りて、佛に供するをいふ。齊明天皇の三年七月始めて行はる。「しやうりやうまつり」「たままつり」ともいふ。

うらみこつずゐにてつす　怨徹二骨髓一【文】怨恨の、痛切なるをいふ。史記「繆公之怨二此三人一、入二於骨髓一」。

うらやす　浦安【名】我が日本國の古名。

うりふたもつ　瓜生保【名】越前の人。判官と稱す。義貞の敗走して越前に入るや、弟重と共に之を迎へ、兵を杣山城に擧げ、大に賊軍を敗る。

うりん　羽林【名】近衛の大中少將の唐名。されば、近衛の官にある人をさしてもいへり。

うりんけ　羽林家【名】近衛司を經て、中少將より、參議に上ることを得る家柄。中山、飛鳥井、冷泉、六條等の家なり。

うれたし　憂痛【形】なげかはし。慷慨にたへぬこと。

うろ 雨露【名】雨と露と。轉じて、洽き恩澤。天子の惠などに。「雨露の恩」。「雨露のめぐみ」。

うろう 傴僂【名】せむし。また、腰を屈むるをいふ。左傳に「一命而僂、再命而傴、三命而俯、循ㇾ牆而走」。

うわう 禹王【名】支那古代の君、夏后氏にして、鯀の子なり。虞舜の時、治水の効あり。遂に舜の後をうけて、天子となれり。夏の代の祖なり。

うわじま 宇和島【名】伊豫國北宇和郡宇和島町。德川氏のとき、藤堂高虎こゝに居り、後、伊達政宗の子、秀宗、ここに封ぜられてより、子孫繼いで明治維新に至れり。

うゑき 禹域【名】支那の全地をさす。もと、夏の禹王が、九州の境域を定めしによりていふ。

うゑてんべん 有爲轉變【句】佛教の語。世俗の事の、移ひ變り易きをいふ。

うゑんな Vienna【名】澳地利匈牙利國(オーストリアハンガリー)の首府なり。ダニユウブ河に瀕し、歐洲中樞要の大都會にして、人口百三十五萬餘。我が國の公使館あり。緯度は、我が國の札幌より北に位せり。

うゑたるものはしよくをなしやすし 飢者易ㇾ爲ㇾ食【文】孟子に「飢者易ㇾ爲ㇾ食、渴者易ㇾ爲ㇾ飲」とありて、注に「飢渴の甚しきものは甘美を待たざるなり」とあり。俗諺「ひもじい時に、まづいものなし」といふに同じ。

うゑもんのぢん 右衞門の陣【名】右衞門府の官人の詰所なり。内裏の、清涼殿の西にある、宜秋門の西面にあり。ちんのざを參照せよ。

うをつ 魚津【名】越中國下新川郡魚津町。港なり。

うをのみづをえたるごとし 魚の水を得たる如し【句】くんしんするざよを見よ。

えい 穎【名】筆の穗。韻會に「筆頭也」。又、尖れる物の尖(サキ)。

えい 纓【名】古の冠の後に垂るるもの。又、冠の紐。

えい 裔【名】先祖より以來の血統。子孫。「平氏之後裔」。

えい 贏【名】利益などの意。まうけ。

えい 翳【名】天皇の禁中などにて行幸の時、御面のあたりを、左右よりさしかざして蔽ふものにて、團扇の柄の長きやうなるもの。ほ。さしば。

えいあい 翳薈【名】草木の蔽遮せるをいふ。「修竹蔵翳、以翳薈」。翳はくもること、くらきこと。薈はわいともよみて、茂ること、興ること。

えいえい 營營【副、形】往來するをいふ。詩經「營々青蠅」。又、あくせくすること。「營二營名利一」。

えいえい 曀曀【名】暗きをいふ。空くもりて風吹くをもいふ。詩經「曀曀其陰」。昏曀。陰曀。奄曀。

えいえうのひ 瘞鶴の碑【名】水戸光圀の薨ぜしとき、其の愛鷹もまた死せしかば、後樂園中に埋めて立てたる碑。

えいかう 影向【名】佛の姿を現すこと。佛典の語。

えいきやう 影響【名】かげとひゞきとの義にて、一事物起れば、必ず他にさしひゞきを生ずるに譬ふ。

えいきよ 盈虛【名】滿ちたりかけたりすること。「月有二盈虛一、水有二滿干一」。

えいきよく 郢曲【名】俗曲といふに同じ。郢は支那の國の名にして、その國の歌曲の淫靡なりけるより轉用せり。

えいくわ 英華【名】草木の花。轉じて、人の才智の義にもいふ。

えいぐわ 榮華【名】世の中に時めくこと。はなばなしきこと。「榮華の夢さめて」。

えいぐわものがたり 榮華物語【名】書名。四十一卷。宇多天皇の寛平年間より、堀河天皇の寛治六年まで、二百餘年間の事を記せる、假名歷史なり。藤原の道長の榮花を主とせるより、この名あり。作者未詳。藤原爲業の作とも、赤染衞門の筆ともいはる。

えいけつ 英傑【名】すぐれたる人。英雄。英物。

えいごゑ 曳聲【名】重き物を動す時など、えいと、力を入れて發する聲。

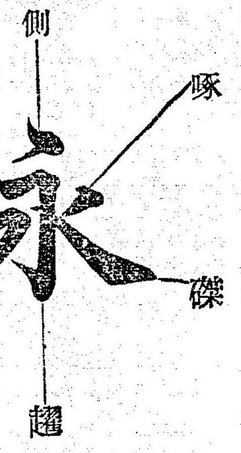
えいこせいする 榮枯盛衰【句】物の盛んになり、また、衰ふること。

えいじ 嬰兒【名】あかご。みどりご。をさなご。男兒の幼きを兒、女子の幼きを嬰といふ。

えいし 英姿 【名】 姿の高尚なること。轉じて、英資と同じ意に、性質の勝れたるにもいふ。

えいし 殪死 【名】 たふれ死ぬること。

えいじはつぱふ 永字八法 【句】 蔡邕の創意になりたるものにて、書法に、永の一字を以て、運筆の八法を顯はしたるものなり。



えいせんのみづに、みみをあらひしけんじん 潁川の水に耳を洗ひし賢人 【句】 支那の堯のとき、許由の賢なるを聞き、帝、位をこれに讓らんとす。許由、きゝて、耳穢れたりとて潁川に耳を洗ひしといふ古傳あり。

えいたいばし 永代橋 【名】 東京市京橋區北新堀町より、深川區佐賀町（舊名永代島）に架せる隅田川河口の長橋。

えいちう 裔胄 【名】 裔は末、胄は後なり。後裔。後胤。左傳「是四嶽之裔胄也」。

えいねいだう 永寧堂 【名】 はつしやうねんを見よ。

えいまい 英邁 【名】 勝れて賢き性質をいふ。「英邁之資」。

えいまんのいましめ 盈滿之戒 【句】 諺に「滿つれば缺く」の戒なり。十分なるを慎むべしとの意。

えいみん 裔民 【名】 凶惡の民の、放たれて荒裔にあるもの。國語「陽豊無裔民」。

えいやう 營養 【名】 飲食物より滋養分を取りて、身體の消耗を補ひ、其成長を遂げ、また、維持するをいふ。

えいりよ 叡慮 【名】 天子の御心。思召。

えいをだつす 脱穎 【句】 ほさきをあらはすこと。才氣をあらはすこと。史記に「處囊中、便當脱穎」。

えいゐき 塋域 【名】 葬地。墓所。

えうおん 拗音 【名】 音韻學の語。「チャ」、「キャ」等の音を

いふ。

えうえう 搖搖 【副、形】 不安の狀。漢書五行志の注「搖々不安之貌」。憂の慰むべきなく、訴ふる所なき狀。詩經「中心搖搖」。

えうえう 夭夭 【副、形】 少好の貌。若く美き狀。「桃之夭々」。

えうえう 杳杳 【副、形】 遙にしてほのかなるを云。文選「眇兮杳杳」。

えうがい 要害 【名】 緊要の地をいふ。類書纂要に「地形險固、在我則爲要、在敵則爲害」。

えうかい 幼艾 【名】 容色美好の少年をいふ。戰國策「王不以予ア工乃與幼艾」。

えうがくかうえう 幼學綱要 【名】 書名。元田永孚の編にて、內外古賢の、嘉言善行を輯めたるもの。

えうげき 要擊 【名】 敵をまちうけてうつこと。ねらひ打ちにすること。

えうげん 要言 【名】 つゞめていふこと。要約。左傳「實與ニ隨人ニ要言」。

えうげん 耀眩 【名】 光彩の爲に眼のくらむこと。

えうさつ 夭札 【名】 早死をいふ。短折を夭といひ、夭死を札といふと左傳の注にあり。

えうせつ 夭折 【名】 夭逝。夭死。夭札と同じ。

えうぜん 窅然 【副、形】 ふかき貌。また、憂ふる貌。莊子「窅然喪ニ其天下ニ」。

えうだい 瑤臺 【名】 寶石にて飾りし臺（ウテナ）。殷の紂王の作りしものといふ。淮南子「紂爲ニ璇室瑤臺ニ」。

えうび 么微 【名】 么麼に同じ。「至微至么」。

えうふく 要服 【名】 支那にて、王畿より、方二千里の域の稱。國語「蠻夷要服」。

えうべう 窈渺 【名】 極めてほのかなること。史記「紅窈渺以眩瀁」。幼渺。杳々。窈冥。

えうま 么麼 【名】 細微の者をいふ。

えうよ 腰輿 【名】 手輿（タゴシ）なり。人の手にて昇くもの。

えうらん 搖籃 【名】 小兒の鈎牕臺。

えきえき 役役 【名】 やくにたつ人。有爲の人。莊子「悅夫役々之佞」。力を勞するにもいふ。

えきえき 奕奕 【副、形】 大きなる貌。盛なる貌。

えきえき 繹繹 【副、形】 相連なる狀。よく走る。いろごりの美しき。盛なる貌。

えきさう 繹騷 【名】 ひきつゞくこと。詩經大雅「徐方繹騷」。

えきさく 易簀 【名】 臨終。死ぬること。曾子、死に臨みて、簀を易へたる故事に出づ。

えきしん 役心 【名】 心を勞すること。苦心すること。國語

「正二七體一以二役心一」。

えきせい 奕世 【名】奕は重なり。されば、世を重ぬること。代々と同じ。國語「奕世載レ德」。

えきてい 掖庭 【名】天子の後宮にある室。

えきでん 驛傳 【名】むかし、街道の諸驛に、驛馬、傳馬といふを置き、驛家を以て、之を取扱はしめき。驛馬は、官用の急を要するとき、驛鈴を先だてて乘り、傳馬は、急を要せぬとき、傳符を帶びて乘る。其の馬子人夫に、驛子、傳子といふものあり。大化の頃より設けられし制なり。

えきのしやう 易象 【名】易のおもてをいふ。

えきはう 易方 【名】仕方をかへること。易の象傳に「不二易方一」。

えこ 依怙 【名】己の愛する方にのみ偏りて、公平ならぬこと。偏頗。偏愛。えこひいき。

えじま きせき 江島其磧 【名】戯作者。京都の人にて、大佛餅を商とせり。八文字屋自笑と共に、滑稽本小説を合著して、八文字屋風の一派を立つ。元文二年七月、享年七十にて、歿す。

えだには、きんれいをかく、しゆんうののち、枝繁二金鈴一、春雨ノ後、花薫二紫麝一、凱風ノ程 【文】後中書王具平親王の花橘の詠なり。和漢朗詠集に出づ。上句は、橘の實は、冬雨に熟して、枝に黄金の鈴をかけたる如しとの意。下句は、其の花は、麝香の匂を放つて南風に薫るとの意。麝獣の毛は、其の色紫なるより、紫麝といふ。凱風は、南風をいふ。

えだは、せいどうのごとく、ねはいしのごとし 柯如二青銅一根如レ石 【文】杜甫の古栢行に「孔明廟前有二老栢一。柯如二青銅一根如レ石。霜皮滑雨四十圍。黛色參二天二千尺一」。とあり、

えつす 謁す 【動サ變】謁は名刺のこと。刺を通じて面會するをいふ。まみゆ。

えつい 噎噫 【名】咽び泣くこと。

えつれき 閱歷 【名】これまでふみ行ひ見聞きして過ぎたること。經歷。履歷。

えつり 蘆筆 【名】たるきの上に細き竹を並べ、繩にて結び、瓦又は板を載する爲のもの。

えどざき 江戸崎 【名】地名。常陸國信太郡の東西、小野川の西岸に位せる町。

えどろふしま 擇捉島 【名】千島群島中の最大なるもの、箱舘より海上二百餘里にあり。

えならぬか 得ならぬ香 【句】何ともいはれぬ匂。口にいはれぬ美き香。

えのしま 江島 【名】相模國鎌倉郡に屬する一孤島にして、

庄瀬よりは、徒歩して渡るべし。西方、遠く白雲の間に富嶽を望み、南海には大島の浮べるあり、四面の風光を一所に占めたり。

えのもときかく 榎本其角 【名】晉子、寶井、寶晉齋、狂雷堂などの號あり。近江の人。江戸に住す。芭蕉門の俳人なり。寶永(五代綱吉)四年二月歿す。年四十七。

えふ 謁 【名】辨當をいふ、かれいひ。

えまからじ 得罷らじ 【句】行き得まい。行くことが出來まい。

えむらせんさい 江村專齋 【名】名は宗具。播州三石の城主江村榮基の後なり、京都に在りて醫を業とし、百歳の時、後水尾上皇より、杖、茶、酒、扇を賜はる。寛文四年九月歿す。實に一百二十歳の長壽を保てりといふ。

えんあん 宴安 【名】燕安に同じ。酒宴して樂むをいふ。佚樂。左傳「宴安酖毒不可レ懷也」。

えんいう 奄有 【名】悉く保つ義。掩ひ保つこと。書經「奄二有四海一」。

えんいん 讌飲 【名】醼、燕、宴と義同じ。酒宴。

えんうつ 湮欝 【名】塞りうもれて、晴れやかならぬをいふ。いんうつとも訓む。

えんえん 炎炎 【副、形】ほのほの盛なるをいふ。詩經「赫赫炎炎」。

えんえん 奄奄 【副】精氣の閉藏せる狀にいふ。「氣息奄奄」などは、辛うじて息するさまなり。息もたえ〴〵なること。

えんか 讌下 【名】のくみだすこと。一息にのみ下すこと。

えんき 愆期 【名】時刻を過つ。時をはづす。

えんぎ 緣起 【名】神社佛寺の草創の由來。又、其の由來などを記したるもの。轉じては、前兆などの意にも用ふ。「えんぎが悪い」など。

えんきうだう 延休堂 【名】はつしやうねんのじふにだうを見よ。

えんぎのせいだい 延喜の聖代 【句】醍醐天皇の御代をいふ。延喜は年號なり。

えんけん 偃蹇 【名】おごりたかぶる貌。左傳「彼皆偃蹇將棄子命」。又、高き貌。離騷に「望二崟之偃蹇兮一」。又、衆くして盛なる貌。舞ふ貌。委曲の貌。屈折の狀。

えんげん 淵源 【名】事物の本源。根源。根本。孔子家語「其爲レ人之淵源也」。

えんこ 淵乎 【副、形】深き狀。深淵。左傳「淵乎憂而不困者也」。

えんざう 醃藏 【名】肉などを鹽漬にして藏したるもの。

えんしつ 燕室 【名】（燕は、安なり、息なり）。茶の間。休息室。

えんしふ 沿襲 【名】前の事物に因り循ふをいふ。禮記「五帝殊レ時不レ相二沿樂一、三王異レ世不レ相二襲禮一」とあるに本づく。

えんじやく、いづくんぞ、こうこうの、こころざしをしらむ 燕雀安知二鴻鵠之志一乎 【文】史記の陳渉の世家に「陳渉、少時、嘗與二人傭耕一。輟レ耕之壟上一、悵恨久レ之曰、苟富貴、無二相忘一。傭者笑而應曰。若爲二傭耕一。何富貴也。陳渉、太息曰、嗟呼燕雀安知二鴻鵠之志一哉」。

えんしよく 饜食 【名】十分に食ふこと。あくまで食ふこと。飽食。

えんせい 炎精 【名】火焔（ホノホ）。また、陽炎（カゲロフ）。馮衍の文「社稷復存、炎精更輝」。謝宗可の詠二走馬燈一詩「飛輪擁レ騎駕二炎精一、飛逸人間不夜城」。庾信の樂府「純陽之月樂二炎精一、赤雀丹書飛送迎」。

えんせう 焰硝 【名】硝石の一名。轉じて、火藥。

えんせき 筵席 【名】宴席。酒宴の坐。

えんそう 淵叢 【名】淵は魚の聚る所、叢は獸の聚まる所、故に物の多く聚る所をいふ。書經「爲二天下逋逃主一、萃（リテ）淵叢（トス）」。淵藪。

えんそ、かはにのめども、はらをみたすにすぎず 偃鼠飲レ河、不レ過レ滿レ腹 【文】はやしにやとるささぎを見よ。

えんてい 炎帝 【名】支那上古の帝にて神農氏といふ。又、太陽。

えんてうひかのし 燕趙悲歌之士 【句】いにしへ、燕、趙の間に、俠客聚りて遊戯し、悲歌を歌うて慷慨せしかば、後世、慨慷の士をかくいふ。

えんぱ 煙波 【名】水の上のもやと波と。

えんぱう 延袤 【名】ひろさ。東西を延、南北を袤といふ。王褒の文に「崇臺五層延袤百丈」。

えんま 閻魔 【名】また、閻羅。梵語の閻魔羅の略。佛經に、地獄の王にて、亡者の魂を司りて、其の行事を賞罰すといへり。

えんらん 延攬 【名】人を延招（ヒキマネ）きて、其の心を收攬するをいふ。後漢書に「方今之計莫レ如下延二攬英雄一務悦二民心一立二高祖之業一救中萬民之命上」。

えんろくだう 延祿堂 【名】ばつしやうゐんのじふにだうを見よ。

えもいはず 得不言 【句】言ふにも言はれぬ。いふことができぬ。副詞句としては、えもいはずをかなしど。また、語尾なぬに變するときは形容句となりて、えもいはぬ香など。

えもん 衣紋 【名】衣服の紋。轉じて、衣服。「えもんかけ」。また、衣服の着こなし。「えもんをつくろふ」。

えやみ 疫病 【名】流行病、又、瘧（オコリ）。

えりもとにつく 襟元に附く 【句】人の身分よき方に追從するをいふ。輕薄なる世の。利欲にのみ走るをいへる諺。

えるば Elba 【名】地中海にある一小島にて。コルシカ島の東にあり。ナポレオン一世の初に流されし地。

えるんすと、きゆるちゆうす Ernst, Cirtius 【名】有名なる獨逸の古物學者、兼、史家なり。一八六三年より伯林大學教授となれり。一八九六年歿す。

お

おあし 料足 【名】 錢をいふ。足なくして、よく飛ぶをもてなり。管窺の錢神論に「無翼而飛、無足而走」。

おいきたりて、はじめて、みちをぎやうず 老之來而、始行ㇾ道 【文】 年壯の者も、無常の來ること料られざれば、念佛修道せよとの意。徒然草「老來りてはじめて、道を行ぜんと待つことなかれ」。寒山頌「待ㇾ老來ㇾ始學ㇾ道。古墳多是少年」。

おいそのもり 老蘇森 【名】 追初森、息磯杜などもかく。近江國蒲生郡老蘇村にあり。

おいて、ますます、さかんなり 老而益壯 【文】 後漢書の馬援傳に「丈夫爲ㇾ志、窮當ㇾ益堅、老當ㇾ益壯」。王勃の滕王閣序「老當益壯貧、寧知ㇾ白首之心」。

おいふ 於邑 【名】 憂苦煩悶するをいふ。

おいへりう 御家流 【名】 書風の一派。世尊寺尊圓法親王に始まる。

おいらく 【名】 おいといふに同じ。古今集「老らくの、來んと知りせば、門さして、無しと答へて、逢はざらましを」。

おいをやしなふふること 考を養ふ故事 【句】 孟子の曰く「伯夷避ㇾ紂、居ㇾ北海之濱ㇾ、聞ㇾ文王作興ㇾ曰、盍ㇾ歸乎來。吾聞、西伯善養ㇾ老者。太公避ㇾ紂、居ㇾ東海之濱ㇾ、聞ㇾ文王作興ㇾ曰、盍ㇾ歸乎來。吾聞、西伯善養ㇾ老者。二老者、天下之大老也」。

おうか 謳歌 【名】 功德を讃することゝ。德を稱詠して、之に歸服することゝ。孟子「謳歌者、不ㇾ謳ㇾ歌堯之子ㇾ、而謳ㇾ歌舜ㇾ」。「謳歌之民」は、太平に浴化して歸嚮せる人民をいふ。

おうやうこう 歐陽公 【名】 歐陽修。名は永叔、宋の人、文をよくせり。唐宋八大家の一人たり。ずゐをうていを參照せよ。

おうろうまんかう、うやまんしや 甌窶滿篝、汗邪滿車 【句】 歐窶は、高くて狹き地、汗邪は低き田地。篝はふごなり。高下の田地、皆豐熟し、篝にも車にも滿ち足るをいふ。史記滑稽傳にある語。

おおくらんど Ouck-land 【名】 阿西亞尼亞洲のニュージランドの中なる北島の名、島中の大都をも、亦オークランドといふ。

おかちのかた お勝の方 【名】 德川家康の愛妾お梶の方といひし人。太田康資の女。

おきつ 興津 【名】 駿河國庵原郡興津町。清見潟に瀕し勝景の地たり。停車場あり。夏季は殊に遊客おほし。大字清見寺町に清見寺（セイケンジ）あり。

おきつべ 沖つ邊 【名】 沖の方。

おきつみとし 奥津御年 【名】 むかももな見よ。

おきなぐさ 翁草 【名】 書名、神澤貞幹の著。一百卷。何となく、雜事を記せるもの。

おきなもんだふ 翁問答 【名】 書名。中江藤樹の著。二卷。問答體に、儒道歷史文學其他の雜事を記したるもの。

おきのくらきに 沖の暗きに 【句】 「沖の暗いのに、白帆が見ゆる。あれは、紀の國、蜜柑船。あれは、紀の國、蜜柑船」いふ俚謠あり。

おきのりわざ 賒事 【名】 物を買ひて、代價を借りおくをいふ。かけにて買ふこと。土佐日記「おきのりわざをして、錢も持て來ず、おのれだにこず」。

おきのゐん 隱岐院 【名】 後鳥羽天皇を申す。承久の變に、隱岐に遷されましましかばいふ。

おくかにおくをかす 屋下架ㇾ屋 【句】 無益に力を用ふること。甲斐なきことをすること。王隱の論に「楊雄太玄、雖ㇾ妙非ㇾ益也。古人謂ㇾ之屋下架ㇾ屋」。

おくぎ 奥義 【名】 あうぎを見よ。

おくだん 臆斷 【名】 想像を以て斷定すること。あて推量。

おくのほそみち 奥の細道 【名】 書名。俳人芭蕉が、奥州行脚の旅日記。

おくびと 奥人 【名】 奥向に奉仕する女房などをいふ。

おくやまさだね 奥山正胤 【名】 岩代の人、文政年中、江戸に出でて幕士某の養子となる。平田篤胤の門に入り、維新後は、政府に教職を奉じ、明治十七年、八十歳にして仙臺に歿す。

おくる 送、贈、饋、貽、遺 【動ラ四】 送は、送迎、送別、目送などいひて、人の行をおくるなり。また、おくりとゞくる意。送ㇾ茶、送ㇾ簡。贈は、物を與ふること。饋は、食物をおくることゝ。貽るは、贈遺の義。物をやりあたふること、又後にのこすこと。「貽ㇾ福子孫」。「作ㇾ師說ㇾ貽ㇾ之」。遺は、物品、或は使をおくるなり。

おさらぎこれさだ 大佛維貞 【名】 宗宣の子。宣時の孫。修理大夫となる。元弘の役に、楠正成を千早城に攻めし大佛高直の父なり。

おしがた 押形 【名】 刀の銘などのある部分を、墨を以て紙に押して、形をとれるもの。

おしつけのいた 押附の板 【名】 鎧の、肩に當るところの板をいふ。多くは染革（シルシ）を以て包めり。

おしで 押手 【名】 印としておすもの。てがた、印、燒印などをいふ。又、左手（弓を射る時にいふ詞）。

おしはる 押張る 【動ラ四】 まげずに我意をおしとほすこ

と。

おせんまい 御洗米【名】神佛に供ふる洗ひ米。

おぞうん Ozone【名】化學の語。變形酸素にして、一種の臭を有し、酸素よりは化學作用活潑なり。

おそぶらふ 押【動ハ四】おそぶるの延言。押すに同じき古言。

おそや 鈍や【句】愚なりよ。にぶしや。やは歎詞。

おそる 恐、懼、畏、怖、慴【動ラ下二】恐は、未來をおそるゝこと。「恐三雨至一」。恐らくは副詞。懼は恐懼と連用す。恐怖に同じ。畏はおそるゝこと甚しきなり。威におそるゝにもいふ。畏服、畏敬、畏友など。怖はわけもなくおそるゝなり。恐怖。怯怖。慴は振へ恐るゝなり。「聞二獅子之吼一百獣慴伏」。

おだうらくさい 織田有樂齋【名】信長の弟にて茶人なり。元和の大坂の戰に家康に降る。同七年十二月歿す。年七十五。

おだのぶひで 織田信秀【名】信長の父なり。平重盛の後胤。

おちあざむ 悚惕【動マ四】恐れあきる。驚きおそる。恐しさにおどろく。

おちあひ 落合【名】地名。美濃國惠那郡に在り。中仙道の一驛。

おちあひ なほあき 落合直亮【名】國學者。武藏國多摩郡の人。明治二十七年十二月歿す。直文氏の養父。

おちあひ なほずみ 落合直澄【名】國學者、明治廿四年一月歿す。

おちうど 落人【名】軍に敗れて逃ぐる人。

おちくぼものがたり 落窪物語【名】書名。四卷あり。中納言なる人の一女、繼母に惡まれて、別殿の落窪なる一間に押籠められたれば、落窪の君と呼ばれたるが、藏人の少將に思はれて、後に榮華になれる趣を作れる小說なり。作者詳ならず。

おちをる 落居【動ワ上一】落ちつく。安心する。

おでい 淤泥【名】どろ。

おと 淤菟【名】虎なり。左傳に「楚人謂二乳穀一、謂二虎淤菟一」。

おとがひ 頤【名】日の下をいふ。頤使は人を自由自在に使ふこと、勝手に使ひまはすこと。

おとぎざうし 御伽草紙【名】足利時代の中頃より、德川氏の初までに行はれし小說風のよみ本。そのころ、婚禮の道具に用ひたりといふ。

おどしげ 威毛【名】鎧を綴りたる糸、または、革をいふ。

おとな 乙名【名】蝦夷語。酋長をいふ。部落の長。

おとなしきらうどう 大人しき郎等【句】おだやかなる郎等。分別あるらしき郎等。重立ちたる家來。

おとなひ 音、音信、訪問【名】音。響。消息。おとづれ。

おどろ 荊棘、藪、榛莽【名】草木の茂り亂れたるところ。

おどろおどろし 【形】物凄し。怖し。仰山なり。枕草紙「夜いたく更けて、門おどろおどろしく叩けば」は副詞に用ひたり。

おなじ 同【形】この語は、名詞につゞく時は同じき事、同じき物などいふべきを、古より同じ事、同じ物などやうにもつゞけ用ひられたり。

おなんど 御納戸【名】貴人の衣服などを入れおく部屋。また、染色の一種。また、御納戸役は、德川時代の職名にて、納戸のかかり、即、衣服器物の出納を司りし役。

おなり 御成【名】むかし、宮方、攝家、將軍などの、出で行くにも、來るにも、いふ。

おにきり、おにまる 鬼切、鬼丸【名】共に刀の名。いづれも、源氏の重寶といふ。

おにくりげ 鬼栗毛【名】畠山重忠の馬の名。鞭打に、三日月形あるより、後に三日月栗毛と改名す。

おににわらはる 爲レ鬼所レ笑【文】宋の劉伯龍、家貧なり。常に、家にありて、什一の法を營まんとす。一鬼、傍に在りて掌を拊てて笑ふ。伯龍歎じて曰はく、「貧窮固有レ命。乃復爲レ鬼所レ笑也」とて、遂に止めたり、との故事より、富を作るに汲々たるにいふ。

おにのま 鬼の間【名】清涼殿中の間の名。鬼の繪の障子ありしよりいふ。

おにやらひ 鬼遣【名】十二月晦日に、人を、疫癘の衣外に扮裝せしめ、之を驅り遣ふ式。禁中の公事にもあり。儺遣、追儺なといふ皆同じ。今俗間には、節分の夜に、大豆を炒りて鬼打豆と呼びて、「福は内、鬼は外」などいひて撒く。まめまき。まめうち。

おのがじし 各自【副】おのおのの心心。てんでに。銘銘のむきむき。自分勝手に。

おのれにかつ 己に克つ【文】我意私欲に打ち勝つをいふ。禮記「克レ己復レ禮仁也」。

おのれのほつせざるところは、ひとにほどこすことなかれ、 己所レ不レ欲、勿レ施レ於レ人【文】論語にいでたり。己れが功名を得るをいふ。史記淮陰侯列傳の語。

おのをうる 賣レ己【文】功名を金錢に比し、他を欺きて

おはさうず 御座【動サ變】おはしますに同じ。源氏物語「暮うちさして、さらひておはさうずる、いとをかしげなり」。

おひ 笈【名】山伏、または、行脚僧などの、佛具食器など入